

齊
田
中
耕
地
遺
跡
(2)

齊田中耕地遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2013

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

齊田中耕地遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2013

群 馬 県 伊 勢 崎 土 木 事 務 所
公 益 財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団



Ⅳ区5面水田全景(北方上空から)



Ⅳ区5面水田110・126区画周辺(上空から)

序

東毛広域幹線道路は、群馬地域の県央と東毛を直結する流通網の新たな動脈として期待され、「はばたけ群馬・県土整備プラン」のなかの「7つの交通軸構想」のひとつとして、推進されてきました。国道354号のバイパス建設は、この東毛広域幹線道路の中核と位置づけられています。

本書で報告します齊田中耕地遺跡は、国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴い群馬県南部の佐波郡玉村町域で発掘調査された遺跡です。

発掘調査は、群馬県伊勢崎土木事務所から委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成22年度に実施しました。これより以前、平成14年から3年間行われた第1次調査分については、すでに報告書を刊行しております。本報告はこれに続く第2次調査分の調査成果をまとめてあります。遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけて営まれた水田をはじめ、各時代の様々な遺構と遺物が発見されました。周辺は古代に施行されていた土地区画である条里地割が残る地域として知られ、平安時代の水田調査の結果からも確認できました。この度の成果は、平成22年に刊行いたしました『齊田中耕地遺跡』とともに、地域史解明に寄与するものと考えております。

おわりに、発掘調査の実施から本書の刊行にいたるまで、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、玉村町教育委員会、並びに地元関係者の皆様には終始ご協力を賜りました。上梓にあたり、皆様方に心から感謝申し上げます。

平成25年6月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

- 1 本書は国道354号(高崎玉村B P)地域活力基盤創造事業に伴い、平成22年度に発掘調査を実施し、国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴い、平成24・25年度に整理作業を実施した埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、佐波郡玉村町大字斉田で、地番は以下のとおりである。
53- 2・53- 3・102- 2・103- 2・114- 2・115- 2・115- 3・116- 1・116- 4
- 3 事業主体は群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所である。
- 4 発掘調査の主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は以下のとおりである。
調査履行期間 平成22年3月31日～平成23年3月31日
調査期間 平成22年7月1日～平成23年3月31日
発掘調査担当者 友廣哲也(調査統括事務取扱) 麻生敏隆(上席専門員)
矢口裕之(専門員(総括)) 飯森康広(専門員(総括)) 小林正専門員(主任)
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量：株式会社測研 空中写真撮影：株式会社測研
- 6 整理事業の発掘調査の期間と体制は以下のとおりである。
平成24年度
整理履行期間 平成24年10月1日～平成25年3月31日
整理期間 平成24年12月1日～平成25年3月31日
平成25年度
整理履行期間 平成25年4月1日～平成25年7月31日
整理期間 平成25年4月1日～平成25年5月31日
- 7 本書作成の担当者は次のとおりである。
担当・編集 飯森康広・高井佳弘
本文執筆 飯森康広(第4章は鑑定分析報告書(橋崎修一郎を再編集))
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐) 保存処理 関邦一(補佐)
遺物観察 石器・石造物：岩崎泰一(上席専門員)、新倉明彦(上席専門員)
縄文土器：谷藤保彦(上席専門員) 土師器・須恵器：桜岡正信(上席専門員)
中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員) 金属器・木器：関邦一
石材鑑定 飯島静男(群馬地質研究会) 人骨・獣骨鑑定 橋崎修一郎
- 8 発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・玉村町教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
- 9 斉田中耕地遺跡の諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 遺構平面は日本測地系を用いて測量した。本文中に使用した方位は全て国家座標北を表している。真北との偏差は、調査区中央付近で、東偏0度25分53秒である。当該地域は国家座標IX系の第2象限に当たっている。
- 2 調査区の南北両側は、平成14年から3か年で発掘調査が行われ、調査報告書第484集『斉田中耕地遺跡』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010）として刊行された。これを1次調査と呼び、本書を2次調査として、書名を『斉田中耕地遺跡(2)』とする。両調査の区別は、全体図で2次調査の枠線を太線とすることで示した。
- 3 遺構名称は区ごとに通番をつけた。遺構名称は1次調査の呼称を原則尊重し、同一の遺構と見なした場合、同一名を付した。1次調査が南北に分かれていたため、同一遺構でありながら、遺構名称が別となった場合、本書ではどちらかの名称を使い、1次調査報告分については変更しなかった。新たに検出された遺構は、1次調査の次番から付した。結果として、本書に記載のない遺構番号が多くなったが、欠番でなく1次調査として既に報告されたものである。調査段階で1次調査と同一遺構名称を付したが、図面精査の結果、別の遺構と判明したのもなど、整理段階で遺構名称を変更した場合は、本文中に備考として旧遺構名称を示した。この作業で欠番は生じていない。

全体図作成に当たっては、1次調査を合成した。調査面は2次調査成果により一部組み換えて記載した。

- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。縮尺は挿図中に、原則を外れるものも含めてすべて示してある。

遺構 土坑 1 : 80 墓 1 : 30 ピット 1 : 60 溝 1 : 40・80・100・120・150・200 橋 1 : 60

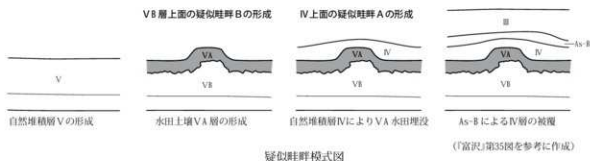
遺物 土師器・須恵器 1 : 3 陶磁器・在地系土器 1 : 3・4

石器・石製品 1 : 2・3・4 金属器・金属製品 1 : 1・2 木器 1 : 4

- 5 本書の図版に使用したスクリーントーンは次のことを表示している。

水田区画・漆  油煙  粘土  擾乱 

- 6 遺構の計測値において全体を計測できないものについては、残存する値を()書きで示した。溝の長さは、全長と断らないかぎり、確認長を示す。
- 7 水田の区画番号は、1次調査の通番を踏襲し、同一となるものはそのまま同一番号を使用した。新たな区画は次番を付した。水田の面積は、デジタルプランメーターにより縮尺1 : 40の平面図を用いて、畦の内側を3回計測した平均値である。1次調査と同一の場合は、含めた計測値を別記した。水田区画に未検出部があり、連続で計測できない場合、1次調査の報告書に掲載された数値を加算して行った。区画形状がほぼ三角形の場合、規模は底辺と高さを計測した。
- 8 水田に準じた遺構について、「疑似畦畔」という用語を使用する。疑似畦畔とは、「畦畔ではない畦畔状の高まり」（斎



疑似畦畔模式図

野1987)のことであり、本書では『富沢遺跡』における「疑似畦畔B」について遺構名として使用している。疑似畦畔Bとは、水田の畦畔直下に認められる床土(基盤層)上面の畦畔状の高まりを指している。この場合、直接畦畔が検出されなくとも、疑似畦畔Bの検出により水田の存在が想定できると考えられている。また、水田の検討において、「疑似畦畔A」という用語も使用した。疑似畦畔Aとは、水田の畦畔直上に認められる自然堆積層上面に生じた畦畔状の高まりを指している。これは下位に埋没した水田の起伏に影響されて堆積した結果と位置づけられている。

本遺跡では2・4・5面が関係する。4面水田はAs-B直下で検出された水田で、検討の結果疑似畦畔Aと判断した。I区2面とII区5面水田下位の一部で疑似畦畔Bを検出した。模式図は関連づけを重視して、4・5面の状況を示した。2面の場合、前頁の疑似畦畔模式図右端例の基本土層V A・V Bを、II B・III Aに置き換えれば説明できる。

引用文献 斎野裕彦1987「遺構の種類別と遺物の分類」『富沢』仙台市教育委員会91-92頁。

- 9 橋の柱穴は、平面測量時の底面標高測点を原則として中心とみなし、心々距離を計測した。各辺の長さの計測も同様とした。柱穴は新たにP1から順に時計回りで付番した。
- 10 土層観察の記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』(1991年版)に基づいている。面積割合は1%、5%、10%、20%、40%を準用した。含まれる礫については、径5mm以上を大礫、径2~5mmを中礫、径1~2mmを小礫とした。基本土層はローマ数字を使用し、本文中では「層」を省略した。
- 11 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
 - ・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』(1991年版)に基づいている。
 - ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径2mm以上を礫、径2~0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
 - ・計測値の口：口径、胴：胴径、底：底径、高：器高、台：高台径を示す。単位はcmである。
 - ・金属器観察表の計測値に()がついているものは残存部分での値である。
 - ・石斧刃部側の摩擦痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩擦痕については横位定規線で図示した。
 - ・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩擦範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。
- 12 陶磁器の分類・掲載は以下に拠った。
 - ・「在地系土器」は、従来「軟質陶器」、「土師質土器」と呼称された焼き物である。
 - ・中世片口鉢は、使用痕からすると「すり鉢」と呼ぶべきであるが、従来の呼称に従った。破片の場合、すり目の有無が不明であることから、残存部のすり目の有無にかかわらず「片口鉢」とした。
 - ・片口鉢と内耳鍋の使用痕：器表が摩擦して下部の胎土が露出した範囲を実線、摩擦度合いが少なく平滑となった範囲を破線で表した。二次的な使用痕である底部外面周縁の摩擦は図示していない。
 - ・中世在地系土器胎土は、以下によりA・B2種類に分類した。
 - A：透明鉱物、黒色鉱物、片岩細片含む。透明鉱物と片岩由来の雲母など多くを含む。
 - B：透明鉱物と黒色鉱物含む。片岩含まない。
 - ・常滑窯系陶器・渥美窯系陶器は『愛知県史別編窯業3中世・近世常滑系』2013による。
 - ・肥前陶磁器は『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-九州近世陶磁学会2000による。
 - ・12~13世紀の中国磁器は、横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館1978による。白磁の分類は森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究№2』貿易陶磁研究会1982による。
- 13 土器に関する分類上の大小は以下による。
 - ・須恵器：大型品(壺・甕類・羽釜・瓶類)、中型品(高杯・盤類・甗)、小型品(椀・杯・皿類)
 - ・土師器：大型品(壺・甕類・土釜)、中型品(高杯類・古式土師小型丸底壺など)、小型品(椀・杯類・手捏ね)

- 14 ガラス玉の計測に関しては、肉眼で長径と思われる箇所とほぼ直交方向の2カ所をMitutoyoデジマチックキャリパ（JIS規格）で計測した。高さはMitutoyo製デジタルマイクロメーター（JIS規格）を縦にして乗せ、上から挟んだ状態で計測し、穴方向の数値を示した。重さは、A&D電子天秤EK-120Aで計測を行った。気泡孔は10Xのスケールルーペによる簡易計測を行った。
- 15 出土遺物は調査終了時までには洗浄され、遺跡略号(R354SN)、調査区、調査面、遺構名またはグリッド名、遺物番号が注記されている。
- 16 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については以下の表記をともに使用する。原則、一次堆積の場合はテフラ名(As-Bなど)を使用し、埋没土に含まれる場合は軽石名として、F Pなどを使用した。
- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 浅間A軽石:As-A(1783年) | 浅間Bテフラ:As-B(1108年) |
| 榛名山二ツ岳軽石:Hr-FP(6世紀中葉) | 榛名山二ツ岳火山灰:Hr-FA(6世紀初頭) |
| 浅間C軽石:As-C(3世紀後半) | 浅間板鼻黄色軽石:As-YP(約1.5万年前) |
- 17 本書に掲載した地図は下記のものを使用した。
- ・国土地理院地形図1:25,000「高崎」(平成22年12月1日発行)「前橋」(平成22年12月1日発行)「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)
 - ・国土地理院地形図1:50,000「高崎」(平成10年12月1日発行)
 - ・国土地理院地勢図1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)「長野」(平成10年2月1日発行)
 - ・2千5百分の1玉村町都市計画図7玉村町役場平成6年発行
- 18 本書の編集にあたっては、下記を主要参考文献とした。
- ・瀧川伸男・神谷佳明・石守晃2010『齊田中耕地遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 - ・小島敦子2011『上新田中道東遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 19 34・70・90・106・126・137頁に掲載した1次調査の遺構写真は、群馬県教育委員会提供である。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1項 調査に至る経過……………1

第2項 調査の方法……………2

1 グリッドの設定……………2

2 調査区の設定……………3

3 調査の方法……………3

第3項 調査の経過……………3

第4項 整理事業の経過……………5

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の位置と地形……………6

2 周辺の遺跡……………8

第3章 発掘調査の記録

第1項 遺跡の概要……………13

1 遺構の概要……………13

2 基本土層……………14

第2項 1面の遺構と遺物……………20

1 概要……………20

2 溝……………20

3 復旧坑群・復旧痕群……………31

第3項 2面の遺構と遺物……………39

1 概要……………39

2 土坑墓……………39

3 疑似畦畔……………39

4 溝……………39

第4項 3面の遺構と遺物……………53

1 概要……………53

2 橋……………53

3 溝……………53

第5項 4面の遺構と遺物……………75

1 概要……………75

2 水田……………75

3 落ち込み……………77

4 溝……………77

第6項 5面の遺構と遺物……………83

1 概要……………83

2 水田……………83

3 溝……………87

第7項 6面の遺構と遺物……………95

1 概要……………95

2 ビット……………95

3 落ち込み・耕作痕ほか……………95

4 溝……………97

第8項 7面の遺構と遺物……………103

1 概要……………103

2 水田……………103

3 疑似畦畔……………103

第9項 8面の遺構と遺物……………109

1 概要……………109

2 溝・土坑……………109

第10項 9面の遺構と遺物……………119

1 概要……………119

2 旧河道・小谷地……………119

第11項 遺構外出土遺物……………124

第4章 鑑定分析……………131

第5章 まとめと考察……………133

第1項 まとめと問題点……………133

1 1面……………133

2 2面……………134

3 3面……………134

4 4面……………134

5 5面……………134

6 6面……………138

7 7面……………140

8 8面……………140

9 9面……………140

第2項 考察……………143

1 Ⅲ区3面中世屋敷の再検討……………143

挿 図 目 次

第1図	道跡位置図(国土地理院発行20万分の1地形図「宇都宮」長野「平成10年発行を使用)……………	1	第538図	I区4面水田エレーベーション……………	76
第2図	道跡と国道354号バイパスの位置図(国土地理院発行5万分の1地形図「高崎」平成10年発行を使用)……………	2	第548図	IV区4面落ち込み群エレーベーション……………	78
第3図	調査区およびグッド設定図(2千5百分の1 玉村町都市計画図7 玉村町役場平成6年発行を使用)……………	4	第558図	IV区4面48号溝……………	79
第4図	道跡周辺の地形(群馬県史「通史編1より作成)……………	6	第578図	Ⅱ区4面全体図……………	80
第5図	明治初期地目・道路・水路復元図(2千5百分の1 玉村町都市計画図7 玉村町役場平成6年発行を使用)……………	7	第588図	I区4面全体図……………	81
第6図	I次調査Ⅲ区47号溝遺物出土状態……………	8	第598図	Ⅱ区5面水田エレーベーション……………	83
第7図	周辺道跡分布図……………	9	第608図	Ⅱ区5面水田下位の疑似畦畔……………	84
第8図	基本土層柱状図……………	16	第618図	Ⅲ区5面水田エレーベーション……………	85
第9図	全体図(1)……………	17	第628図	I次調査Ⅲ区5面水田115区画耕作痕……………	85
第10図	全体図(2)……………	18	第638図	IV区5面水田エレーベーション……………	86
第11図	全体図(3)……………	19	第648図	IV区5面水田面牛跡跡……………	86
第12図	I区1面1号溝……………	20	第658図	IV区5面20号溝……………	88
第13図	I区4面4号溝、1号杭列と4号溝出土遺物……………	22	第668図	IV区5面20号溝出土遺物……………	89
第14図	I区1面7号溝(1)と出土遺物……………	23	第678図	Ⅲ区5面全体図……………	91
第15図	I区1面7号溝(2)・25号溝と25溝出土遺物……………	24	第688図	Ⅲ区5面全体図……………	92
第16図	I区1面26～28号溝と27号溝出土遺物……………	26	第698図	Ⅱ区5面全体図……………	93
第17図	Ⅱ区1面1号溝……………	27	第708図	IV区6面5号ビット……………	95
第18図	IV区1面4・49号溝と4号溝出土遺物……………	28	第718図	I区6面1号耕作痕・1号落ち込み・33号溝……………	96
第19図	IV区1面40・41・45・46号溝と41・45号溝出土遺物……………	30	第728図	Ⅱ区6面17号溝……………	97
第20図	IV区1面43・50号溝……………	32	第738図	Ⅱ区6面24号溝……………	98
第21図	Ⅱ区1面5・6号復旧痕群……………	32	第748図	IV区6面全体図……………	99
第22図	I区1面7号復旧坑群……………	33	第758図	Ⅲ区6面全体図……………	100
第23図	IV区1面全体図……………	35	第768図	Ⅱ区6面全体図……………	101
第24図	Ⅲ区1面全体図……………	36	第778図	I区6面全体図……………	102
第25図	Ⅱ区1面全体図……………	37	第788図	IV区7面出土遺物……………	103
第26図	I区1面全体図……………	38	第798図	IV区7面全体図……………	107
第27図	I区2面1号基及び出土遺物……………	40	第808図	Ⅲ区7面全体図……………	108
第28図	I区2面疑似畦畔断面図……………	44	第818図	I区8面34号溝・IV区8面51～53号溝……………	110
第29図	Ⅱ区2面23～26号溝と23号溝出土遺物……………	45	第828図	IV区8面9・10号土坑、54・55・57号溝……………	111
第30図	Ⅱ区2面27～29号溝……………	47	第838図	IV区8面56・58～60号溝……………	113
第31図	Ⅲ区2面3号溝……………	48	第848図	IV区8面61～64号溝……………	114
第32図	Ⅲ区2面全体図……………	49	第858図	IV区8面全体図……………	115
第33図	Ⅱ区2面全体図……………	50	第868図	Ⅲ区8面全体図……………	116
第34図	I区2面全体図……………	51	第878図	I区8面全体図……………	117
第35図	Ⅱ区3面1号橋と杭列……………	54	第888図	IV区9面1・2・7・8号河道断面図、杭と1号河道出土遺物……………	121
第36図	I区3面8A・8B号溝と出土遺物……………	55	第898図	IV区9面2号河道出土遺物……………	123
第37図	I区3面8A・8B号溝断面図……………	56	第908図	I～IV区遺構外出土遺物……………	125
第38図	I区3面16～19号溝……………	58	第918図	IV区9面全体図……………	127
第39図	I区3面29～32号溝……………	59	第928図	Ⅲ区9面全体図……………	128
第40図	Ⅱ区3面3・4・72～74号溝と3・73号溝出土遺物(1)……………	61	第938図	Ⅱ区9面全体図……………	129
第41図	Ⅱ区3面3・73号溝出土遺物(2)……………	62	第948図	I区9面全体図……………	130
第42図	Ⅱ区3面6号溝……………	64	第958図	赤田中耕地道跡Ⅱ区3号溝出土馬歯出土部位図……………	132
第43図	Ⅱ区3面30・42・70号溝と30・43号溝出土遺物……………	65	第968図	赤田中耕地道跡Ⅱ区3号溝出土馬歯出土部位図……………	132
第44図	Ⅱ区3面71号溝……………	66	第978図	IV区4・5・6面合成図……………	135
第45図	Ⅲ区3面11・13・14・42・104号溝と104号溝出土遺物……………	67	第988図	4・5面水田地型断面図……………	136
第46図	IV区3面44号溝……………	68	第998図	I次調査Ⅲ区48・50号溝断面……………	138
第47図	IV区3面42・47号溝……………	69	第1008図	I区4・6面合成図……………	139
第48図	IV区3面全体図……………	71	第1018図	I次調査IV区2号河道遺物出土状態……………	141
第49図	IV区3面全体図……………	72	第1028図	IV区9面2号河道杭分布図……………	142
第50図	Ⅱ区3面全体図……………	73	第1038図	I次調査Ⅲ区中伊屋敷変遷修正案……………	145
第51図	I区3面全体図……………	74	第1048図	I次調査Ⅲ区1・13号掘立柱建物修正案……………	146
第52図	I区4面水田断面図……………	75	第1058図	I次調査Ⅲ区中伊屋敷出土跡変遷案……………	148
			第1068図	Ⅲ区3面ビット柱痕石割型……………	149

表 目 次

第1表	周辺道路一覧表	11・12
第2表	道橋一覧表	13
第3表	I区1面4号溝出土遺物	22
第4表	I区1面7号溝出土遺物	25
第5表	I区1面25号溝出土遺物	25
第6表	I区1面27号溝出土遺物	27
第7表	IV区1面4号溝出土遺物	29
第8表	IV区1面41・45号溝出土遺物	31
第9表	I区2面1号墓出土遺物	41～43
第10表	II区2面23号溝出土遺物	45
第11表	II区3面1号橋脚杭杭計測表	53
第12表	II区3面1号橋計測表	54
第13表	I区3面8号溝出土遺物	55
第14表	II区3面3・73号溝出土遺物	62
第15表	II区3面30・43号溝出土遺物	66

第16表	III区3面104号溝出土遺物	67
第17表	I区4面水田計測表	75
第18表	II区5面水田計測表	83
第19表	III区5面水田計測表	85
第20表	IV区5面水田計測表	87
第21表	IV区5面20号溝出土遺物	89
第22表	IV区7面水田出土遺物	103
第23表	IV区7面水田計測表(1～66)	103・104
第24表	IV区7面C混土疑似廻轉計測表(101～167)	104・105
第25表	IV区9面1号河遺出土遺物	120
第26表	IV区9面2号河遺出土遺物	120・124
第27表	I～IV区道橋外出土遺物	124
第28表	齊田中耕地遺跡出土人骨調査計測値及び比較表	131
第29表	1次調査Ⅱ区中世屋敷建物一覧	144
第30表	1次調査Ⅲ区中世屋敷建物総括表	147

写真図版目次

PL.1	I区1面調査区全景(東から) I区1面1号溝全景(西から) I区1面1号溝セクション(南から) I区1面4号溝セクションB(南から)
PL.2	I区1面4号溝全景(南から) I区1面4号溝セクションA(南から) I区1面4号溝、杭列全景(南から) I区1面4号溝、杭列セクションA(南から) I区1面4号溝、杭列セクションB(南から)
PL.3	I区1面7号溝東半部全景(北西から) I区1面7号溝東半部全景(南から) I区1面7号溝セクションA(南から) I区1面7号溝中央部全景(南から) I区1面7号溝セクションC(南から)
PL.4	I区1面7号溝セクションB(南から) I区1面7号溝西半部全景(西から) I区1面25号溝中央部全景(南から) I区1面25号溝西半部全景(西から) I区1面25号溝セクション(南から) I区1面26号溝セクション(西から) I区1面26号溝全景(西から) I区1面27号溝セクション(南から)
PL.5	I区1面27号溝全景(南から) I区1面28号溝全景(南から) II区1面1号溝セクション(東から) II区1面1号溝全景(東から)
PL.6	IV区1面東半部全景(上空から) IV区1面4・49号溝全景(北西から)
PL.7	IV区1面4号溝内掘出土状態(東から) IV区1面4号溝セクション(東から) IV区1面40・45号溝全景(南から) IV区1面40・45号溝セクションA(東から) IV区1面40・45号溝セクションB(東から)
PL.8	IV区1面40号溝・3面47号溝セクション(西から) IV区1面41号溝全景(北西から) IV区1面43号溝全景(北から) IV区1面43号溝セクション(南から) IV区1面46号溝全景(西から) IV区1面50号溝セクション(北から) IV区1面50号溝全景(南から) IV区1面50号溝セクション(南から)

PL.9	I区1面7号復旧杭群全景(東から) I区1面7号復旧杭群セクション(東から) II区1面5号復旧竈群全景(南から) II区1面5号復旧竈群セクション(南から) II区1面5号復旧竈群セクション(南から)
PL.10	II区1面6号復旧竈群全景(北から) II区1面6号復旧竈群セクション(南から) I区2面1号墓全景(南から) I区2面1号墓遺物出土状態(南から) I区2面1号墓セクション(南から)
PL.11	II区2面23号溝全景(東から) II区2面23号溝セクション(東から) II区2面23号溝遺物出土状態(南から) II区2面23号溝遺物出土状態(南から) II区2面24号溝セクション(東から)
PL.12	II区2面25号溝セクション(北東から) II区2面26号溝セクション(東から) II区2面27号溝セクション(東から) II区2面28・29号溝セクション(北から) III区2面3号溝全景(西から)
PL.13	III区2面3号溝セクション(西から) I区2面疑似廻轉(東から) I区2面疑似廻轉(西から) I区2面疑似廻轉セクション(南から)
PL.14	II区3面1号橋全景(南から) II区3面1号橋P・5・8～11全景(南から) II区3面杭列C断面(南から) II区3面杭列D断面(南から) II区3面杭列E断面(南から) II区3面杭列G断面(南から) II区3面杭列1断面(南から)
PL.15	I区3面8A・8B号溝全景(南から) I区3面8A・8B号溝セクション(南から) I区3面8B号溝セクション(南から) I区3面8号溝掘人持出土状態(南から) I区3面8・16・17号溝セクション(南から)
PL.16	I区3面16～19号溝全景(北から) I区3面16・19号溝セクション(南から) I区3面18号溝セクション(南から) I区3面29号溝全景(南から) I区3面29号溝セクション(南から)

PL.17	I区3面30・31・32号溝全景(南から) I区3面30号溝北部全景(西から) I区3面30号溝セクション(南から)	PL.30	I区6面33号溝全景(南から) I区6面33号溝セクション(南から) II区6面17号溝全景(南東から)
PL.18	I区3面30・31・32号溝セクション(南から)	PL.31	II区6面17号溝セクション(北から) IV区6面24号溝全景(北から) IV区6面24号溝全景(南から)
PL.19	II区3面調査区全景(上空から) II区3面調査区全景(東から)	PL.32	IV区6面24号溝セクション(北から) IV区7面水田西半部全景(西から) IV区7面C趾上擬似畦畔西半部全景(南から)
PL.20	II区3面3号溝全景(西から) II区3面4号溝全景(西から) II区3面6号溝セクション(南から) II区3面43号溝全景(南から)	PL.33	IV区7面D趾上擬似畦畔東半部全景(南から) IV区7面全景(上空から) IV区7面水田全景(上空から)
PL.21	III区3面13・14号溝全景(南から) III区3面11・13・14号溝セクション(南東から) III区3面13・14・104号溝セクション(南東から) IV区3面42号溝西半部全景(北から) IV区3面42号溝東半部全景(北から)	PL.34	IV区7面C趾上擬似畦畔全景(上空から) I区8面34号溝全景(南から) I区8面34号溝セクションB(北東から) I区8面34号溝セクションA(南西から)
PL.22	IV区3面42号溝セクション(南から) IV区3面44号溝全景(北から) IV区3面44号溝セクション(南から) IV区3面47号溝・4面48号溝セクション(西から) IV区3面47号溝全景(北西から)	PL.35	IV区8面51号溝セクション(南東から) IV区8面52号溝セクション(南東から) IV区8面51号溝全景(南東から) IV区8面53号溝セクション(南東から) IV区8面54号溝セクション(西から)
PL.23	IV区4面調査区全景(上空から)	PL.36	IV区8面54・55・57号溝全景(北から) IV区8面9・10号土坑全景(北から) IV区8面9・10号土坑、54号溝セクション(北東から)
PL.24	I区4面水田16区西付芝全景(北から) I区4面水田43区西付芝全景(南から) I区4面水田F断面(南から) I区4面水田H断面(南から) IV区4面水田全景(上空から) IV区4面48号溝全景(北西から)	PL.37	IV区8面55号溝全景(南東から) IV区8面55号溝セクション(南から) IV区8面56・58号溝全景(東から) IV区8面56号溝セクション(東から) IV区8面57号溝全景(南西から) IV区8面57号溝セクション(西から)
PL.25	II区5面水田東半部全景(南から) II区5面水田中央部全景(南西から) II区5面水田畦セクションB(南から) II区5面水田下の擬似畦畔(北東から) III区5面水田全景(南から)	PL.38	IV区8面58号溝セクション(東から) IV区8面59～64号溝全景(南西から) IV区8面59～63号溝セクション(南西から) IV区8面62号溝セクション(南から) IV区8面64号溝セクション(南から)
PL.26	III区5面水田北半部全景(南東から) III区5面水田南半部全景(南から) III区5面水田耕作痕全景(北西から) IV区5面水田全景(東から) IV区5面水田東半部全景(東から) IV区5面水田西半部全景(東から) IV区5面水田前牛跡跡(西から) IV区5面水田前牛跡跡断面(南東から)	PL.39	III区9面調査区全景(南から) IV区9面調査区全景(上空から)
PL.27	IV区5面調査区全景(上空から)	PL.40	IV区9面1号河道全景(南西から) IV区9面1・7号河道全景(南東から) IV区9面1・7号河道全景(北東から) IV区9面7号河道全景(北西から)
PL.28	IV区5面20号溝全景(南から) IV区5面20号溝遺物出土状態(南東から) IV区5面20号溝遺物出土状態(南から) IV区5面20号溝セクションB(北西から) IV区5面20号溝セクションA(東から)	PL.41	IV区9面1号河道杭1出土状態(東から) IV区9面2号河道全景(東から) IV区9面2号河道全景(北から) IV区9面2号河道セクションB(南東から) IV区9面2号河道セクションC(南から) IV区9面2号河道杭1出土状態(南から) IV区9面2号河道杭2出土状態(南西から) IV区9面2号河道杭3出土状態(南から) IV区9面2号河道杭4出土状態(北から) IV区9面2号河道杭5出土状態(北西から) IV区9面2号河道杭6～8出土状態(北から)
PL.29	I区6面1号耕作痕全景(西から) I区6面1号耕作痕確認状態(南から) I区6面耕具痕近景(南から) I区6面耕具痕近景(南から) I区6面1号落ち込み全景(北から) I区6面1号落ち込みセクション(西から) I区6面5号ピット全景(南から) I区6面5号ピットセクション(南から)	PL.42	PL.42
		PL.43	PL.43
		PL.44	PL.44

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1項 調査に至る経過

国道354号は高崎駅東口を起点とし、玉村町・伊勢崎市・太田市・大泉町・館林市にいたる。群馬県南東部の主要都市を結び、東北自動車道館林インターチェンジを経由して板倉町まで総延長58.61kmの広域幹線道路である。国道354号の整備事業は、沿道の産業立地・物流の円滑化、生活環境の利便化等、地域発展に貢献する交通網整備の一環として昭和37年度に始まった。館林インターチェンジ付近の整備から開始され、各地点で事業が進み、平成19年度には全体計画のほぼ70%を超えている。道路建設と併行して埋蔵文化財調査も継続して進められ、当事業団も平成8年度から、発掘調査を受託実施してきた。

齊田中耕地遺跡のある玉村町内の国道354号改築事業は、玉村バイパス延長5.3kmとして平成5年度に開始された。計画路線内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、県教育委員会、県土木部、伊勢崎土木事務所による協議を経て、平成8年度から当事業団への委託が開始された。調査は、計画区間の東端にある主要地方道藤岡大胡バイ

パス(平成13年12月15日開通)との交差点の西に接する福島大島遺跡から順次西へ着手することとなった。

齊田中耕地遺跡の発掘調査は、1次調査を平成14年～17年、2次調査を平成22年として実施した。

平成14年～平成17年(1次調査)

本遺跡の発掘調査は、平成14年4月1日から平成14年12月31日、平成15年7月1日から平成16年3月31日、平成16年4月1日から平成17年3月31日のほぼ3年にわたり実施された。その調査成果は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第484集「齊田中耕地遺跡」として刊行された。

平成22年度(2次調査)

道路中央部分は、計画当初盛り土となるため、調査対象から除外された部分である。その後、工事の設計が変更され、調査対象地となったため、道路中央部分の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成21年度国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴って実施された。平成22年3月18日付けて群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査の依頼があ



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行20万分の1地形図「宇都宮」「長野」平成10年発行を使用)

り、平成22年3月31日付けで群馬県伊勢崎土木事務所と当事業団の間に、発掘調査の委託契約が締結された。

契約された当初の発掘調査期間は、平成22年4月1日～平成23年1月31日であったが、平成22年6月11日付けで、調査の進展に伴う調査面積の増加と調査期間を平成23年3月31日まで延長することを内容とした「変更委託契約」が締結された。上新田中道東遺跡と合わせた最終的な調査面積は16,796㎡で、うち本遺跡は9,340㎡である。

第2項 調査の方法

1 グリッドの設定

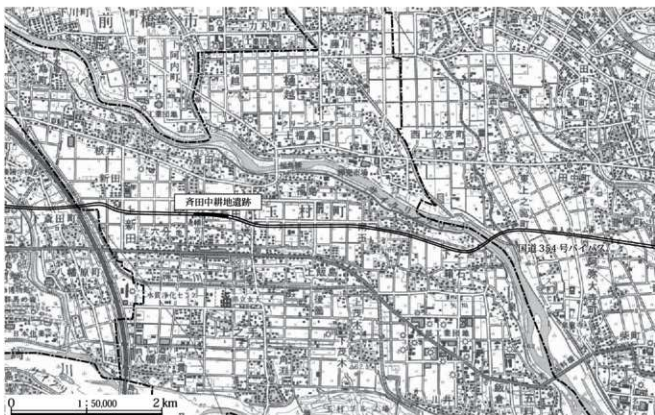
当該地域は遺跡が近接し、各調査遺跡個別によるグリッド設定では齟齬が生じると懸念される。このため、玉村地区全体で当該事業に関わる路線部分に統一したグリッドを設定した。

グリッドは、平成8年度に着手された国道354号玉村バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査において、共通の「地区-大区画-中グリッド-小グリッド」が設定されてい

る。「地区」は、国家座標に基づき、玉村町全域を網羅するように南東隅の座標 $X=30,000$ 、 $Y=60,000$ を起点とする10km四方の区画を設定した。次いで、「地区」を1km四方に分割し、南東隅から北に向けて1～100の番号を平行に付して「大区画」とした。次に「大区画」を100m四方に分割し、「大区画」と同様な手順で番号を付し、「中グリッド」とした。斉田中耕地遺跡は、44区(大区画)の $50 \cdot 51 \cdot 61 \cdot 70 \cdot 71 \cdot 81 \cdot 91$ (中グリッド)に位置する。

さらに、「中グリッド」を5m四方に分割し「小グリッド」とした。「小グリッド」は南東隅を起点として西方向(X軸方向)にアラビア数字を1～19、北方向にアルファベットをA～Tまで付した。発掘調査にあたっては、この「小グリッド」を基本にした。本報告書挿入図中では、「地区」「区」を省略し、「中」「小」グリッドを記載した。例えば、61A 1と標記した場合、61中グリッドのA 1小グリッドのことを指している。

測量の初年度は平成8年度であったことから、国道354号(玉村バイパス)関連の発掘調査の成果は日本測地系の座標で測量されてきた。このため、本遺跡も調査の混乱を避けるため日本測地系を踏襲している。



第2図 遺跡と国道354号バイパスの位置図(国土地理院発行5万分の1地形図「高崎」平成10年発行を使用)

2 調査区の設定

調査区の設定は1次調査の段階で調査グリッドとは別に、土地利用状況に応じ道路や水路を境として、任意の調査区名称を東からⅠ～Ⅳ区の順で呼称していた。このため、本報告に関わる2次調査段階でも、この調査区を踏襲した。Ⅲ区の面積が少ないのは、このためである。また、混乱を避けるため、調査段階ではセンターの意味として「C」を付し、例えばⅠ区Cと呼称することで、2次調査を表した。しかし、遺構名称は調査区全体で通番としたことから、本報告では「C」を付さずⅠ～Ⅳ区と単純化した(第3図参照)。

3 調査の方法

表土掘削の方法は、指標となる火山噴出堆積物を手がかかりに、遺構確認面の検出に当たり、バックホーによる重機掘削のち、人力による遺構確認作業を行った。その結果、浅間A軽石を埋没土に持つ復旧坑ほか1面の遺構面を検出した。以下、1次調査所見を参考に調査を行い、全体で9面調査を行った。

遺構調査に際しては、埋没土層の確認用ベルトを任意に設置し、ジョレン・移植ゴテほかにより掘削を行った。

遺構名称は、1次調査と同一遺構である場合は、原則としてその名称を使用した。ただし、1次調査が南北に分かれたため、今時の調査により同一と判明した溝などは、どちらか一方の名称を踏襲することとなった。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影により行った。遺構の平面測量は、デジタル平板測量を基本とし、広範囲にわたる水田遺構の記録に際しては、航空写真測量により効率化を図った。縮尺は遺構の性格に合わせて、1/10、1/20、1/40、1/100を選択した。断面測量は、個別に水糸により基準標高を設置し、コンベックス、棒尺ほかを使用して、手書きによる図化を行った。縮尺は平面図と同様に1/10、1/20、1/40を採択した。

遺構写真は、iso400ブローニー版モノクロ写真を6×7サイズで撮影し、カラー写真はデジタルカメラ(1000万画素)を使用して、ハードディスク及びDVDによるデータの記録保存を行った。調査区の全体写真など、調査状況にあわせラジオコントロールによるヘリコプターによって空中写真撮影、高所作業車搭乗による撮影を行った。

第3項 調査の経過

発掘調査は、平成22年7月1日～平成23年3月31日まで実施した。主な調査経過は以下のとおりである。

調査日誌抄録

平成22年(2010)

- 7月1日 調査準備着手
- 7月23日 Ⅱ・Ⅲ区表土掘削開始
- 7月30日 Ⅱ区1面調査開始
- 8月3日 Ⅱ区1面5・6号復旧痕群調査開始
- 8月6日 Ⅱ・Ⅲ区1面空中写真撮影
- 8月10日 Ⅲ区2面重機掘削開始
- 8月17日 Ⅱ区2面重機掘削開始
- 8月18日 Ⅱ区2面23号溝掘削
- 9月1日 Ⅲ区5面水田検出
- 9月7日 Ⅲ区最終面掘削
- 9月10日 Ⅲ区調査終了
- 9月14日 Ⅱ区5面空中写真撮影
- 9月15日 Ⅱ区6面調査開始
- 9月27日 Ⅱ区調査終了
- 9月30日 Ⅰ区表土掘削開始
- 10月1日 Ⅰ区1面1・7号溝調査開始
- 10月19日 Ⅰ区1面25号溝調査開始
- 10月22日 Ⅰ区B混土重機掘削開始
- 10月25日 Ⅰ区3面B混溝調査開始
- 10月27日 Ⅰ区4面水田検出開始
- 10月28日 Ⅳ区表土掘削開始
- 11月6日 Ⅰ区空中写真撮影
- 11月10日 Ⅰ区6面掘削開始
- 11月12日 Ⅰ区6面耕作痕・溝調査開始
- 11月19日 Ⅰ区調査終了
- 11月25日 Ⅳ区1面4号溝調査開始

12月1日 Ⅳ区1面空中写真撮影

12月2日 Ⅳ区4面As-B直下水田検出開始

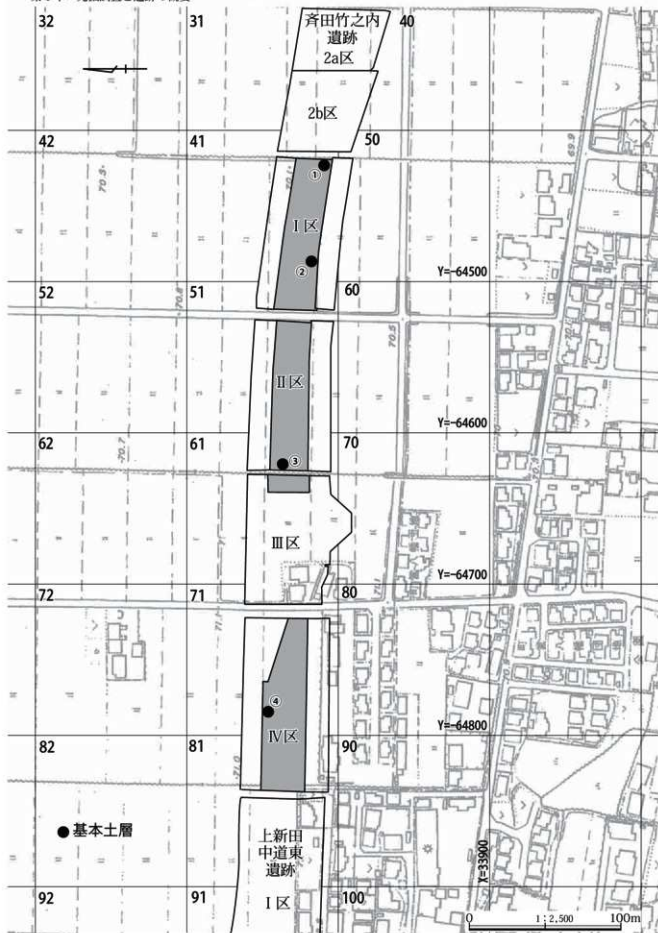
12月13日 Ⅳ区4面As-B直下水田空中写真撮影

12月16日 Ⅳ区5面洪水層下水田検出開始

平成23年(2011)

1月6日 Ⅳ区20号溝断面、水田畦断ち割り調査開始

1月12日 Ⅳ区5面水田牛蹄痕・耕作痕調査開始



第3図 調査区およびグリッド設定図(2千5百分の1 玉村町都市計画図7 玉村町役場平成6年発行を使用)

- 1月13日 IV区5面空中写真撮影
 1月18日 IV区6面掘削開始
 1月20日 IV区7面水田検出開始
 2月10日 IV区7面空中写真撮影
 2月16日 IV区8面重機掘削開始
 2月17日 IV区8面土坑・溝調査開始
 2月22日 IV区9面河道跡調査開始
 2月25日 IV区7号河道調査開始
 3月10日 IV区8・9面空中写真撮影。IV区1・2号河道杭断ち割り調査開始。
 3月11日 東日本大震災発生、現場被害なし。
 3月14日 IV区調査終了。埋戻し。
 3月30日 伊勢崎土木事務所による完了検査。明渡し終了。
 3月31日 調査資料整備終了。



IV区調査風景

第4項 整理事業の経過

整理作業は、平成24年12月1日から平成25年5月31日の2か年にわたり実施した。

整理作業においては、遺物を種別・器種別に分類し、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等について、接合・復元・写真撮影・実測・トレース作業を実施した。

遺物の実測は手作業で実施したが、一部については長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定して素図を作成後、手作業で最終的な図化を行った。作成された実測図は手作業でトレースし、それをスキャンしてデジタルデータ化し、報告書掲載図とした。古銭、金属製品については、錆を除去する作業を実施後、写真撮影・実測等を行い、防錆処理を行なった。

遺構図については、平面図と断面図を照合し、修正とレイアウト作業を行い、デジタルトレースを行った後、掲載図として編集を行った。

遺構の計測は、測量原図を使用して行った。

遺構写真については、報告書に掲載する写真の選定とレイアウトを行い、図版を作成した。遺物写真撮影は、デジタルカメラで撮影し、レイアウトをもとに、加工・編集・図版作成を行った。

以上の作業と併行して、本文原稿・表原稿・土層注記等の執筆を行った。

報告書の出稿にあたっては、原稿・挿図・写真全てについてデジタルデータ化を行った。その後、校正作業を経て、平成25年7月に『齊田中耕地遺跡(2)』として発掘調査報告書を刊行した。

報告書に掲載した資料は、管理台帳作成後、収納作業を行った。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の位置と地形

本遺跡は佐波郡玉村町齊田内に所在し、前橋台地の南側に位置する。地形に関しては、西に隣接する『上新田中道東遺跡』（小島2012）で詳述されているため、以下に基本的な部分を引用する。

前橋台地の形成 「前橋台地は、榛名火山の南東麓から南東方向に広がり、下位から前橋泥流堆積物（前橋岩なだれ堆積物群）・前橋泥炭層で構成されている。更新世後期に利根川によってもたらされた前橋砂礫層を基盤として、約2～2.4万年前には浅間山山体崩落に起因する前橋泥流が堆積して、前橋台地は形成された。渋川市以南の利根川両岸に堆積した前橋泥流堆積層は、高崎市旧群馬町域から平野部へと広がり、東は前橋市の北東部から伊勢崎市西部にかけて10m以上の厚さで堆積して、烏川と広瀬川に挟まれた県央の平野部の基盤層を形成している。前橋泥流堆積層の上位には、シルト・粘土・砂・泥炭層などによって構成されている前橋泥炭層が堆積し

ている。このシルト・泥炭層は水中や湿潤な環境で形成されることから、この時期の前橋台地は湿地状態であったと推定されている。科学分析によると、水成ローム層に含まれる泥炭質粘土層は約1.3万年前という測定値が得られている。前橋泥炭層の中部には浅間山起源の複数の降下軽石層が挟んでいる。

利根川の変流 「前橋台地の基盤層である前橋泥流をもたらし利根川は、現在榛名山南東裾野の末端を侵食する形で南流し、前橋市大手町付近から玉村町五科付近まではこの台地上を貫通している」。しかし、「利根川の変遷をたどると、約2.4万年前には総社町辺りから新前橋～染谷川、澗川付近を流れ井野川に注いでいたとされるが、その後約1.7万年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城山南西麓の広瀬川低地帯にその流路を変更した。利根川が現在の河道に移ったのは天文年間であろうと考えられている。

微地形の形成 「現在の利根川の両岸には自然堤防が形成されている。その表層は天明三（1783）年の浅間山噴火



(1M) 井野川泥流堆積面

(1C) 広瀬川低地帯の旧中州（浅間Bテフラ降灰後）

(LP) 前橋・伊勢崎台地上の微高地

(BM) 河成段丘（後背湿地：完新世）

(BP) 前橋・伊勢崎台地上の後背湿地

(BC) 河成段丘（旧中州：完新世）

第4図 遺跡周辺の地形（『群馬県史』通史編1より作成）

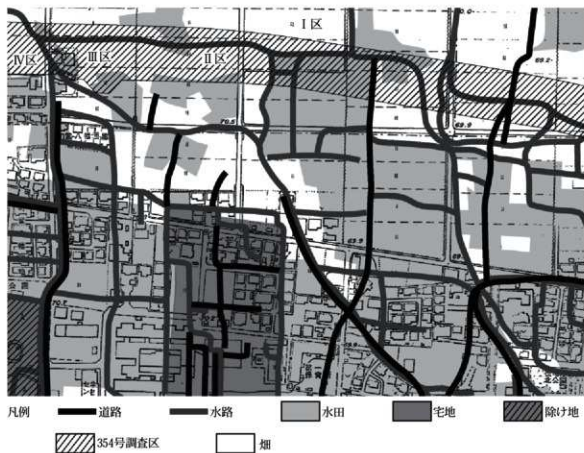
に伴う鎌原泥流であり、玉村町の上福島・穂越・板井・齊田・福島・南玉・下之宮・箱石・飯倉・川井・小泉・五料地区の利根川沿いの地域は古墳や高などが泥流に厚く覆われていることがわかっている。厚く幅の広い現自然堤防の下には、古墳などがつくられた低くて小規模な微高地や後背低地が埋没していると推定される。現利根川流路以外の地点では、このような微高地は現状でもみることができ、縄文時代以降の遺跡が分布している。

微高地の周りには、樹枝状の後背低地が形成されている。後背低地の形成には時間差があるが、前橋台地上の微高地を侵食した谷を埋めるそれぞれの時期の湿性堆積物や規模の小さな埋没谷を形成する河川堆積物によって構成されている。台地上には藤川や端氣川などの小河川が流下し、浸食や谷埋積を繰り返してきたのだろう(註1)。

小規模な埋没谷を形成した旧河道は、本遺跡で既に報告された1次調査部分のうち、Ⅱ区西端からⅣ区にかけて検出されている。北西から南東方向に向かう本流に対して、南北に樹枝状の分流が見られる。本流は最大幅10

m程度で、大きく蛇行する。出土遺物から時期が判明した流路は、4～5世紀に比定されている。一部に木杭が打たれ、用水路として利用された可能性が高く、農具も底面で出土する。この旧河道は埋没した後も小規模な谷地となり、Hr-FA直下(5世紀末)では小区画水田が営まれる。

谷地地形は南北に位置を変えながらも、水路として利用され基幹的な流路として存続したと考えられ、9世紀後半に洪水災害をもたらしている。洪水堆積物はⅢ区47号溝、Ⅳ区20号溝を埋めており、両溝を中心に洪水堆積物が広がることから、溝を奪取して洪水がもたらされたと考えられる。第6図は本遺跡1次調査においてⅢ区47号溝の中央部底面で、まとまって土器が出土した状況である。出土遺物は9世紀第3四半期から同第4四半期に及ぶ土師器・須恵器である。洪水により集積したと考えられるが、摩滅が少なく完形品が多いことから、周辺に分布した集落からの投棄とも思われる。しかし、直近でそうした状況もないため、故意に投棄されたものが集まったとも考えられる。いずれにしろ、層位的にもAs-B



第5図 明治初期地目・道路・水路復元図(2千5百分の1 玉村町都市計画図7 玉村町役場平成6年発行を使用)

降下以前であることは確実である。

玉村地域の水系は、現在近世に作られた備前堀(滝川)とその用水系によって人為的に作られているが、元来はこうした流路がいくつかあり、微地形を形成していたことが想像できる。第5図は、明治初期の「壬申絵図」などを手がかりに、用水や地目などを復元したものである(註2)。規模から考えても、本遺跡Ⅳ区東端を基幹となる用水路(自然河道起源)が流下していたことは確実であろう。

註1 小島敦子2012『上新田中道東遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団19～22頁。

註2 平成25年4月9日(火)、玉村町文化財整理室において旧図を実見精査した成果による。

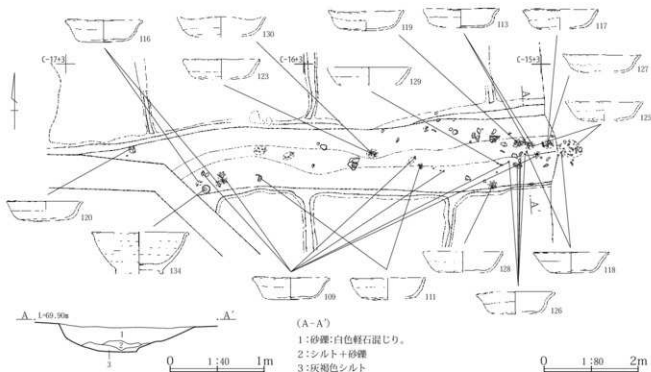
2 周辺の遺跡

旧石器～弥生時代 玉村町では旧石器時代の遺跡は見つかっていない。縄文時代の遺跡も非常に少なく、居住に不向きな環境であったと推測される。本遺跡(1:第7図・第1表参照、以下同じ)の1次調査では草創期の石槍1点ほか石鏃が出土している。隣接する上新田中道東遺跡(2)でも、草創期の有茎尖頭器3点が発見され、加曾利E2式(中期)～堀之内1式(後期)の縄文土器片も出土

している。弥生時代の遺跡も引き続いて少ないが、上新田中道東遺跡では後期の樽式土器や、外来系の土器も出土している。

古墳時代 前期になると遺跡が多くなる。上新田中道東遺跡でも竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓が検出されている。周辺では福島曲戸遺跡(12)、福島大光坊遺跡(10)、福島久保田遺跡(11)などで、前期の集落が調査されている。本遺跡1次調査では4～5世紀の旧河道が検出され、多数の木器が出土している。

古墳時代中期以降も引き続いて集落が営まれたと推測されるが、遺跡の調査例は少ない。本遺跡1次調査で旧河道から中期の土器も出土し、集落の存在をうかがわせる。水田の調査例は多く、本遺跡Ⅳ区の1次調査でも、浅間C軽石を鑄込んだ水田が検出され、Ⅲ・Ⅳ区ではHr-FA直下から5世紀末に被災して埋没した小区両水田が検出されている。同時期の調査例は、福島飯玉遺跡(6)、福島飯塚遺跡(7)、福島大島遺跡(9)、福島大光坊遺跡、福島久保田遺跡、福島曲戸遺跡でも認められる。**奈良・平安時代** 奈良時代の集落は、福島稲荷木遺跡(8)や上之手八王子遺跡(14)で調査され、平安時代の集落は、東方に隣接する齊田竹之内遺跡(5)や福島飯塚遺跡など、町内のほぼ全域で検出されている。



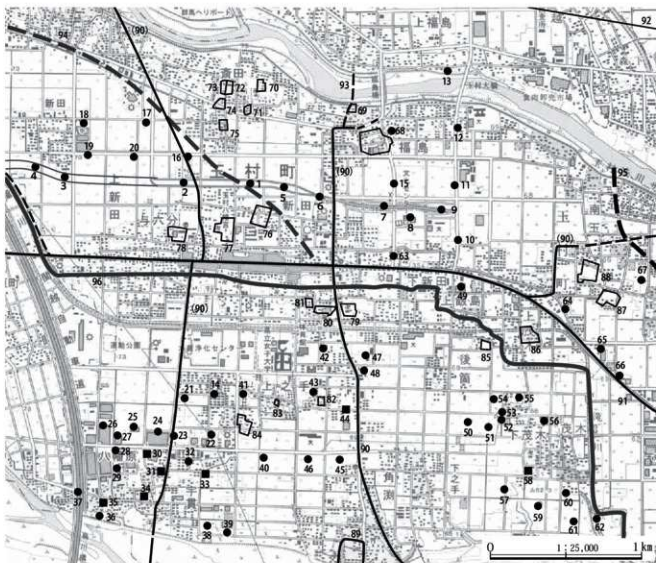
第6図 1次調査Ⅲ区47号溝遺物出土状態

特筆される遺構として、本遺跡のⅡ～Ⅳ区及び上新田中道東遺跡Ⅰ～Ⅲ区で検出された水田と疑似畦畔が挙げられる。これらを被覆する洪水砂は9世紀第3四半期～第4四半期と推定されている。同時期の用水路とみられるⅢ区47号溝では多量の土器が出土している(第6図)。水田面には洪水直下及び同層中から踏み込まれた牛蹄跡が多数見つかると、Ⅲ区南西隅では並行して溝状に掘られた跡痕が見つかると、畜力耕との関連も考えられる。

中世 12世紀初頭では、引き続きAs-B直下及び基本土層ⅢC(B混土)下位から水田が検出されている。本遺跡Ⅰ・Ⅳ区で検出された水田は直下に近いと考えられる。共通する特徴として、畦畔と考えられる高まりが幅広く潰れており、休耕田の可能性も考慮される。上新田中道東遺跡Ⅱ区では、B混土下面で並行して走向する溝状の耕作痕が検出され、犁による掘削痕と考えられている。

同遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区の水田面では、半月形の跡痕が多数見つかっている。時期は不明となっているが、分布に顕著な粗密が認められる。前橋市の公田池尻遺跡では、As-B直下の水田畦畔を避けて、半月形の跡痕が施工されていた。これまで、漠然と中世と考えられているが、浅間山噴火災害後の復旧作業も視野に入れた検討が必要であろう。その意味で、本遺跡で未検出であることも、意味を見いだすことができよう。

玉村町内には公領とされる玉村保があったが、12世紀中頃一部が伊勢神宮領となり玉村御厨が成立する。鎌倉幕府下で「上野国奉行人」として守護権力を行使した安達盛長は、指揮権を上野国内の国衙や寺社にまで及ぼしており、大犯三箇条に規定される守護権力に比べると、より広範な権限を持っていた。上野国奉行人は安達盛長に始まり、景盛-義景-泰盛と継承されていく。安達氏の本



第7図 周辺遺跡分布図

拠は幕府内の要人として鎌倉にあったが、上野国内にも基盤を持ち、玉村氏や飽間氏が被官化していった。角淵八幡宮は初代奉行人安達盛長の勸請という伝承がある。弘安8年(1285)、安達泰盛は霜月騒動により滅亡し、玉村氏も合わせて没落したと言われる。以後、北条得宗家は玉村御厨の多くを編入し、守護権力も獲得していった。

室町期になると、那波氏が勢力を伸ばし、上州白旗一揆の構成員として、上野守護山内上杉氏の被官となる一族も現れる。関東管領上杉氏と古河公方足利成氏が争った享徳の乱(享徳3年(1455)～文明14年(1483))では、玉村町角淵が戰場となり、岩松持国が在陣している。角淵は上野国と武蔵国の境となる烏川を渡る渡河点であり、鎌倉街道(90)が通り、江戸時代における佐波奉行街道へと受け継がれていった。

齊田を含む玉村五郷では、応永34年(1427)の風水害によって、農民が極楽寺への年貢を納入しない事件が発生する(註1)。本遺跡Ⅲ区の中世屋敷を区画する1次調査Ⅲ区11・12号溝においても、埋没土に洪水を起源とする土砂が認められた。中世屋敷の発掘調査は比較的多く、国道354号に関連した調査においても、本遺跡のほか、齊田竹之内遺跡(5)、福島飯玉遺跡(6)、福島飯塚遺跡(7)、福島大島遺跡(9)があり、西方に隣接する高崎市内でも、下滝高井前遺跡、綿貫伊勢遺跡、綿貫牛道遺跡、綿貫原北遺跡と密集している。近年では利根川縁辺に位置する下之宮高俣遺跡で、石垣を伴う虎口遺構と土塁を持つ屋敷遺構が調査され、注目されている。

近世 本遺跡の東方約150mを南流する滝川(96)は、滝川用水や備前堀とも呼ばれ、北群馬郡古岡町漆原付近で利根川から取水し、前橋市西部から高崎市東部を経て玉村町に至る広範囲な地域を潤すかんがい用水である。現在の受益地面積は1600haである。この用水は、総社城主秋元長朝によって慶長9年(1604)に完成し(天狗岩用水)、さらに同15年から幕府代官伊奈備前守忠次が、玉村町下之宮まで延長工事を行い、新田開発を推進している。正保4年(1647)以降は、日光例幣使街道(91)が整備され、宿場町玉村宿が繁栄期を迎えることとなった。本遺跡南方約250mにある玉村八幡宮は、宿場中心部の一角を形成している。

宿場町に関係するものとして、玉村宿東端を調査した八街北圃^{やちひのくろ}・八街北区遺跡(63)がある。ピット59基が検出されたが、陶器として復元されたものはない。「玉村宿」と墨書された陶磁器などが出土した溝は、屋敷地における居住地と耕作地を区分する溝と評価されている。

本県では、天明3年(1783)の浅間山噴火とその泥流によって被災した遺構が各地で調査されている。古くは火砕流によって被災した鎌原(嬭恋村)の集落調査が知られていたが、近年では八ヶ場地域で泥流によって埋没した集落や畠の調査事例が増加している。

本地域周辺では、玉村町の上福島中町遺跡(13)で、天明の泥流で埋没した集落が発見されている。建物は使所6棟を含む16棟が検出され、8か所程度の屋敷地に復元される。建物はすべて礎石建物となっており、本県における礎石建て構造の普及を示す資料としても貴重である。屋敷の周辺には整然と畠が配置され、道や溝がそれらを区画している。下層では寛保2年(1742)の洪水で埋没した建物も発見されている。

天明3年の浅間山噴火に関係する田高調査では、上福島中町遺跡と同じく、直接的に埋没したものが発見される一方で、被害に対する復旧作業を示す遺構も発見されている。これらの遺構には、幾つかの違いが報告されている。上滝五反畑遺跡では水田27枚が検出され、田面には天地返しによる農具痕がみられた。農具痕跡の一単位は、幅20cm前後で、長さ60～80cmの長方形をなし、これらが連続して整然と施工されている。報告書においては、「エンガ」と呼ばれる足踏み式の鎌が使用されたと分析している。

灰掻き穴や灰掻き溝も一般的に多く選択されている。天地返して処理できない場合に、選択されたものと想像される。福島曲戸遺跡は利根川に近いこともあり、浅間A軽石に加えて泥流被害も受け、被災した水田を復旧した復旧坑群が発見されている。本遺跡で検出された復旧痕群も天地返しを行い、浅間A軽石を埋め込んだものと判断される。

註1 峰岸純夫「極楽寺領上野玉村御厨の農民闘争」『中世の東国』東京大学出版会1989年269-273頁。

第1表 周辺道跡一覧表

No.	道跡名	所在地	○築路・溝等 ●墳墓 凸城跡・屋敷 □水田・品						不明	参考文献 / 団:公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
			開文	発生	古墳	奈良・平安	中世	近世		
1	西田中耕地道跡	玉村町下新田					凸	凸		本報告書 / 関2010「西田中耕地道跡」
2	上新田中道東道跡	玉村町上新田	○		○●		凸	凸		関2012「上新田中道東道跡」
3	上新田新田西道跡	玉村町上新田				○	凸	凸		関2009「上新田新田西道跡 上新田赤塚道跡」, 関2013「上新田新田西道跡(2)」
4	上新田赤塚道跡	玉村町上新田					凸	凸		関2009「上新田新田西道跡 上新田赤塚道跡」
5	斉田竹之内道跡	玉村町斉田竹ノ内					凸	凸		関2011「斉田竹之内道跡」
6	福島飯玉道跡	玉村町福島	○				凸	凸		関2008「福島飯玉道跡」
7	福島飯塚道跡	玉村町福島	○	○	●		凸	凸		関2007・2008「福島飯塚道跡(1)」,「福島飯塚道跡(2)」
8	福島稲荷木道跡	玉村町福島				○	凸	凸		玉村町教育委員会2009「福島稲荷木道跡(第1～3次調査) 福島稲荷木道跡 福島稲荷木道跡」
9	福島大島道跡	玉村町福島				○	凸	凸		関2009「福島大島道跡」
10	福島大光坊道跡	玉村町福島	○			凸	凸	凸		関2003「福島大光坊道跡 福島大光坊道跡」
11	福島久保田道跡	玉村町福島	○	○		凸	凸	凸		関2004「福島久保田道跡 福島大光坊道跡」
12	福島曲戸道跡	玉村町福島	○	○		凸	凸	凸		関2002「福島曲戸道跡 上福島道跡」
13	上福島中町道跡	玉村町福島					凸	凸		関2003「上福島中町道跡」
14	上之手八王子道跡	玉村町上之手				○	凸	凸		玉村町教育委員会1991「上之手八王子道跡」
15	福島稲荷木IV道跡	玉村町上福島			●	○	凸	凸		玉村町教育委員会2009「福島稲荷木道跡(第1～3次調査) 福島稲荷木道跡 福島稲荷木道跡」
16	桜楓東道跡	玉村町上新田					凸	凸		玉村町教育委員会2008「中道東道跡 中道西II道跡 新堀東道跡(第2次調査) 中道東II道跡 中道東II道跡(第2次調査)」
17	一本木道跡	玉村町板井					凸	凸		玉村町教育委員会2004「一本木道跡」
18	中道西道跡	玉村町上新田					凸	凸		玉村町教育委員会1996「中道西道跡(第1次・第2次調査)」
19	中道西II道跡	玉村町上新田					凸	凸		玉村町教育委員会1996「中道西道跡(第1次・第2次調査)」
20	中道東道跡	玉村町上新田					凸	凸		玉村町教育委員会2008「中道東道跡 中道西II道跡 新堀東道跡(第2次調査) 中道東II道跡 中道東II道跡(第2次調査)」
21	上之手地区道跡群(1)	玉村町上之手				○	○	○		玉村町教育委員会1999「上之手地区道跡群(1)・(2) 稲荷森道跡 天神塚道跡 宇賀地区道跡群 稲荷山道跡群 下茂本地区道跡群 下茂木神明II道跡 上新田地区道跡群」
22	行人塚道跡	玉村町上之手								玉村町教育委員会2006「神明道跡 行人塚道跡 十王堂道跡 中郷道跡 松原II道跡 杉山道跡」
23	上之手地区道跡群(2)	玉村町上之手								玉村町教育委員会1999「上之手地区道跡群(1)・(2) 稲荷森道跡 天神塚道跡 宇賀地区道跡群 稲荷山道跡群 下茂本地区道跡群 下茂木神明II道跡 上新田地区道跡群」
24	宇賀道跡	玉村町宇賀				○	○	凸		玉村町教育委員会1999「宇賀道跡」
25	赤城II道跡	玉村町宇賀				○	○	凸		玉村町教育委員会1993「赤城II道跡」
26	八幡原赤塚道跡	玉村町八幡原							○	玉村町教育委員会2002「角瀨伊勢山IV道跡・角瀨伊勢山IV道跡 下郷II道跡・天神塚II道跡・八幡原赤塚道跡・栗原道跡」
27	八幡原赤塚II道跡	玉村町八幡原					凸	凸		玉村町教育委員会2003「八幡原赤塚II道跡」
28	八幡原赤塚III道跡	玉村町八幡原				○	○	凸		玉村町教育委員会2003「八幡原赤塚III道跡」
29	赤城道跡	玉村町宇賀			●		○	凸		玉村町教育委員会2004「赤城道跡」
30	宇賀館(1)	玉村町宇賀					凸	凸		玉村町教育委員会1999「宇賀道跡」, 2005「宇賀II道跡(第1次・第2次調査)」
31	宇賀館(2)	玉村町宇賀					凸	凸		玉村町教育委員会1999「宇賀道跡」, 2005「宇賀II道跡(第1次・第2次調査)」
32	行人塚II道跡	玉村町上之手				○	凸	凸		玉村町教育委員会2000「行人塚II道跡」
33	新井屋敷	玉村町上之手					凸	凸		玉村町教育委員会1993「上之手石塚IV道跡」
34	宇賀城	玉村町宇賀			○	○	凸	凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡群」
35	八幡原城	玉村町八幡原					凸	凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡群」
36	上之手石塚III・IV道跡	玉村町上之手	○	○	○		凸	凸		玉村町教育委員会1993「上之手石塚III道跡」 玉村町教育委員会1993「上之手石塚IV道跡」
37	下郷道跡	玉村町宇賀			○●		凸	凸		県教育委員会1980「下郷」
38	蟹沢II～IV道跡	玉村町角瀨	○					○		玉村町教育委員会1993「蟹沢II道跡」 玉村町教育委員会1993「蟹沢IV道跡」
39	蟹沢道跡	玉村町角瀨					凸	凸		玉村町教育委員会2001「蟹沢道跡」
40	宮ノ下道跡	玉村町上之手						○		玉村町教育委員会2000「宮ノ下道跡 若王子II道跡 天神巡り道跡」
41	中郷道跡	玉村町上新田					凸	凸		玉村町教育委員会2006「神明道跡 行人塚道跡 十王堂道跡 中郷道跡 松原II道跡 杉山道跡」
42	中袋道跡	玉村町上之手								玉村町教育委員会2000「中袋道跡」
43	上之手立野道跡	玉村町上之手				○	凸	凸		玉村町教育委員会2004「内田屋敷道跡 原屋敷道跡 上之手立野道跡」
44	木暮屋敷	玉村町上之手					凸	凸		玉村町教育委員会2004「内田屋敷道跡 原屋敷道跡 上之手立野道跡」
45	天神巡りII道跡	玉村町角瀨			○	○		凸		玉村町教育委員会2000「宮ノ下道跡 若王子II道跡 天神巡り道跡」
46	若王子II道跡	玉村町角瀨					凸	凸		玉村町教育委員会2000「宮ノ下道跡 若王子II道跡 天神巡り道跡」
47	曲田道跡	玉村町上之手								玉村町教育委員会1999「曲田道跡」
48	曲田道跡II	玉村町上之手								玉村町教育委員会1999「曲田II道跡」

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	○集落・溝等 ●墳墓 凸城跡・屋敷 □水田・品					不明	参考文献 / 図:公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
			開文	弥生	古墳	奈良・平安	中世		
49	上飯高芝根Ⅱ遺跡	玉村町上飯高		○					玉村町教育委員会2002「上飯高芝根遺跡 上飯高芝根Ⅱ遺跡」
50	栗丸山古墳	玉村町角湧			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
51	玉村町第3号墳	玉村町上之手			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
52	神明遺跡	玉村町上茂木					□□	○	玉村町教育委員会2006「神明遺跡 行人塚遺跡 十王堂Ⅲ遺跡 中郷遺跡 松原Ⅱ遺跡 杉山遺跡」
53	下茂木神明Ⅱ遺跡	玉村町上茂木					□□		玉村町教育委員会1999「上之手地区遺跡群(1)・(2) 稲荷森遺跡 天神塚遺跡 宇良地区遺跡群 稲荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明Ⅱ遺跡 上新田地区遺跡群」
54	萩塚古墳	玉村町上茂木			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
55	嵐山南遺跡	玉村町上茂木			○				玉村町教育委員会1999「嵐山南遺跡」
56	下茂木地区遺跡群	玉村町上茂木					□□		玉村町教育委員会1999「上之手地区遺跡群(1)・(2) 稲荷森遺跡 天神塚遺跡 宇良地区遺跡群 稲荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明Ⅱ遺跡 上新田地区遺跡群」
57	浄土山古墳	玉村町下茂木			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
58	下茂木屋敷	玉村町下茂木					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
59	蟹ノ木山古墳	玉村町下茂木			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
60	オトノ塚古墳	玉村町下茂木			○●				玉村町教育委員会2003「オトノ塚遺跡」
61	殿ヶ石山古墳	玉村町下茂木			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
62	房子塚古墳	玉村町下茂木			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
63	八街北側・八街北地区遺跡	玉村町下新田						○	玉村町教育委員会2010「原屋敷Ⅲ遺跡 八街北側・八街北地区遺跡」
64	十王堂Ⅲ遺跡	玉村町南玉			○				玉村町教育委員会2006「十王堂・十王堂Ⅱ遺跡」
65	十王堂・十王堂Ⅱ遺跡	玉村町上茂木						□	玉村町教育委員会2006「十王堂・十王堂Ⅱ遺跡」
66	三境遺跡	玉村町上茂木					□□		玉村町教育委員会1997「三境遺跡・三境Ⅱ遺跡」
67	社宮山古墳	玉村町南玉			●				玉村町教育委員会1992「玉村町の遺跡」
68	福島寺	玉村町福島					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
69	仁字津木屋敷	玉村町福島					凸		玉村町誌編纂準備委員会1986「玉村町誌研究(その1)」
70	田口下屋敷	玉村町青田					凸		玉村町教育委員会「田口下屋敷遺跡」2000
71	田村屋敷	玉村町青田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
72	釜井末屋敷	玉村町青田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
73	釜井西屋敷	玉村町青田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
74	町田屋敷	玉村町青田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
75	石原屋敷	玉村町青田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
76	玉村館	玉村町下新田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
77	玉村八幡館	玉村町下新田					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
78	与六屋敷	玉村町与六分					凸	凸	群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
79	観照寺屋敷	玉村町上之手					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
80	宮下屋敷	玉村町上之手					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
81	内田屋敷	玉村町上之手					凸	凸	玉村町教育委員会2004「内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡」
82	秋山屋敷	玉村町上之手					凸		玉村町教育委員会2004「内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡」
83	垂田屋敷	玉村町上之手					凸		玉村町教育委員会2004「内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡」
84	原屋敷	玉村町上之手					凸	凸	玉村町教育委員会2004「内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡」
85	後徳原敷	玉村町後徳					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
86	茂木館本館(田口屋敷)	玉村町上茂木					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
87	南玉館(原玉屋敷)	玉村町南玉					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
88	玉村城(南玉村屋敷)	玉村町南玉					凸		群馬県教育委員会1988「群馬県の中世城跡跡」
89	角渡遺跡	玉村町角湧	○	○●			凸○	凸○	玉村町教育委員会2001「角渡遺跡」
90	鎌倉街道						道		群馬県教育委員会1983「歴史の遺跡調査報告書 鎌倉街道」
91	日光御幣使街道							道	群馬県教育委員会1979「歴史の遺跡調査報告書 日光御幣使街道」
92	推定東山道驛路						道		群馬県教育委員会1983「歴史の遺跡調査報告書 東山道」
93	福島船橋							植	玉村町誌編纂準備委員会1986「玉村町誌研究(その1)」
94	基幹水路								玉村町中世研究会総研グループのご教示による。
95	矢川								玉村町誌編纂委員会1995「玉村町誌通史編(下巻)」
96	旧沼川田路(堀前堀)								玉村町誌編纂委員会1995「玉村町誌通史編(下巻)」

第3章 発掘調査の記録

第1項 遺跡の概要

1 遺構の概要

本遺跡では重層的に生活面が検出され、9面調査が行われた。鍵層となるのは、下位からAs-C、Hr-FA、基本土層IVC（洪水層）、As-B、As-Aである。掲載については、煩雑さを避け、調査過程と同様に上位から下位へ記述を進めた。調査面は遺跡全体で統一したため、調査区によっては調査面が検出されていない場合もある。遺構数は第2表参照。

1面 As-A降下(天明3年(1783))以降の遺構であり、埋没土に浅間A軽石を含む。遺構は溝16条と、復旧坑群1か所、復旧痕群2か所である。溝は用水路であったものもあり、長く利用された末、最終的には塙整備により埋没したものも含まれる。復旧坑群・復旧痕群はⅠ・Ⅱ区のみ掲載となった。1次調査ではⅢ区で復旧坑群が多く検出されている。浅間A軽石を除去したものであり、本地域で広く見られる遺構である。軽石を直接埋め込んだ灰掻き溝と、いわゆる「天地返し」を行ったものが混在し、深さや形態にやや違いが見られる。

2面 As-A降下以前で、埋没土に浅間A軽石を含まないか、概ね近世とみられる遺構である。遺構は土坑墓1基、溝8条、疑似畦畔1か所が検出された。Ⅰ区で検出された土坑墓と疑似畦畔の新旧関係は不明である。土坑墓は17世紀代であった可能性が高く、近世墓としては古い事例で、検出状況も合わせて興味深いものである。疑似畦畔は基本土層ⅢA上面で確認された水田痕跡である。洪水層を多く含んだ基本土層Ⅱが水田耕作土となったために検出されている。Ⅱ・Ⅲ区の遺構は溝8条である。Ⅱ区5・23号溝とⅢ区3号溝は同一で、広域に及ぶ水路である。本来上流となる1面Ⅳ区4号溝が、塙整備以前まで継続使用されたため、調査面がわかれてしまった。Ⅱ区5・23号溝とⅢ区3号溝は、洪水などで埋没し機能を終えた。1面Ⅳ区4号溝の末流は、Ⅳ区東側調査区域外を南東方向へ直進したものと推測される。付け替えら

れたものか、元々分岐していたものかは不明である。

3面 As-B降下以降で基本土層Ⅲを埋没土とする。あるいは中世とみられる遺構である。遺構は溝29条と橋1基である。Ⅱ区1号橋は溝を渡る施設である。Ⅲ区では1次調査の中世屋敷を区画する溝の延長部分が検出された。中世屋敷の区画溝は洪水砂により埋没廃棄された部分があり、Ⅲ区2面3号溝が水路として存在していた可能性が高い。屋敷の東であるⅠ・Ⅱ区では、溝により区画された空間が4か所以上存在し、Ⅱ区では遺構間をつなぐ1号橋も検出されている。こうした空間の性格づけ

第2表 遺構一覧表

調査面	区別	溝	水田	その他
1面	Ⅰ区	7		復旧坑群1
	Ⅱ区	1		復旧痕群2
	Ⅲ区			
	Ⅳ区	8		
2面	Ⅰ区			土坑墓1/疑似畦畔
	Ⅱ区	7		
	Ⅲ区	1		
	Ⅳ区			
3面	Ⅰ区	10		
	Ⅱ区	11		橋1
	Ⅲ区	5		
	Ⅳ区	3		
4面	Ⅰ区		○	
	Ⅱ区			
	Ⅲ区			
	Ⅳ区	1	○	落ち込み1
5面	Ⅰ区			
	Ⅱ区		○	
	Ⅲ区		○	
	Ⅳ区	1	○	
6面	Ⅰ区	1		落ち込み1/耕作痕群
	Ⅱ区	1		
	Ⅲ区			
	Ⅳ区	1		ビット1
7面	Ⅰ区			
	Ⅱ区			
	Ⅲ区			
	Ⅳ区		○	疑似畦畔
8面	Ⅰ区	1		
	Ⅱ区			
	Ⅲ区			
	Ⅳ区	14		土坑2
9面	Ⅰ区			
	Ⅱ区			
	Ⅲ区			小谷地1
	Ⅳ区			旧河道4

も課題となる。

4面 VA上面のAs-B直下で検出された遺構および基本土層ⅢC上面(Ⅰ区)で確認された遺構調査面である。遺構は溝1条、水田2か所が検出された。Ⅰ・Ⅳ区で検出された水田の畦は潰れて幅広く、被災当時休耕していた可能性が高い。Ⅰ区水田は、後述するⅡ～Ⅳ区5面水田に区画形態が極めて似ており、Ⅰ区で5面水田が検出されていないため、同時期の水田を起源とする水田と考えられる。

5面 基本土層VA上面で確認される遺構調査面で、溝1条と水田3か所を検出した。水田はIVC(洪水層)直下が標準で、1次調査Ⅲ区南側が最も良好な遺存状態であり、Ⅱ・Ⅳ区は層位的に一致する。条里地割の形態を残す水田として注目される。水路としてⅣ区20号溝が検出される。1次調査ではⅢ区47号溝もあり、比定年代から水田も9世紀後半代と位置づけられる。Ⅲ・Ⅳ区では牛蹄跡多数と並走する溝状の耕作痕が検出され、畜力による水田耕作が想定できる。

6面 基本土層VB下位でHr-FAより上位で検出された遺構である。遺構はピット1基、溝3条、耕作痕・落ち込み1か所が検出された。古墳時代から平安時代に営まれた遺構が混在している。Hr-FAが堆積していない場合、Ⅶより上位で確認した場合となる。実質的に5面水田より古いものが選別される。Ⅰ区では耕作痕・落ち込み・関連する溝1条が検出され、上位4面水田と一致する要素がある。

7面 Hr-FA直下面と基本土層ⅦA段階である。前者は水田で、後者は疑似畦畔の各1か所である。水路は見つかっていない。2次調査で水田の検出はⅣ区のみだが、1次調査Ⅲ区でも同様に検出されている。谷地地形に形成された極小区画水田が主体である。用水は掛け流しが基本と見なされる。疑似畦畔もⅣ区のみで、1次調査Ⅳ区北側でも見つかっている。本来、面を変えるべきであるが、範囲が狭く重複しないため、同一調査面とした。

8面 基本土層ⅦBを確認面とする遺構である。遺構は土坑2基、溝15条である。後述の9面河道が埋没谷となっていた段階と考えられるが、状況は不明であり、9面と分けて扱った。Ⅳ区と1次調査Ⅲ区の溝群は9面の旧河道が埋没した谷と結んでいる。遺構の性格は水路であろうが、どのような生活遺構に伴うものか判然としない。

Ⅳ区では7面で浅間C軽石を含む疑似畦畔が検出されており、Hr-FA以前から水田耕作が行われていたことが判明している。

9面 基本土層ⅦB上面で確認された遺構で、最終調査面となる。検出遺構は旧河道4条と小谷地1か所である。旧河道には杭が打たれ、木製品も出土して5世紀段階まで水路として機能していたものが含まれる。8面の溝群との関連もうかがえるが、埋没谷として同一面で捉えられず関連づけは難しい。平面図は完掘状態である。埋没土上位にAs-CやHr-FAが堆積するものがあり、埋没年代は一律でない。旧河道は1次調査段階で遺跡全体の通番で1～8号河道が付番されており、今次に新たに付番したものはない。同番号の河道でもつながらず、別番号でつながるなど混乱が生じている。3号河道は規模から本流となる河道で、各調査区3号河道で一致する。著しく蛇行しながら遺跡内を北西から南東へ流下している。9面の地形は遺跡の地形を規定する基盤地形であり、旧河道の走向は後代の用水路の形成に影響を与えている。

2 基本土層

本遺跡の基本土層は、既報告の1次調査(群理文2010年)において記載されている。しかし、隣接する上新田中道東遺跡(群理文2012年)の報告において、本遺跡の成果も取り入れた基本土層が示された。このため、本報告でもその成果を取り入れることとした。土層注記(16頁)で、「2010」と断ったものは、本遺跡1次調査の土層に準拠しながら、番号を入れ替えたものである。「上新田中道東2012」と断ったものは、その成果を準用したものである。

IA 灰褐色土の表土であり、調査前は水田であったことから、旧耕作土が主体である。IBは、その床土として酸化凝集が顕著に認められる土層である。ICはⅠ区南側で散見される土層で、浅間A軽石を顕著に含み、復旧作業などの影響も考えられる。ICは遺構の埋没土として捉えられていないため、基本土層として扱う。

As-A 一次堆積は平面的に見られず、遺構の埋没土に堆積するものが、Ⅰ区で見られる程度である。ただし、本来は地表面を広く被覆したものをらしく、浅間A軽石を除いた復旧坑群が検出されている。

IIA 洪水起源とみられる黄褐色シルトを多く含むが、耕作による攪拌が進んだ灰黄褐色土である。II Bも洪水起源のシルトを主体とし、耕作土化が進んでいる。この土層中で水田耕作が行われた結果、下位のIII A上層を掘り込んで畦畔基部が掘り残され、II BとIII Aの層間で疑似畦畔を検出できることとなる(2面)。I区では、この疑似畦畔が平面的に検出されたが、II区ではIII層、IV区ではII Bが失われていたため、疑似畦畔は発見されなかった。

III A 浅間B軽石を多く含む黒褐色砂質土で、いわゆるB混土と呼ばれる土層である。下層に比べると色調は明るく耕作土化が進んでいる。III Bも浅間B軽石を多く含む砂質土で、攪拌が弱く色調は黒みが強い。III CはAs-Bの一次堆積が失われ、下位のIVまで攪拌が進んだ範囲で見られる土層である。黒褐色土でありながら、浅間B軽石を多く含むことに特徴がある。この層土を埋没土の主体とする溝も多く、3面に相当する調査面である。III Bの下位にはAs-Bの一次堆積が想定でき、IV区西端で一部堆積が確認され、直下の水田として調査された(4面)。また、I区の水田は同じ4面で扱うが、As-Bの一次堆積がほとんどなく、III C上面の起伏を水田と認定したものである。下位のIV Aも畦畔として高まることから、上層からの掘り込みで形成された疑似畦畔とは異なる。詳細は本文中で後述する。

As-B 一次堆積する範囲が少なく、直下の遺構としてはIV区西端の4面水田に限られる。ただし、I区4面の水田も直下ではないが、状況から同時期であったと言える。As-Bの一次堆積は、ユニット最下位にある細粒灰色軽石・火山灰の堆積により判別される。

IV A 黒褐色粘質土で水田耕作土である。本来はAs-B直下の水田耕作土に位置づけられるが、As-Bの堆積が少なく、明確な状況ではない。I区では水田が良好に検出されたが、As-B自体の堆積はわずかで、III C上面で検出されている。畦の断ち割り調査の結果、IV Bも隆起しており、III C上層からの掘り込みによる疑似畦畔ではない。形態的には他の調査区の5面水田と類似するため、同種の遺構としたいが、調査面として4面であることは動かせない。水田の位置づけについては、本文中で後述する。

IV B 灰褐色シルトで、洪水堆積物が耕作等により攪拌され形成されたものと考えられる。Hr-FPと見られる粗

粒白色軽石をやや多く含む。洪水は数時期に及び、最下位はIV Cとなる。

IV C 灰色～黄褐色土シルト・砂で、洪水堆積である。明確な堆積は、III区からIV区東半部の範囲に限られる。1次調査の報告ではIV下層と呼称されている。シルトと砂が互層をなすため、洪水の状況や時期は位置によって様ではない。直下面に水田が検出され、5面水田を被覆する遺層である。

IV A 灰褐色土の水田耕作土である。III・IV区のIV C直下では、この層位で水田が検出される(5面)。IV Cが堆積しないII区では、IV Bの下位にIV Aが露呈し、同様な水田が検出される。この場合は直下ではないため、厳密には同時期と見なすがたいが、形態的には極めて類似している。

IV B VAよりも色調が明るい灰褐色土。洪水堆積物を多く含む、VAに比べれば攪拌が弱い。II区西半部では、VAとVBの間に、洪水砂を含むにぶい黄褐色シルト質土であるVB^{*}が見られる。この層位に対応する洪水堆積層が、1次調査のIII区北東端で確認されており、幅の狭い洪水層である。直下で遺構は検出されていない。

IV A 褐色でやや粘質である。黒みが強く、VBとの層境は明確である。I区の場合、VIIまでの層厚が薄いため、分層できない。IV Aは明瞭な層土であるため、疑似畦畔の確認が容易となる。西側に隣接する上新田中道東遺跡I～III区では、この面で疑似畦畔が捉えられている。

Hr-FA III・IV区で数cm程度堆積するが、III区の調査は東端であったため確認できなかった。IV区では中央部を除く東西両端の、直下相当面水田を検出した(7面)。

IV A 粘性の強い黒褐色土である。浅間C軽石を含む、いわゆるC混土層に相当する。水田耕作も行われていたと考えられ、IV区ではIV Bの上面でIV Aを耕作土とする疑似畦畔を北西端で検出できた(7面)。

As-C IV区9面河道の埋没土上層で確認できる程度であり、直下で遺構は確認されていない。

IV B 粘性の強い黒褐色土である。浅間C軽石を含まないほかは、VII Aと同じである。

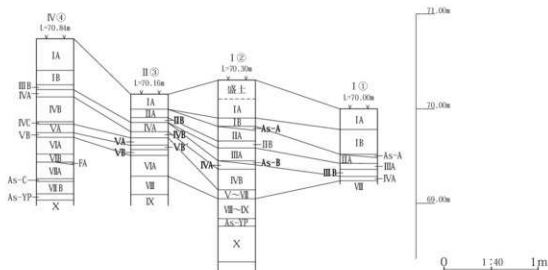
IV 灰色～灰黄色の粘質土である。9面の確認面である。

IX・X 以下は文化層として確認できなかった。

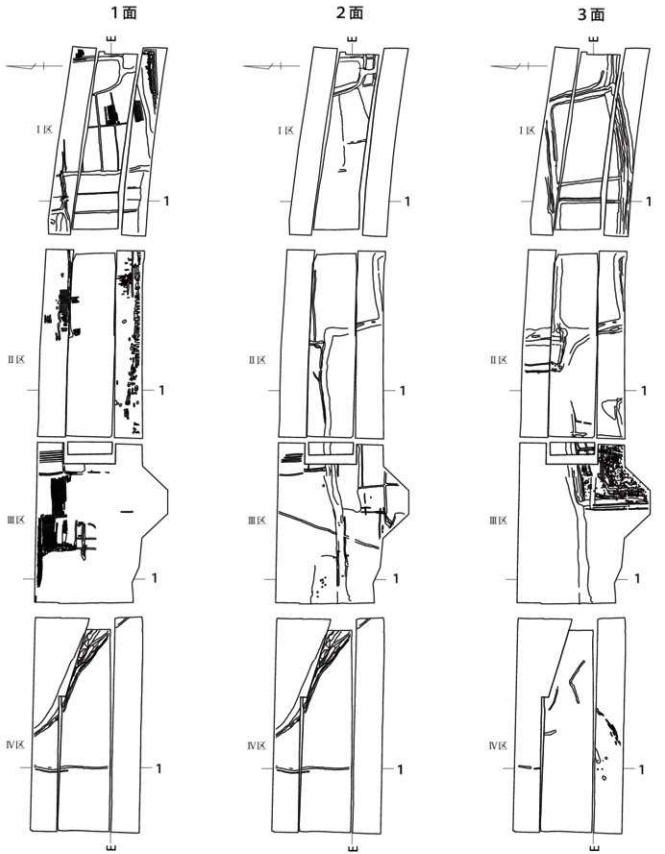
基本土層

- I A層 灰褐色土 水田耕作土。表土。
 I B層 にぶい褐色土 浅間A軽石少量含む。酸化凝集あり。水田床土。
 I C層 灰褐色土 浅間A軽石やや多く含む。
 As-A
 II A層 灰黄褐色土 洪水堆積物多く含む。黒褐色土を含む。
 (2010-II改め)
 II B層 灰色～黄褐色シルト 洪水堆積物多く含む。
 (2010-III改め)
 III A層 灰褐色砂質土 浅間B軽石を多く含む。いわゆるB混土。
 (2010-IV上層改め)
 III B層 褐灰色質土 浅間B軽石を多く含む。いわゆるB混土。
 (2010-IV上層改め)
 III C層 黒褐色砂質土 IVA上面を攪拌する。浅間B軽石多量に含む。
 As-B
 IV A層 黒褐色粘質土 水田耕作土。
 (2010-IV中層改め)
 IV B層 灰褐色シルト 粗粒白色軽石(FPか)含む。
 (上新田中道東2012準用)

- IV C層 灰色～黄褐色シルト・砂 洪水層。数次に及ぶ。
 (2010-IV下層改め)
 VA層 灰褐色土 やや粘質。洪水砂やや多く含む。酸化凝集顕著。水田耕作土。
 VB層 灰褐色土 酸化凝集顕著。
 VB'層 にぶい黄橙色シルト質土 洪水砂含む。
 VIA層 褐灰色土 やや粘質。
 VIB層 灰褐色土 やや粘質。
 Hr-FA
 VII A層 黒褐色粘質土 浅間C軽石を含む。いわゆるC混土。
 (上新田中道東2012準用)
 As-C
 VII B層 黒褐色粘質土 浅間C軽石を含まない。
 (上新田中道東2012準用)
 VIII層 灰色～灰黄色粘質土
 (上新田中道東2012準用)
 IX層 灰色～灰黄色粘質土 黄色風化軽石(As-YP)を多く含む。酸化凝集顕著。
 As-YP
 X層 灰色～緑色砂礫混土

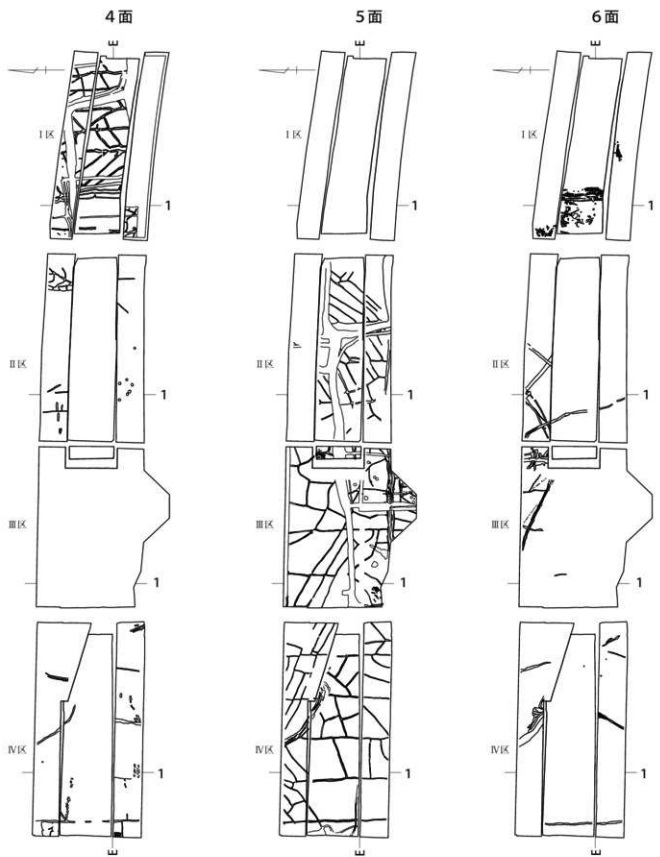


第8図 基本土層柱状図

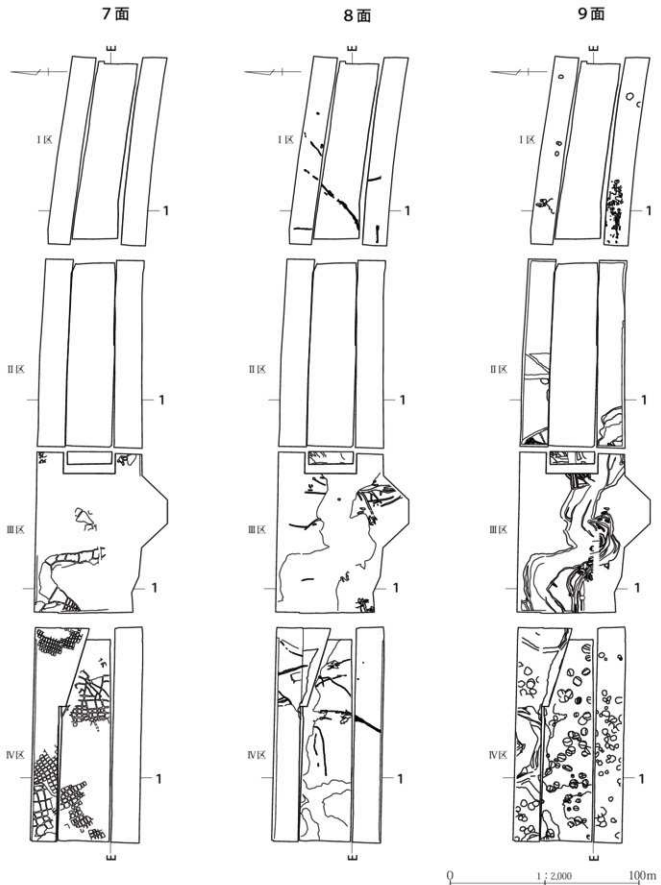


第9図 全体図(1)

0 1:2000 100m



第10図 全体図(2)



第11図 全体図(3)

第2項 1面の遺構と遺物

1 概要

1面はAs-A降下以降の遺構であり、埋没土に浅間A軽石を含む。遺構は溝17条と、復旧坑群1か所、復旧痕群2か所である。復旧坑・痕群はI・II区で検出された。浅間A軽石を除去した遺構であり、本地域で広く検出されている。「天地返し」を行った溝が混在し、深さや形態にやや違いが見られる。

2 溝

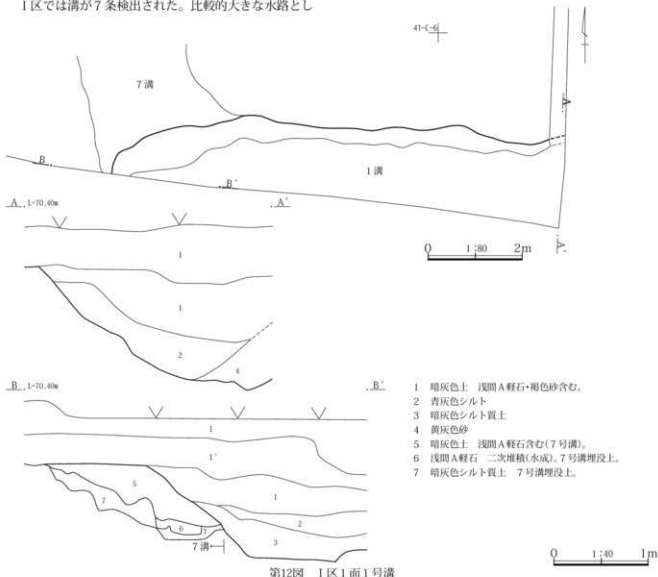
(1) I区

I区では溝が7条検出された。比較的大きな水路とし

て4・7号溝があり、4号溝中程から7号溝へ導水する点は注目される。その際の堰に関係して杭列が検出された。そのほかの溝は直線的で、耕作地の区画や耕作に直接関連する溝であろう。

I区1面1号溝(第12図、PL. 1)

位置 41B-5～41B-6グリッド。1面7号溝より後出。西側は調査区外に延び、1次調査の7号溝と同一となる。東側も調査区域外に延びる。平面形はほぼ直線状で、西端はやや湾曲気味だが、曲がらずにそのまま直線的に延びる。走向方位はN-85°-W。南半部は調査区域外となるが、断面形はU字形とみられる。底面は丸みを持つ。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。埋没土の中位に還元気味の青灰色シルトが堆積しており、湿潤な状況で自然埋没したと思われる。規模は長さ9.54m上端



幅191cm以上、下端幅142cm以上、深さ68cmで、1次調査も含めると長さ55.4mである。埋没土から土師器大型品2片、同小型品1片が出土する。埋没土から天明3年以降に埋まる。

1区1面4号溝・杭列(第13図、PL. 1・2)

位置 41C~H-17・18グリッド。1面7・25・26号溝と接続するが新旧関係不明で、並存していた可能性もある。南北両側とも調査区域外に延び、1次調査の4号溝と同一となる。平面形は直線状だが、南端はやや東へ折れる。走向方位はN-3°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持ち、南端は底面がW字状になるが、分岐していないため、掘り直しであろう。B断面の観察の結果、中央部に掘り直しがU字形に残り、東西両側に前段階の溝がある。これも時期差が想定されるが、判断としない。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。B断面では新段階の溝が、暗灰褐色シルト質で一気に埋まるため、人為的に埋没する。ただし、A断面及びB断面の古段階は自然埋没と思われる。規模は長さ21.88m上端幅150~222cm下端幅44~118cm深さ39cmで、1次調査も含めると長さ78.1mである。杭列は溝の中央付近に位置し、ほぼ直交する7号溝との接続部にあたる。両溝とも流水痕跡があるため、水路であった可能性が高い。7号溝の底面は本溝の底面より23cm高いため、本溝が用水の本流で、水位を上げ7号溝へ導水したものと推測される。杭は本溝の底面両脇と壁面中位に並走して2列走向し、7号溝部分で東壁に合わせて杭列も東へ折れている。全体として壁面を板あるいは草木類で護岸したものであろうが、7号溝付近は取り入れ口を兼ねていたと考えられる。溝の埋没土から1の焼締陶器片が出土するが混入である。掲載遺物のほか土師器小型品3片、同不明品5片、須恵器小型品1片、中世焼締陶器1片、近世国産磁器6片、国産施釉陶器8片、国産焼締陶器1片、在地系銅類2片、近現代遺物5片、時期不詳遺物1片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかる。

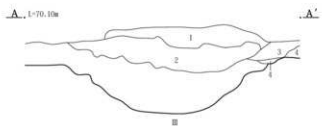
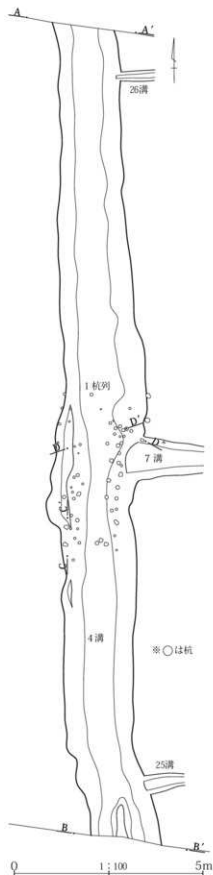
1区1面7号溝(第14・15図、PL. 3・4・42、第4表)

位置 41B~F-5~17グリッド。1面1号溝より前出。1面4・25号溝と重複するが新旧関係不明で、並存して

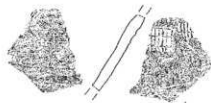
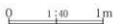
いた可能性もある。東半部はY字形をなし、両軸の北側は調査区域外に延び、東側は1次調査の7号溝となる。西側の延長部は検出されていない。南側は1面1号溝と重複して消滅する。調査区南壁の観察結果によれば、更に南へ延びるが、1次調査では延長部は検出されていない。本溝の西半部は、直線状に西へ延びて1面4号溝と接続して終わる。おそらく並存しており、杭列を伴った施設により導水されていたと考えられる。走向方位は南北軸が東からN-2°-W、N-22°-W、東西軸がN-82°-E~N-70°-W。東半部Y字形の南北軸東側は、断面逆台形で深い。両端の比高差は10cmで、勾配は0.74%で北方から南方へ下向する。規模は長さ13.40m上端幅218cm下端幅98cm深さ52cmで、1次調査も含めると長さ102.7mである。西側の南北軸は、断面V字形に近い。ただし、北端は別の溝が合流したとみられ、細く断面形はU字形である。両端の比高差は22cmで、勾配1.39%で北方から南方へ下向する。規模は長さ15.80m上端幅115cm下端幅45cm深さ32cmである。東西軸の断面形は浅く皿状。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。規模は長さ14.60m上端幅220cm下端幅110cm深さ38cmである。底面は丸みを持つが、東半部Y字形の基部の走行方位はN-7°-Wで底面は、溝状に掘り込まれる。自然埋没と思われる。B断面では、中位で浅間A軽石を多く含む砂質土が堆積し、灰掻きによって一部埋められた可能性もあるが、溝としては存続したものと考えられる。埋没土から肥前磁器碗(1)、鉄釘(2)が出土する。掲載遺物のほか土師器小型品4片、同中型品1片、同大型品2片、同不明品3片、中世在地系鉢・銅類3片、近世国産磁器7片、国産施釉陶器18片、在地系銅類2片、近現代遺物4片、時期不詳遺物6片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかる。

1区1面25号溝(第15図、PL. 4・42、第5表)

位置 41C~G-9~17グリッド。7号復旧溝群より前出。状況から4・7号溝より前出とみられるが、並存していた時期も考えられる。南北両側とも調査区域外に延びるが、1次調査ではともに検出されていない。西端は4号溝と接続して不明となる。平面形は十字形で、溝2条が重複するように見えるが、調査段階で1条とするため、その所見に従う。南北軸の平面形は直線状で、走向



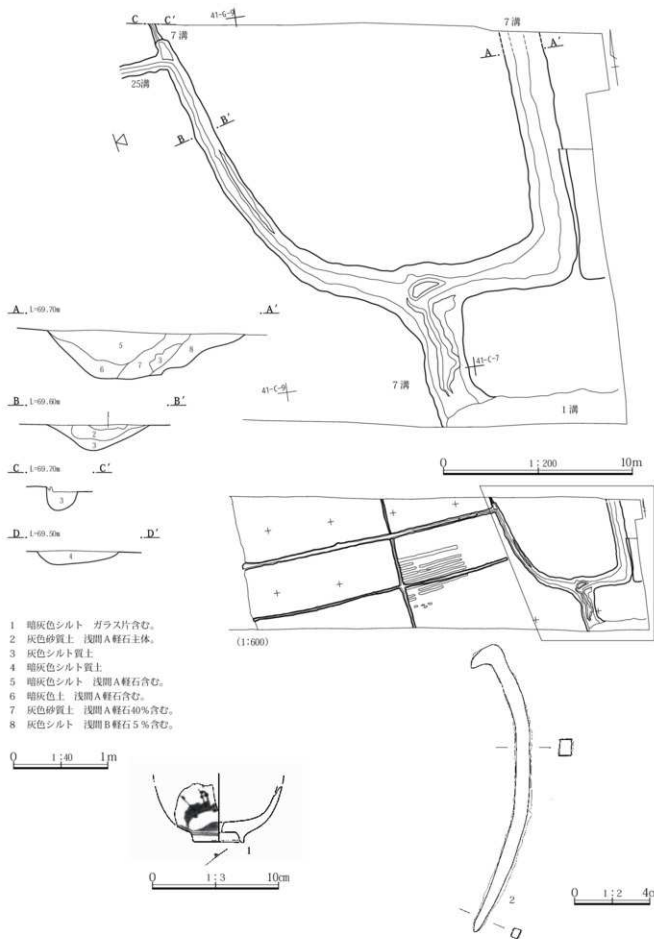
- 1 灰色シルト質土 浅間A軽石5%含む。
- 2 暗灰褐色シルト質土 浅間A軽石5%含む。
- 3 暗灰色シルト質土 浅間A軽石5%含む。
- 4 灰色シルト質土 浅間A軽石5%含む。
- 5 浅間A軽石+灰色シルト 二次堆積軽石。
- 6 灰褐色シルト質土
- 7 暗灰色シルト質土



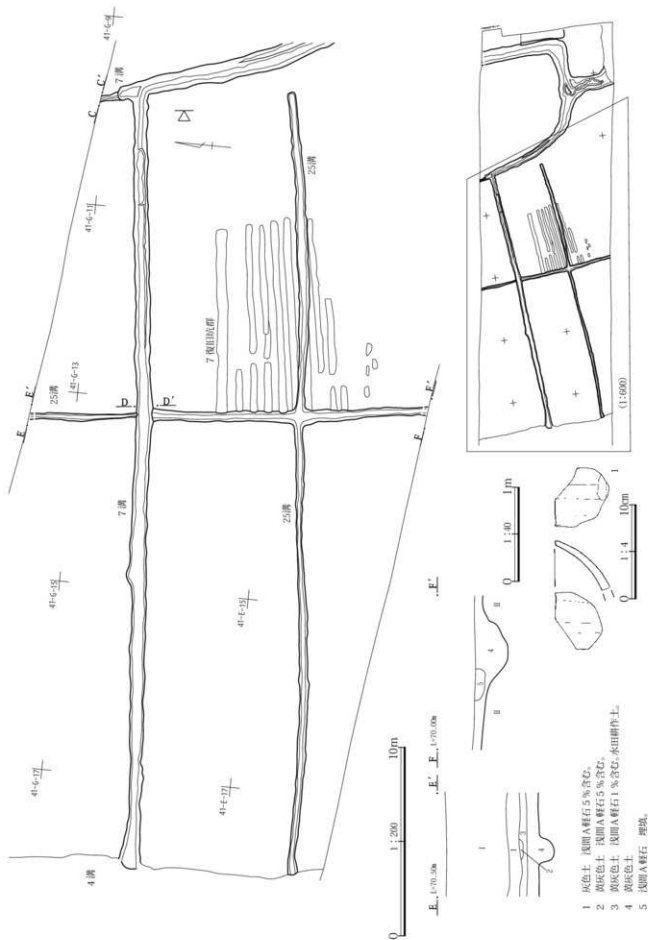
第13図 1区1面4号溝、1号杭列と4号溝出土遺物

第3表 1区1面4号溝出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 底	高			
第13図	1	深美?陶器 甕	体部片			//灰白、褐灰	断面から内面器表は灰白色、外面器表は褐色。外面に格子状明き目。	12世紀~13世紀前半。



第14図 Ⅰ区1面7号溝(1)と出土遺物



第15図 I区1面7号溝(2)・25号溝と25溝出土遺物

第4表 I区1面7号溝出土遺物

挿入 No. PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	厚			
第14図 PL.42	1	肥前磁器 碗	体部一部、底部 1/2	15.3	0.9	0.9	//灰白	外面に雪輪文。高台内に不明跡。	成化見系。18 世紀中頃～ 19世紀初頭。
第14図 PL.42	2	鉄製品 釘		長 0.9	厚 0.9	0.9 28.57		0.6×0.6cmのほぼ正方形断面の角釘で頭部分は犬釘に似た形状を示し、先端2.5cm程で急に細くなり失る。頭部無面は張り出さない。	

第5表 I区1面25号溝出土遺物

挿入 No. PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	厚			
第15図 PL.42	1	龍泉窯系青 磁皿	口縁部から体部 片				//灰白	体部から口縁部を波状に作る。内外面に青磁軸。軸には貫入が入る。	中世。

方位はN-85°-W。東西軸の平面形は直線状だが、中央部がわずかにたわんでいる。走行方位はN-6°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。南北軸両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。規模は長さ20.48m上端幅60cm下端幅42cm深さ14cmである。東西軸両端の比高差は3cmで、勾配はほとんどない。規模は長さ41.20m上端幅60cm下端幅38cm深さ13cmである。埋没土は均質な黄灰色土で、基本土層ⅡBに近い。ⅡB自体、耕作による攪拌が著しいと思われるため、本遺構もそうした遺構の一部である可能性もある。埋没土上位に復旧坑の埋没土が被覆する。埋没土から1の青磁碗皿が出土する。掲載遺物のほかに近世国産磁器1片、同在地系銅類1片、時期不詳遺物1片が出土している。復旧坑群との新旧関係から天明3年以前である。

I区1面26号溝(第16図、PL.4)

位置 41G・H-16・17グリッド。I区4号溝と接続するが新旧関係不明。東側は調査区域外に延びるが、1次調査では検出されていない。形状は25号溝に近似する。平面形は直線状。走向方位はN-85°-E。断面形はU字形。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は3cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質な暗灰色シルトで、埋没状況不詳。規模は長さ6.69m上端幅23～32cm下端幅8～16cm深さ9cmである。遺物は出土していない。

I区1面27号溝(第16図、PL.4・5)

位置 41D～H-20グリッド。南北両側ともに調査区域外に延びるが、1次調査では検出されていない。平面形は直線状。走向方位はN-3°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は1cmで、勾配はほとん

どない。埋没土は均質な灰褐色砂質土で、埋没状況不詳。規模は長さ21.88m上端幅32～54cm下端幅5～25cm深さ17cmである。埋没土から1の在地系土器が出土するが、混入の可能性がある。掲載遺物のほかに時期不明の土器2片が出土する。

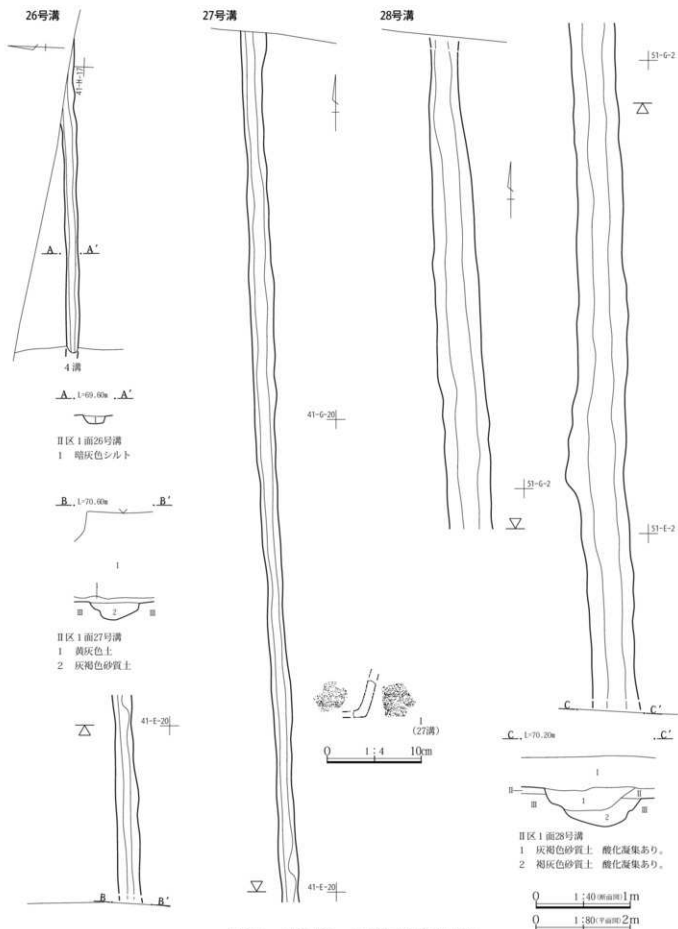
I区1面28号溝(第16図、PL.5)

位置 51D～H-2グリッド。南北両側ともに調査区域外に延び、南側1次調査10号溝と同一となる。北側1次調査では延長部は検出されていない。平面形は直線状。走向方位はN-2°-W。断面形はU字形。断面Aの観察から掘り直しが想定される。底面は丸みを持つ。両端の比高差は9cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質な灰褐色及び褐色砂質土で、埋没状況不詳。調査段階の土層観察では、基本土層Ⅱを挟んで二時期に分かれるが、不自然な印象を受ける。規模は長さ22.92m上端幅56～122cm深さ24cmである。1次調査も含めると長さ32.6mである。遺物は出土していない。

(2)Ⅱ区

Ⅱ区1面1号溝(第17図、PL.5)

位置 51I-12グリッド。東西両側は調査区域外に延びて、東側は1次調査の1号溝となるが、西側の延長部は検出されていない。1面5・6号復旧溝群および北側1次調査3号復旧溝群と近接して並走するため、一連の遺構である可能性が高い。平面形は直線状で、西端は南に湾曲しながら北へ折れる。東西軸の走向方位はN-86°-E。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は22cmで、勾配1.2%で東方から西方へ下向する。埋没土は浅間A軽石を多く含み、人為埋没の可能性が高い。規模



第16図 I区1面26～28号溝と27号溝出土遺物

第6表 I区1面27号溝出土遺物

採掘 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高			
第16図	1	在地系土器 内耳類?	休部下位から破 断片			B//灰	還元炎焼成。断面は灰白色、器表は灰色。	中世。

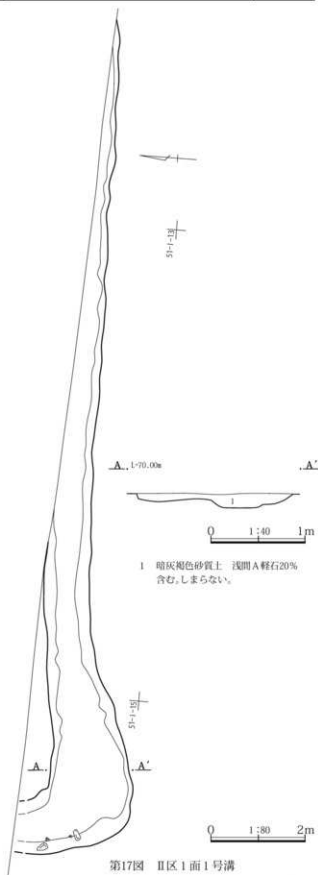
は長さ18.00m上端幅90～184cm下端幅37～162cm深さ41cmである。1次調査も含めると長さ47.4mである。埋没土から土師器小型品2片、同不明品1片、中世国産焼締陶器1片、近世国産施釉陶器5片、同在地系銅類3片、近現代遺物11片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかる。

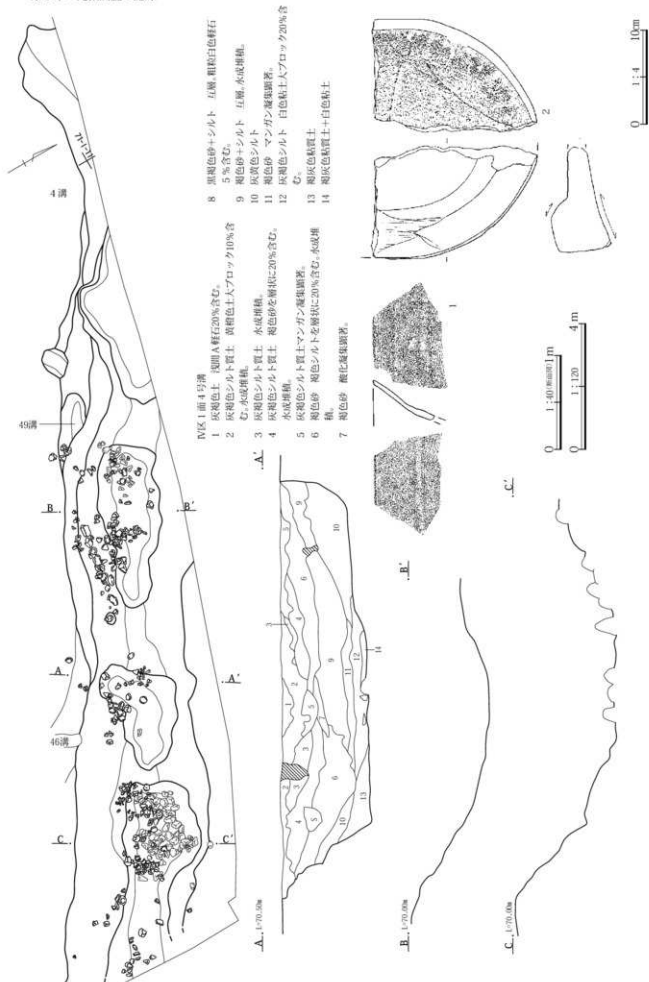
(3)IV区

IV区では溝が8条検出された。4号溝は基幹的な用水路である。40・41・45・46・49号溝も並走して数時期にわたって関連した水路であろう。中央部の43・50号溝は南北軸を採る溝で、導水路と考えられる。

IV区1面4・49号溝(第18図、PL.6・7)

4号溝 位置 71F～1-6～11グリッド。1面41号溝より後出で、46・49号溝と重複するが新旧関係不明で並存していた可能性もある。南北両側ともに調査区域外に延び、北側は1次調査のIV区4号溝となる。南側は1次調査のⅢ区3号溝と同一の可能性が高いが、東西軸に屈曲するため、Ⅲ・IV区間の調査区域外町道部で分岐する可能性もある。平面形は直線状。走向方位はN-64°-W。断面形は基本U字形で、逆台形部分もある。底面は凸凹しており、不定形に凹む。凹みには人頭大を含む多量の円礫が見られる。両端の比高差は61cmで、勾配1.9%で西方から東方へ下向する。埋没土は水成堆積する砂およびシルトであるため、流水により自然埋没する。規模は長さ30.80m上端幅335～428cm下端幅60～136cm深さ131cmで、1次調査も含めると長さ65.2mである。遺物は土師器小型品5片、同中型品1片、同大型品6片、同不明品7片、須恵器小型品1片、同大型品2片、灰釉陶器碗皿類1片、中世国産焼締陶器1片、同在地系鉢・銅類1片、近世国産磁器1片、同国産施釉陶器1片、近現代遺物6片、時期不詳遺物3片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかるが、埋没状況から人為的に埋めたものでなく、徐々に自然埋没する。元来は基幹的な用水路であったものが、機能を失い廃絶され埋没したと考えられよう。





第18図 IV区1面4・49号溝と4号溝出土遺物

第7表 IV区1面4号溝出土遺物

溝 No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高				
第18回	1	在地系土器 罎	口縁部片				灰/黒褐色から灰	断面はふいっぺん、器表は黒褐色から灰色。口縁部の屈曲は弱く、屈曲部内面は輪軸目状に浮きだけ段をなさない。口縁部は平坦で内縁、器底は薄い。外面に隈付者。	15世紀末～ 16世紀中頃。
第18回	2	石製品 石臼	直径 幅	(28.0)	高 重	(6.2) 1197.3	牛状砂岩	上臼破片。破損したのち、土縁部内側が研削され、砥石として再利用している。磨合せ部に相当する臼の周辺部が強く摩耗する。目なし白か。	

49号溝 位置 71G・H-8・9グリッド。4号溝の埋没土中で確認される。重複遺構とするよりも、一時期並存して45号溝と繋いでいた可能性が高い。45号溝接続部付近は円形状に凹み、堰などを想定させる。平面形は直線状。走向方位はN-63°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没土は4号溝同様、砂層とみられるが、掘削過程で判明した溝のため、断面観察は明確ではない。規模は長さ2.50m上端幅80cm下端幅38cm深さ33cmである。遺物は出土していない。

IV区1面40・41・45・46号溝(第19図、PL.7・8・42、第8表)

40号溝 位置 70E～J-6～15グリッド。南北両側ともに調査区域外に延び、北側は1次調査の3号溝となる。南側の1次調査で延長部は検出されていない。断面観察の結果、45号溝より前出と判明したが、45号溝自体数条の変遷がある。45号溝とほぼ並走するため、並存時期も想定される。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-49°-W～N-70°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は18cmで、勾配はほとんどない。A断面の北側で西方へ湾曲し、あわせて45号溝の底面も丸みをもって広がる。杭も点在するため、堰などが設けられ、分水されていた可能性が高い。埋没土は砂質土及びシルト質土が主体で、地山が基本土層IVCである影響が大きい。全体に水成堆積に近く、自然埋没か。規模は長さ47.68m上端幅40～128cm下端幅20～52cm深さ35cmで、1次調査も含めると長さ67.6mである。遺物は中世国産焼締陶器1片、同在地系鉢・銅類2片、近世国産磁器6片、同国産施釉陶器7片、同在地系銅類2片、近現代遺物13片、時期不詳遺物2片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかる。

41号溝 位置 71E・F-6・7グリッド。北側は4号溝と重複して不明となる。南側は調査区域外に延び、1次調査5号溝と同一となる。4号溝より前出で、状況から45号溝より前出か。平面形は直線状。走向方位はN-

35°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持ち、やや凸凹する。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ14.80m上端幅58～124cm下端幅32～72cm深さ34cmである。1次調査も含めると長さ27.8mである。遺物は出土していない。

45号溝 位置 71E～J-6～15グリッド。南北両側ともに調査区域外に延び、北側は1次調査の3号溝となる。南側の1次調査では検出されていない。断面観察の結果、40号溝より後出と判明したが、並走するため、並存時期も想定される。46号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-50°-W～N-69°-W。断面形は幅広で皿状に近い。底面はやや凸凹する。両端の比高差は9cmで、勾配はほとんどない。A断面の北側で底面が丸みをもって広がる。杭も点在するため、堰などが設けられ、40号溝へ分水していた可能性が高い。A断面南側で46号溝と接続しており、4号溝へ分水していた可能性もある。埋没土は砂質土及びシルト質土が主体で、地山が基本土層IVCである影響が大きい。全体に水成堆積に近く、自然埋没か。規模は長さ46.88m上端幅36～200cm下端幅16～128cm深さ25cmで、1次調査も含めると長さ68.2mである。遺物は土師器小型品1片、同不明品2片近世国産磁器5片、同国産施釉陶器7片、同国産焼締陶器2片、同在地系銅類2片、近現代遺物18片、時期不詳遺物7片が出土している。出土遺物から近現代まで使用されていたことがわかる。

46号溝 位置 71F・G-7・8グリッド。4・41・45号溝重複するが新旧関係不明。状況から4・45号溝は並存時期が想定される。平面形は直線状。走向方位はN-45°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持ち、東側41号溝底面を掘り込んで、大円礫が4点並ぶ。両端の比高差は26cmで、勾配9.55%で南西から北東へ下向する。埋没土の中位以下は砂質で流水があったと推測される。規模は長さ2.72m上端幅256cm下端幅8cm深さ15cmである。

第3章 発掘調査の記録

40・45号溝

A, 1-70.50m



40・45号溝

B, 1-75.50m



0 1:40 (0 to 10m)

46号溝

C, 1-70.50m



40溝 45溝

47溝

B B'

IV区 1面 40・45号溝

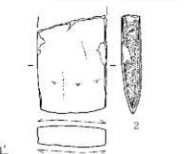
- 1 オリーブ灰色砂質土 浅間A軽石10%含む。
- 2 オリーブ灰色砂質土 川砂5%含む。
- 3 オリーブ灰色砂質土+川砂
- 4 灰褐色砂
- 5 青白色粘質土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 6 オリーブ灰色シルト質土 汚れた感じ。
- 7 灰褐色シルト質土
- 8 灰褐色シルト質土 川砂5%含む。
- 9 川砂 シルトを層状に含む。水成堆積。
- 10 灰褐色土
- 11 灰褐色シルト+川砂 互層。

IV区 1面 46号溝

- 1 灰褐色シルト質土 川砂10%含む。
- 2 灰褐色砂質土 粗粒軽石5%含む。
- 3 灰褐色シルト質土+川砂
- 4 灰褐色砂質土+川砂



0 1:3 10cm



0 1:2 4cm



(1:600)

第19図 IV区 1面40・41・45・46号溝と41・45号溝出土遺物

第8表 IV区1面41・45号溝出土遺物

採得 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	厚			
第19号 PL.42	1	常滑陶器 円盤(農か)	完形	5.8 5.6	1.2		//	断面は灰白色、外面器表には薄い赤褐色、内面器表には薄い褐色。内面には自然釉が薄く斑状にかかる。農と推定される破片の周囲を細かく打ち欠いて円盤状に整形。	二次加工。中世。
第19号	2	石製品 砥石		長幅 3.7	厚 1.1 重 29.6		砥沢石	切り砥石。右側面を除く各面を使用。表面裏面とも砥ぎ減り、下部端は薄く尖る。	

状況から45号溝から4号溝へ導水したとみられ、41号溝重複部の大円礫は浸食による崩れを防ぐもので、落差があったと思われる。遺物は出土していない。4・45号溝同様、近現代まで使用されていたと考えられる。

IV区1面43・50号溝(第20図、PL.8)

43号溝 位置 71・81 E～J-20・1グリッド。南北両側ともに調査区域外に延び、北側1次調査では4面2号溝と付合するが、調査面が違うため、遺構名称は別とした。南側1次調査で延長部は検出されていない。平面形はわずかに蛇行する。走向方位はN-0°。断面形はU字形。底面はほぼ平坦。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没土は川砂を含んだシルト質土で、自然埋没か。浅間B軽石を含まず基本土層IIに近い。規模は長さ25.44m上端幅52～130cm下端幅18～52cm深さ34cmで、1次調査も含めると長さ38.8mである。遺物は出土していない。時期は層位から中世以降と考えられる。

50号溝 位置 81I・J-1グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査では4面1号溝と付合するが、調査面が違うため、遺構名称は別とした。南端は削平により消滅する。平面形は直線状。走向方位はN-5°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は13cmで、勾配は3.1%で南から北方へ下向する。埋没土は暗灰褐色砂質土で、水成堆積に近い。規模は長さ4.20m上端幅24～38cm下端幅12～64cm深さ21cmで、1次調査も含めると長さ17mである。

基本土層IIIを掘り込む。遺物は出土していない。時期は層位から中世以降と考えられる。

3 復旧坑群・復旧痕群

復旧坑群・復旧痕群はI・II区で検出された。地域全般にみられる遺構のため、IV区の場合削平により消滅したと想像される。III区では1次調査で多量に検出されている。

(1) I区

I区1面7号復旧坑群(第21図、PL.9)

位置 41D・E-11・12グリッド。25号溝より後出で、西端の重複部分は平面図化が不完全で、おそらく25号溝部分で掘り込まれたと推測される。25号溝南端の土層断面で、同様に復旧坑が掘り込んでいる。復旧坑は東西方向に30～40cm間隔で10本が並走する。走向方位はN-82°-E。断面形はU字形から皿状。底面は平坦で、短軸方向に数mm程度の立ち上がりがあり、耕具痕とみられる。ほぼ水平方向に長く掘り込む形状から、柄杓状の農具によるものと推測できる。埋没土は浅間A軽石を多く含むが、灰褐色土と等量である。規模は最大長10.22m最大幅58cm最大深12cmである。遺物は土師器小型品1片、同不明品2片、近世国産磁器1片、同国産施釉陶器2片が出土している。

(2) II区

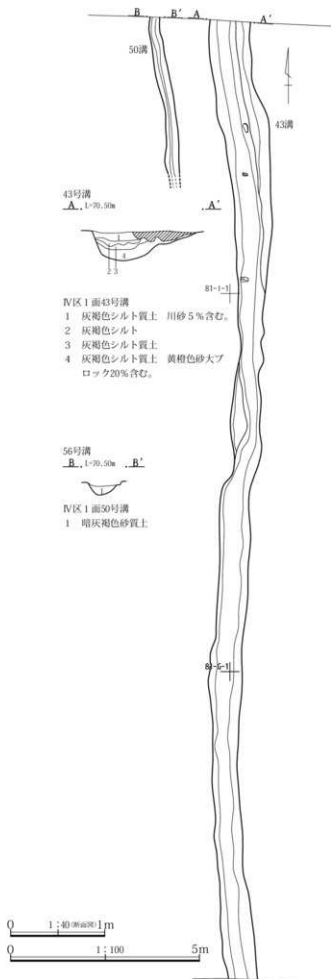
II区東半部北端で復旧痕群を2か所検出した。状況から本来は連続する一連のものと判断される。

II区1面5号復旧痕群(第21図、PL.9)

位置 51H・I-12グリッド。1面1号溝に近接する。1号溝を挟んだ北側1次調査で3号復旧溝群が検出される。復旧痕は南北方向にほぼ間隔を開けず4本が並走する。走向方位はN-7°-W。東端1条は整った平面形で、断面形は皿状。西側の平面形は乱れ、浅く底面は凸凹する。細かな耕具痕跡も見られるため、東端1条と耕具自体が異なると思われる。埋没土は浅間A軽石を多く含むが、灰褐色土と等量である。規模は最大長4.16m最大幅57cm最大深7cmである。遺物は出土していない。
備考 一部調査段階2号畠を名称変更。

II区1面6号復旧痕群(第21図、PL.10)

位置 51H-14・15グリッド。1面1号溝に近接する。1号溝を挟んだ北側1次調査で3号復旧溝群が検出され

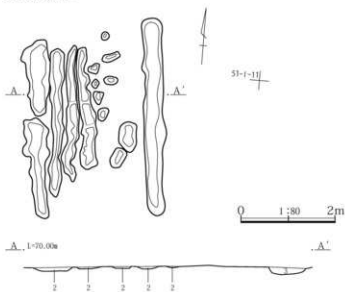


第20図 IV区1面43・50号溝

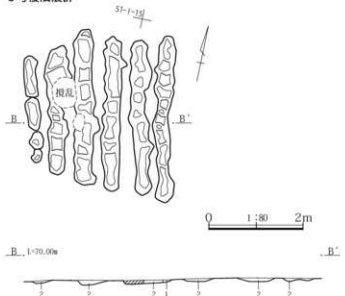
る。復旧痕は南北方向に6本が並走する。その間隔は約30cmの部分もあるが概して狭く、間隔は意識して開けられていない。走向方位はN-12°-W。平面形は乱れ、浅く底面は凸凹する。細かな耕具痕跡も見られる。埋没土は浅間A軽石を多く含むが、灰褐色土と等量である。規模は最大長3.51m最大幅46cm最大深6cmである。遺物は出土していない。

備考 調査段階1号畝を名称変更。

5号復旧痕群

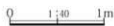


6号復旧痕群

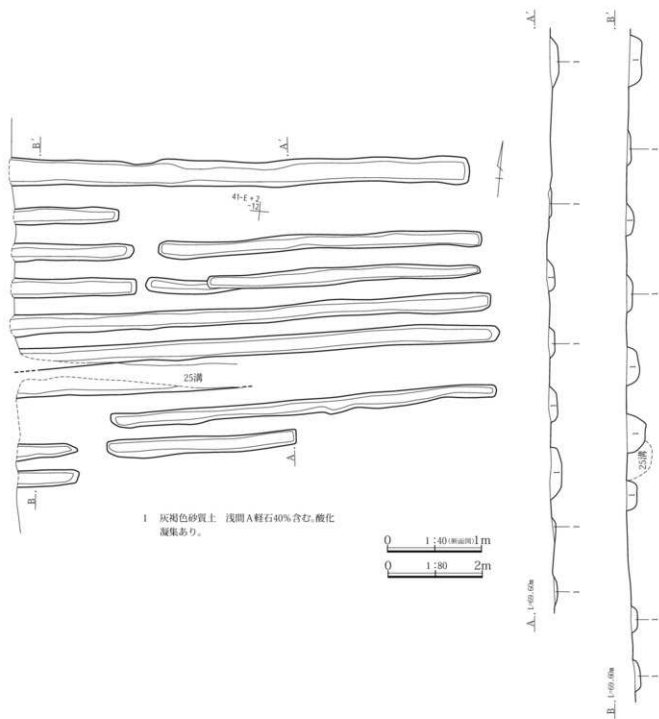


II区5・6号復旧痕群

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石5%含む。
- 2 灰褐色砂質土+浅間A軽石
- 3 灰褐色砂質土+浅間A軽石 灰色ブロック含む。



第21図 II区1面5・6号復旧痕群



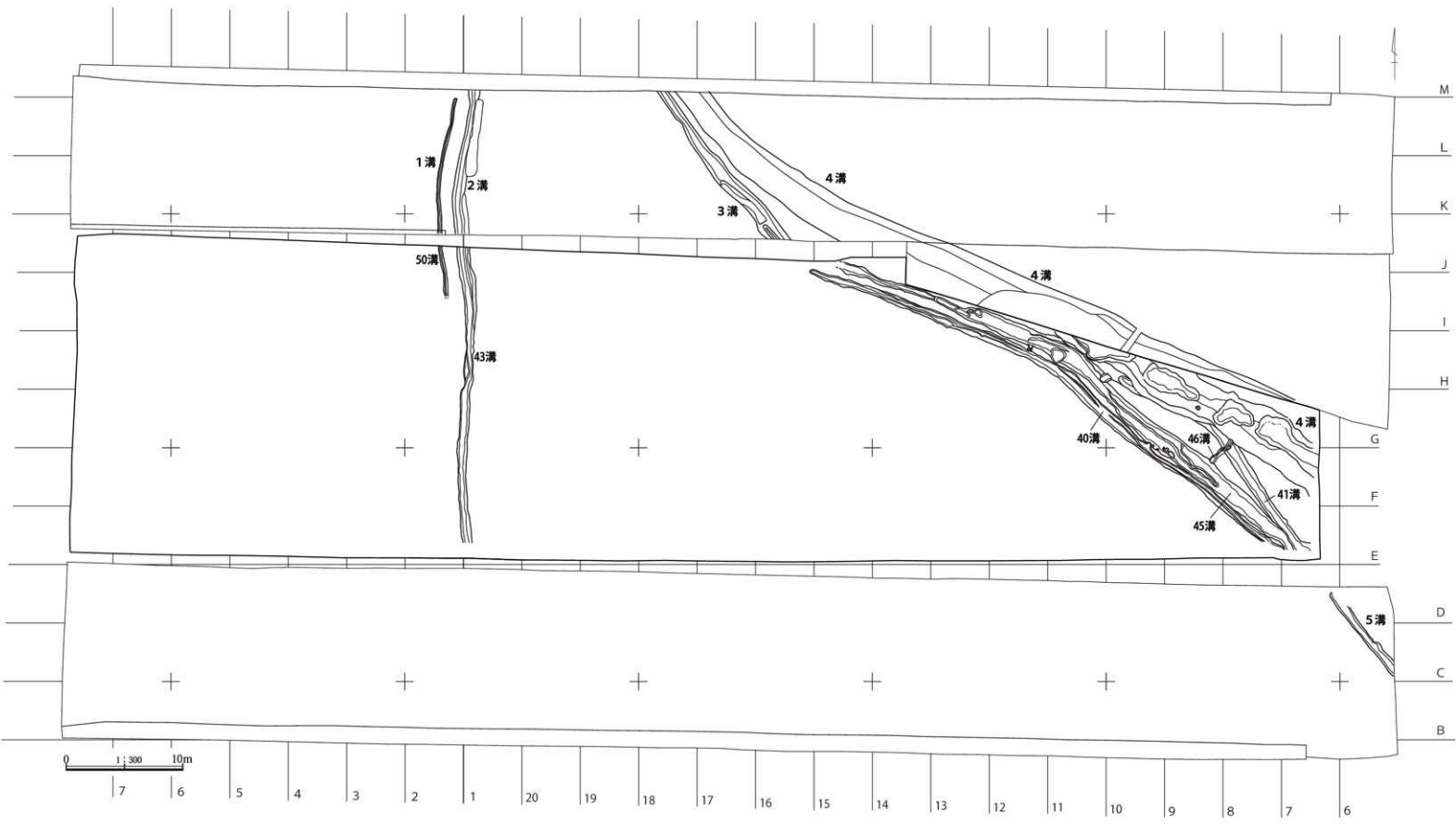
第22図 1区1面7号復旧坑群



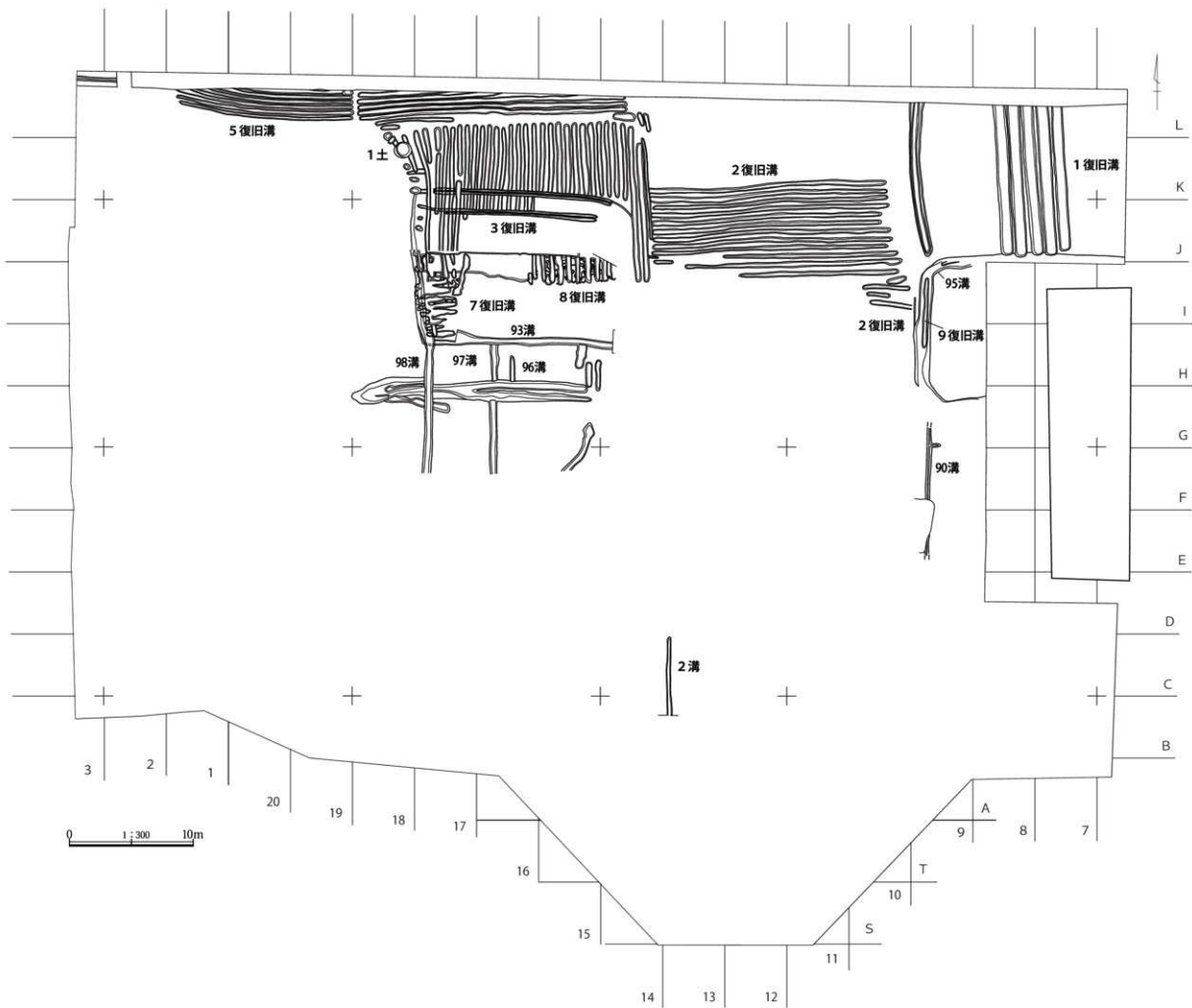
1次調査Ⅲ区1面復旧溝群(西から) 施工されている部分とされていない部分が混在している。



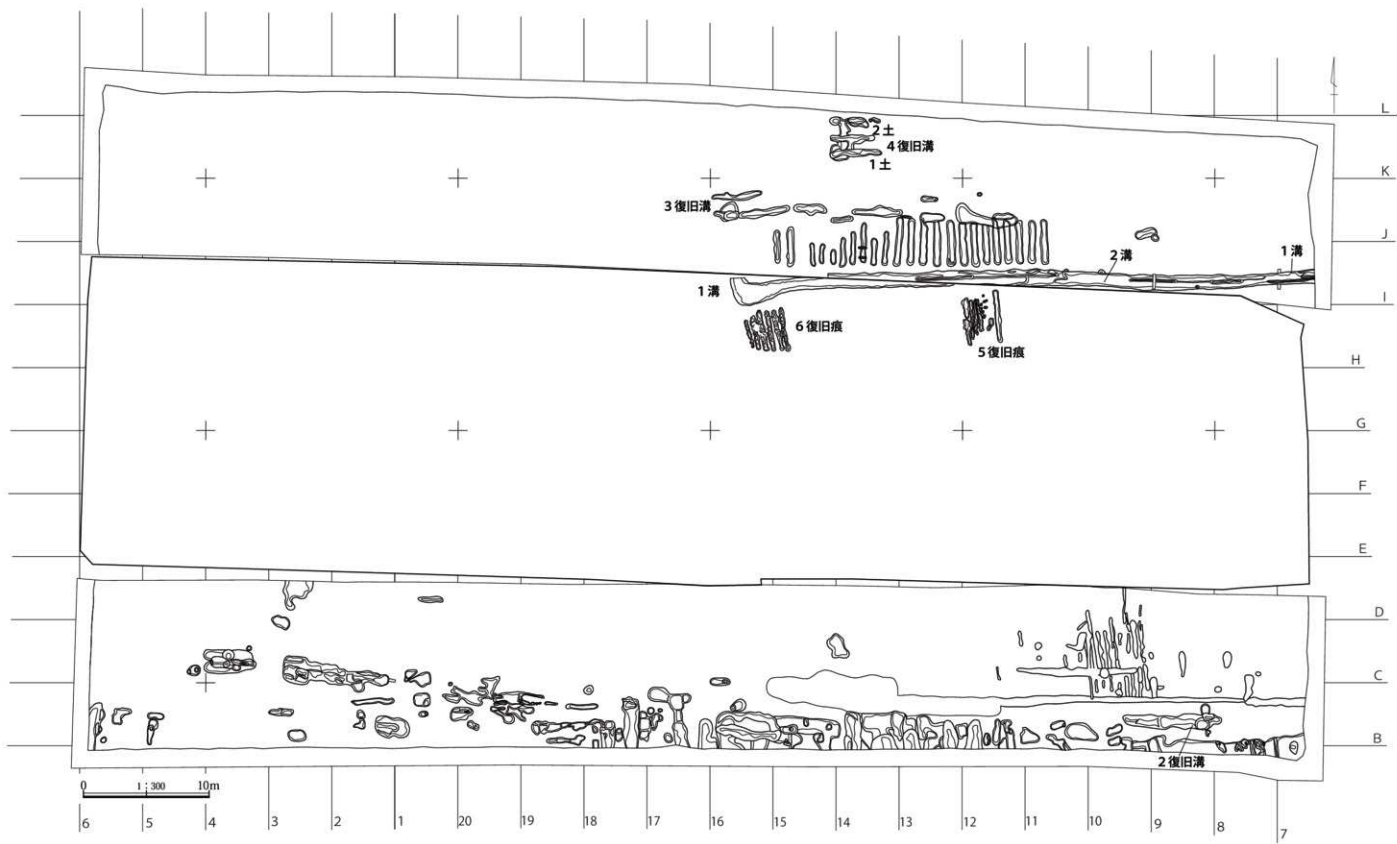
1次調査Ⅲ区1面1号復旧溝群(南から) 幅・深さとも本道跡最大で、灰掻き溝とみなされる。



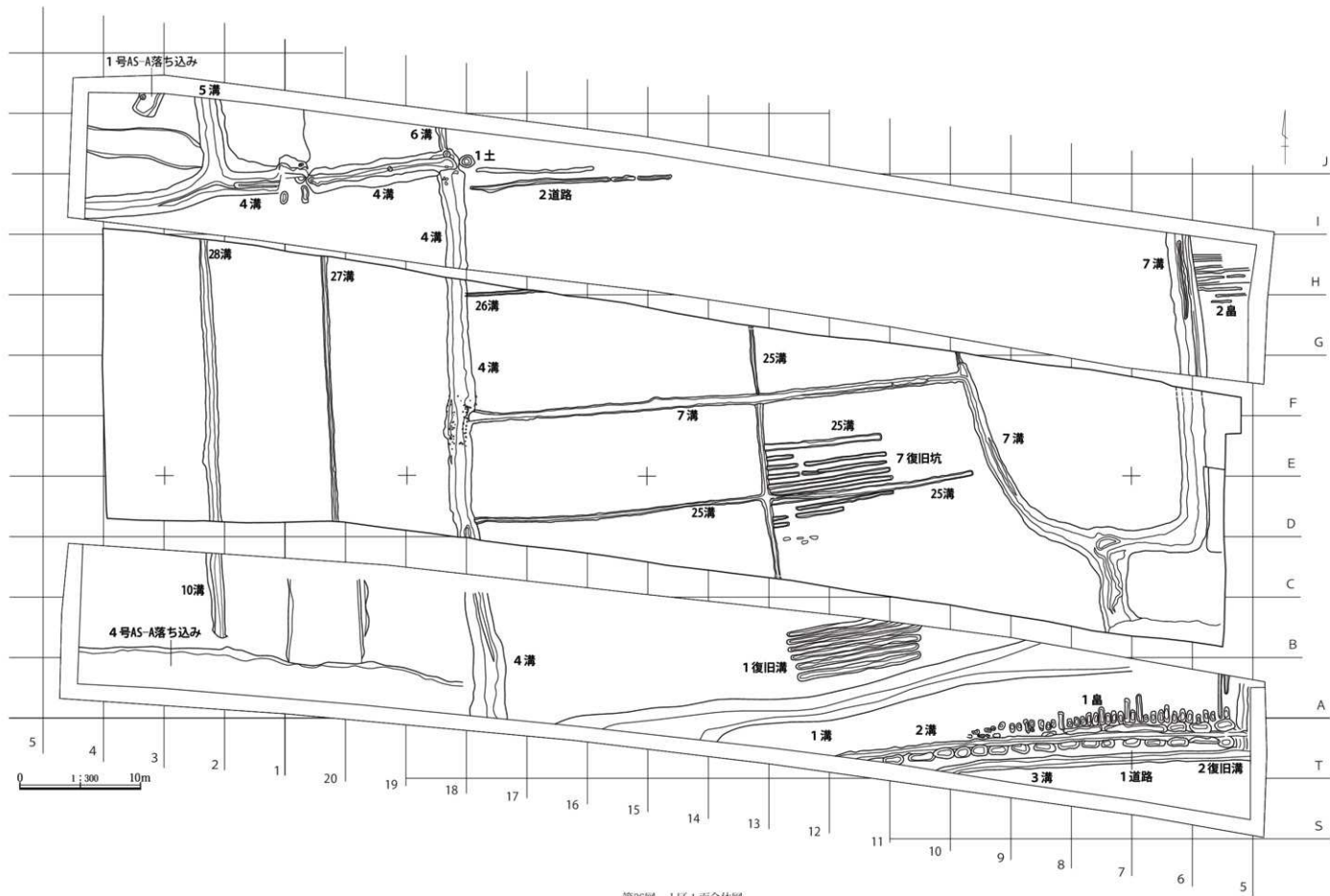
第238图 IV区 I面全体图



第24图 Ⅲ区1面全体图



第25图 II区I面全体图



第26图 I区1面全体图

第3項 2面の遺構と遺物

1 概要

2面はAs-A降下以前で、埋没土に浅岡A軽石を含まないが、概ね近世とみられる遺構である。I区では土坑墓1基と疑似畦畔が検出されたが、両者の新旧関係は不明である。II・III区の遺構は溝のみである。

2 土坑墓

(1) I区

I区2面1号墓(第27図、PL.10・42、第9表)

位置 41C-6グリッド。1面7号溝の南に接して、2面疑似畦畔と重複するが新旧関係不明。3面調査時に確認される。平面形は整った隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長軸121cm短軸65cm深さ31cmである。北西隅の底面で東向き状態で頭蓋骨が出土する。鑑定の結果(第4章第1項)30～40歳代の女性の土葬骨とされる。中央部底面で在地系土器皿(1)、漆が付着して合わせ口になった同皿(2・3)、頭蓋骨の南側で錆びて付着した銅銭5枚(4)と剥がれた1枚(5)、更に北東隅底面でガラス玉54点(6～59)が出土する。ガラス玉は径5mm前後が53点で、3mm弱が1点であった。出土状態から念珠と考えられるが、結んでいた緒は出土していない。状況から埋葬者の手に巻き付けられていた可能性が高い。また、頭蓋骨の下に風化した漆の塗膜が出土し、漆碗の残骸と考えられる。在地系土器皿は底面に正位で置かれ、その他の出土遺物も埋葬後の移動が少ないため、墓坑に直に埋葬された可能性も考えられる。錆着した4の寛永通宝5枚の外側2枚は古寛永通宝で、内側3枚および5の1枚は寛永通宝文銭である。いずれも17世紀代に納まる。遺構の年代は、在地系土器皿の年代観も合わせて、17世紀かと考えられるが、ガラス玉の年代観と一致するものが確定できない。

3 疑似畦畔

(1) I区

I区2面疑似畦畔(第28・34図、PL.13)

南北グリッド軸41区18ラインより東側に展開する。基

本土層II B下面でIII Aとの層境で確認される。形態上水田となるが、被覆する鍵履はなく、II B段階での水田耕作、特に畦畔を付設したことによって、下面に形成された疑似畦畔Bである。平面的には畦畔の基部のみであり、検出面は平坦である。断面観察によれば、疑似畦畔の高さは5cmに及ぶ。水田面全体を露呈できたものはないため、規模は不明である。遺物は須恵器小型品1片が出土している。

4 溝

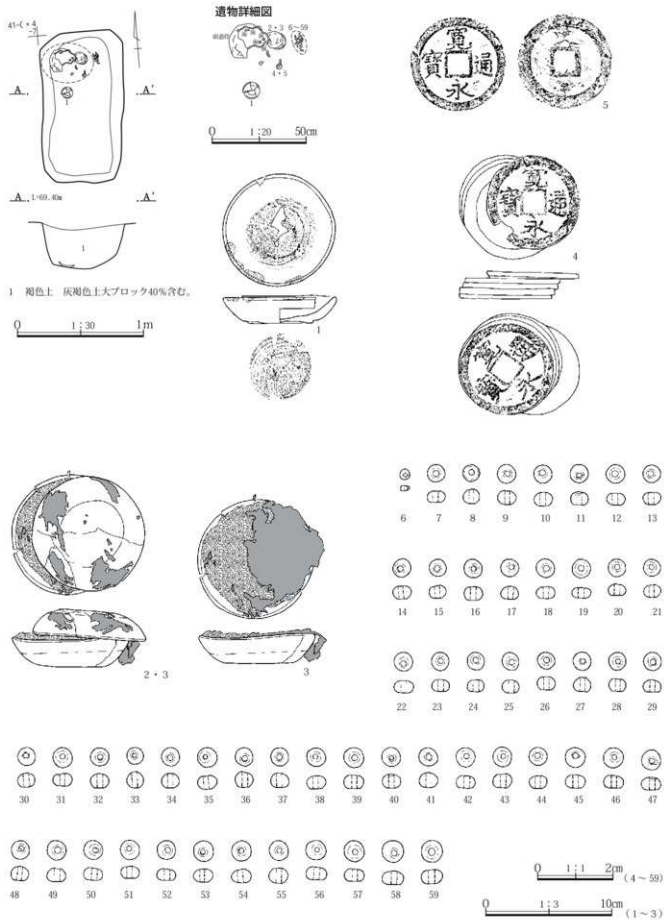
(1) II区

II区では溝7条が検出された。23号溝は大規模で基幹となる用水路である。ほか概ね小規模で、23号溝へ排水する溝も想定できる。

II区2面23・24・25・26号溝(第29図、PL.11・12・43、第10表)

23号溝 位置 51E～H-14～20、61G・H-1～5グリッド。南西両側ともに調査区域外に延びる。西側はIII区3号溝と同一となる。南側は1次調査II区5号溝と同一となる。南側1次調査では3面扱いであったため、遺構名は別となっている。3面6・30号溝より後出。2面24・26・28号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形で、東西軸はやや蛇行する。走向方位はN-85°W～N-87°E。東端屈曲部は鈍角で、南北軸は西方へ内傾する。走向方位はN-3°W。断面形はU字形。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は9cmで、勾配はほとんどない。埋没土は水成堆積した砂質土・シルト質土で、間層を挟まないため、洪水などに一時期に埋没したと思われる。IV区1面4号溝に近似する。規模は長さ66.32m上端溝248～528cm下端溝44～248cm深さ72cmで、1次調査も含めるとIII区総延長125.4mである。南北軸の底面で板碑(5・6)が、円礫に混じって出土する。投棄されたものであろうが、溝の屈曲部にあたるため、堆積したとみられる。掲載遺物のほかに土師器小型品3片、同大型品3片、同不明品4片、近世国産施釉陶器1片が出土している。出土遺物から近世まで使用されていたと考えられる。

24号溝 位置 51H-18～20.61G・H-1～4グリッド。23・25・26号溝と重複するが新旧関係不明。西側は23号溝と重複して不明となる。東側は26号溝と接続し、延長線上に29号溝が延びる。平面形は直線状。断面形はU字



第27図 1区2面1号窟及び出土遺物

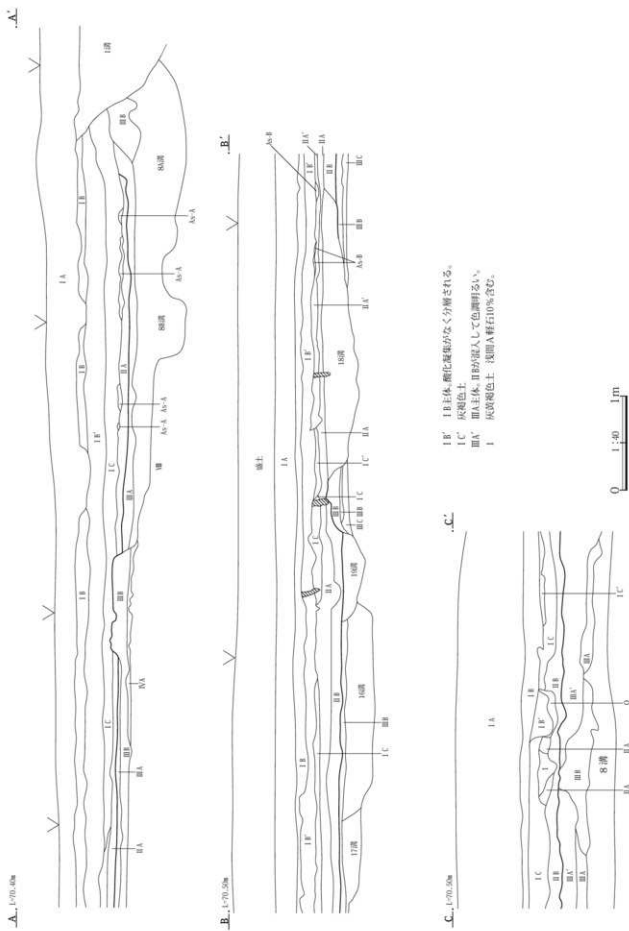
第9表 I区2面1号墓出土遺物

群 号 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 現 存 率	計 量 値		胎土/焼成/色調 石材・素材	成形・整形の特徴	備 考
第279号 PL.42	1	在地系土器 底面一部欠	口底 8.8 5.1	高 2.0 2.2	//灰白	断面は浅黄棕色。器表は灰白から浅黄棕色。底部から1縁部は内湾気味に開く。内面の体部と底部境は不明瞭。底面左回転系切無調整。口縁部輪の1/4に治付付着。	17世紀か。	
第279号 PL.42	2	在地系土器 完形	口底 8.9 4.9	高 2.1 2.1	//	2枚の土器面輪は下に漆喰層が残る。下の皿正位。上の皿は逆位。漆喰面は表面が朱色で黄褐色を呈し、黒色顔が内面に施している。漆喰が剥がれて漆喰のみが残った状態である。したがって、下から土器面、漆喰、土器面、漆喰の順で重ねられている。土器面は底面左回転系切無調整。	土器面は17世紀か。	
第279号 PL.42	3	在地系土器 完形	口底 9.1 5.2	高 2.4 2.4	//	5枚筋付。現状で外側の2枚は賈水通(文)が水入で、筋付いた既の孔内には織網の糸が残存し紐の跡跡と見られる。		
第279号 PL.42	4	陶製品 残貨	長 2.79 3.22	厚 0.74 17.49	//	賈水通(文)2人と一緒に出土。1枚だけ割れたものと考えられる		
第279号 PL.42	5	陶製品 残貨	長 2.55 2.54	厚 0.15 3.22	//	賈水通(文)2人と一緒に出土。1枚だけ割れたものと考えられる		
第279号 PL.42	6	ガラス製品 玉	径 2.79 2.49	高 1.61 0.01	//青色半透明	平面形状はやや円形。上下面から円へはならぬ方向に移行する。円穴と同方向の気泡列が認められ、黄色の部分も同方向で線状をなす。内部に黒褐色の不純物を少量含む。		
第279号 PL.42	7	ガラス製品 完形	径 4.73 4.77	高 3.04 0.12	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。気泡を含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	8	ガラス製品 玉	径 4.43 4.59	高 3.87 0.13	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	9	ガラス製品 玉	径 4.88 4.92	高 3.76 0.36	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	10	ガラス製品 玉	径 4.80 4.91	高 3.77 0.36	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。顕化痕は他に比して深い。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。気泡を含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	11	ガラス製品 完形	径 4.81 4.83	高 3.72 0.14	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	12	ガラス製品 完形	径 4.88 4.90	高 3.24 0.14	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。表面に直径約0.7mmの気泡が1か所残存。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	13	ガラス製品 玉	径 4.70 4.79	高 3.33 0.13	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	14	ガラス製品 玉	径 4.83 4.87	高 3.56 0.15	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	15	ガラス製品 完形	径 4.63 4.66	高 3.44 0.13	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	16	ガラス製品 玉	径 4.86 4.91	高 3.70 0.15	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	17	ガラス製品 玉	径 4.70 4.74	高 3.66 0.14	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。1か所突起状のさびり上がりが見られる。輪線形は面全面平で、上方が急の上上がりであり、上方の円孔は急な上り中心とされている。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	18	ガラス製品 完形	径 4.90 4.96	高 3.32 0.14	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1方所に含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	19	ガラス製品 玉	径 4.92 5.05	高 2.72 0.12	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	20	ガラス製品 玉	径 4.59 4.64	高 3.17 0.11	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	21	ガラス製品 玉	径 4.39 4.54	高 3.11 0.11	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1方所に含む。本来は無色透明。		
第279号 PL.42	22	ガラス製品 完形	径 4.95 5.14	高 3.36 0.15	//白色、無色透明	顕化が著しく、表面の多くは白・粉を吸ったように顕化。顕化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の輪線様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1方所に含む。本来は無色透明。		

第3章 発掘調査の記録

陣 団 PL. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第279号 PL.42	23 ガラス製品 玉	完形	径 4.64 ～ 4.68	高 3.14 重 0.12	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	24 ガラス製品 玉	完形	径 4.50 ～ 4.51	高 3.17 重 0.11	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	25 ガラス製品 玉	完形	径 4.49 ～ 4.56	高 3.24 重 0.12	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	26 ガラス製品 玉	完形	径 4.68 ～ 4.74	高 3.49 重 0.13	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	27 ガラス製品 玉	完形	径 4.62 ～ 4.72	高 4.00 重 0.14	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	28 ガラス製品 玉	完形	径 4.53 ～ 4.54	高 3.44 重 0.13	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。微細な黒褐色の不純物を3か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	29 ガラス製品 玉	完形	径 4.74 ～ 4.81	高 3.54 重 0.14	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。微細な黒褐色の不純物を3か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	30 ガラス製品 玉	完形	径 4.71 ～ 4.73	高 3.75 重 0.14	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	31 ガラス製品 玉	完形	径 5.18 ～ 5.25	高 3.38 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。側面に直径約0.6mmの気泡が挟んだ窪みが1か所あり、微細な黒褐色の不純物を2か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	32 ガラス製品 玉	完形	径 4.87 ～ 4.89	高 3.71 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。微細な黒褐色の不純物を3か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	33 ガラス製品 玉	完形	径 4.43 ～ 4.47	高 4.33 重 0.14	//白色、無色透明	器高が直徑に近く、本資料が器高が高。酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	34 ガラス製品 玉	完形	径 4.67 ～ 4.84	高 3.77 重 0.15	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	35 ガラス製品 玉	完形	径 4.97 ～ 5.26	高 3.65 重 0.17	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。気泡が挟んだ直径0.2mmの窪みが1か所あり、黒褐色の不純物を3か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	36 ガラス製品 玉	完形	径 4.79 ～ 4.86	高 4.11 重 0.17	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	37 ガラス製品 玉	完形	径 4.79 ～ 4.91	高 3.89 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	38 ガラス製品 玉	完形	径 4.79 ～ 4.91	高 3.89 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	39 ガラス製品 玉	完形	径 5.26 ～ 5.29	高 3.68 重 0.19	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	40 ガラス製品 玉	完形	径 4.99 ～ 5.02	高 3.70 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1か所に含む。本来は無色透明。	
第279号 PL.42	41 ガラス製品 玉	完形	径 4.91 ～ 4.97	高 3.89 重 0.15	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白・粉を吹いたように酸化。酸化痕は深い部分が円孔に対して螺旋状の縞模様を呈する。上下面と円孔境は明瞭な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	

採掘 PL. No.	種 類	出土位置 埋存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 4.97 ～ 4.98	高 3.39 重 0.14	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.02 ～ 5.05	高 3.73 重 0.16	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を微量含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 4.84 ～ 4.88	高 3.37 重 0.14	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.18 ～ 5.26	高 3.52 重 0.17	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を5カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.22 ～ 5.28	高 3.57 重 0.18	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.14 ～ 5.22	高 3.68 重 0.17	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 4.90 ～ 4.93	高 4.14 重 0.16	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.09 ～ 5.10	高 3.78 重 0.18	//白色、無色透明	酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.02 ～ 5.14	高 3.47 重 0.16	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 4.99 ～ 5.03	高 3.15 重 0.14	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を4カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 4.96 ～ 5.02	高 3.28 重 0.15	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.25 ～ 5.30	高 3.63 重 0.18	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.00 ～ 5.19	高 3.73 重 0.17	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.00 ～ 5.04	高 4.07 重 0.18	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.43 ～ 5.46	高 3.59 重 0.20	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を1カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.19 ～ 5.33	高 3.55 重 0.18	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を2カ所に含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.68 ～ 5.69	高 3.79 重 0.22	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。黒褐色の不純物を5カ所に含む。やや大きい不純物を器表付近に1カ所含む。本来は無色透明。	
第2790 PL. 42	ガラス製品 玉	完形	径 5.49 ～ 5.66	高 3.77 重 0.21	//白色、無色透明	器高が高い。酸化が著しく、表面の多くは白く粉を吹いたように風化。風化面は深い部分が円孔に対して螺旋状の縦線模様を呈する。上面と円孔境は明確な線をなす。球状の気泡を含む。気泡は列をなさない。本来は無色透明。	



第28図 1区之面疑似詳断面図

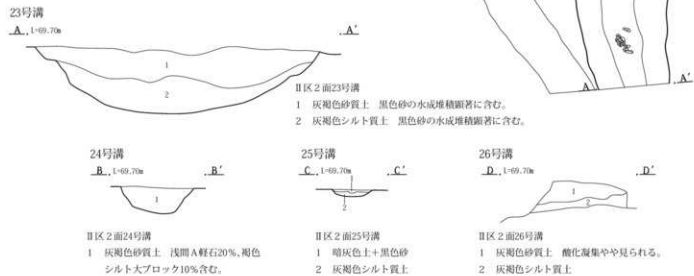
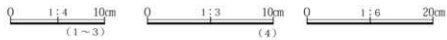
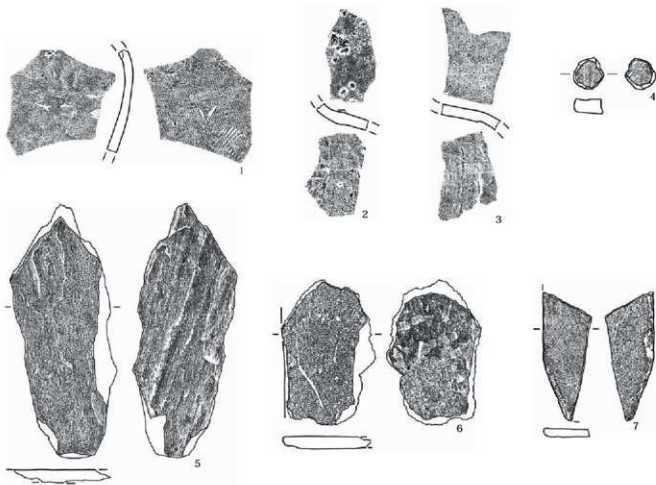
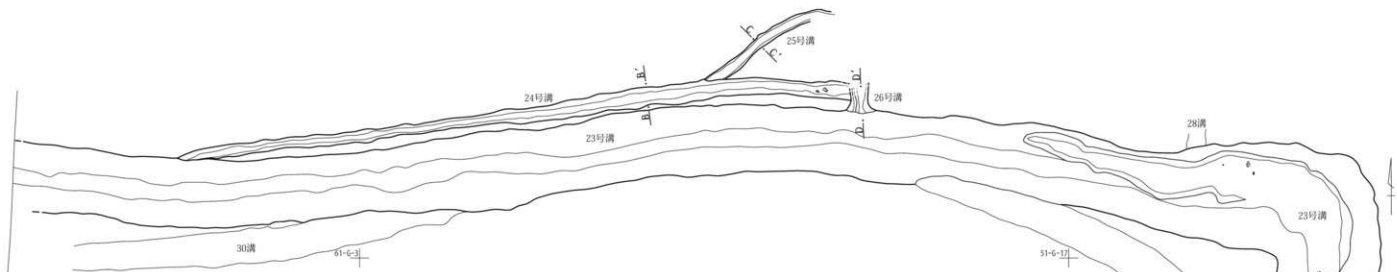
A. 1:70.5m

B. 1:70.5m

C. 1:70.5m

- 1B' 1B主体、酸化層帯がなく分層される。
- 1C' 灰帯包土
- 10A' 10A主体、目が混入して色調暗い。
- 1 灰黄褐色土：採掘A層土10%含む。





第10表 II区2面23号溝出土遺物

発掘No.	種別	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第30回 1	深美陶器 盤	口底	口 高	//灰	外面は板状工具による縦位撫で。外面に叩き目。	12世紀~13 世紀前半。
第30回 2	滑滑陶器 壺?	口底 肩部片	口 高	//暗赤褐	断面は灰白色。内面器表は暗赤褐色。外面には全体に自然釉がかかる。外面肩上部に低い段差。	中世。
第30回 3	深美?陶器 壺?	口底 肩部片	口 高	//灰	断面は灰白色。内面器表は灰色。外面には自然釉がかかるが、白濁し数形状となる。内面は縦位撫で。	中世。
第30回 4	在池系土器 白磁(不詳)	口底	口 2.5 底 2.3	高 1.0 B//褐色	器種不詳の土器片を打ちさき、周囲を粗く磨って円盤状に整形。	二次加工。中世か。
第30回 5	石造物 板碑		長 (40.0) 幅 (16.8) 厚 2.2 重 2075.1	緑色片岩	板碑下半部。碑面は平坦だが磨き整形は施されていない。裏面も凹凸の残したままで、面整形は施されない。	
第30回 6	石造物 板碑		長 (23.1) 幅 (15.0) 厚 2.1 重 1147.8	緑色片岩	板碑左辺・下端部破片。碑面には粉縁の一部のみ残り、裏面には縦位・斜位の平ノミ加工痕(約10mm)が残る。	
第30回 7	石造物 板碑		長 (20.6) 幅 (7.8) 厚 1.5 重 347.7	緑色片岩	板碑左辺・下端部破片。表面面とも平坦だが、磨き整形は施されていない。	



第29図 II区2面23~26号溝と23号溝出土遺物

形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は13cmで、勾配はほとんどない。埋没土は褐色シルトブロックを多く含み人為埋没で、浅間A軽石も多く含む。規模は長さ28.64m上端幅40～96cm下端幅16～44cm深さ28cmである。埋没土から灰釉陶器碗皿類1点が出土するが混入である。埋没土から天明3年に降に埋められる。

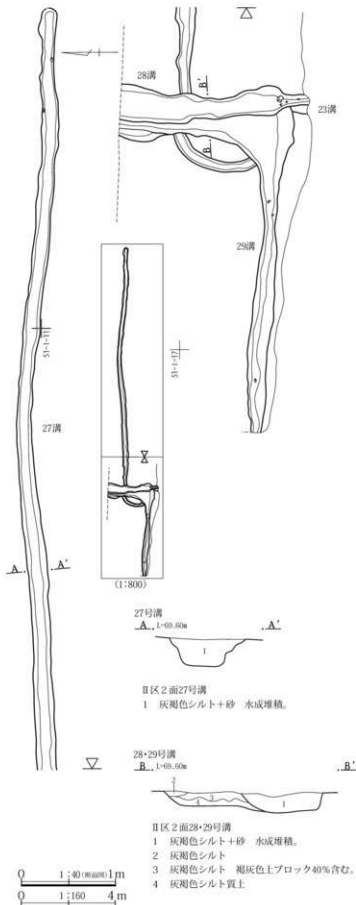
25号溝 位置 51H・I-19・20グリッド。24号溝と重複するが新旧関係不明で、西側は重複して不明となる。東側は削平により消滅する。平面形はやや湾曲する。走向方位はN-57°-E。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土は暗灰色土と黒色砂が等量に混じり人為埋没。規模は長さ6.16m上端幅40～56cm下端幅24～40cm深さ7cmである。遺物は灰釉陶器碗・皿類が1片出土している。時期は比定できない。

26号溝 位置 51H-18グリッド。23・24号溝と重複するが新旧関係不明。南北両端とも重複して不明となる。23号溝は状況から並存時期も想定される。平面形は直線状。走向方位はN-0°。断面形はU字形。底面はほぼ平坦。勾配は計測不能である。埋没土は水成堆積に近いシルト質土・砂質土で、自然埋没する。23号溝への排水路とみられるが、北側は不明である。規模は長さ1.04m上端幅72cm下端幅16cm深さ36cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

II区2面27・28・29号溝(第30図、PL.12)

27号溝 位置 51H・I-8～16グリッド。28・29号溝と重複するが新旧関係不明で、南端は重複して不明となる。東端は立ち上がるが、削平による消滅と思われる。東側1次調査で延長部は検出されていない。東西軸の平面形は直線状で、西端で南方へ湾曲する。走向方位はN-90°-N-12°-E。断面形は逆台形。底面は平坦。両端の比高差は5cmで、勾配はほとんどない。水成堆積により自然埋没する。規模は長さ43.20m上端幅30～89cm下端幅16～48cm深さ33cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

28号溝 位置 51H・I-15・16グリッド。27・29号溝と重複するが新旧関係不明。北側は調査区域外に延びるが、1次調査で延長部は検出されていない。南側は23号溝と重複して不明となるが、並存時期も想定される。



第30図 II区2面27～29号溝

平面形は直線状で、南端は細くなる。走向方位は $N-0^{\circ}$ 。断面形は血状。底面はほぼ平坦でやや凸凹する。南端近くで円形に凹んでおり、水溜状によどませた後に23号溝に落水した可能性が高い。両端の比高差は24cmで、勾配2.99%で北から南方へ下向する。水成堆積により自然埋没する。規模は長さ8.02m上端幅44～153cm下端幅11～107cm深さ27cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

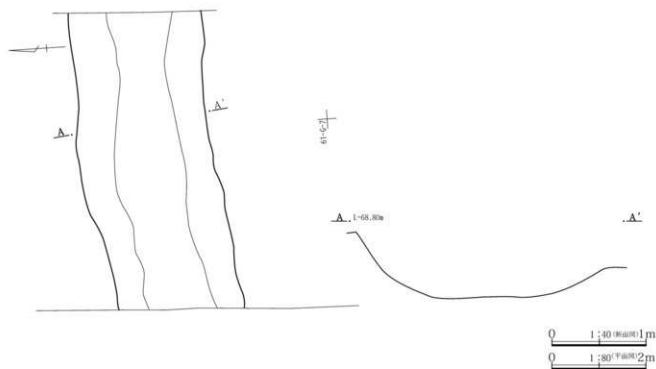
29号溝 位置 51H・I-15・18グリッド。28号溝と重複して、断面観察により前出となるが、屈曲部であり観察地点に問題が残る。西端は26号溝と重複するが新旧関係不明で、延長線上に24号溝が延びる。平面形はL字形で、南北軸の走向方位は $N-2^{\circ}-E$ で、東西軸の走向方位は $N-88^{\circ}-W$ 。南北軸は残存部分が少なく詳細は不明。断面形は血状か。底面は平坦でやや丸みを持つ。東西軸両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没

土はシルトが主体であるが、埋没状況不詳。規模は長さ19.32m上端幅42～264cm下端幅18～194cm深さ26cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

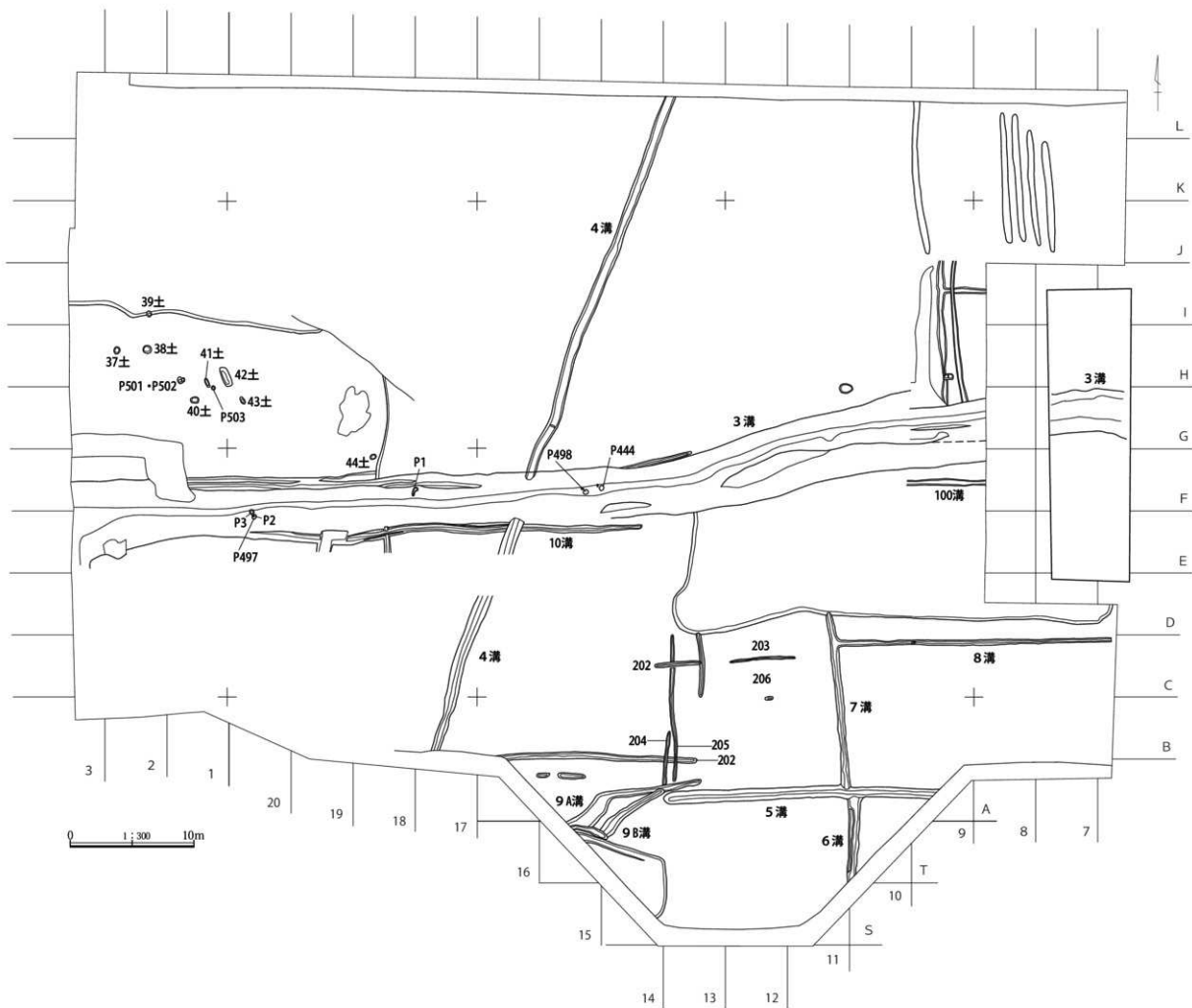
(2) Ⅲ区

Ⅲ区2面3号溝(第31図、PL.12・13)

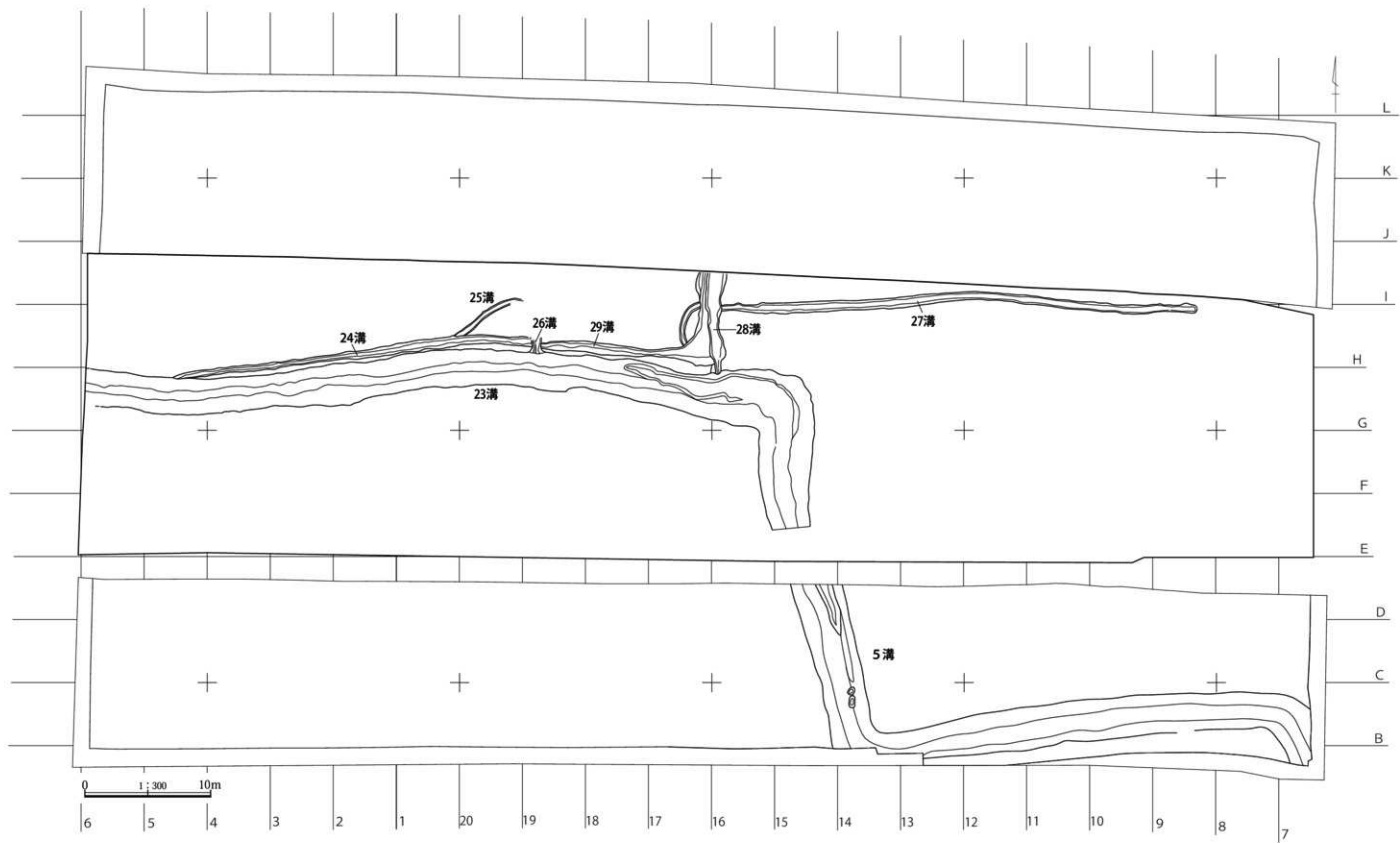
位置 61G-6・7グリッド。東西両側ともに調査区域外に延び、東側はⅡ区23号溝と同一で、西側1次調査で3号溝と同一となる。11号溝より後出。平面形は直線状。走向方位は $N-90^{\circ}$ 。断面形は血状。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没土は浅間B軽石を含む砂質土で自然埋没。規模は長さ6.40m上端幅350cm下端幅192cm深さ28cmで、1次調査も含めるとⅢ区総延長85.2mである。遺物は出土していない。1次調査の所見から近世に比定される。



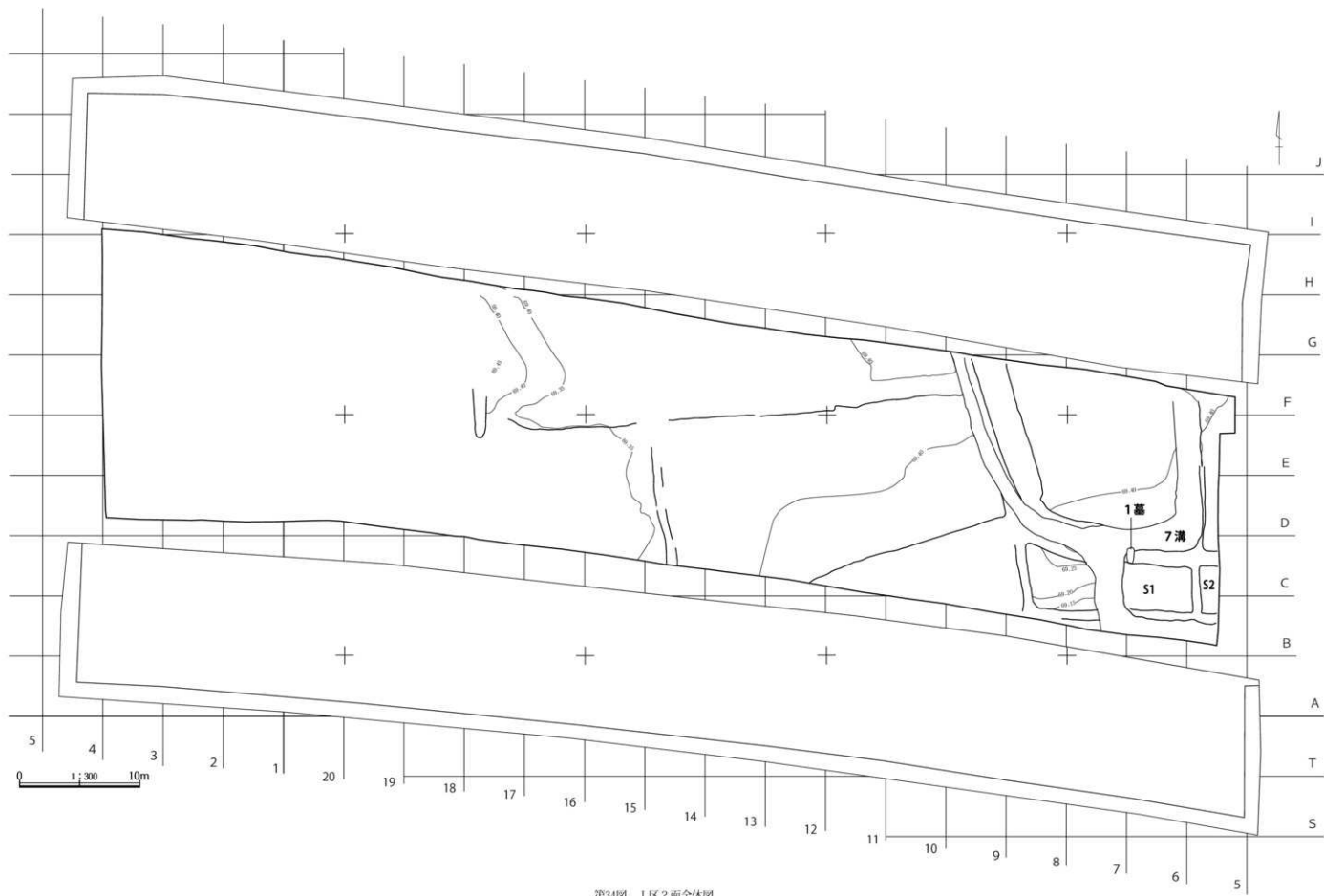
第31図 Ⅲ区2面3号溝



第32图 Ⅲ区2面全体图



第333图 II区2面全体图



第34图 1区2面全体图

第4項 3面の遺構と遺物

1 概要

3面はAs-B降下以降で基本土層Ⅲを埋没土とする。あるいは中世とみられる遺構である。溝は29条と遺構のほとんどを占め、残るⅡ区1号橋も溝を渡る施設である。Ⅲ区では1次調査の中世屋敷を区画する溝の延長部分が検出された。

2 橋

Ⅱ区3面1号橋と杭列(第35図、PL.14、第11・12表)

1号橋 位置 51G・H-15グリッド。南北軸をとる。柱穴の東辺はP1～6の6本で柱間4間、西辺はP8～15の8本で柱間5間、南北辺は柱間1間である。P1・15は3面73号溝北辺上端に付設し、ほぼ直交方向に柱穴を配置する。3面71号溝は中段状になり、P3・4・12・13・16を直線的に付設する。P5・11は3面3号溝の北辺上端に設ける。柱筋の通りは良く規格性が高い。埋没状況不詳。詳細な規模は第12表のとおり。遺物は出土していない。

杭列 位置 51G・H-15グリッド。1号橋周辺で多数の杭が出土し、一部列状に並ぶことが確認された。杭が明確に残存する8か所について、断ち割り調査を行った。Cラインを除く7か所は、杭の配置が1号橋とほぼ一致しており、橋を補助したのか、別時期の橋とみなされよう。Cラインでは杭5本が東西方向に直線状に並んでいる。走向方位はN-76°-Wで、1号橋南辺に対して22度南に触れている。この杭列は3面3号溝の底面に打たれ、方位はその走向と一致する。この溝の南辺にも対応する柱穴が見られるため、1号橋に続いて、くの字に折れる橋が架かっていたことも想定できる。ただし、3面3号溝の南辺は2面23号溝と重複して消滅するため、不明な部分が多い。杭周辺を埋める土は、青灰色シルトでビット状に変色する。しかし、夾雑物はなく均質であることから、杭打設後に変色した可能性も残る。杭は基本的に掘り込みを持たず、1号橋の柱穴とは違い、打ち込まれたものと考えられる。

第11表 Ⅱ区3面1号橋周辺杭 計測表

	杭番号	次杭との		備考
		長さ (cm)	間隔 (cm)	
Cライン	杭1	32	20	直径1.5～2cm、深さ1.5cmのほぞ穴有り
	杭2	22	30	竹
	杭3	24	44	
	杭4	25	42	
	杭5	42	42	先端炭化
Dライン	杭6	40	22	
	杭7	46		先端炭化
Eライン	杭8	33	47	
	杭9	48	51	先端炭化
	杭10	33		先端炭化
Fライン	杭11	(26)	25	
	杭12	24		やや炭化有
Gライン	杭13	47		サクラ属腐皮付き
Hライン	杭14	(26)		竹?
Iライン	杭15	54		サクラ属腐皮付き
Jライン	杭16	20	57	
	杭17	28	57	
	杭18	25		

3 溝

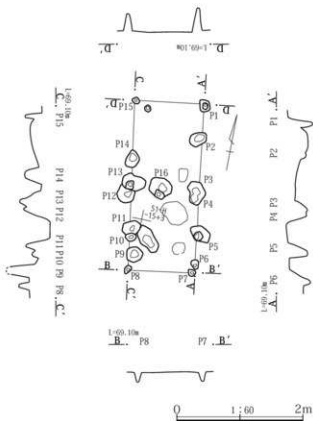
調査区すべてで溝が検出された。Ⅱ区西端とⅢ区の溝はⅢ区中世屋敷と関連する溝群である。Ⅰ区とⅡ区中央以東も比較的大規模で土地を区画し、流水を伴うものが多い。Ⅳ区は3条と少なく、小規模である。大規模なもの、東端の1・2面の溝に踏襲されたものと考えられ、東端を除けば溝は少ない。ここから隣接する上野田中道東遺跡Ⅰ区の西端にかけて、微高地であることも要因にある。

(1) Ⅰ区

Ⅰ区では溝が10条検出された。比較的大規模な溝が多く、1次調査とつながるものがほとんどである。また、重複するものが多く、方形に区画する性格がある。8B号溝は掘削痕が見られ、ほかと性格が異なる。

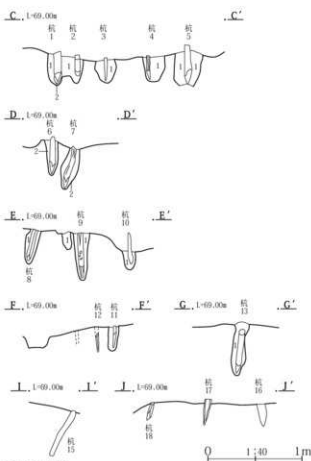
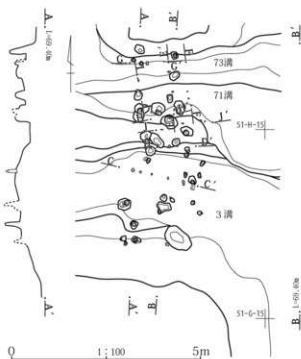
Ⅰ区3面8A・B号溝(第36・37図、PL.15・43、第13表)

8A号溝 位置 41B・C-5～12グリッド。東西両側ともに調査区域外に延び、西側1次調査の8・9号溝となるが、重複が激しく特定は難しい。1面1号溝、3面8B・19号溝より前出で、3面16・17号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状だが、中央を境にへの字形に折れる。おそらく、重複あるいは合流する溝による影響があるだろう。走向方位はN-85°-W～N-82°-E。8B号溝を境に南北で形態が異なり、北側の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質な褐灰色土で埋没後の攪拌が著しい。南側の断面形はU字形、底面は丸みを持



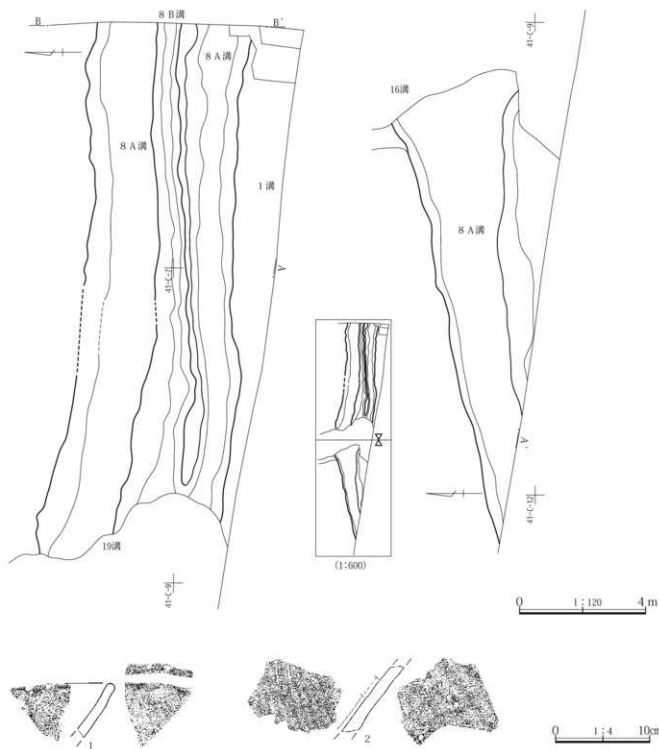
第12表 II区3面1号橋計測表

規模(m)	位置	51C・H-15			主軸方位 N-9°-W	
		柱穴番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	形状
東辺 2.69	P 1	19	16	39	楕丸方形	0.54
	P 2	29	19	19	楕円形	0.85
	P 3	-	21	24	不明	0.12
	P 4	-	19	25	不明	0.60
	P 5	35	24	30	五角形	0.47
	P 6	15	10	16	円形	0.13
南辺 1.03	P 7	11	10	16	円形	1.03
西辺 2.70	P 8	15	9	15	円形	0.27
	P 9	25	25	37	円形	0.28
	P10	18	13	10	楕円形	0.14
	P11	30	22	38	楕円形	0.13
	P12	26 (24)	41	-	不明	0.55
	P13	37	24	34	不明	0.17
	P14	26	20	26	方形	0.43
北辺 1.12	P15	12	10	27	円形	0.91



- 1 青灰色シルト 還元顕著。
- 2 暗灰色土: 白色軽石(浅間B軽石?)含む。

第35図 II区3面1号橋と杭列

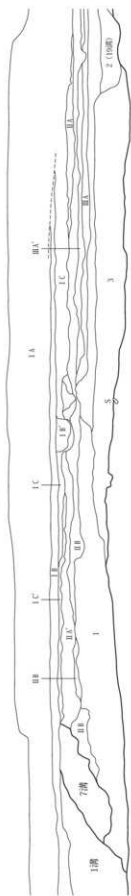


第36図 1区3面8A・8B号溝と出土遺物

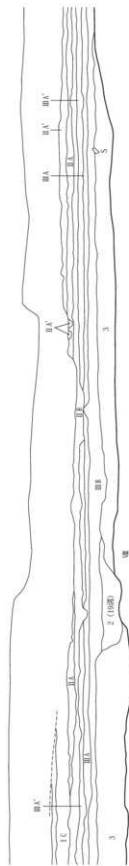
第13表 1区3面8号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高			
第36図 PL.43	1	常滑陶器 片口鉢	片口部片	口 底	高	//にふい赤褐色	断面は灰色、器表はにふい赤褐色であるが、内面に自然釉がかかる。口縁端部は丸い。	片口鉢Ⅱ類、13世紀第1四半期～第3四半期。
第36図	2	在地系土器 片口鉢	体部片	口 底	高	A//灰	断面は灰色、器表付近はにふい褐色。器表は灰色。体部は開く。内面下半は使用により、器表摩滅。	中世。

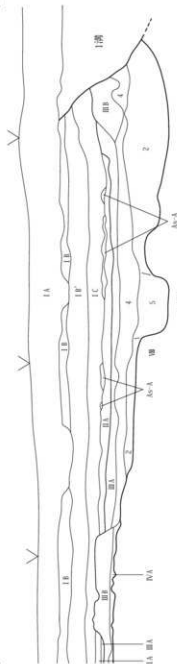
A., 1/70.0m



A'



B., 1/70.0m



1区3面8号溝

1B' 1B主体、酸化濃度がなく分離される。

1C' 灰褐色土

IIA' 1A主体、目録分類して色調明るい。

1 灰白色シルト II Bの表土部分のみ。

2 褐色土

3 黒褐色砂質土、粗砂を層状に含む。

4 暗灰色シルト質土、粗砂に似る、浅間山軽石を含む。

5 黒褐色砂質土、褐色土入ブロック20%含む。

0 1:40 1m

第37図 1区3面8A・8B号溝断面図

つ。両端の比高差は8cmで、勾配ほとんどない。埋没土中に水成堆積する部分も見られ、自然埋没する。規模は長さ34.60m上端幅440～560cm下端幅48～110cm深さ39cmで、1次調査9号溝も含めると長さ94.7mである。8B号溝をあわせた埋没土から常滑陶器片口鉢(1)、在地系土器片口鉢(2)が出土する。掲載遺物のほかに土師器小型品5片、同大型品1片、同不明品11片、須恵器小型品2片、灰釉陶器碗・皿類1片、同瓶類1片、中世国産焼締陶器1片、同在地系鉢・銅類1片、時期不詳遺物2片が出土している。出土遺物から中世以降に比定される。備考 調査段階8号溝を8A号溝に名称変更。

8B号溝 位置 41B・C-5～8グリッド。東側は調査区域外に延びる。西側は19号溝と重複して不明となるが、西端が北方へやや屈曲するため、延長部に位置する3区16号溝と同一となる可能性もある。8A号溝より後出で、19号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状で、西端は北方へやや屈曲して広がる。走向方位はN-90°。断面形は逆台形。底面は削削工具痕が長軸方向にほぼ2列残り、波板状に凸凹する。両端の比高差はなく、勾配はほとんどない。埋没土は褐色土大ブロックを多く含み人為埋没。規模は長さ16.44m上端幅92～170cm下端幅16～104cm深さ41cmである。出土遺物は8A号溝と同じ。時期は8A号溝より後出のため、中世以降に比定される。

備考 調査段階8号溝から一部を分離し名称変更。

I区3面16・17・18・19号溝(第38図、PL.15・16)

16号溝 位置 41C～G-8～10グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査16号溝と同一となる。南側は19号溝と重複して不明となるが、調査段階の所見では8A号溝と同一と見なされる。17号溝より後出で、19号溝より前出。平面形は直線状で、南端はやや東へ湾曲する。走向方位はN-13°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は13cmで、勾配はほとんどない。埋没土中に灰白色土ブロックを多く含むが、埋没後の攪拌も想定される。人為埋没か。規模は長さ21.00m上端幅114～250cm下端幅54～134cm深さ33cmで、1次調査も含めると長さ33.9mである。遺物は出土していない。時期は層位から中世以降と考えられる。

備考 調査段階8号溝の一部を北側1次調査の成果にあ

わせ名称変更した。

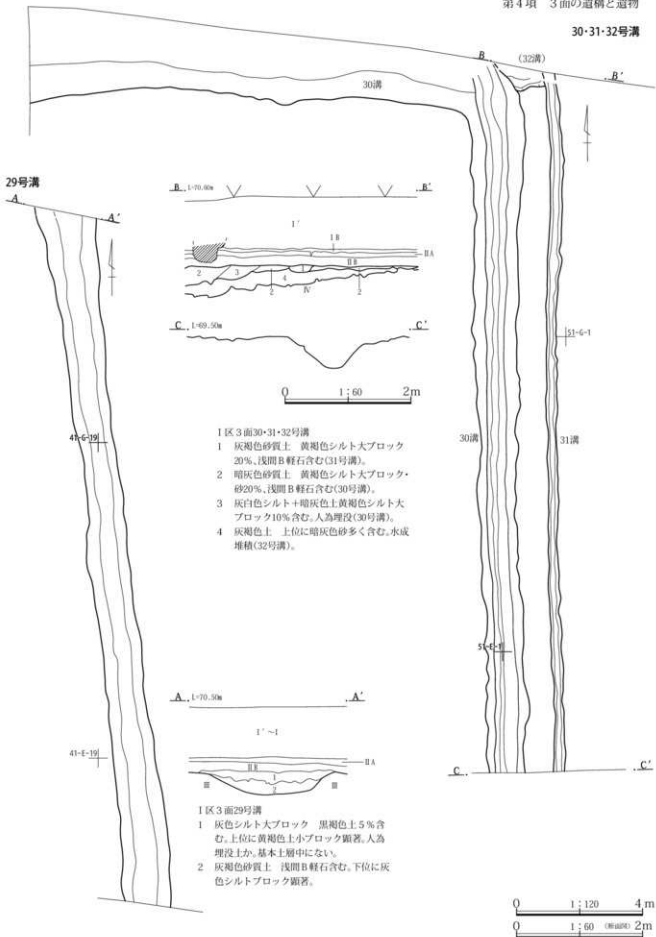
17号溝 位置 41C～G-9・10グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査17号溝と同一となる。南側は8A号溝と重複して不明となる。16号溝より前出で、8A号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-12°-W。大部分は重複により消滅するが、断面形は皿状か。底面はほぼ平坦。埋没土中に灰白色土ブロックを多く含むが、底面の地山が攪拌されており、上層からの攪拌によって溝状に凹んだ可能性が高い。16号溝と形状・埋没土ともに類似しており、連続的に形成された一連の遺構とも考えられる。規模は長さ17.08m上端幅125cm以上で、1次調査も含めると長さ60.5mである。遺物は出土していない。時期は層位から中世以降と考えられる。

18号溝 位置 41D～F-7～9グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査18号溝と同一となる。東端は削平されて消滅する。平面形は「L」の字で緩く湾曲する。走向方位はN-69°-W～N-18°-W。断面形は皿状だが、A断面観察の結果、掘り込み面は基本土層II A中であり、幅の広いU字形となる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は11cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質なシルト質土であるが、埋没後の攪拌も想定され、埋没状況不詳。規模は長さ20.35m上端幅52～153cm下端幅18～78cm深さ17cmで、1次調査も含めると長さ34mである。遺物は出土していない。時期は層位から近世以降と考えられる。

19号溝 位置 41B～G-8・9グリッド。南西両側ともに調査区域外に延び、北側1次調査19号溝と同一となる。西側は南側1次調査8号溝の一部と同一となる。8A・16号溝より後出で、8B号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は逆L字形で、西端はわずかに南に屈曲しはじめる。南北軸の走向方位はN-15°-Wで、東西軸はN-83°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持ち、やや凸凹する。両端の比高差は53cmで、勾配1.95%で北から南方へ下向する。埋没土は水成堆積が見られ、自然埋没する。規模は長さ27.12m上端幅66～267cm下端幅17～140cm深さ34cmで、1次調査も含めると長さ33.2mである。遺物は出土していない。時期は層位から中世以降と考えられる。



第38図 1区3面16～19号溝



第39図 I区3面29～32号溝

I 区3面29号溝(第39図、PL.16)

位置 41D～H-18・19グリッド。南北両側とも調査区域外に延び、1次調査12号溝と同一となる。平面形は直線状。走向方位はN-6°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は9cmで、勾配はほとんどない。埋没土下位は浅間B軽石を含んで自然埋没するが、上位はシルト大ブロックにより人為埋没する。規模は長さ22.36m上端幅105～182cm下端幅44～80cm深さ27cmで、1次調査も含めると長さ34.2mである。上層が水田耕作土とみられるため、床土として充填された可能性が高い。土師器小型品1片、同大型品1片が出土している。時期は埋没土から中世以降と考えられる。

I 区3面30・31・32号溝(第39図、PL.17)

30号溝 **位置** 41D～H-20、51D～H-1～3グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査11・20号溝のいずれかと同一となる。北端は西に屈曲し、北側1次調査区15号溝と同一となるが、本溝が直線的に延びて屈曲していない可能性もある。調査所見に従い同一とした。31・32号溝より後出。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°。断面形はV字に近いU字形。底面は細くやや凸凹する。両端の比高差は23cmで、勾配は1.02%で南から北方へ下向する。東西軸の走向方位はN-90°。半分が北側調査区域外となるが、U字形と思われる。底面形状・勾配は不明。埋没土は黄褐色シルト大ブロックを多く含むが、中位まで水成堆積が見られ、自然埋没と思われる。南北軸の規模は長さ22.60m上端幅108～180cm下端幅10～37cm深さ57cmで、東西軸の規模は長さ14.60m上端幅300cm以上で、1次調査も含めると長さ47.6mである。少量ながら近現代の遺物も含まれ、近現代まで使用されていた可能性がある。

31号溝 **位置** 41D～H-20グリッド。南北両側ともに調査区域外に延びるが、1次調査で延長部は検出されていない。32号溝より後出。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-0°。断面形はU字形。底面はやや凸凹して丸みを持つ。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。埋没土は黄褐色シルト大ブロックを含み攪拌され埋没する。遺物は出土していない。時期は比定できない。

32号溝 **位置** 41H-20グリッド。東側は調査区域外に延び、北側1次調査15号溝と同一の可能性もある。西

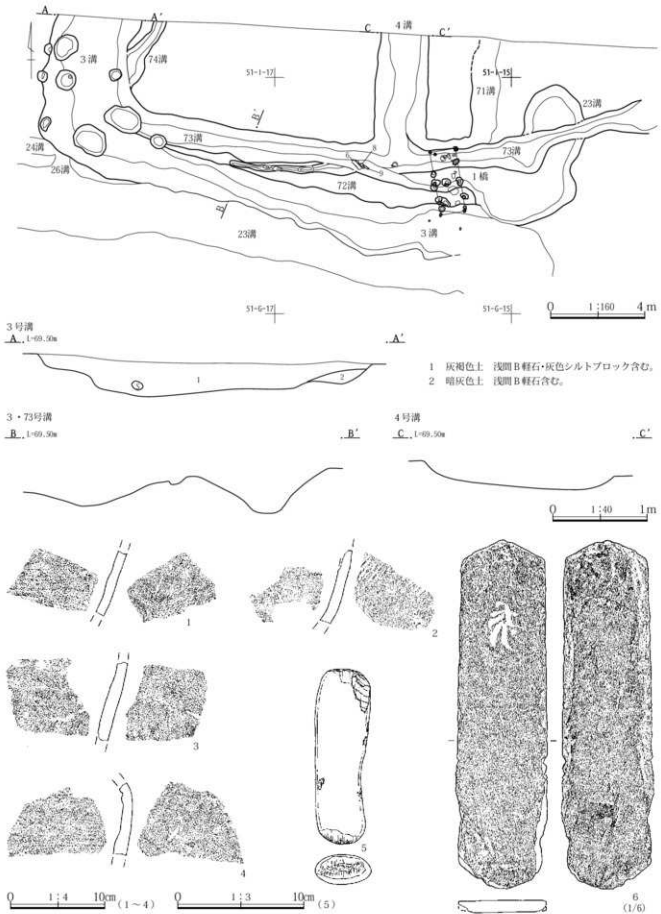
側は31号溝を挟んで延長線状に30号溝が延びるが、埋没土が異なり同一と見なせない。30・31号溝より前出。平面形・断面形・底面形・走向方位・勾配は不明。埋没土は灰白色シルトを多量に含むが、地山底面の掘削土とみられ、掘削作業の痕跡に近い性格がうかがえる。遺物は出土していない。時期は比定できない。

(2) II区

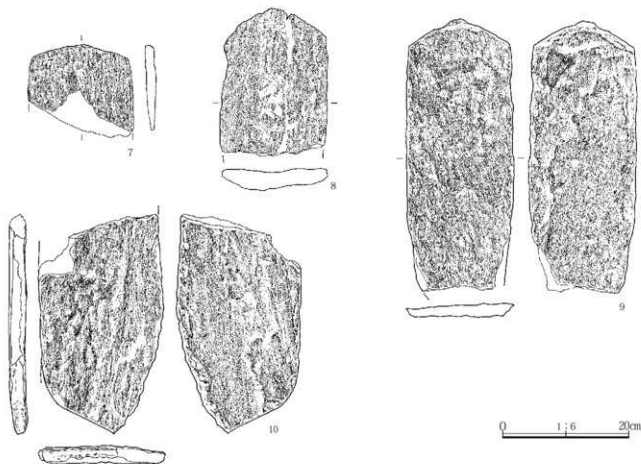
II区では11条の溝が検出された。中央には北側1次調査から続く大規模な3・4号溝があり、3号溝は東へ直角に曲がり区画溝と考えられる。3号溝の屈曲部から73号溝が東へ延びて、東西軸の区画溝となる71号溝と接続する。3号溝は再び南へ折れて南下する。3・73号溝は流水が想定できる。この2条を渡る1号橋の存在は注目される。ほかに小規模な72・74溝がある。南に離れた6号溝は屈曲して西へ延びており、西端の30号溝と同一とみられる。西端の42・70号溝はIII区の中世屋敷に關係する溝である。ほかに小規模な43号溝がある。

II区3面3・4・72・73・74号溝(第40・41図、PL.19・20)

3号溝 **位置** 51G～I-15～18グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査3号溝と同一となる。南側は2面23号溝と重複により消滅する。状況から1面23号溝より前出で、73・74号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°。断面形は皿状。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は27cmで、勾配5.6%で北から南方へ下向する。東西軸の走向方位はN-74°-W。断面形はU字形。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。底部から肩部にかけて円形の土坑状の落ち込みが見られるが、別の遺構という所見はない。形態から井戸あるいは水溜状の施設と考えられる。埋没土は均質な灰褐色土で浅間B軽石を含む。自然埋没か。円形の落ち込みの埋没状況不詳。南北軸の規模は長さ4.80m上端幅370cm下端幅238cm深さ57cmで、1次調査も含めると長さ36.6mである。東西軸の規模は長さ17.20m上端幅230cm下端幅170cm深さ38cmである。埋没土から焼締陶器(1～4)が出土するが73号溝と選別できていない。掲載遺物のほかに土師器中型品1片、同大型品3片、須恵器大型品1片、中世国産焼締陶器1片が出土している。出土遺物から中世に比定される。



第40図 II区3面3・4・72～74号溝と3・73号溝出土遺物(1)



第41図 II区3面3・73号溝出土遺物(2)

第14表 II区3面3・73号溝出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
				口 底	高				
第40図	1	常滑陶器 貫	3号溝 体部片	口 底	高	//	断面は菊灰色、器表はにぶい棕色。内面は横位撫で。外面は工具による縦位撫で。	中世。	
第40図	2	南蛮陶器 貫	3号溝 体部片	口 底	高	//灰	外面に叩き目。	12世紀～13 世紀前半。	
第40図	3	南蛮?陶器 陶器 貫	3号溝 体部片	口 底	高	//暗灰	内面は横位撫でで、接合痕残る。外面は工具による縦位撫で。	12世紀～14 世紀前半か。	
第40図	4	南蛮?陶器 陶器 貫	3号溝 胴部片	口 底	高	//暗灰	内面は横位撫で。外面は丁寧な撫でで工具痕は不明。	12世紀～14 世紀前半か。	
第40図	5	礫石 敲石	3溝	長 幅	厚 底	13.8 4.4 2.4 223.4	雲母石英片岩	上下両端とも小口部が摩耗するほか、上端小口部に敲打に伴う割れ痕が生じている。扁平状様を用いる。	
第40図	6	石造物 板碑	73溝	長 幅	厚 底	54.9 14.4 2.4 3410.3	緑色片岩	小形板碑。碑面は平滑で、やや磨滅する。浅い羽竹彫りの阿弥陀如来種子(キリーク)一尊を刻む。二条線なし。紀年銘は判読不可。裏面は横～斜方向の平ノミ状工具痕(幅10mm)を残す。	
第41図	7	石造物 板碑	3・73溝	長 幅	厚 底	(15.0) 17.0 1.7 784.5	緑色片岩	板碑下半部。裏面に横～斜方向の平ノミ状工具痕(幅10mm)が残る。転用器種は不明だが、下端側面に転用時の研磨痕?が残されている。	
第41図	8	石造物 板碑	73溝	長 幅	厚 底	(23.4) 17.0 3.4 1915.2	黒色片岩	板碑上半部破片。羽竹状彫りの阿弥陀如来種子(キリーク)一尊と蓮座の痕跡が残る。裏面は湾曲し、碑面中央も面状に陥んでいるが、この部分にも種子の痕跡があり、造立時より碑面は平滑ではなかったものと推察される。表裏面とも磨滅が著しい。石材質質。二条線なし。	
第41図	9	石造物 板碑	73溝	長 幅	厚 底	(42.8) 16.8 2.2 3410.3	緑色片岩	小形板碑。碑面は平滑で、やや磨滅する。浅い羽竹彫りの阿弥陀如来種子(キリーク)一尊を刻む。二条線なし。紀年銘は判読不可。裏面は横～斜方向の平ノミ状工具痕(幅10mm)を残す。	
第41図	10	石造物 板碑	3・73溝	長 幅	厚 底	(34.6) 19.8 3.0 784.5	緑色片岩	板碑下半部。裏面に横～斜方向の平ノミ状工具痕(幅10mm)が残る。転用器種は不明だが、下端側面に転用時の研磨痕?が残されている。	

4号溝 位置 51H・I-15・16グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査4号溝と同一となる。南側は73号溝と重複して不明となる。1面27号溝より前出で、73号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-0°。断面形は皿状。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は23cmで、勾配3.87%で北から南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ5.95m上端幅222cm下端幅138cm深さ34cmで、1次調査も含めると長さ19.0mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

72号溝 位置 51H-16・17グリッド。東端は73号溝と重複して不明となり新旧関係不明。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-90°。断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差はない。73号溝へ向かって落ち込んでおり、合流した可能性が高い。埋没状況不詳。遺物は出土していない。時期は比定できない。

備考 遺構名称がなく新たに付した。

73号溝 位置 51H-13～18グリッド。3・4・71・72号溝と重複するが新旧関係不明で、両端とも重複して不明となる。平面形はわずかに湾曲する。走向方位はN-78°E～N-82°W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。72号溝と接続する南壁面下位に、完形の板碑(6)や半完形の板碑2点(8・9)が横位で出土する。投棄されたというより、壁面に配置された可能性が高く、護岸的な性格と考えられる。72号溝からの流水などに対応したものであろう。4号溝接続部の東側に、1号橋が架けられており、本遺構を超える施設とみられる。底面に大円礫が点在し、橋台の一部である可能性もある。検出時点で1号橋は認識できておらず、相互の関係は不明である。出土遺物から中世に比定される。

備考 調査段階3号溝の一部を分離して新たに付番した。

74号溝 位置 51H-17・18グリッド。北側は調査区域外に延びるが、1次調査で延長部は検出されていない。南側は3号溝と重複して不明となり新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-31°E。断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。遺物は出土していない。時期は比定できない。

備考 遺構名称がなく新たに付した。

II区3面6号溝(第42図、PL.20)

位置 51E～G-15～18グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査6号溝と同一となる。1面23号溝より前出で、北側は重複により消滅する。調査所見では西側延長線状の3面30号溝と同一とする。平面形は緩く湾曲する。走向方位はN-35°W～N-66°W。断面形はU字形。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没土下位は自然埋没で、中位以上は黄褐色土大ブロックを多量に、浅間A軽石をわずかに含む埋没土で人為埋没する。規模は長さ20.16m上端幅146～194cm下端幅36～111cm深さ45cmで、1次調査も含めると長さ37.6mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

備考 調査段階では30号溝となっていたが、南側1次調査に合わせて東半部を名称変更した。

II区3面30・42・70号溝(第43図、PL.21・22・43、第15表)

30号溝 位置 61F・G-2～5グリッド。西側は調査区域外に延び、Ⅲ区1次調査14号溝と同一となる。1面23号溝より前出で東端は重複により消滅する。東側延長線上に延びる3面6号溝と調査所見では同一である。3面42号溝より前出で、3面43号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや北方へ湾曲する。走向方位はN-83°E。断面形は逆台形に近いU字形。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は3cmで、勾配はほとんどない。埋没土に黄褐色土ブロックを少量含むが自然埋没か。規模は長さ19.56m上端幅95～150cm下端幅34～66cm深さ47cmである。埋没土から在地系土器片口鉢(1)が出土する。掲載遺物のほかに近現代陶磁器1点が出土するが、1面23号溝からの混入も想定される。ほかに土師器大型品1片、近現代遺物1片、時期不詳遺物1片が出土する。時期は1次調査の所見も加味して中世に比定される。

42号溝 位置 61E～G-5グリッド。西側は調査区域外に延び、1次調査Ⅲ区11号溝と同一となる。3面30号溝より後出で、3面70号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°。東西軸の走向方位はN-90°。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は17cmで、勾配1.74%で南から西方へ



第42図 II区3面6号溝

下向する。埋没土は砂質土・シルト質土を主体とし自然埋没と考えられる。規模は長さ9.75m上端幅102～120cm下端幅21～48cm深さ50cmで、1次調査も含めると長さ44.3mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

70号溝 位置 61F-5グリッド。西側は調査区域外に伸び、Ⅲ区103号溝、1次調査Ⅲ区104号溝と同一となる。東端は3面42号溝と重複して不明となり新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-0°。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は10cmで、勾配8.77%で西から東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ1.14m上端幅74cm下端幅46cm深さ26cmで、1次調査も含めると長さ22.2mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

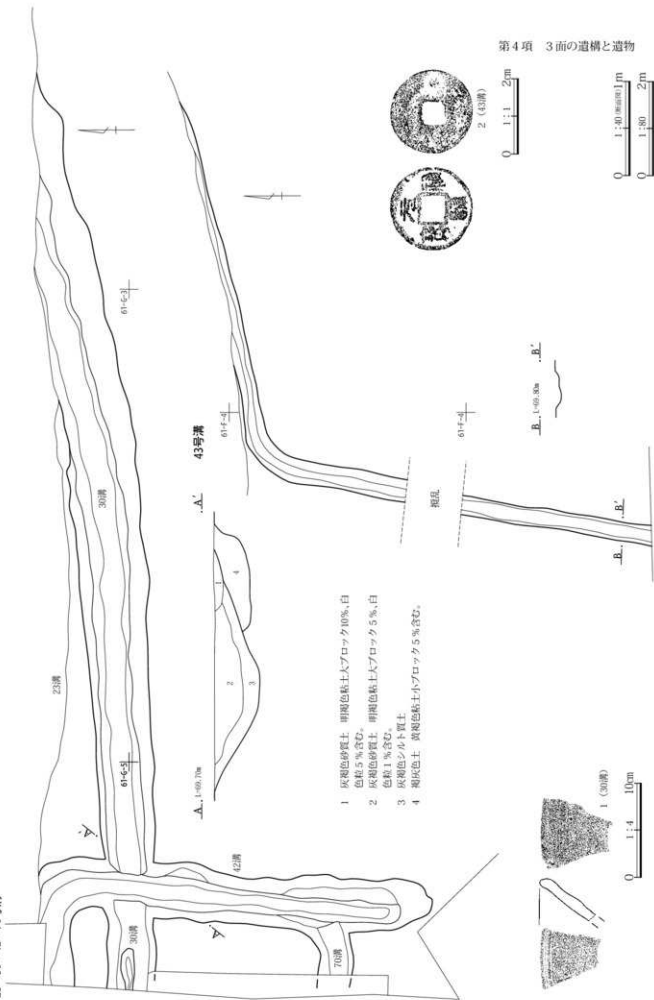
Ⅱ区3面43号溝(第43図、PL.20・43、第15表)

位置 61E～G-2～4グリッド。南側は調査区域外に伸びるが、1次調査で延長部は検出されていない。北側は30号溝と重複して不明となり新旧関係不明。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-11°-E、東西軸の走向方位はN-76°-E。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没状況不詳。南北軸の規模は長さ8.32m上端幅50cm下端幅30cm深さ7cmで、東西軸の規模は長さ7.94m上端幅32cm下端幅16cm深さ4cmである。埋没土から銅銭(1)が出土する。出土遺物から中世以降に埋没する。

Ⅱ区3面71号溝(第44図)

位置 51G～1-7～15グリッド。東側は調査区域外に伸び、1次調査Ⅰ区15号溝と同一となる。西側は3・73号溝と重複して不明となり新旧関係不明。平面形は直線状で、西端は南北に分岐する。北側は調査段階で4号溝となっており、別の遺構の可能性もあるが、遺構範囲は不明である。東西軸の走向方位はN-88°-Wで、南北の走向方位不明。断面形は皿状。底面はほぼ平坦でやや凸凹する。両端の比高差は14cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ40.80m上端幅230～790cm下端幅75～490cm深さ53cmで、1次調査も含めると長さ121.8mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

備考 調査段階23号溝の東半部と4号溝の東側を分離して新たに付番した。



第4項 3面の遺構と遺物

- 1 灰褐色砂質土、黒褐色粘土大ブロック10%、白色鉄5%含む。
- 2 灰褐色砂質土、黒褐色粘土大ブロック5%、白色鉄1%含む。
- 3 灰褐色シルト質土。
- 4 褐色土、黄褐色粘土小ブロック5%含む。

第43図 II区3面30・42・70号溝と30・43号溝出土遺物

第15表 II区3面30・43号溝出土遺物

採掘No. PL. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚			
第43号 PL. 43	1	在地系土器 片口鉢	30号溝 口縁部片	口 底	高	厚	B/暗灰、灰赤	断面は橙色、内面器表は灰赤色、外面器表は暗灰色。口縁部は玉縁状をなして内湾し、端部は尖り気味に立ち上がる。14世紀前半頃。	
第43号	2	銅製品 残片		長 幅	厚	重		元祐通宝、銕欠けの小孔あり	初踏1086年

(3) III区

III区南東部は1次調査で中屋敷が検出されており、2次調査でも関係する溝5条が確認された。うち4条は屋敷を区画する溝である。残る103号溝も内部を細分する溝である。

III区3面11・13・14・42・104号溝

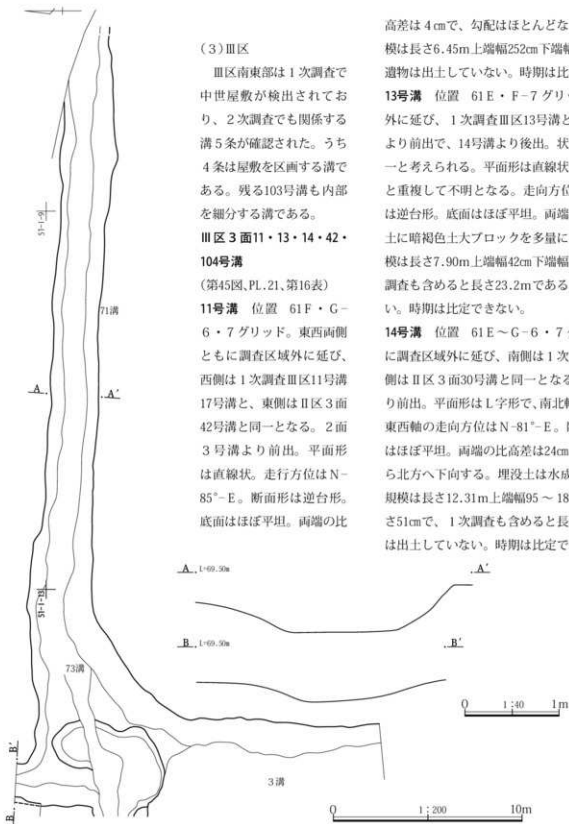
(第45図、PL. 21、第16表)

11号溝 位置 61F・G-6・7グリッド。東西両側ともに調査区域外に延び、西側は1次調査III区11号溝17号溝と、東側はII区3面42号溝と同一となる。2面3号溝より前出。平面形は直線状。走向方位はN-85°-E。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比

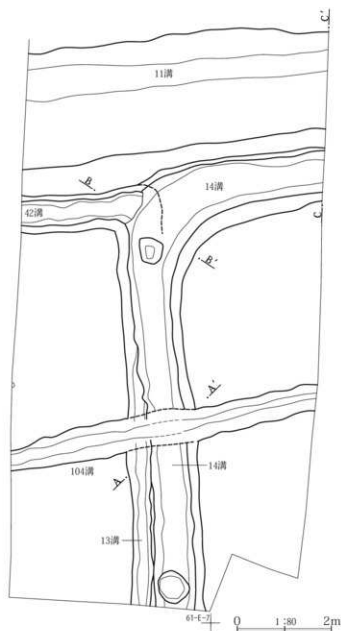
高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ6.45m上端幅25cm下端幅70cm深さ85cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

13号溝 位置 61E・F-7グリッド。南側は調査区域外に延び、1次調査III区13号溝と同一となる。103号溝より前出で、14号溝より後出。状況から3面42号溝と同一と考えられる。平面形は直線状だが、前出する14号溝と重複して不明となる。走向方位はN-1°-W。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差はない。埋没土に暗褐色土大ブロックを多量に含み人為埋没する。規模は長さ7.90m上端幅42cm下端幅24cm深さ24cmで、1次調査も含めると長さ23.2mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

14号溝 位置 61E-G-6・7グリッド。南東側ともに調査区域外に延び、南側は1次調査III区14号溝と、東側はII区3面30号溝と同一となる。13・42・103号溝より前出。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°、東西軸の走向方位はN-81°-E。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差は24cmで、勾配1.95%で南から北方へ下向する。埋没土は水成堆積に近く自然埋没。規模は長さ12.31m上端幅95～180cm下端幅40～90cm深さ51cmで、1次調査も含めると長さ49.1mである。遺物は出土していない。時期は比定できない。



第44図 II区3面71号溝



A, 1-70.00m

A'



Ⅱ区3面13・14・104号溝

- 1 灰褐色土 白色粒・粘土粒・砂10%含む,103号溝埋没上。
- 2 灰褐色土 やや粘質,褐灰土大ブロック・褐色土大ブロック40%含む,104号溝埋没上。
- 3 灰褐色粘質土 暗褐色粘土大ブロック20%含む,13号溝埋没上。
- 4 灰褐色土 やや粘質,13号溝埋没上。
- 5 灰褐色土 やや粘質,褐色土小ブロック5%含む,14号溝埋没上。
- 6 灰褐色土 褐色土小ブロック・褐色土小ブロック10%含む。

42・14号溝

B, 1-70.00m

B'



Ⅱ区3面42・14号溝

- 1 灰褐色土 明褐色粘土大ブロック20%含む。
- 2 灰褐色粘質土 明褐色粘土大ブロック5%、白色粒1%含む。
- 3 褐色土 黄褐色粘土小ブロック5%含む。
- 4 黒褐色粘質土 黄褐色粘土小ブロック5%含む。



0 1:3 10cm

C, 1-69.80m

C'



0 1:40 (0m/10m) 1m

第45図 Ⅱ区3面11・13・14・42・104号溝と104号溝出土遺物

第16表 Ⅱ区3面104号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	須恵器 杯	底部片	底 6.3	細砂粒/還元/不 い黄橙	口クロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	器面摩滅

42号溝 位置 61F-7グリッド。西側は調査区域外に延び、1次調査Ⅲ区42号溝と同一となる。東側は3面11号溝と重複して不明となるが、南へ折れて13号溝と同一と考えられる。14号溝より後出。平面形は直線状。走向方位はN-90°。断面形は逆台形。底面は凸凹する。両端の比高差はない。埋没土の下位は自然埋没か、上位は明褐色粘土大ブロックを多量に含んで人為埋没する。規模は長さ3.98m上端幅78cm下端幅43cm深さ44cmで、1次調査も含めると長さ26.8mである。遺物は土師器大型品1片が出土している。時期は比定できない。

104号溝 位置 61E-6・7グリッド。東西両側ともに調査区域外に延びが、西側は1次調査Ⅲ区104号溝と同一、東側はⅡ区70号溝と同一となる。13・14号溝より後出。平面形は直線状。走向方位はN-79°-E。断面形はV字に近いU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は16cmで、勾配2.40%で西から東方へ下向する。埋没土は水成堆積に近く自然埋没。規模は長さ6.68m上端幅42～74cm下端幅12～30cm深さ34cmである。遺物は出土していない。時期は比定できない。

備考 調査段階103号溝を名称変更。

(4)Ⅳ区

Ⅳ区では溝3条が検出された。42・44号溝は浅く、底面に掘削痕が見られ、何らかの作業痕跡である。47号溝は傾斜に沿って掘られている。

Ⅳ区3面42号溝(第47図、PL.22)

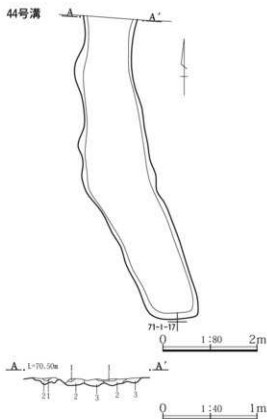
位置 71F・G-9～13グリッド。平面形は中央部で山形に折れて、への字形。走向方位はN-56°-W～N-70°-E。断面形は皿状。底面は著しく凸凹する。全体にU字鋤状の工具による掘削痕が明確に残る。掘削痕は中央部は短軸方向で、東西両側は長軸方向に数列並走する。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。埋没土は明褐色粘土・浅間B軽石を多量に含み、粘土は地山底面の掘削土とみられ、掘削作業の痕跡に近い性格がうかがえる。規模は全長25.40m上端幅50～126cm下端幅30～110cm深さ12cmである。遺物は土師器大型品1片が出土するが混入とみられる。埋没土から中世以降に比定される。

Ⅳ区3面44号溝(第46図、PL.22)

位置 71I-16・17グリッド。北側は調査区域外に延びるが、北側1次調査で延長部は検出されていない。平面形は中央部で折れて、くの字形に近い。走向方位はN-0°～N-25°-W。断面形は皿状。底面は著しく凸凹する。全体にU字鋤状の工具による掘削痕が残る。両端の比高差はない。埋没土は褐色土・浅間B軽石を多量に含み、褐色土は地山底面の掘削土とみられ、掘削作業の痕跡に近い性格がうかがえる。規模は長さ6.68m上端幅100～152cm下端幅85～127cm深さ6cmである。遺物は出土していない。埋没土から中世以降に比定される。

Ⅳ区3面47号溝(第47図、PL.22)

位置 71H・I-12～14グリッド。40号溝より前出で、南側は重複して不明となる。北端は斜めに立ち上がる。平面形は緩く北方へ湾曲する。走向方位はN-73°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹して丸みを持つ。両端



- 1 暗褐色土 浅間B軽石20%含む。
- 2 黒褐色砂(浅間B軽石主体) 暗褐色土10%含む。
- 3 褐色土 浅間B軽石10%含む。

第46図 Ⅳ区3面44号溝

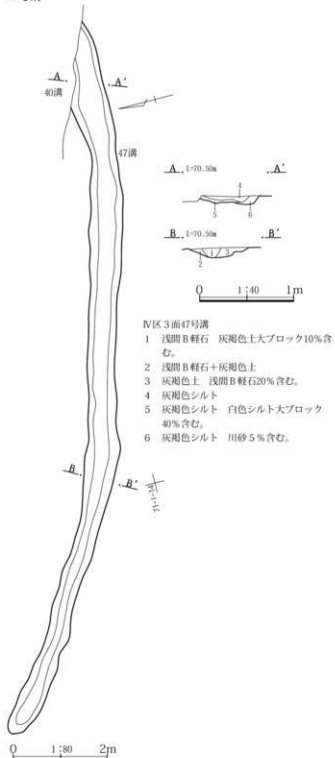
第4項 3面の遺構と遺物

の比高差は11cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と考えられる。遺物は須恵器小型品1片が出土するが混入とみられる。埋没土から中世以降に比定される。

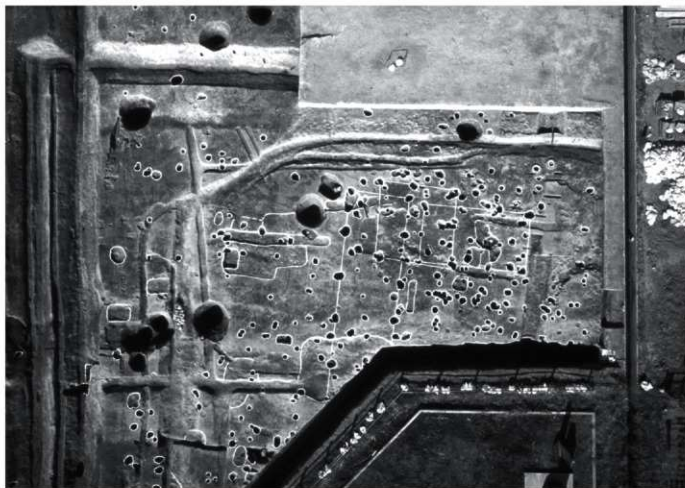
42号溝



47号溝



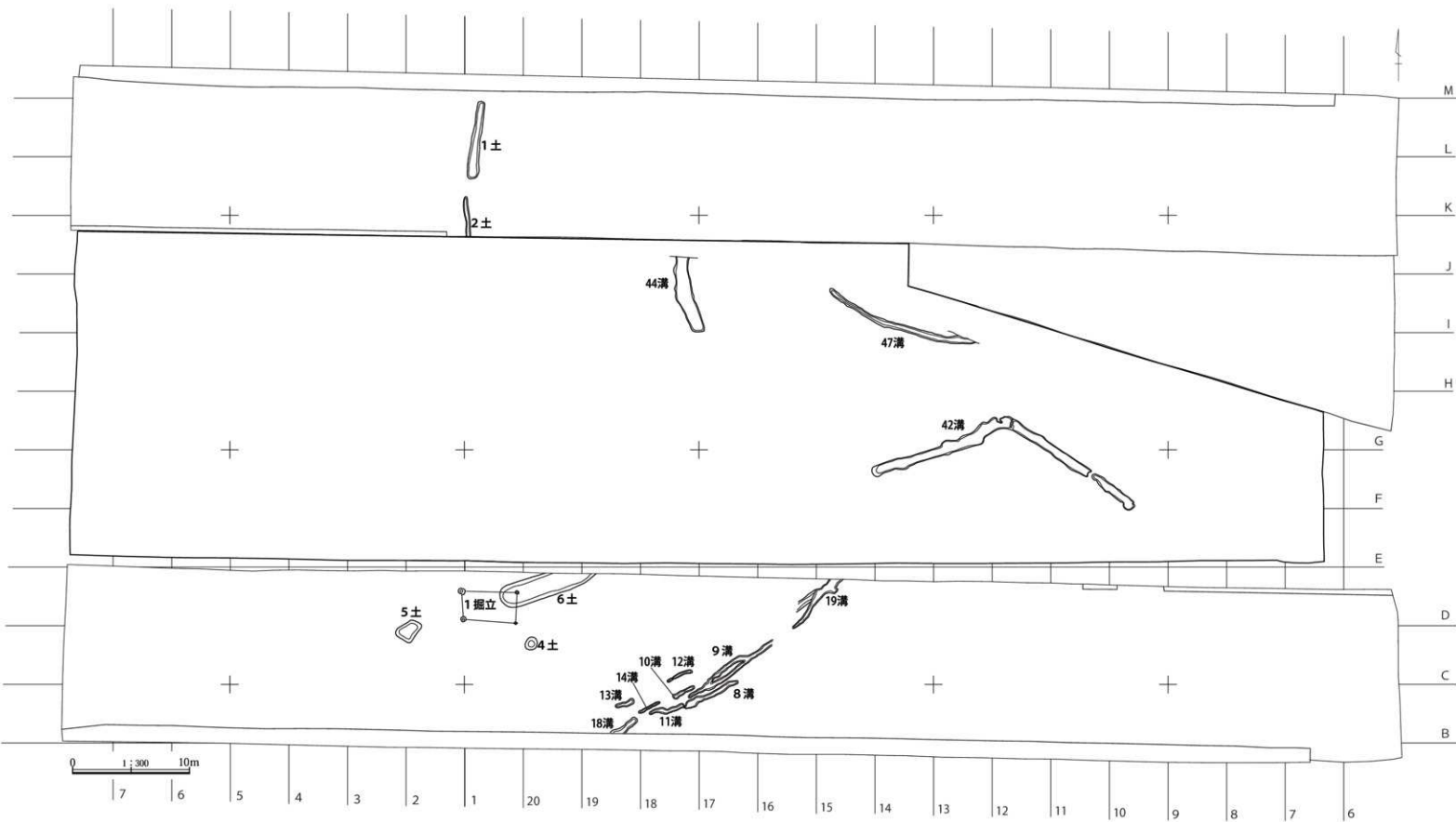
第47図 IV区3面42・47号溝



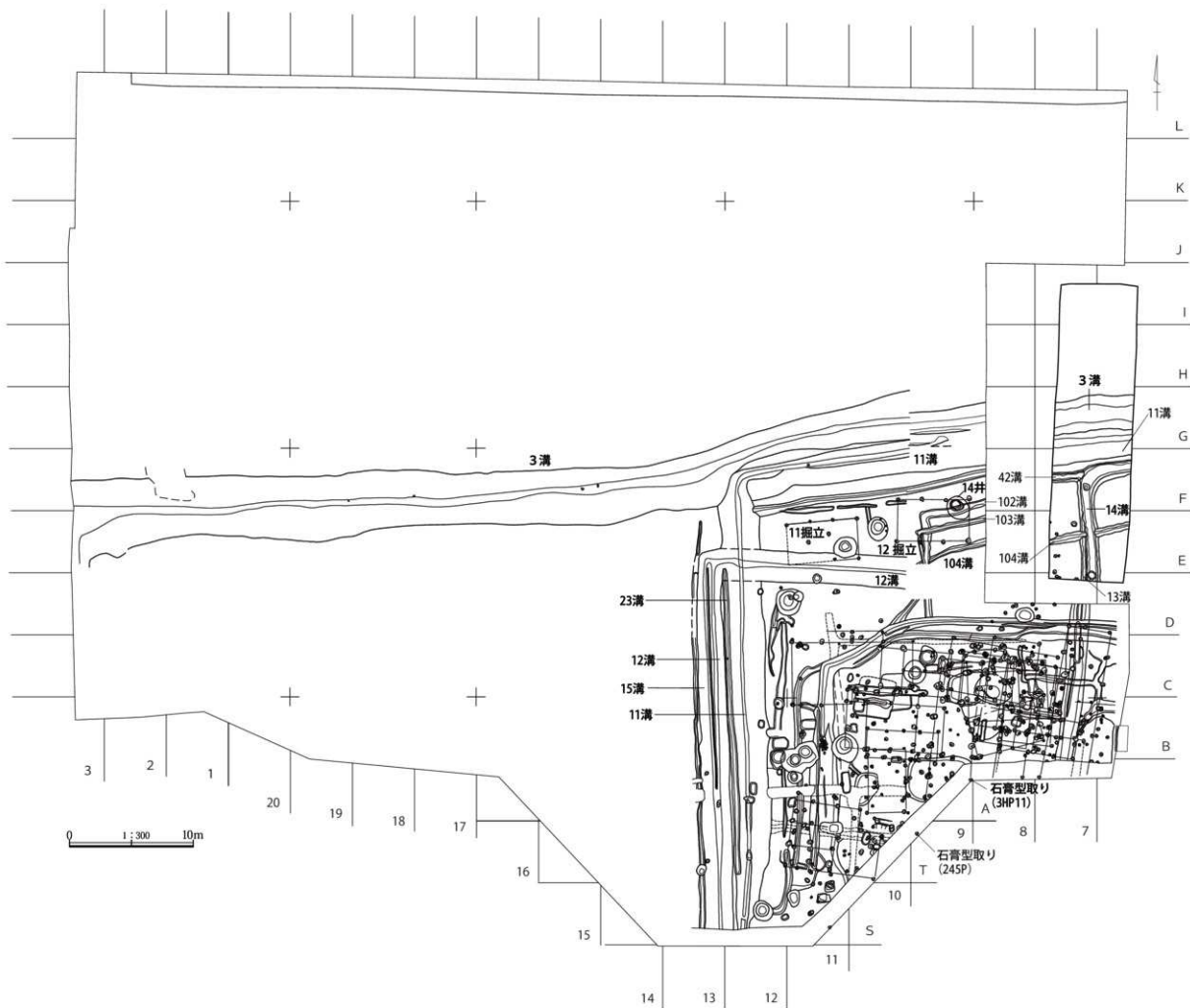
1次調査Ⅲ区3面中世屋敷(上空から) 溝は4時期に変遷が分かれる。



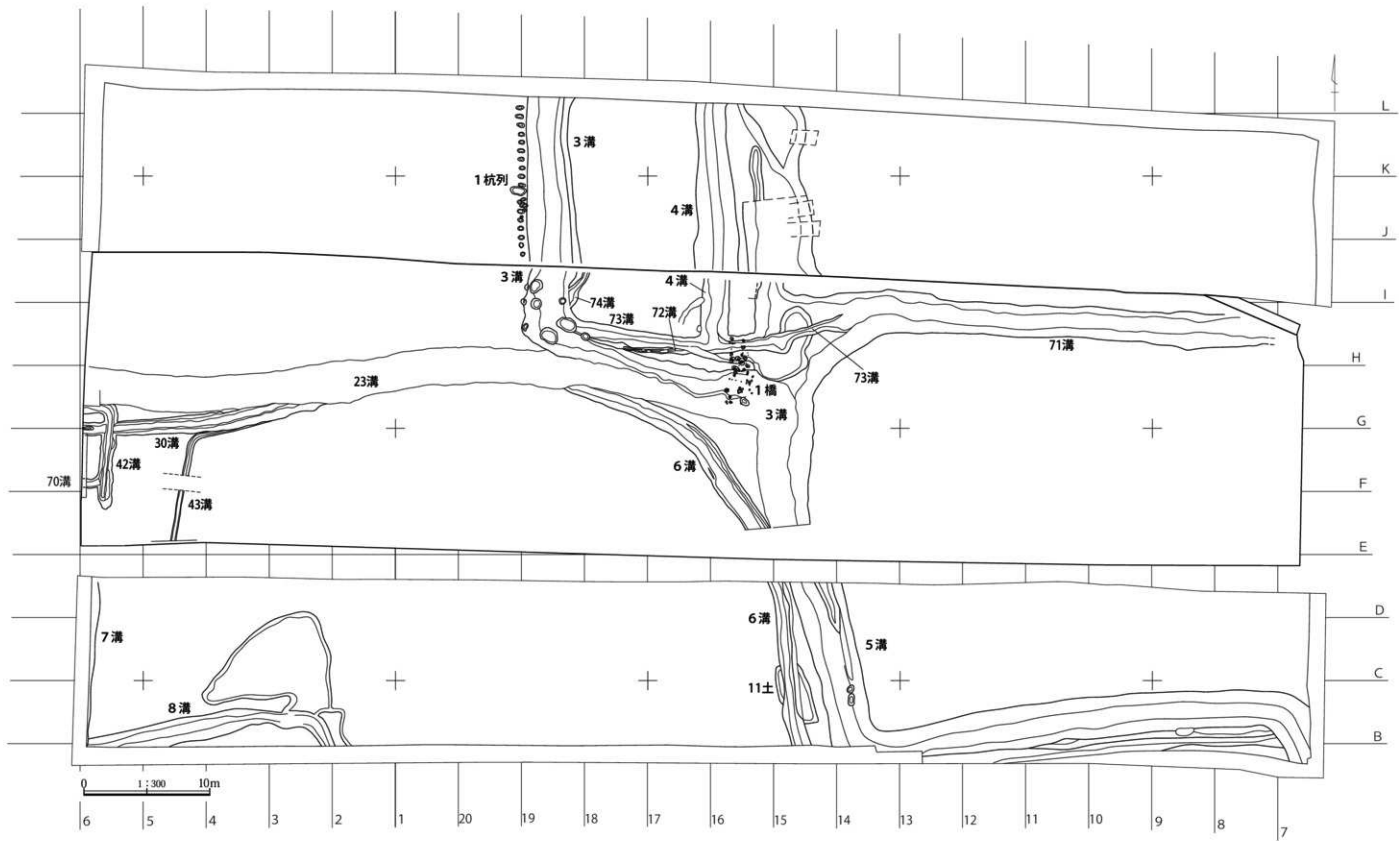
1次調査Ⅲ区13号溝(左)と14号溝(右)断面(南から) 13号溝は中世屋敷の1期段階を囲む。



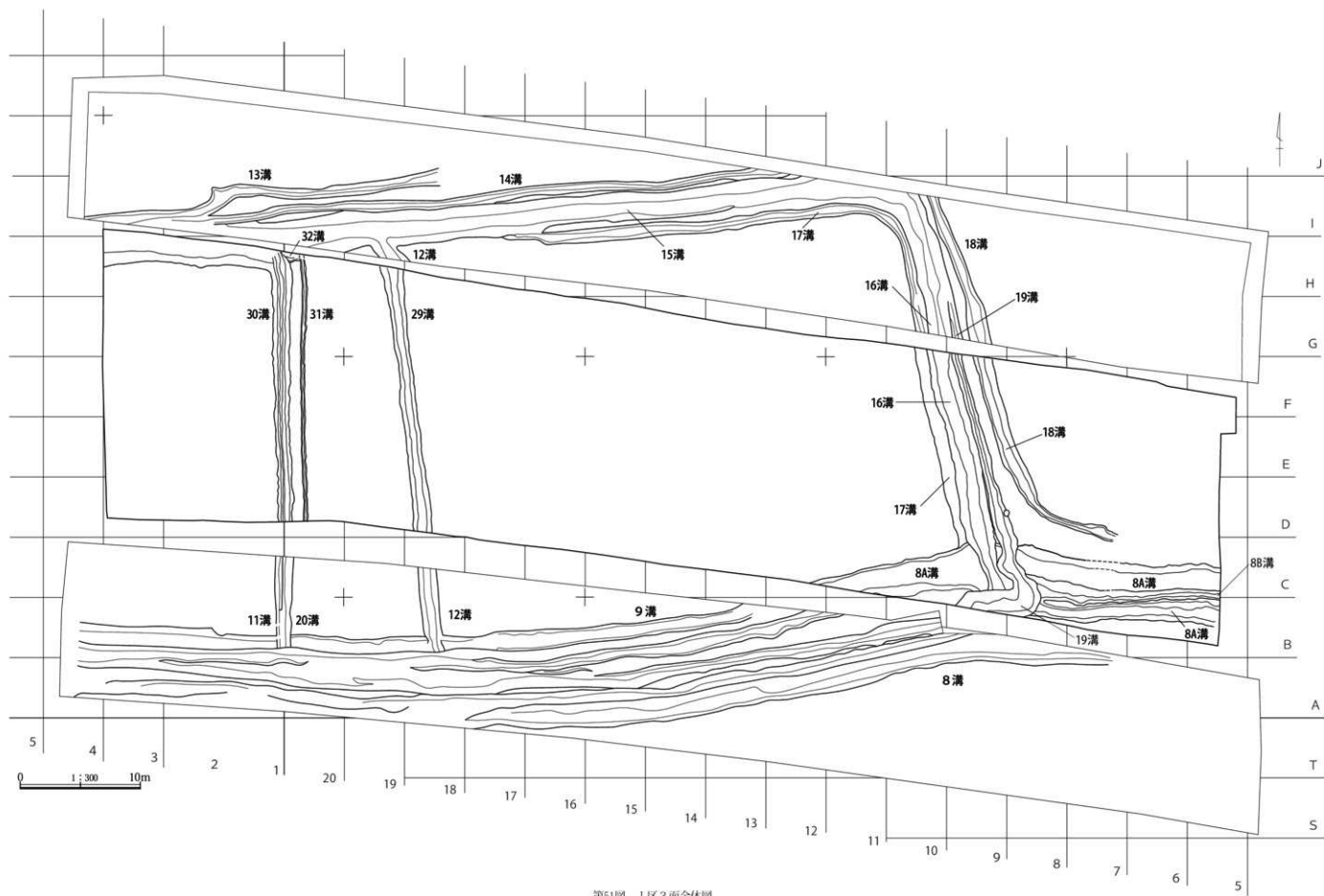
第488图 IV区 3面全体图



第49图 Ⅲ区3面全体图



第50图 II区3面全体图

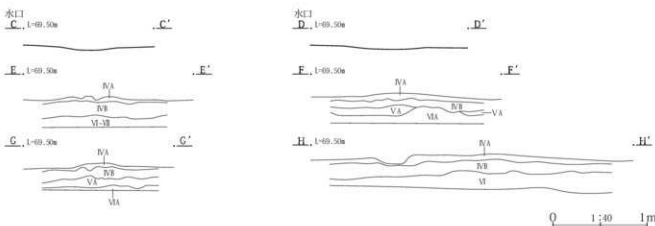


第51图 1区3面全体图

第5項 4面の遺構と遺物

1 概要

4面はAs-B直下面で検出された遺構となるが、I区は基本土層ⅢC上面である。水田が主な遺構であり、I・IV区で検出される。このほかはIV区で落ち込み群と溝1条が検出されている。

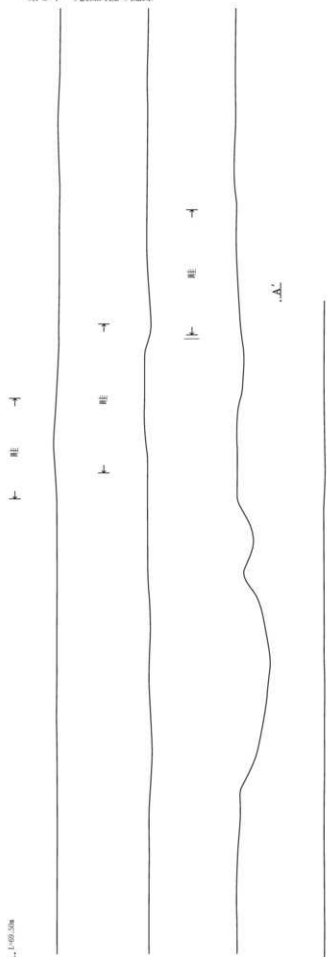


第52図 I区4面水田断面図

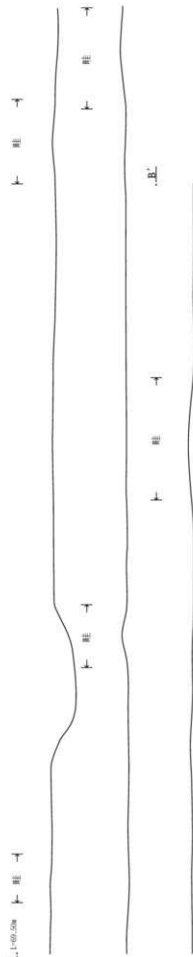
第17表 I区4面水田計測表

No.	形状	規模(m)		水田面標高(m)		畦高(cm)	二次調査		水口	畦の傾き				備考
		長軸	短軸	高位	低位		面積(m ²)	二次面積(m ²)		東	西	南	北	
5		(30.2)	2.3	69.38	69.32	5	(40.1)	(52.0)	—	0°~10°-W	0°-W	—	—	一次調査に繋がらない
12	台形か	(18.1)	10.4	69.34	69.24	5	(72.9)	(131.2)	西畦下方	5°-E	1°-W	51°-E	—	一次調査に繋がらない
16	三角形	17.1	(9.3)	69.24	69.21	5	(37.6)	100.13	東畦中央部	4°-W	36°-W	—	48°-E	一次調査に繋がらない
18	不明	19.7	(3.9)	69.22	69.19	5	(33.06)	(39.06)	西畦中央部	—	4°-W /17°-W	60°-E	(77°-E)	一次調査に繋がらない
21	長方形か	(12.6)	(2.9)	69.22	69.21	5	(9.46)	(22.2)	—	4.5°-W	—	—	81°-E	一次調査に繋がらない
24	台形	12.1	8.0	69.23	69.21	6	(30.6)	83.06	北畦西部	7.5°~ 18.5°-E	4.5°-W	60°-E	81°-E	一次調査に繋がらない
26	台形か	14.4	(5.0)	69.21	69.19	7	(12.9)	—	—	—	18.5°-W~ 7.5°-E	47°-E	68°-E	一次調査に繋がらない
36	平行四辺形	24.9	5.3	69.33	69.28	6	(119.1)	(135.7)	東畦の南寄り	—	—	41.5°-W	9~35°-W	一次調査に繋がらない
38	台形か	(14.3)	(7.4)	69.22	69.17	6	(87.46)	—	—	—	9.5°-W /7.3°-W	—	47°-E	—
39	台形か	(9.8)	8.2	69.22	69.19	6	(76.53)	—	—	7.3~14° W/9.5°-E	3.7°-W	—	60°-E	—
40	一部分の為計測不能	—	—	69.21	69.14	5	(8.26)	—	—	—	2.5°-E	—	60°-E	—
41	三角形	11.05	5.4	69.25	69.23	4	(29.26)	—	—	36°-W	5°-W	68°-E	—	—
42	長方形か	(11.5)	9.3	69.23	69.21	5	(96.8)	—	—	17~23°-W	5°-W	—	68°-E	—
43	平行四辺形	10.0	5.6	69.27	69.24	5	53.86	—	西畦の北端部	5°-W	10°-W	52.5°-E	51°-E	—
44	台形か	(9.15)	8.9	69.26	69.22	5	(51.4)	—	—	5°-W	0°-E	—	52.5°-E	—
45	三角形	(17.1)	5.4	69.31	69.28	5	(43.6)	—	—	—	1°-W	35°-W	—	—
46	平行四辺形か	(26.6)	5.4	69.32	69.24	5	(92.6)	—	—	—	—	35°-W	41.5°-W	—
47	三角形か	(18.9)	8.1	69.34	69.37	5	(94.2)	—	—	—	—	82.5°-W	35°-W	—
48	一部分の為計測不能	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
49	一部分の為計測不能	—	—	69.42	69.38	2	(18.4)	—	—	0°-E	—	—	—	—
50	一部分の為計測不能	—	—	69.42	—	2	—	—	—	1.5°-W	—	—	—	—
51	一部分の為計測不能	—	—	69.41	—	3	—	—	—	1.5°-E	—	—	—	—
52	一部分の為計測不能	—	—	69.44	—	0	—	—	—	1.5°-E	—	—	—	—

△. 1:40.5m



△. 1:40.5m



0 1:40 1m

第53図 1区4面水田エレベーション

(1) I区

I区4面水田(第53・58図、PL.23・24)

基本土層ⅢC上面で水田を検出した。範囲は調査区のほぼ全域にわたる。西壁から10～20mの間では畦が検出されないが、大畦など境界となる部分とも考えられる。今回調査された水田区画は23面で、1次調査からの通番により新たに38～52区画を付番した。区画は上面の溝等で壊されており、全体を露呈できたものは少ない。詳細な規模は第17表のとおり。畦の走向は南北軸がほぼ安定しており、N-0～5°-Wである。12・45区画間の畦を境に、東西で区画形態が異なる。東側は東西軸の畦が北東-南西方向で走向する。区画規模は比較的小さく、台形や三角形の区画が目立つ。西側は東西軸の畦が北西-南東方向に走向し、細長く区画規模も大きい。36・43区画の間には、12区画から南へ延びる細長い区画があり、東西から水が集まり南へ流す区画となっている。西端の5区画は細長い区画である。中程で西から畦が延びるが水口によりつながる。すぐ東側の畦は幅広く中畦である。水口は確認できない。5区画は水を南へ流すとともに、水温を温める機能を持つと言える。3面30号溝に重複して本来用水路が存在した可能性も想定できる。層位的に4面となるが、水田形態から見ても5面水田に近く、下層の厚さが薄いことによって生じた疑似畦畔Aとも考えられる。畦を断ち割ったF断面では疑似畦畔が確認でき、この畦畔が本来の水田遺構を示している可能性もある。

(2) IV区

IV区4面水田(第56図、PL.24)

調査区の西端部にAs-Bの一次堆積があり、直下で南北に延びる畦状の高まり1条と分岐する1条を検出した。南北軸の高まりは、南北両側ともに調査区域外に延び、1次調査で延長部が検出されている。走向方位はN-0～2°-E。規模は長さ26.4m幅10～76cm高さ最大10cmで、1次調査も含めると長さ約57mである。上面には不定円形の小穴が顕著に見られ、モグラなどの小動物による攪乱である可能性が高い。耕作土は黒みの強いIVAである。遺物は土師器中型品1片が出土している。

3 落ち込み

IV区落ち込み群(第54・56図)

位置 81I-1～5グリッド。浅間B軽石直下で断続的に2か所にまとまって2か所検出される。平面形は不定形。断面形は皿状で底面は凸凹する。全体として走向方位はN-84～86°-Wをとって並ぶ。全長は21.20mである。個別の規模は、最大で径1.84m深さ12cmである。性格不明の遺構である。周辺で土地改良時の重機による踏み込み攪乱が顕著に見られるため、可能性は否定できない。As-B直下のため、検出面は天仁元年(1108)となる。

4 溝

IV区4面48号溝(第55図、PL.24)

位置 71I・J-13～15グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査17号溝と同一の可能性がある。47号溝より前出で南端は重複により消滅する。平面形は緩く湾曲する。走向方位はN-68°-W～N-34°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質な灰褐色土で自然埋没か。規模は長さ12.26m上端幅56～95cm下端幅16～42cm深さ14cmである。浅間B軽石を含まない。埋没土から須恵器小型品1片が出土する。埋没土・層位から平安時代に比定される。

第3章 発掘調査の記録

A, 1/70.50m

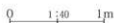


A'

B, 1/70.50m



B'



第54図 IV区4面落ち込み群エレベーション

A, 1/70.50m

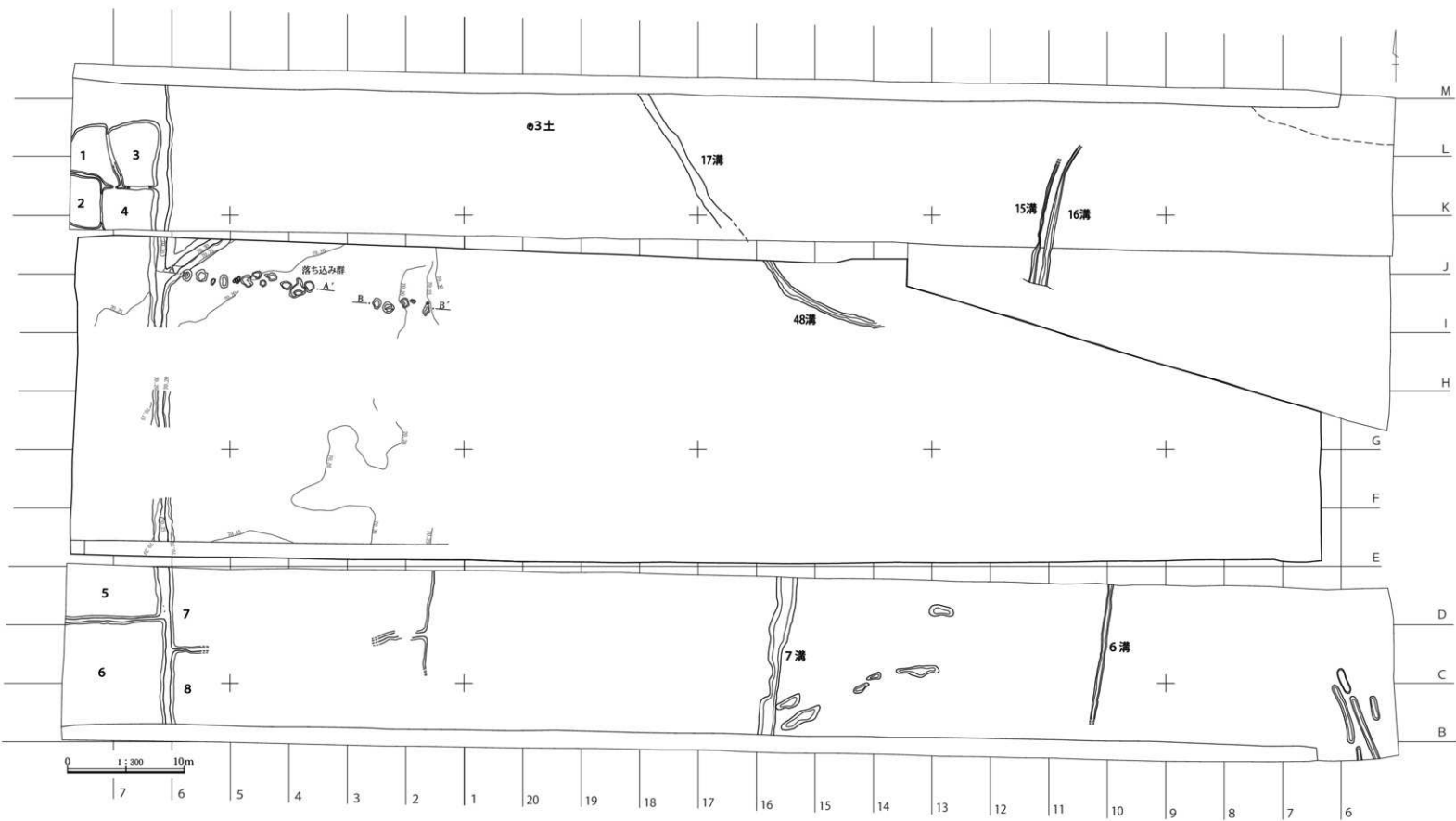


A'

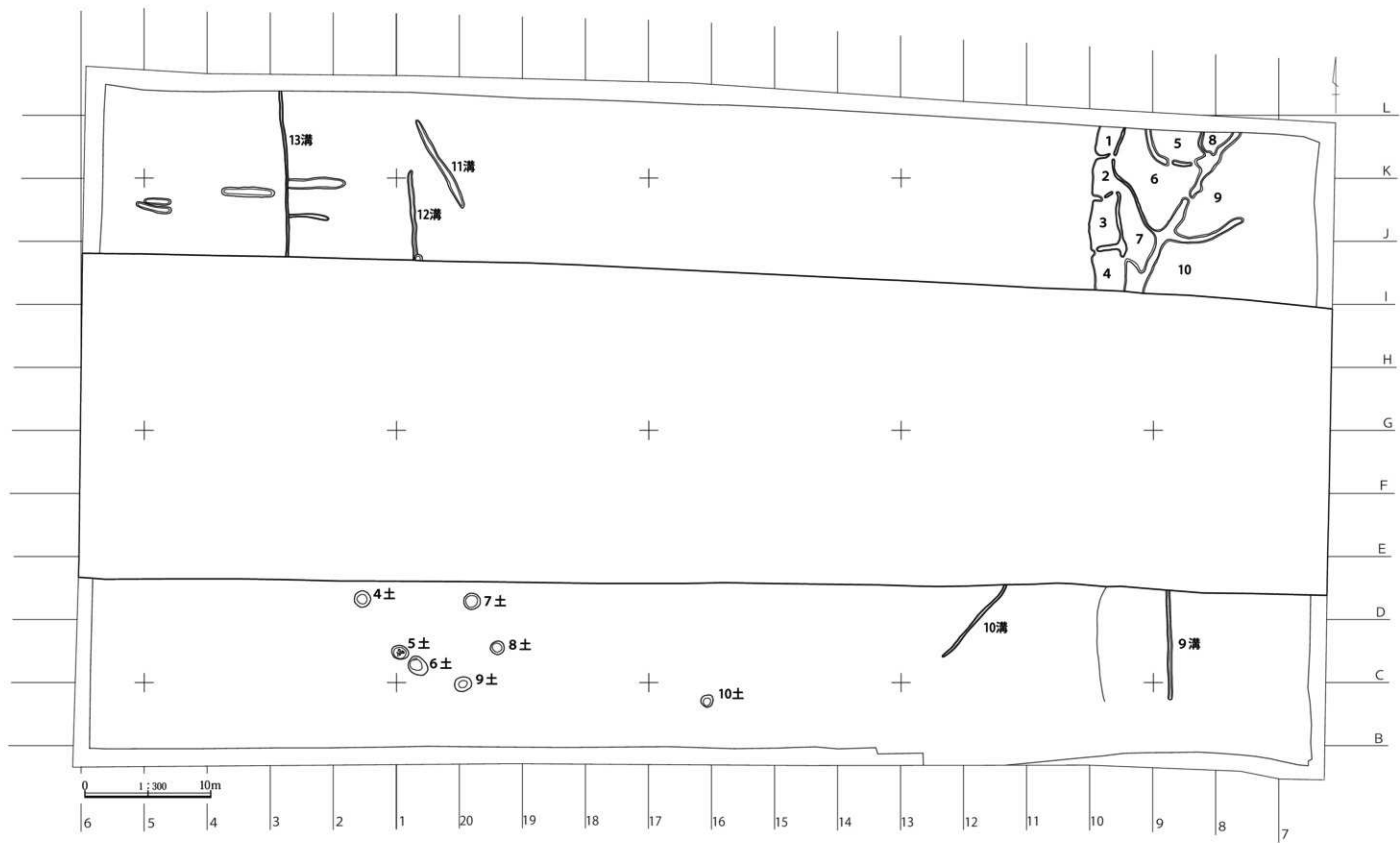
- 1 灰褐色土 浅間B軽石20%含む。
- 2 灰褐色土



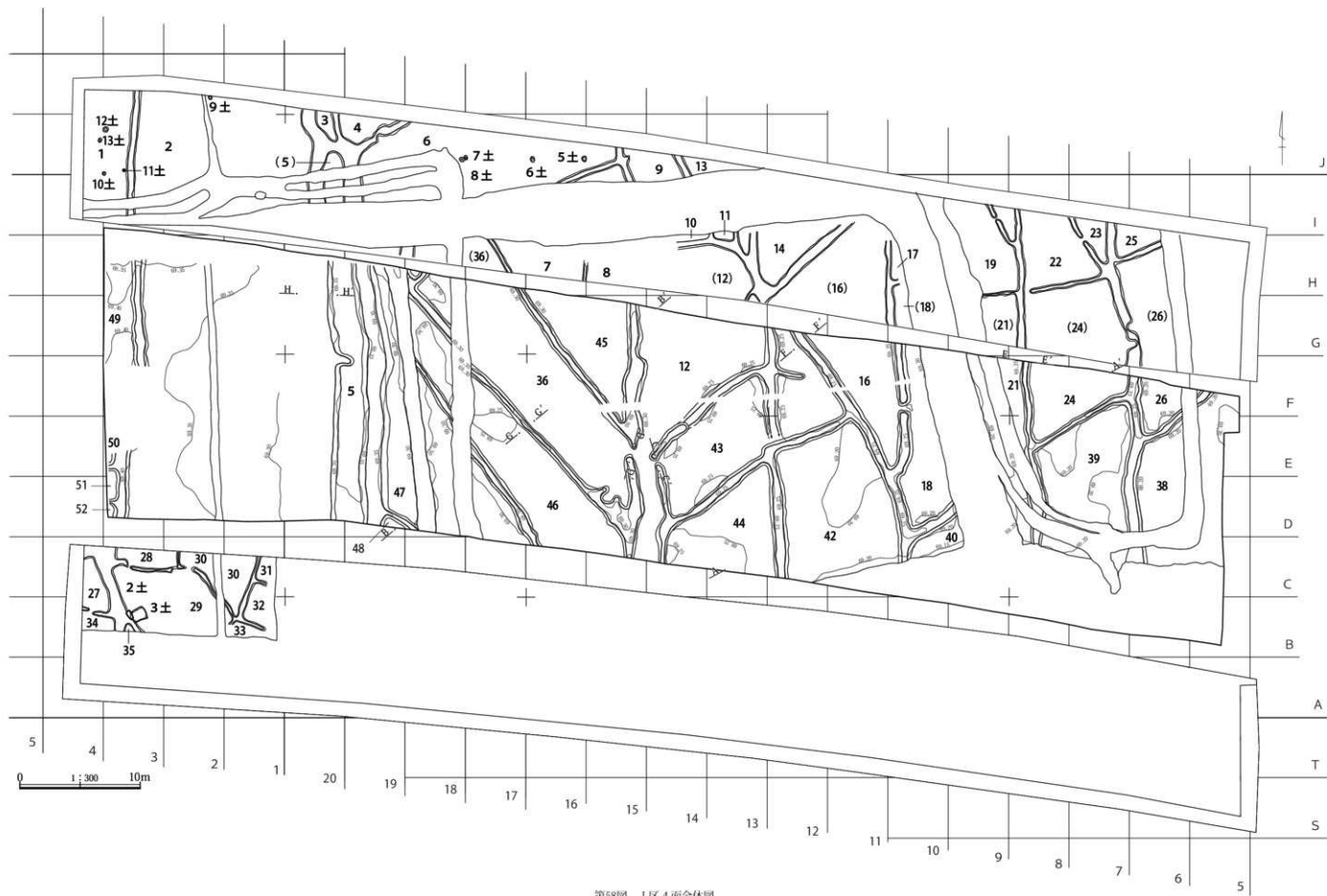
第55図 IV区4面48号溝



第568图 IV区4面全体图



第57图 II区4面全体图



第58图 1区4面全体图

積し、水田が検出された。畦は潰れて状況は異なる。Ⅲ区も調査面積は狭いが、良好な直下水田である。Ⅱ区はⅣB下面となるが、比較的直下に近い状況であった。

第6項 5面の遺構と遺物

1 概要

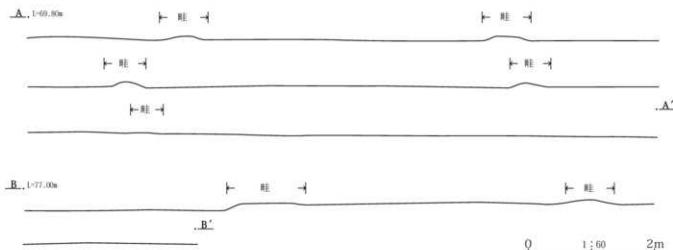
5面は基本土層VA上面で確認できる遺構である。ほとんどは水田で、Ⅳ区ではその水路である溝1条がある。水田はⅣC（洪水層）直下が標準的で、1次調査Ⅲ区南側が最も良好な遺存状態であった。Ⅳ区東側でもⅣCが堆

2 水田

(1) Ⅱ区

Ⅱ区5面水田(第59・69図、PL.25、第18表)

基本土層ⅣBの下面で水田を検出した。範囲は調査区のほぼ全域にわたる。一部に洪水砂も見られ、ⅣC下面



第59図 Ⅱ区5面水田エレベーション

第18表 Ⅱ区5面水田計測表

No.	形状	規模(m)		水田面標高(m)		畦高 (cm)	二次 調査 面積 (m ²)	一次・ 二次 面積 (m ²)	水口	畦の傾き				備考
		長軸	短軸	高位	低位					東	西	南	北	
101	台形か	(11.8)	(8.4)	69.62	69.52	3	32.11	53.21	—	3.5°~12.5°-W	—	71°-E	69°-E	
102	台形か	10.5	8.0	69.54	69.47	7	44.8	56.34	—	13°-23°-E	3.5°~12.5°-W	74°-E	69°-E	
104	台形か	14.0	9.0	69.58	69.52	5	87.2	104.15	—	4°-E	23°-W	54°-E	61°-E	
111	平行四辺形か	(21.3)	4.5	69.42	69.38	11	84.33	85.54	—	—	2°-W	31°-E	35°-E	
112	平行四辺形か	(32.4)	7.0	69.42	69.32	8	123.6	147.29	—	—	7°-W	39°-E	31°-E	
113	平行四辺形か	(29.7)	4.7	69.39	69.32	10	60.0	120.43	—	—	40°-W	—	41°-E	39°-E
115	—	—	—	69.60	69.57	(1)	—	—	—	—	39°-49°-W	—	—	畦一部分のみ。計測不能
119	長方形か	(9.5)	(5.9)	69.29	69.25	4	36.8	—	—	—	45.5°-W	—	37°-E	
120	—	(6.4)	2.9	69.32	69.29	5	15.46	—	—	—	—	37°-E	31°-E	
121	平行四辺形か	(5.5)	1.7	69.32	69.29	4	13.83	—	—	—	45.5°-W	56.5°-W	—	40°-W / 40°-E 北側畦が湾曲している
122	長方形か	(10.0)	(8.2)	69.39	69.31	5	49.86	—	—	—	56.5°-W	—	—	41°-E
123	平行四辺形か	(16.7)	4.9	69.43	69.36	11	60.0	—	—	—	2°-W	35°-E	36°-E	—
124	平行四辺形か	(5.7)	(3.1)	69.46	69.41	7	60.6	—	—	—	21.5°-W	—	35°-E	—
125	—	(10.7)	(10.3)	69.53	69.41	6	12.4	—	—	—	7.5°-W/16°-E	—	—	50°-E
126	—	(7.3)	(4.4)	69.47	69.33	8	106.5	—	—	—	—	30°-W	50°-E	24°-E
127	—	(4.5)	1.25	69.53	69.44	10	23.93	—	—	—	7.5°-W/16°-E	4°-E	—	30°-E
128	—	(15.9)	4.9	69.55	69.37	8	6.05	—	—	—	24°-E	13°-W	61°-E	67°-E
129	—	(12.8)	4.9	69.52	69.43	8	64.2	—	—	—	—	36°-W	67°-E	64°-E
130	—	(5.4)	5.0	69.51	69.50	3	—	—	—	—	36.5°-W	6.5°-W	69°-E	—
131	—	(11.4)	(5.9)	69.56	69.49	2	—	—	—	—	6.5°-W	—	69°-E	—
132	—	(12.6)	(3.3)	69.58	69.53	1	62.66	—	—	—	—	—	—	40°-E
133	—	(12.1)	4.47	69.59	69.54	6	33.23	—	—	—	—	3°-W	64°-E	40°-E
134	—	(7.15)	7.45	69.66	69.52	4	37.3	—	—	—	3°-W/39°-E	27°-W	—	—
135	—	—	—	69.64	69.54	3	58.7	—	—	—	—	27°-W	—	—

水田に相当すると判断した。ただし、直下ではないため、削平を受けている。畦は北側調査区域外に伸びるが、北側1次調査では延長部は検出されておらず、削平などにより消滅する。今回調査された水田区画は19面で、1次調査からの通番により新たに119～135区画を付番した。区画は上面の溝等で壊されており、全体を露呈できたものはない。区画の走向方位は、南北14ラインを境に東西で若干変化があり、123・124区画の西側の幅4m程の高まりは大畦である可能性が高い。西側に水路があった痕跡は見つかっていない。大畦状の高まりの東側はほぼ平坦で傾斜がほとんどない。長軸を北東-南西方向にとる。1次調査とあわせて区画全体が判明した113区画の規模は、長軸29.7m短軸4.7m面積120.43㎡である。水口は確認できない。東端の119・122区画はやや短軸が長くなり始める。大畦状の高まりの西側は東側に比べて長軸が短い。基本的には長軸を北東-南西方向にとるものが多い。南側1次調査では103・106・117区画と110区画の間に東西軸の中畦があり、北側の区画は南辺をそろえて台

形状になる。地形は緩やかに南東へ傾斜する。詳細な規模は第18表のとおり。遺物は土師器小型品7片、同大型品1片、同不明品5片、中世国産焼締陶器1片(混入)が出土している。

II区5面水田下位の疑似畦畔(第60図、PL.25)

位置 61H・I-1・2グリッド。5面水田の133・134区画間の畦の下位で、ほぼ並走する畦状の高まりを検出した。状況から5面水田下位に形成された疑似畦畔と判断され、水田調査の比較資料として有効な遺構である。畦の走向方位はN-3°-Wで、規模は長軸長5.48m幅102cm高さ8cmである。

(2) III区

III区5面水田(第61・68図、PL.25・26、第19表)

基本土層IVBの下面で水田を検出した。範囲は調査区のほぼ全域にわたる。一部に洪水砂も見られ、IVC下面水田に相当すると判断した。ただし、直下ではないため、削平を受けている。南北両側ともに調査区域外に伸び、1次調査で延長部が検出されている。今回調査された水田区画は5面で、1次調査からの通番により142～146区画を付番した。区画は上面の溝等で壊されており、全体を露呈できたものはない。区画形態などは不明である。北端で畦に並行して走向する溝を、断続的に10条検出した。平面観察ではIVBとVAが混在しており、上層からの攪拌である。形態から犁などによる耕作痕の可能性が高い。南の区画では牛蹄跡も多数確認できる。詳細な規模は第19表のとおり。

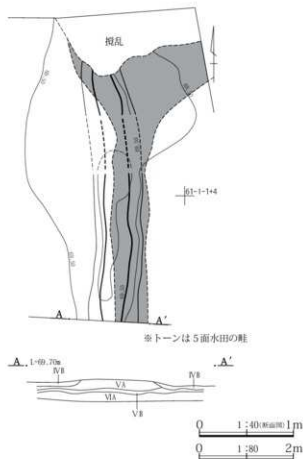
溝状の耕作痕の調査例として、1次調査III区5面水田115区画の耕作痕(第62図)を補足資料として示す。位置は71C-1グリッドである。7条がほぼ並行して走向する。走向方位はN-50°-60°-Eで、緩く湾曲している。最大規模は長さ2m幅15cmで、間隔は35cm前後が多い。各溝は浅いがU字形をしており、灰-黄色砂で埋まる。III区南東部では基本土層IVCが広く堆積することから、本遺構も元来IVC直下であった可能性もある。

(3) IV区

IV区5面水田・牛蹄跡・耕作痕

(第63・64・67図、PL.26～28、第20表)

5面水田 基本土層IVC(洪水層)の下面で水田を検出し



第60図 II区5面水田下位の疑似畦畔

た。IVCは南端の81区E-4ライン交点付近から南東方向に堆積が確認でき、全体として矛盾しないため、調査区全域をIVC直下の水田と見なすことができる。今回調査された水田区画は22面で、1次調査からの通番により147～158区画を付番した。区画が大きい関係もあり、区画全体を露呈できたものはない。特徴として南北軸の畦5条が、1次調査も通じて、約22m間隔(約12間)で並び、条里水田と考えられる。同時期の用水路として5面20号溝がある。この溝を境として北側区画の長軸は、

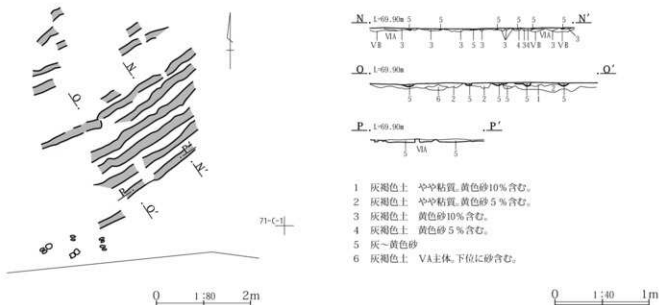
溝と並行する北西-南東方向を採る。溝の南側区画の長軸は、北東-南西方向を採るため、溝とほぼ直交方向に東西軸の畦を設ける。地形および畦の走向から、溝は北側区画に対して排水路、南側区画に対して取水路であったとみられる。水口は少なく、151区画の西畦の中央1か所のみで、東側に浅い溝も認められる。1次調査でも水口は少なく、北側では107区画の南西隅、116区画の南東隅、139区画南畦中央、141区画南畦中央西寄りの計4か所、南側では126区画南畦に2か所、127区画の南畦に

第19表 Ⅲ区5面水田計測表

No.	形状	規模(m)		水田面標高(m)		畦高(cm)	二次調査 面積(m ²)	水口	畦の向き			
		長軸	短軸	高位	低位				東	西	南	北
142	—	(4.10)	(1.95)	69.68	69.64	7	(6.030)	—	—	20°-E	—	78°-W
143	—	(6.80)	(4.20)	69.70	69.68	5	(22.73)	西畔の北側	—	10°-W	—	78°-W
144	—	(9.6)	(2.4)	69.69	69.64	5	(17.8)	東畔の北側	10°-W /20°-E	—	—	—
145	—	—	—	69.67	69.63	7	—	—	—	—	—	77°-W /83°-E
146	—	—	—	69.64	69.56	8	—	—	—	—	—	77°-W /83°-E



第61図 Ⅲ区5面水田畦エレベーション



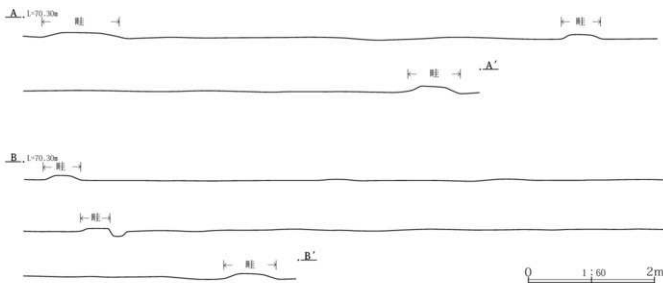
第62図 1次調査Ⅲ区5面水田15区画耕作痕

第3章 発掘調査の記録

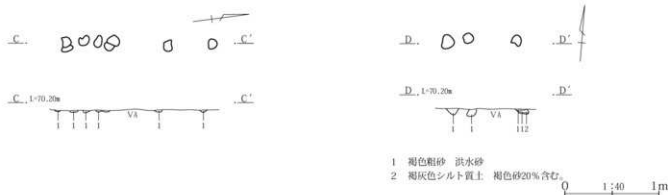
2か所、東隣129区画の南西隅近くに1か所の計5か所が確認できる。西端南北軸の畦西側で、下面の6面から並行する24号溝が検出されている。畦に伴う掘削痕跡である可能性が高い。区画の規模は、西半部が極端に大きく、1次調査も含めて、110区画の規模が長軸24.0m短軸21.9m面積493.20㎡である。西隣の108区画も大きく、長軸34.0m短軸20.9m面積536.83㎡である。水田区画として大きすぎ、形態として完成形であるのか疑問が残る。畦の残存高も、直下の水田としては低く潰れている。詳細な規模は第20表のとおり。

牛蹄跡・耕作痕 分布には粗密があり、基本土層IVCが堆積しなくなる108区画から西側で消滅する。この部分は削平により消滅したとみられる。110区画が少ないのも同様である。比較的密集する126・149区画でも区画内

で一様でなく、帯状に粗密が認められる。調査所見では、蹄痕は畦の走向とほぼ並行とする。一部断ち割り調査を行ったところ、確認面から最大で約7cm踏み込んでおり、歩行当時めかんでいたことがわかる。埋没土は褐色砂であり、洪水直下である。ただし、一部は基本土層IVBから踏み込むものもあり、本遺構は数時期に形成されたものが混在する。畦を踏みつけるものは少ない。意識的に避けさせたものか、畦の上部が欠損したことによるのか、判別できない。153・147区画では耕作痕が検出された。153区画では断続的に東西方向に8条程度が走向する。形態から犁などの掘削痕が通過痕と考えられる。埋没土は褐色砂である。牛蹄跡と混在するものはなく、掘削痕により消去された結果と考えて良い。



第63図 IV区5面水田エレベーション



第64図 IV区5面水田面牛蹄跡

第20表 IV区5面水田計測表

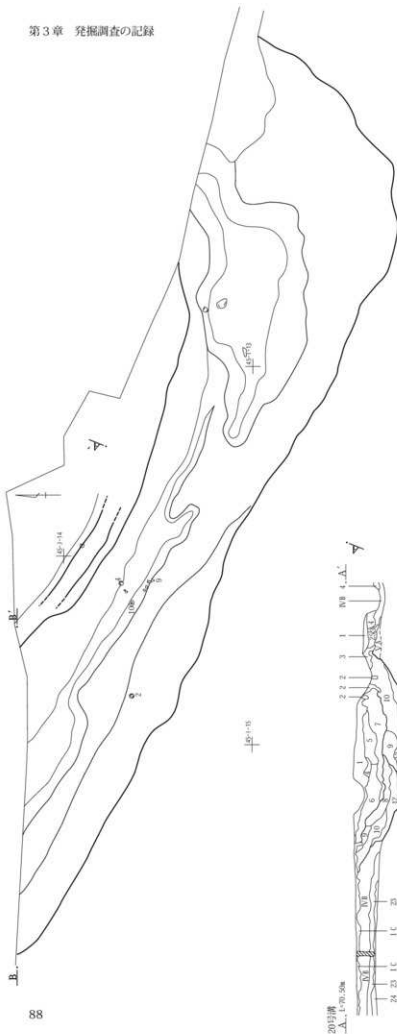
No.	形状	規模(m)		水田面標高(m)		畦高 (cm)	二次調査 面積 (m ²)	一次・二次 面積 (m ²)	水口	畦の傾き				備考
		長軸	短軸	高位	低位					東	西	南	北	
102	平行四辺形	(7.40)	(5.10)	70.01	69.90	7	—	—	—	2°-W	—	62°-E	—	一次調査に繋がらぬ
106	台形	(12.20)	(10.50)	69.99	69.90	10	17.86	77.82	—	14°-W 55°-W	2°-W	56.5°-E	46°-E	一次調査に繋がらぬ
108	台形	34.00	20.90	70.04	69.94	11	487.94	536.83	北東部 (一次調査)	3°-13°-W	4°-E	90°-E	56.5°-E	一次調査に繋がらぬ
110	—	24.00	21.90	70.07	69.93	11	322.60	493.20	—	5°-10°-W	3°-W	71°-E	47°-E	一次調査に繋がらぬ
112	台形	15.30	7.40	70.01	69.93	5	54.80	71.96	—	64°-E	5°-W	73°-E/82°-W	—	一次調査に繋がらぬ
125	台形	21.40	15.70	70.03	69.89	6	6.00	328.00	—	0°-E	4°-E	—	—	—
126	台形	21.90	18.60	70.07	69.98	11	196.80	313.53	南側東寄り (一次調査)	1°-W	4°-E	90°-E	71°-E	—
129	台形	(21.70)	16.10	70.07	69.97	10	76.60	234.60	西側東寄り (一次調査)	27°-W	1°-W	49°-E	71°-E	—
131	—	22.70	12.50	70.01	69.87	10	44.80	190.26	—	14°-E	7°-E	—	63°-W	—
134	平行四辺形か	14.50	5.70	70.08	69.80	13	16.00	77.83	—	8°-W	3°-W	52°-W	50°-W	—
147	平行四辺形か	(12.00)	(4.90)	70.01	69.97	3	63.93	—	—	—	4°-W	50°-W	—	—
148	台形か	(11.80)	(5.20)	69.99	69.92	14	49.13	—	—	4°-W	35°-E	63°-W	—	—
149	台形か	(16.40)	9.70	70.01	69.94	16	110.50	—	—	3°-W	41.5°-W	49°-W	63°-W	—
150	—	(17.00)	(7.80)	69.99	69.91	13	78.06	—	—	41.5°-69°-E	7°-E 13.5°-E	—	—	—
151	四角形か	(11.70)	9.10	70.02	69.92	7	82.40	—	西側 や北寄り	13.5°-E	23°-W	72°-E	64°-E	—
152	—	(11.80)	12.40	70.04	69.99	9	109.80	—	—	7°-E	27°-W	—	72°-E	—
153	台形	12.60	11.40	70.05	69.97	14	103.03	—	東側中央 北寄り	23°-W	4.5° ~10°-W	71°-E	75°-W	—
154	—	18.70	(5.60)	69.96	69.88	12	65.20	—	—	4°-E	—	90°-W	62°-E	—
155	四角形か	4.16	3.25	69.96	69.93	—	12.16	—	—	10°-E/26°-W	—	67°-E	65°-E	—
156	—	(9.00)	(3.65)	69.93	69.89	7	21.06	—	—	24°-W	—	70°-W	—	—
157	—	—	(2.60)	69.95	69.93	7	1.46	—	—	—	—	—	—	90°-E
158	—	—	—	69.94	69.91	7	7.80	—	—	0°-E	—	—	—	70°-W

3 溝

IV区5面20号溝(第65・66図、PL.28・43、第21表)

位置 71H-J-11~16グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査20号溝と同一となる。南端は1面4号溝と重複により消滅するが、状況から東側調査区域外に延びていたと考えられる。L字形で南端は北へ折れる。走向方位はN-62°-W。断面形は逆台形に近いU字形。底面は凸凹する。流水痕跡を残す。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。埋没土は砂・シルトで水成堆積し自然埋没するが、2度以上掘り直したまたは流失がある。規模は長さ24.76m上端幅274~495cm下端幅24~172cm深さ57cmで、1次調査も含めると長さ40.50mである。当初は5面水田と並存し水路であったとみられ

る。北辺上端には畦が並走する。南辺は当初より溝幅が南側へ広がり、水田を侵食する。当初は北辺同様畦が並走していた可能性が高い。中央底面に完形に近い土師器杯(2)、墨書を持つ須恵器杯(9)・同碗(10)が出土する。掲載遺物のほかに土師器小型品91片、同大型品32片、同不明品7片、須恵器小型品5片が出土している。出土遺物は年代幅があり、9世紀第3四半期から同第4四半期に及ぶため、数回の洪水により、最終的に9世紀第4四半期に埋没したとみられる。完形の土器が混入する要因となる集落は周辺になく、故意に投棄されたか、畦祭祀が周辺にあったことも考慮される。



88

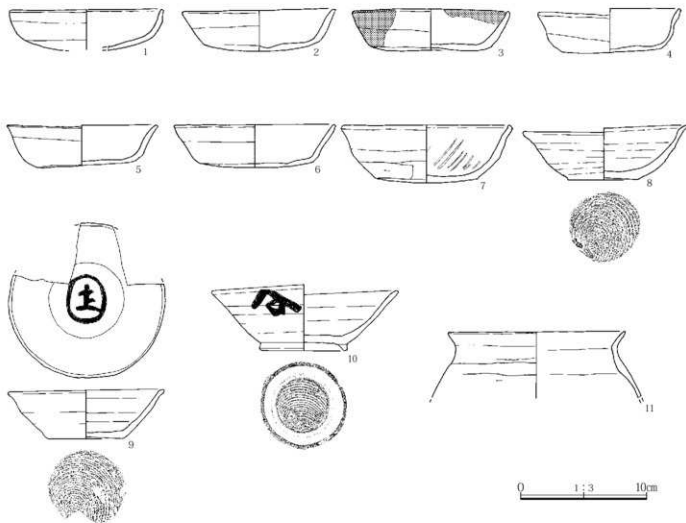
20号溝
A. 1.7m, 5.2m

20号溝
B. 1.7m, 5.2m

1:100 2m

1:100 5m

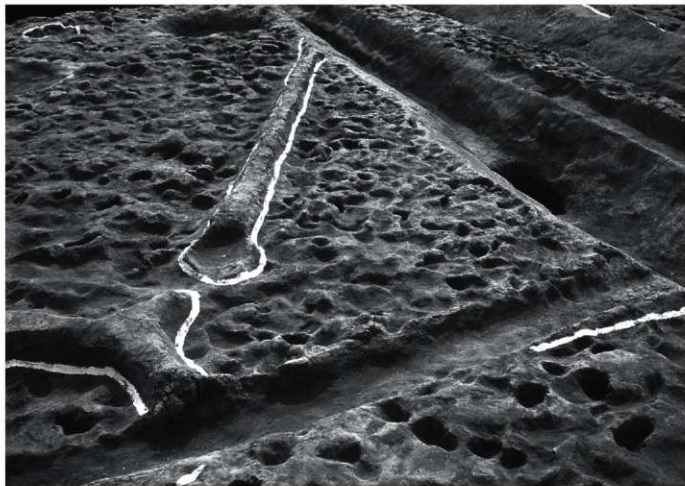
- 1 灰褐色砂質土 粘りか。
- 2 褐色砂質土 植物腐乱カ。
- 3 灰褐色砂質土 灰褐色シルトブロック10%含む。
- 4 灰褐色砂質土 褐色粗砂20%含む。
- 5 灰褐色砂質土 褐色粗砂を層状に40%含む、水成堆積。
- 6 灰褐色砂質土 褐色粗砂を層状に10%含む、水成堆積。
- 7 灰褐色砂質土 褐色粗砂を層状に20%含む、水成堆積。
- 8 明褐色砂質土 粗砂5%含む。
- 9 ない、褐色砂質土。
- 10 明褐色砂質土 褐色粗砂を層状に40%含む、水成堆積。
- 11 明褐色砂質土 褐色粗砂を層状に20%含む、水成堆積。
- 12 灰褐色砂質土 灰褐色シルトを層状に20%含む、水成堆積。
- 13 灰褐色シルト質土
- 14 灰褐色シルト質土 褐色粗砂を層状に20%含む、水成堆積。
- 15 褐色砂質土 褐色シルトを層状に20%含む、水成堆積。
- 16 褐色・黒褐色砂 粗砂20%含む。
- 17 明褐色シルト 褐色粗砂を層状に5%含む、水成堆積。
- 18 明褐色シルト 褐色粗砂を層状に20%含む、水成堆積。
- 19 灰褐色シルト質土 褐色粗砂を層状に20%、粗砂濃10%含む、水成堆積。
- 20 明褐色シルト 褐色粗砂を層状に10%含む、水成堆積。
- 21 褐色砂 灰褐色シルトを層状に20%含む、水成堆積。
- 22 灰褐色シルト
- 23 灰褐色砂質土 褐色粗砂を30%含む。
- 24 灰褐色砂質土 褐色粗砂を40%含む。
- 25 相灰土。VA層に似る層が。



第66図 IV区 5面20号溝出土遺物

第21表 IV区 5面20号溝出土遺物

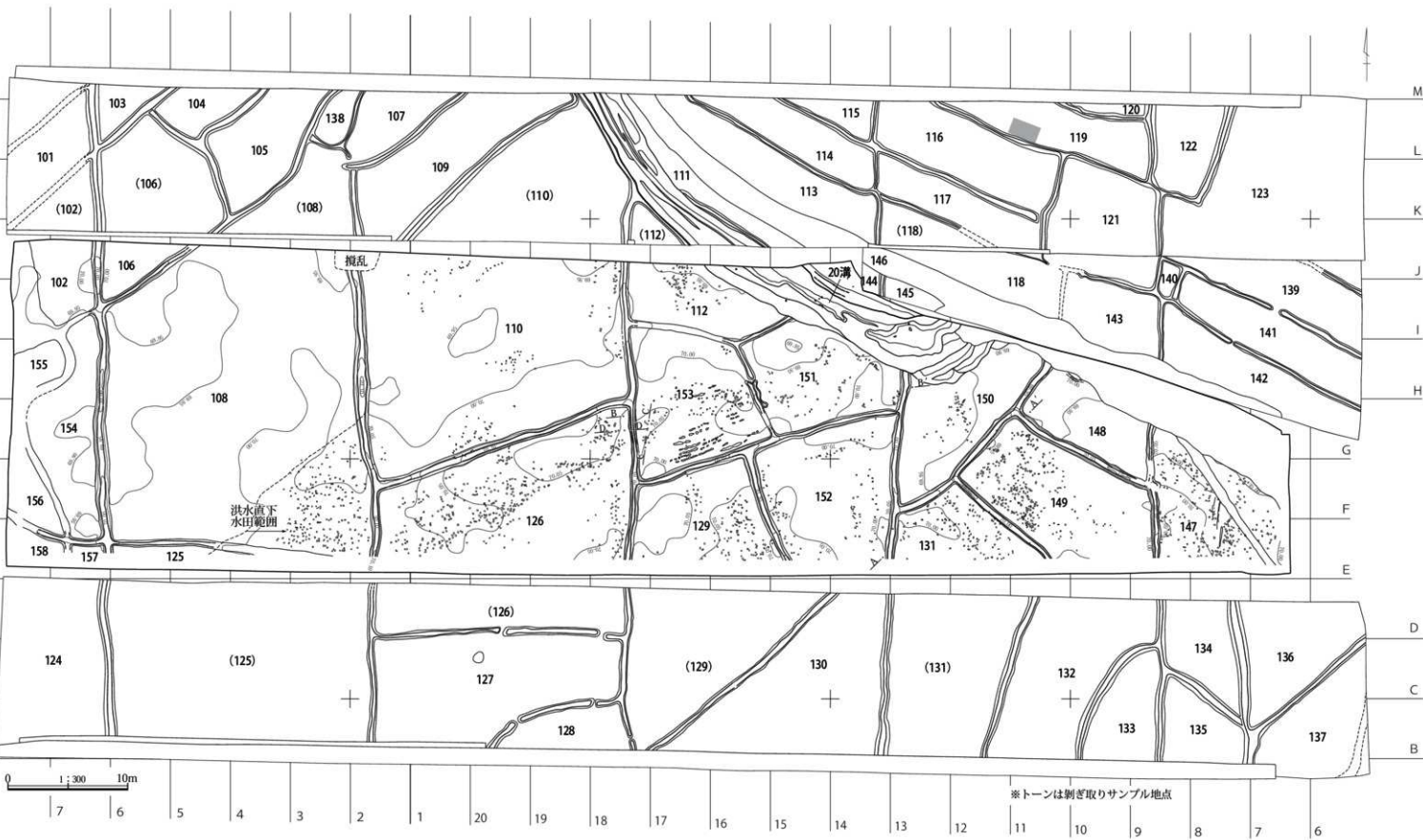
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第66図 PL.43	1	上鉢器 杯	1/3	口 12.0 底 9.6		細砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、型眼を残す。体部内面撫で、底部手持ちへら削り。	
第66図 PL.43	2	上鉢器 杯	口縁部一部欠損	口 12.0 底 9.0	高 3.2	細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	口縁部に赤み
第66図	3	上鉢器 杯	1/3	口 12.1 底 9.5	高 3.2	細砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	内外面に褐色の付着物
第66図 PL.43	4	上鉢器 杯	2/3	口 11.1 底 7.5	高 3.4	細砂粒/良好/にぶい 橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	
第66図	5	上鉢器 杯	完形	口 11.8 底 7.5	高 3.1	細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい 橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	器形に赤み 底部に外側からの 焼成後穿孔
第66図	6	上鉢器 杯	1/2	口 12.6 底 9.0	高 3.4	細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい 橙	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	外面に褐色の付着物
第66図	7	上鉢器 杯	1/4	口 12.6 底 8.0	高 4.5	細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい 橙	口縁部横撫で、体部外面横のへら削り、内面撫で後粗い斜放射状暗文施す。底部手持ちへら削り。	内外面に褐色の付着物
第66図 PL.43	8	須恵器 杯	2/3	口 12.8 底 5.5	高 4.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
第66図 PL.43	9	須恵器 杯	2/3	口 底	高 3.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	見込み部に墨書 文字不明
第66図 PL.43	10	須恵器 椀	完形	口 底	高 5.2	細砂粒・角閃石/ 還元/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
第66図	11	上鉢器 甕	口縁部〜胴部片	口 底	高	細砂粒/良好/にぶい 黄橙	口縁部横撫で、胴部外面横のへら削り、内面撫で。	



1次調査Ⅲ区5面水田127・128区画(北から) 荒起こしが著しい。水口も明瞭である。



1次調査Ⅲ区5面水田面に残る溝状の耕作痕(東から) 褐色砂で埋まる。輪郭は明瞭ではない。

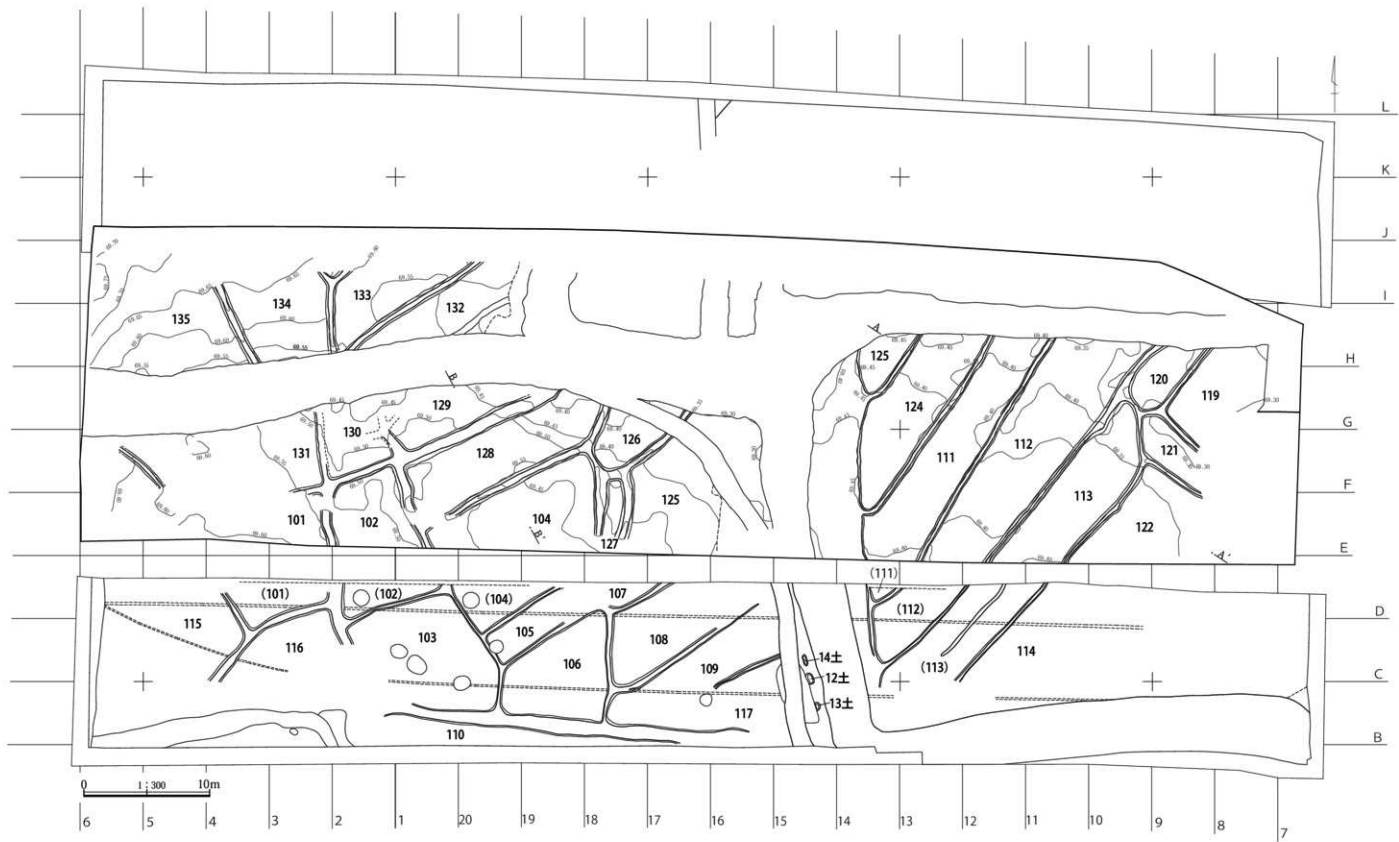


第67図 IV区5面全体図



※トーンは割取取りサンプル地点

第68図 Ⅲ区5面全体図



第698图 Ⅱ区5面全体图

第7項 6面の遺構と遺物

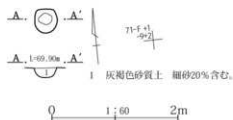
1 概要

6面は基本土層V以下でFAより上層で検出された遺構である。FAがない場合、Ⅷより上位に確認面がある場合となる。実質的な作業として5面水田より古いものが選別された。遺構数は少なく、I区では耕作痕などの一連の遺構、II区は溝1条、IV区はピット1基、溝1条である。

2 ピット

IV区6面5号ピット(第70図、PL.29)

位置 71F-9グリッド。平面形は円形。埋没土は均質な灰褐色砂質土。規模は長径38cm短径36cm深さ17cmである。1基のみ単独であり、埋没土からも柱穴とはみなされない。



第70図 IV区6面5号ピット

3 落ち込み・耕作痕ほか

(1) I区

I区東端の幅約25m範囲で検出された。落ち込み状遺構1基と耕作痕群・溝1条である。形態から遺構名称は異なるが、耕作に伴う同種の遺構と考えられ、同一の項目とした。上層に4面水田があり、関連も想定できるが、一部畦畔と重複する。関連づけは難しいが、検討の余地がある。

I区6面1号落ち込み(第71図、PL.29)

位置 51F・G-1・2グリッド。基本土層VI相当層中で、灰色シルトを埋没土とする方形の落ち込みを検出した。断面形は皿状で、底面は平坦だが、中央部に帯状に掘削具が見られる。埋没土も周辺の耕作痕と同じため、

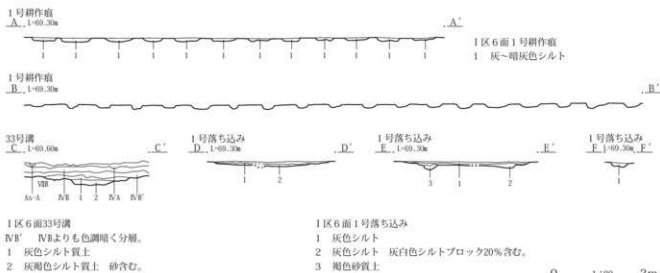
同種の遺構が方形に掘られたと考えられる。規模は長軸2.96m短軸2.0m深さ11cmである。北西・北東側にピットが1基ずつ検出されるが、P1は埋没土が異なるため、前出の遺構となる可能性が高い。ピットの規模はP1:28・24・30cm、P2:23・15・11cm。遺物は埋没土から土師器小型品2片・同不明品3片が出土する。時期は古代に比定される。

備考 調査段階1号堅穴を名称変更。

I区6面1号耕作痕群と6面33号溝(第71図、PL.29・30)

1号耕作痕 位置 41D~H-19・20、51E~H-1~3グリッド。エレベーションラインBを境に東西で形態が異なる。東側は南北軸に6面33号溝が走向し、両側に東西軸の耕作痕が並ぶ。個別の痕跡は不定形で、平面形は溝状と円形が混在するが、残存が悪く元来は溝状であったと推測する。全体として走向方位はN-88°-W。東西幅は約7mで、耕作痕の間隔は15~48cm、深さは2~10cm、最大の溝の規模は長さ170cm幅52cm深さ7cmである。基本土層Ⅷを掘り込む。南側で底面に掘削具痕跡を顕著に残すものが集中する。西側では北寄りに溝状の集まりが2か所見られる。北西側は4条で、走向方位はN-80°-E。東側は5条で、走向方位はN-68°-Wで、両者は重複しないため一連のものと思われる。溝の長さは最大3.82mで、耕作痕の間隔は40~45cm、深さは最大10cmである。1号落ち込み状遺構の周辺にも円形のものがあるが、まとまりが不明である。調査段階の所見は形態から農耕に伴う耕作痕とするが、基本土層Ⅷを掘り込み、重複もないため、開墾など1回性の作業であったと考えられる。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

33号溝 位置 41F~H-19・20グリッド。1号耕作痕の中央に南北に走向する。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-0°。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。東西上端に一致して直交して耕作痕が伸び、本溝を意識して掘削されたものと考えられる。埋没土は灰~灰褐色シルト質土で攪拌が著しい。規模は長さ12.60m上端幅102~185cm下端幅52~160cm深さ13cmである。埋没土から土師器不明品3片が出土する。状況から1号耕作痕と同種の性格を持つ遺構と考える。時期は層位から古代に比定される。



第71図 1区6面1号耕作痕・1号落ち込み・33号溝

4 溝

Ⅱ区で1条、Ⅳ区で1条が検出される。Ⅰ区33号溝は耕作痕に関係するため前項で扱った。Ⅱ区6面17号溝は水成堆積により埋没しており、水路であった可能性が高い。Ⅳ区6面24号溝は南北に走向する浅い溝で、形態から5面水田に関係する可能性が高い。

(1) Ⅱ区

Ⅱ区6面17号溝(第72図、PL.30)

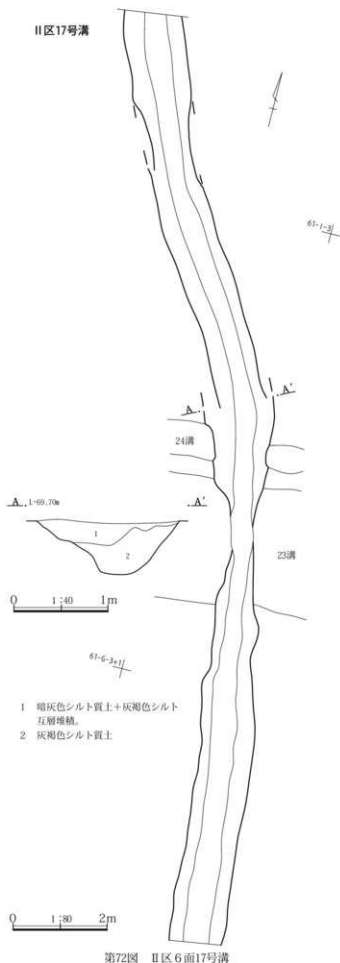
位置 61F～1-2～4グリッド。南北両側ともに調査区域外に延び、北側1次調査17号溝と同一と、南側1次調査16号溝と同一となる。2面23・24号溝より前出。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-10°-W～N-28°-W。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差は11cmで、勾配はほとんどない。埋没土は水成堆積のため自然埋没する。規模は長さ20.08m上端幅80～126cm下端幅32～58cm深さ44cmで、1次調査も含めると長さ49.8mである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

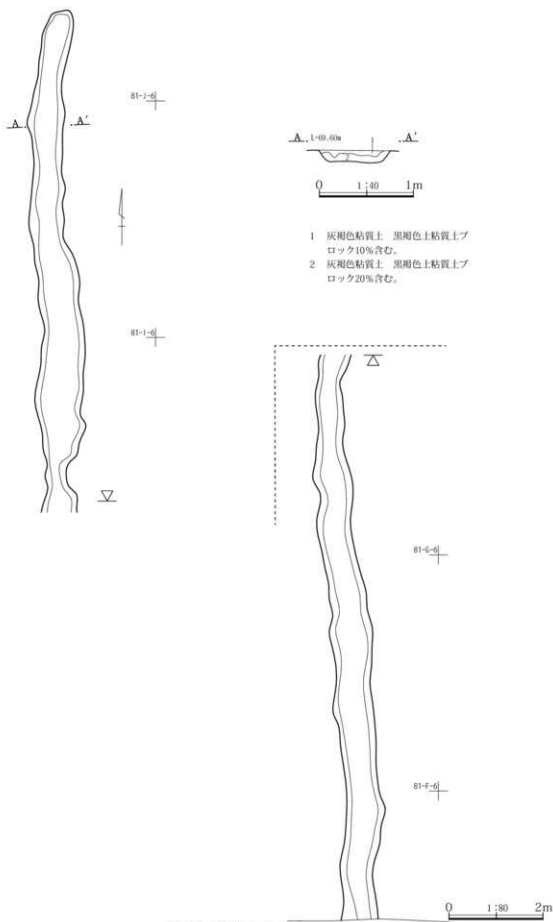
備考 調査段階44号溝を名称変更。

(2) Ⅳ区

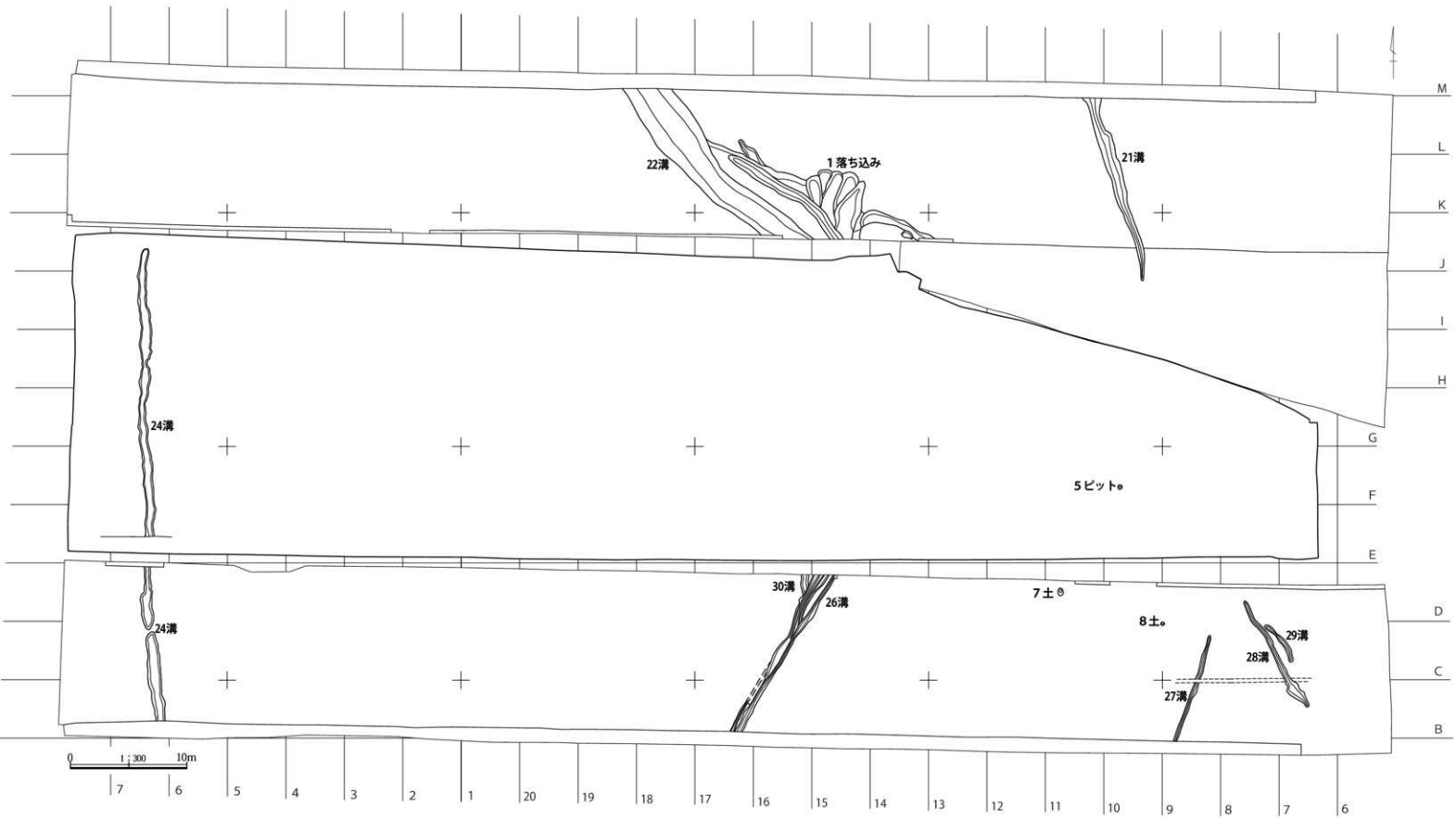
Ⅳ区6面24号溝(第73図、PL.30・31)

位置 81E～J-6グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査24号溝と同一となる。平面形は直線状。走向方位はN-1°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦でやや凸凹する。北端は垂直に立ち上がる。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。埋没土は灰褐色粘質土で水田耕作土に近い。規模は長さ24.80m上端幅20～50cm下端幅14～38cm深さ14cmで、1次調査も含めると長さ40.6mである。5面水田の畦と並行することから、掘削痕跡が下面で捉えられた可能性が高い。遺物は出土していない。

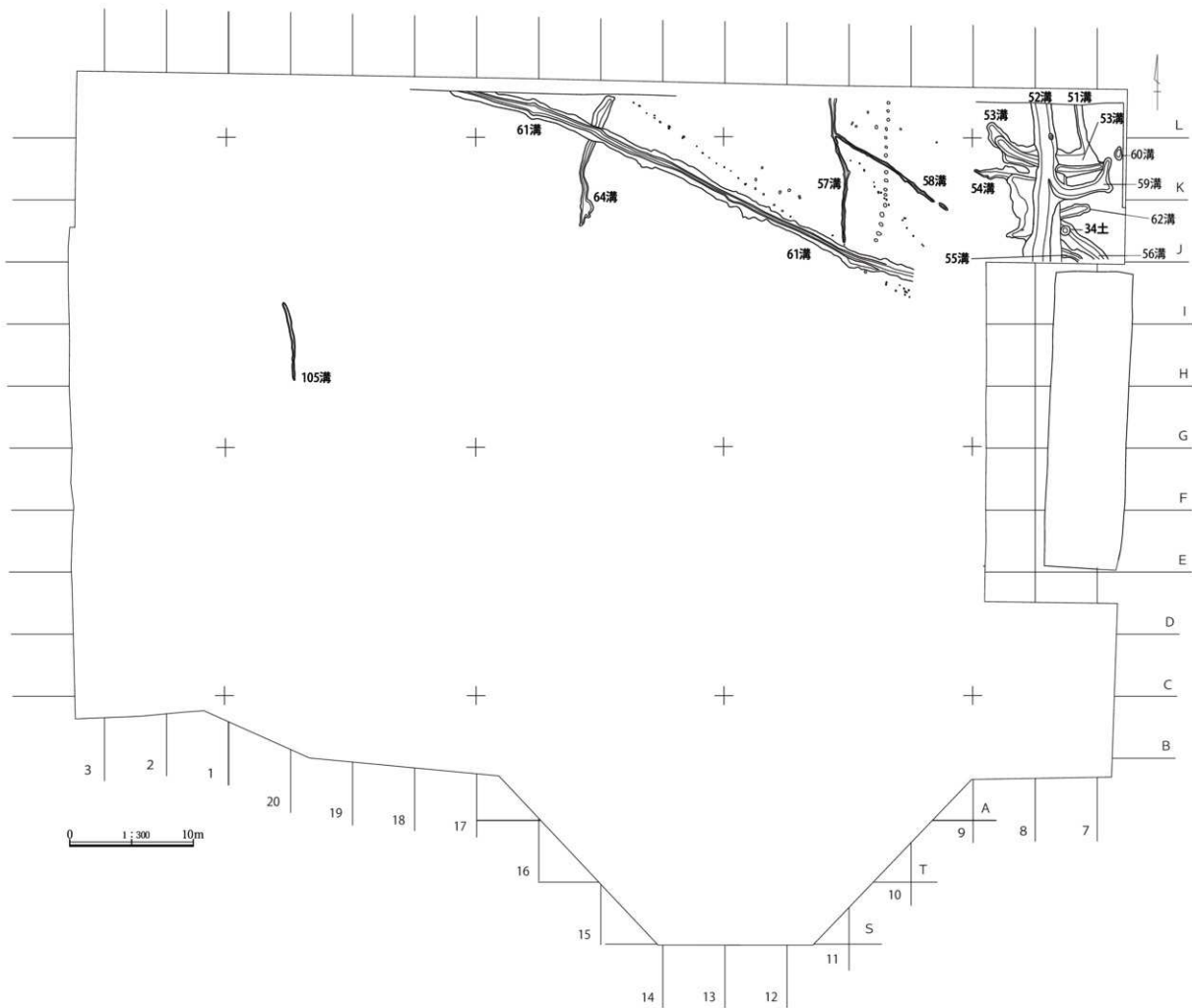




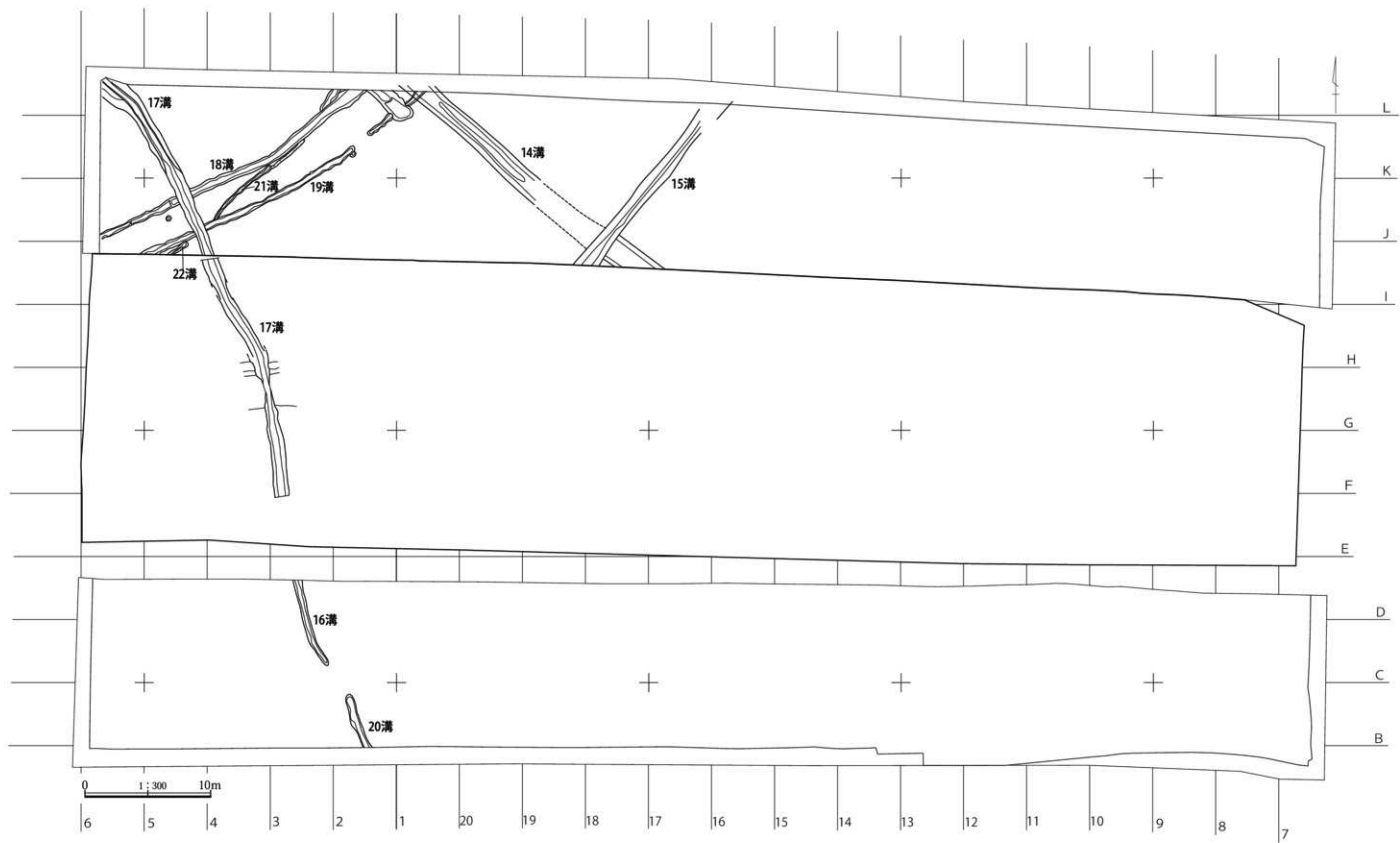
第73図 IV区6面24号溝



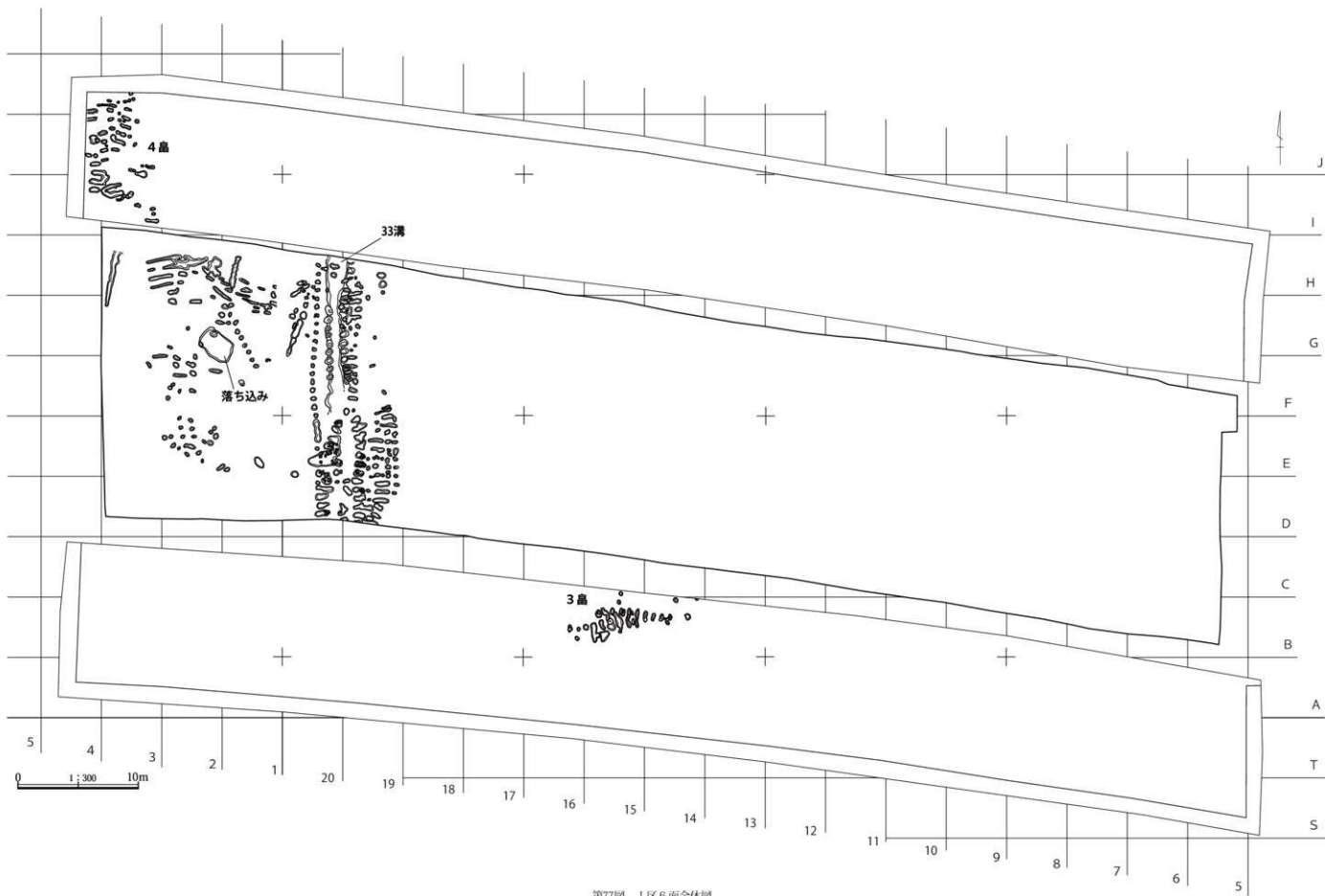
第74図 IV区6面全体図



第75图 Ⅲ区6面全体图



第768图 II区6面全体图



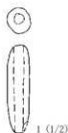
第77图 1区6面全体图

第8項 7面の遺構と遺物

1 概要

7面はIV区のみで遺構が検出された。FA直下面と基本土層VII A段階の水田である。前者は谷地地形に形成された極小区画水田が主体である。Ⅲ区も同様な状況であるが、1次調査が大半であり2次調査では検出されなかった。後者は前者と時期が異なるが、8面で検出された溝群と重複する部分があり、煩雑さを避

け7面で扱う。8面と関連する要素もある。第78図1 (PL.43, 第22表)の土鏝が出土しているが、遺構の帰属は不明である。



第78図 IV区7面出土遺物

2 水田

IV区7面水田(第79図、PL.31～33、第23表)

Ⅱ-FAがわずかに堆積する部分と堆積しない部分を手

がかりに、畦畔を判別した。水田は調査区西端部で検出された。北側は調査区域外に延び、1次調査でも同様な状態で検出されている。区画は傾斜に左右されており、西端の区画は北西軸にタテ畦を設ける。形態として極小区画水田とみなされる。下層の9面では、ほぼ重なる範囲で旧河道が検出されており、耕作時門んでいて谷地水田であった可能性が高い。詳細な規模は第23表のとおり。

3 疑似畦畔

IV区C混土疑似畦畔(第79図、PL.31～33、第24表)

基本土層ⅥAを薄く掘り下げ、同ⅥB上面で畦の基部が検出されたものである。耕作土は浅間C軽石を含むため、「C混土水田」とも呼ばれる。1次調査北側の西端部でも検出されている。南北軸を探る区画と、北東軸を探る区画で東西に分かれる。9面で旧河道が確認できておらず、谷水田と見なし難い。8面で検出された溝群と一致する部分があり、用水路である可能性もうかがえる。検出範囲も狭く、検証は困難である。耕作土は浅間C軽石を含むため、古墳時代中期頃に比定される。

第22表 IV区7面出土遺物

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 現存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第79図 PL.43	1	土製品 土鏝	一部欠損	長幅 4.7 重 5.9 孔 0.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい槽	器面撫で。管状のものに巻き付けて整形か。	器面厚減

第23表 IV区7面水田計測表(1～66)

No.	形状	規模(m)		水田面積高(m)		畦高 (cm)	二次調査 面積 (㎡)	畦の向き			備考	
		長軸	短軸	高位	低位			東	西	南		北
1	—	—	—	69.63	—	1	(1,242)	—	36°-W	48.5°-E	—	
2	隅丸台形	2.23	1.66	69.66	—	1	3,104	23°-47°-W	44°-W	60°-E	48.5°-E	
3	長方形	2.20	1.73	69.69	—	0	3,274	22°-W	30°-40°-W	60°-E	60°-E	
4	長方形	1.40	1.37	69.70	—	0	1,248	22°-W	38°-W	56°-E	60°-E	
5	—	—	—	69.69	—	0	—	—	34°-W	—	56°-E	形状不明瞭
6	—	—	—	69.67	—	0	(0,378)	—	24°-W	76°-W	—	
7	隅丸台形	2.24	2.05	69.65	—	1	3,824	36°-W	28°-W	57°-E	76°-E	
8	長方形	2.30	1.50	69.65	—	2	2,922	36°-W	28°-W	50°-E	57°-E	
9	長方形	2.62	1.80	69.68	—	2	4,597	36°-W	28°-W	53°-E	50°-E	
10	長方形	2.70	1.12	69.70	—	0	2,757	38°-W	30°-W	52°-E	53°-E	
11	長方形	2.92	1.75	69.71	—	-2	4,442	34°-W	28°-W	61°-E	52°-E	
12	長方形	2.70	2.02	69.68	—	2	5,296	16°-35°-W	30°-W	64°-E	61°-E	
13	長方形	2.32	1.17	69.70	—	3	2,437	9°-40°-W	40°-45°-W	58°-E	64°-E	
14	長方形	1.98	1.36	69.72	—	2	2,352	27°-W	30°-W	65°-E	58°-E	
15	長方形か	—	1.56	69.67	—	1	(1,360)	24°-W	25°-W	70°-E	—	
16	長方形	2.58	1.75	69.65	—	3	4,090	28°-W	24°-W	64°-E	70°-E	
17	隅丸正方形	1.73	1.58	69.64	—	2	2,522	28°-W	27°-W	62°-E	64°-E	
18	隅丸長方形	2.35	1.73	69.67	—	0	3,760	28°-W	30°-W	55°-E	62°-E	
19	隅丸長方形	1.70	1.32	69.69	—	0	2,000	30°-W	30°-W	50°-E	55°-E	
20	隅丸長方形	1.60	1.18	69.69	—	1	1,765	36°-W	36°-W	57°-E	50°-E	

第3章 発掘調査の記録

No.	形状	規模(m)		水田面積高(m)	高位	趾高 (cm)	二次調査 面積 (m ²)	趾の向き				備考	
		長軸	短軸					東	西	南	北		
21	—	—	—	69.70	—	0	—	—	36°-W	—	—	57°-E	形状不明瞭
22	長方形か	—	2.46	69.71	—	3	(4,933)	25°-W	28°-W	70°-E	—	—	—
23	隅丸方形	2.64	2.60	69.67	—	5	6,432	24°-W	25°-W	66°-E	70°-E	70°-E	—
24	隅丸長方形	2.64	1.38	69.65	—	4	3,157	27°-W	30°-W	70°-E	66°-E	66°-E	—
25	隅丸台形	2.86	2.40	69.65	—	4	5,370	20°-W	40°-W	50°-E	70°-E	70°-E	—
26	隅丸方形	1.52	1.42	69.69	—	2	1,968	39°-W	49°-W	50°-E	50°-E	50°-E	—
27	隅丸長方形	1.40	1.17	69.69	—	2	1,386	36°-W	40°-W	44°-E	50°-E	50°-E	—
28	—	—	1.24	69.70	—	1	(1,402)	30°-W	18°-64°-W	—	—	44°-E	形状不明瞭
29	隅丸方形	1.50	1.46	69.67	—	3	2,016	30°-W	27°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
30	長方形	2.18	1.50	69.68	—	3	3,184	40°-W	35°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
31	隅丸台形	1.85	1.44	69.71	—	0	2,293	40°-W	28°-W	48°-E	60°-E	60°-E	—
32	長方形	2.08	1.40	69.72	—	2	2,560	25°-W	18°-W	60°-E	67°-E	67°-E	—
33	隅丸方形	1.38	1.24	69.69	—	1	1,621	27°-W	25°-W	66°-E	66°-E	66°-E	—
34	隅丸長方形	1.70	1.40	69.69	—	2	2,192	10°-32°-W	30°-W	72°-E	66°-E	66°-E	—
35	—	—	—	69.77	—	1	—	—	21°-W	75°-E	—	—	形状不明瞭
36	隅丸方形	2.10	1.90	69.73	—	2	3,552	18°-W	24°-W	75°-E	75°-E	75°-E	—
37	隅丸台形	2.00	1.65	69.70	—	2	2,890	25°-W	29°-W	65°-E	75°-E	75°-E	—
38	隅丸方形	1.98	1.86	69.70	—	4	3,338	30°-W	30°-W	65°-E	65°-E	65°-E	—
39	—	—	—	69.80	69.79	0	—	25°-W	—	66°-E	—	—	24溝により消滅
40	隅丸長方形	2.58	1.20	69.77	—	1	3,013	22°-W	30°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
41	隅丸方形	2.25	0.95	69.73	—	3	1,978	35°-W	34°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
42	隅丸台形	2.00	1.70	69.71	—	3	2,896	31°-W	30°-W	83°-E	60°-E	60°-E	—
43	隅丸台形	2.30	1.95	69.71	—	2	3,493	24°-W	34°-W	55°-E	83°-E	83°-E	—
44	—	—	1.83	69.76	—	0	—	—	33°-W	—	—	66°-E	形状不明瞭
45	—	—	—	—	—	—	—	22°-W	—	64°-E	—	—	24溝により消滅
46	隅丸長方形	2.14	0.98	69.76	69.75	1	(1,754)	30°-W	19°-W	57°-E	64°-E	64°-E	24溝により消滅
47	隅丸長方形	2.66	1.40	69.75	—	0	3,210	30°-W	19°-W	60°-E	57°-E	57°-E	—
48	隅丸長方形	3.03	1.65	69.73	—	0	4,442	34°-W	30°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
49	隅丸長方形	2.95	1.15	69.74	—	2	3,162	18°-43°-W	30°-W	60°-E	60°-E	60°-E	—
50	隅丸台形	3.00	1.70	69.76	—	1	4,410	30°-W	37°-W	45°-60°-E	60°-E	60°-E	—
51	—	—	—	69.78	—	—	—	—	38°-W	—	—	45°-60°-E	形状不明瞭
52	隅丸方形か	—	1.58	69.74	69.73	1	2,154	30°-W	—	65°-E	65°-E	65°-E	24溝により消滅
53	隅丸方形か	—	1.26	69.75	—	0	1,978	30°-W	—	58°-E	65°-E	65°-E	24溝により消滅
54	隅丸方形か	—	1.40	69.76	—	2	1,884	37°-W	—	60°-E	58°-E	58°-E	24溝により消滅
55	隅丸方形か	2.05	1.30	69.78	—	—	(2,021)	—	35°-W	66°-E	55°-E	55°-E	24溝により消滅
56	隅丸台形	2.16	1.83	69.75	—	1	3,450	9°-W	21.5°-W	68°-E	75°-E	75°-E	—
57	隅丸長方形	1.38	1.05	69.77	—	1	1,322	18°-W	22°-W	65°-E	68°-E	68°-E	—
58	隅丸長方形か	1.24	—	69.79	—	1	(1,221)	—	20°-W	70°-E	65°-E	65°-E	24溝により消滅
59	隅丸長方形	2.22	1.32	69.78	—	0	2,698	21.5°-W	21.5°-W	68°-E	70°-E	70°-E	—
60	隅丸長方形	1.52	1.15	69.76	—	1	1,605	22°-W	19°-W	68°-E	70°-E	70°-E	—
61	隅丸長方形	1.66	1.23	69.79	—	1	1,776	20°-W	27°-W	62°-E	68°-E	68°-E	—
62	隅丸長方形か	—	1.32	69.81	—	2	(1,920)	20°-W	25°-W	—	—	62°-E	形状不明瞭
63	隅丸長方形か	—	1.93	69.76	—	1	(2,661)	21.5°-W	—	66°-E	66°-E	66°-E	—
64	隅丸長方形か	—	1.13	69.75	—	1	(1,632)	19°-W	—	68°-E	66°-E	66°-E	—
65	隅丸長方形か	2.12	1.45	69.78	—	0	(2,650)	27°-W	25°-W	62°-E	68°-E	68°-E	—
66	隅丸長方形	2.20	1.57	69.82	—	1	3,242	25°-W	25°-W	60°-E	62°-E	62°-E	—

第24表 IV区7面C混土疑似群計測表(101～167)

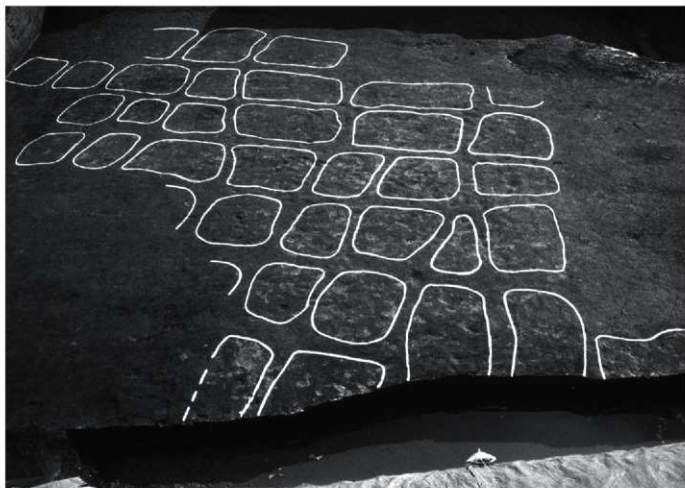
No.	形状	規模(m)		水田面積高(m)	高位	趾高 (cm)	二次調査 面積 (m ²)	趾の向き				備考		
		長軸	短軸					東	西	南	北			
101	—	—	—	69.68	—	—	(3,797)	—	62°-W	62°-E	—	—	一部分のみ	
102	—	—	—	69.69	—	—	(4,090)	62°-W	—	59°-E	—	—	—	一部分のみ
103	—	—	—	69.63	—	—	(0,512)	44°-W	—	—	—	59°-E	—	一部分のみ
104	—	—	—	69.63	—	—	(1,248)	—	44°-W	—	—	62°-E	—	一部分のみ
105	—	—	—	69.82	—	—	—	—	18°-W	68°-E	—	—	—	一部分のみ
106	—	—	—	69.83	—	—	—	—	18°-W	—	—	68°-E	—	一部分のみ
107	—	—	—	69.82	—	—	—	2°-W	—	90°-W	—	—	—	一部分のみ
108	—	—	1.75	69.83	—	—	(2,656)	0°-E	—	—	—	90°-E	—	一部分のみ
109	—	—	4.20	69.81	—	0	—	—	—	—	—	44°-E	—	一部分のみ
110	台形	4.70	3.34	69.79	—	2	(11,856)	40°-W	43°-W	44°-E	—	—	—	北部一部欠
111	台形か	(4,50)	3.00	69.81	—	2	(10,133)	24°-W	9°-E	80°-W	—	—	—	北部一部欠
112	長方形	2.96	1.15	69.81	—	2	2,988	22°-W	46°-W	40°-E/60°	40°-E	—	—	—
113	—	1.68	—	69.82	—	—	(1,397)	47°-W	—	—	—	40°-E	—	南東面大半欠
114	—	5.00	3.12	69.79	—	1	—	9°-E	27°-E	80°-W	—	—	—	—
115	—	2.08	—	69.79	—	1	—	—	50°-W	—	—	—	—	—
116	—	2.86	(2,56)	69.79	—	1	(5,461)	27°-E	2°-E	80°-W	50°-W	—	—	北部欠
117	三角形	5.86	3.20	69.82	69.81	0	10,378	—	5°-E	47°-70°-E	80°-W	—	—	—

第8項 7面の遺構と遺物

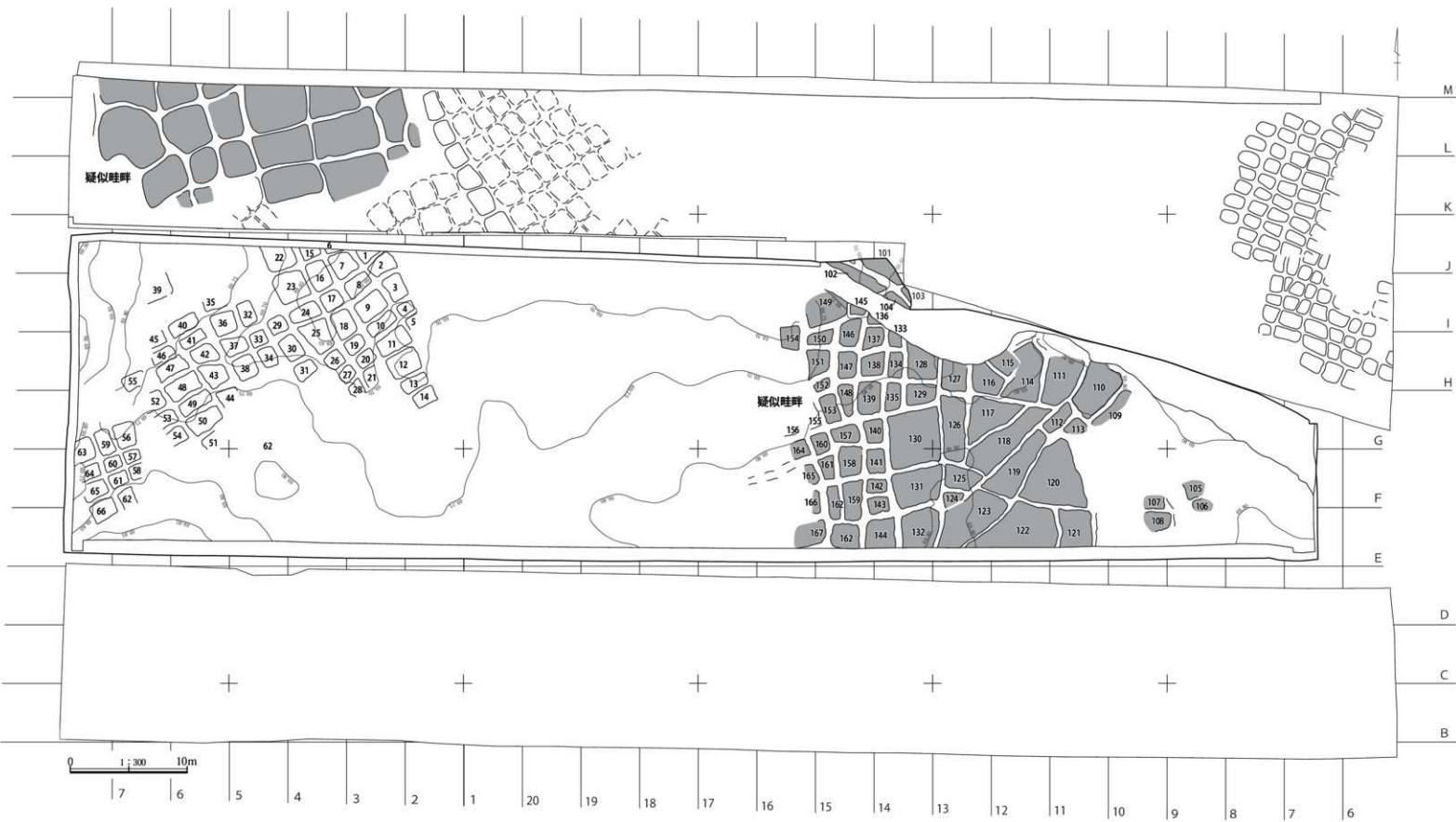
No.	形状	屋敷(m)		水田面標高(m)		畦高 cm	二次調査 面積(m ²)	畦の向き				備考
		長軸	短軸	高位	低位			東	西	南	北	
118	長方形か	7.90	2.60	69.83	69.81	2	14,848	80°-W	15°-E/56°- 73°-W	45°-E	47°-70°-E	
119	長い台形	6.90	2.50	69.82	—	2	12,026	46°-W	68°-W	28°-E	45°-E	
120	台形	6.30	5.50	69.82	69.81	0	21,184	19°-W	—	69°-88°-W	28°-E	
121	長方形か	(3.17)	2.80	69.84	—	-1	(8.24)	0°-E	12°-W/14°- -E	—	88°-W	
122	—	5.60	—	69.85	69.82	-1	(19,498)	12°-W/14°- -E	45°-E	—	69°-88°-W	
123	台形か	(6.80)	3.10	69.80	69.77	3	(16,757)	68°-W	0°-16°-E	45°-E	45°-E	
124	三角形か	1.76	1.26	69.78	—	1	(1,530)	—	0°-E	45°-E	80°-W	
125	台形	3.27	1.82	69.79	—	2	4,954	45°-E	2°-E	80°-W	56°-75°-W	
126	長方形	5.38	2.05	69.81	—	2	10,234	5°-15°-E	3°-W	75°-W	86°-W	
127	長方形か	(2.54)	2.15	69.79	—	6	(5,194)	2°-E	0°-E	86°-W	—	北側20溝により消滅
128	長方形か	(2.94)	2.55	69.79	69.78	6	(6,298)	0°-1°-E	1°-E/4°-W	90°-W	—	北側20溝により消滅
129	台形	2.53	1.85	69.82	—	1	4,08	0°-15°-E	0°-E	78°-E	90°-W	
130	正方形	4.60	4.38	69.84	69.83	0	19,253	3°-W	2°-5°-W	79°-E	78°-E	
131	台形	4.42	3.05	69.84	69.80	2	11,712	0°-2°-E	6°-22°-W	73°-E	79°-E	
132	—	(3.45)	3.26	69.83	69.82	2	(9,381)	0°-16°-E	4°-W	—	73°-E	
133	長方形か	1.30	1.10	69.79	—	0	(1,248)	4°-W	0°-E	90°-E	—	北側20溝により消滅
134	長方形	2.20	1.23	69.79	—	0	2,474	1°-E	6°-E	86°-W	90°-E	
135	長方形	2.42	1.30	69.82	—	1	2,821	1°-E	6°-E	78°-E	86°-W	
136	—	(0.95)	(1.00)	69.76	—	1	(0,538)	—	10°-E	90°-E	—	北側21溝により消滅
137	台形か	2.00	1.60	69.78	—	-1	2,682	0°-E	10°-E	72°-E	90°-E	
138	台形か	2.00	1.90	69.77	—	3	3,424	6°-E	2°-E	89°-E	72°-E	
139	長方形	2.78	1.93	69.82	—	3	5,109	6°-E	2°-E	18°-E	89°-E	
140	長方形	2.00	1.67	69.84	—	1	2,890	2°-W	14°-W	85°-E	18°-E	
141	長方形	2.10	1.60	69.83	—	0	3,013	5°-W	10°-E	88°-E	85°-E	
142	長方形	1.70	1.16	69.83	—	0	1,893	6°-W	3°-E	90°-E	88°-E	
143	長方形	1.86	1.40	69.82	—	1	2,272	5°-W	12°-W	80°-E	76°-90°-E	
144	長方形か	(2.60)	2.56	69.83	69.82	2	(5,941)	4°-W	1°-E	—	80°-E	
145	—	1.38	(0.87)	69.72	—	3	(0,848)	—	2°-E	86°-W	—	北側20溝により消滅
146	台形か	2.40	1.63	69.75	—	2	3,536	10°-E	5°-E	87°-E	63°-E/84°-E	
147	長方形	2.26	1.60	69.74	—	3	3,306	2°-E	0°-E	90°-E	87°-E	
148	隅丸台形	2.80	1.35	69.79	—	3	2,677	2°-E	18°-W	62°-E	90°-E	
149	—	3.70	(2.80)	69.76	—	1	(7,205)	2°-E	15°-W	63°-E/75°- -E	—	北側20溝により消滅
150	台形か	2.10	1.20	69.76	—	1	2,165	12°-E	40°-E	90°-E	75°-E	
151	台形か	2.10	1.40	69.75	—	1	3,680	4°-E	0°-E/10°- -W	62°-E	90°-E	
152	隅丸台形	1.50	0.90	69.77	—	1	1,034	0°-E	30°-W	60°-E	62°-E	
153	長方形	2.42	1.42	69.79	—	4	3,098	18°-W	20°-W	75°-E	60°-E	
154	台形	2.10	1.63	69.70	—	3	2,965	4°-E	6°-W	79°-W	82°-E	
155	—	(2.10)	(1.10)	69.78	—	5	—	20°-W	—	70°-E	—	
156	—	—	—	—	—	—	—	—	—	80°-E	—	計測不能
157	台形	2.30	1.56	69.82	—	1	3,098	14°-W	21°-W	—	75°-E	
158	長方形	2.67	1.98	69.83	—	1	4,613	1°-E	5°-W	85°-E	70°-E	
159	長方形	3.30	1.76	69.83	—	1	5,002	1°-E	0°-E/7°- -W	87°-W	80°-E	
160	長方形	1.73	1.45	69.83	—	0	2,208	21°-W	21°-W	65°-E	70°-E	
161	台形	2.00	1.30	69.82	—	2	2,042	2.5°-W	25°-W	85°-E	70°-E	
162	長方形	2.86	1.00	69.83	—	1	2,645	0°-E/7°- -W	7°-W	86°-E	85°-E	
163	四角形か	2.43	2.05	69.84	—	-2	(4,666)	1.5°-W	15°-E	77°-W	21°-W/15°-E	
164	—	(1.50)	1.47	69.81	—	1	(1,850)	21°-W	21°-W	65°-E	70°-E	形状不明瞭
165	—	1.86	—	69.84	—	0	(1,221)	25°-W	—	—	—	形状不明瞭
166	—	1.92	—	69.83	—	1	(0,948)	7°-W	—	—	—	形状不明瞭
167	—	(2.6)	(1.72)	69.80	—	1	(2,794)	7°-W	—	75°-W	—	形状不明瞭



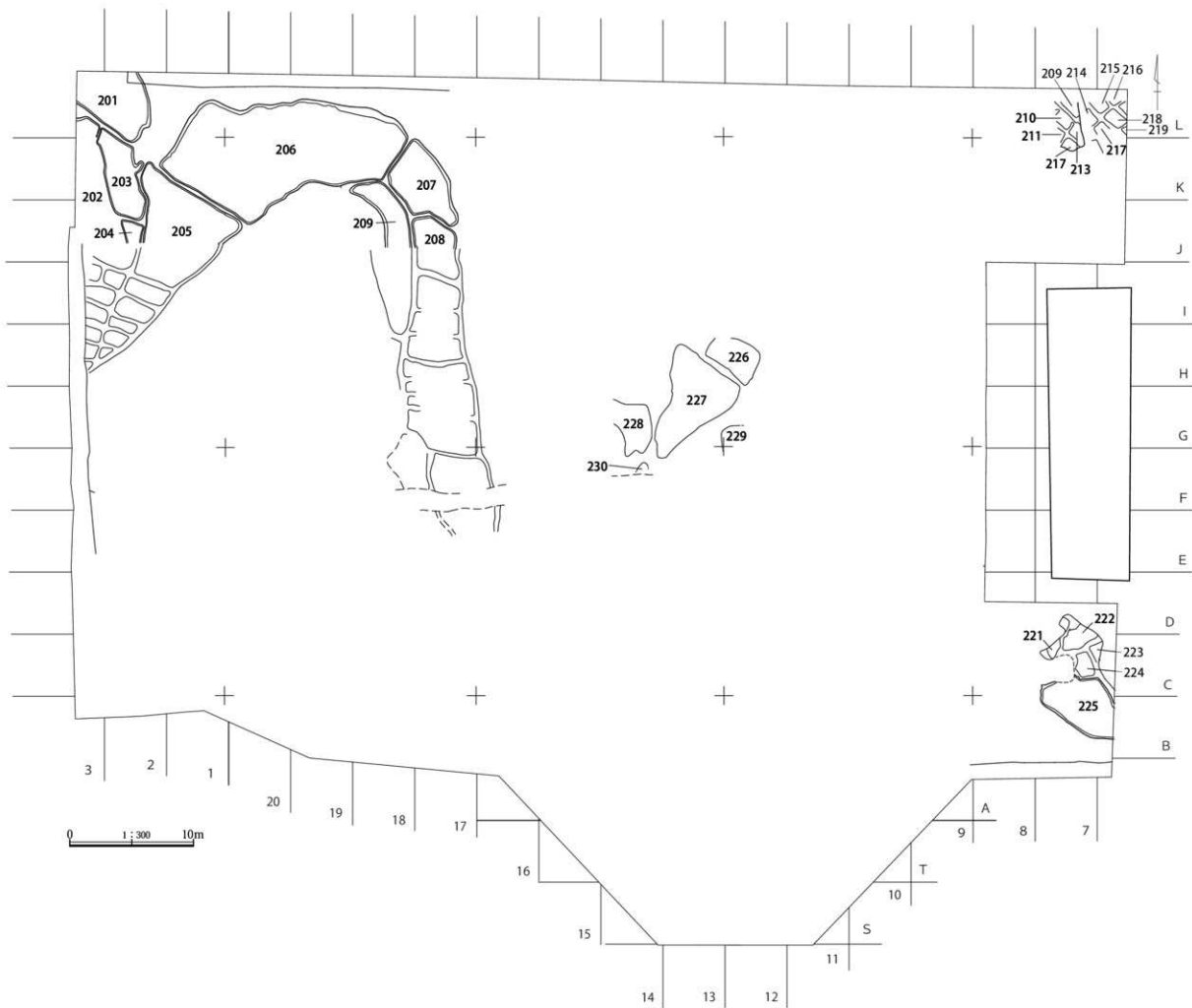
1次調査Ⅲ区7面Hr-FA直下の水田(南から) 細長い谷水田である。



1次調査Ⅳ区7面Hr-FA直下の水田(南から) 極小区画水田である。Hr-FAが斑文状に見られ、水田面は凸凹していた可能性もある。



第79图 IV区 7面全体图



第80图 Ⅲ区7面全体图

第9項 8面の遺構と遺物

1 概要

8面は基本土層Ⅴを確認面とする遺構であり、あわせて9面も調査されている。9面河道が埋没谷となっていた段階と考えられるが、状況は不明であり、別の調査面と扱う。遺構は溝が中心で、I区で1条、IV区で14条である。Ⅲ区も本来同様であるが、2次調査では小谷地部分となったため、溝は検出されていない。

2 溝・土坑

(1) I区

I区8面34号溝(第81図、PL.34)

位置 41D-H-18～20、51D・E-1・2グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査22号溝と同一となる。南側も調査区域外に延びるが、1次調査で延長部は検出されていない。断続的に7条程度に分かれるが、削平のためと考えられ、一括で扱う。本来は4条程度が並行していたとみられる。6面1号耕作痕と同一調査面で検出され、新旧関係も不明ながら、同種の溝が他の調査区でも一様にあるため、8面として扱った。北側の平面形は直線状で、南側はやや蛇行する。走向方位はN-49°-E。北側の断面形は皿状で、南側の断面形はU字形と異なる。底面も北側はほぼ平坦で、南側は丸みを持つ。両端の比高差は3cmで、勾配はほとんどない。北側では基本土層IVBがなく、南側では厚く堆積するため、埋没土の状況に変化がある。北側の埋没土は攪拌が著しく、上層からの耕作痕跡とも思われる。南側は自然埋没か。規模は長さ28.84m上端幅27～130cm下端幅8～40cm深さ19cmで、1次調査も含めると長さ42.6mである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

(2) IV区

IV区では14条の溝が検出された。調査区の東半部に集中し、西半部では見られない。北側1次調査でも状況は同じであるが、直接同一となるものはない。西側の58・56・62・64号溝は9面2号河道および東端南分流部と接続しており、ある段階では並存してしまわれる。河道

の埋没土中とみられ、谷地状の地形となり、溝はそこへ排水していた可能性が高い。東側の51～55・57号溝は9面4号河道と接続し、西側溝群と同様に位置づけられる。

IV区8面51・52・53号溝(第81図、PL.34・35)

51号溝 位置 71E-G-8・9グリッド。南側は調査区域外に延びるが、南側1次調査で延長部は検出されていない。平面形はやや蛇行する。北側は削平により3条に分かれる。走向方位N-0°～N-17°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は8cmで、勾配はほとんどない。埋没土は水成堆積に近く自然埋没する。規模は長さ12.60m上端幅12～35cm下端幅6～13cm深さ7cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

52号溝 位置 71F・G-9グリッド。平面形は直線状。走向方位N-18°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ3.45m上端幅18～30cm下端幅8～16cm深さ3cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

53号溝 位置 71F・G-9グリッド。平面形は直線状。走向方位N-23°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ6.85m上端幅18～29cm下端幅5～12cm深さ5cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

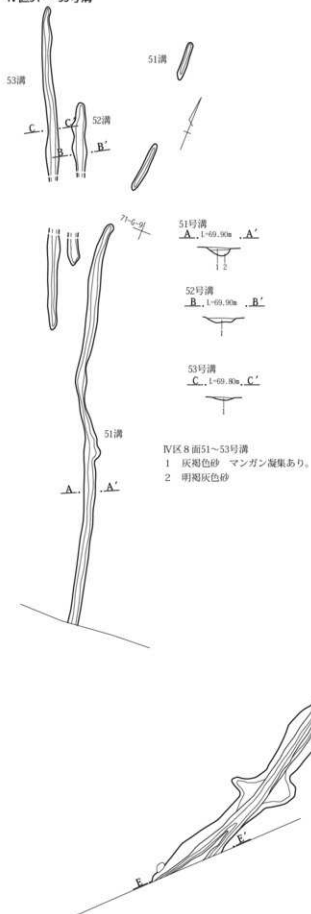
IV区8面9・10号土坑、54・55・57号溝(第82図、PL.35・36)

9号土坑 位置 71H-10グリッド。57号溝より前出で、10号土坑より後出。平面形はビット状。埋没土に灰白土ブロックを顕著に含み人為埋没。規模は長さ75cm短径52cm深さ38cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

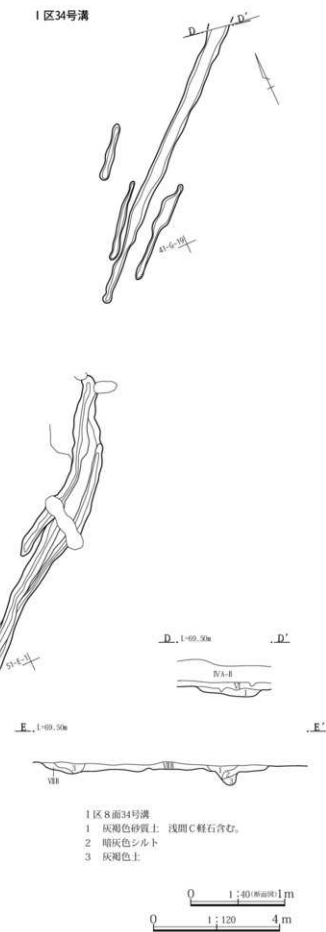
10号土坑 位置 71H-10グリッド。9号土坑、57号溝より前出。平面形はビット状。埋没状況不詳。規模は長さ90cm短径(50)cm深さ36cmである。時期は層位から古代に比定される。

54号溝 位置 71H-10・11グリッド。9・10号土坑より後出で、55・57号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はわずかに湾曲する。走向方位N-80°-E～N-50°-E。

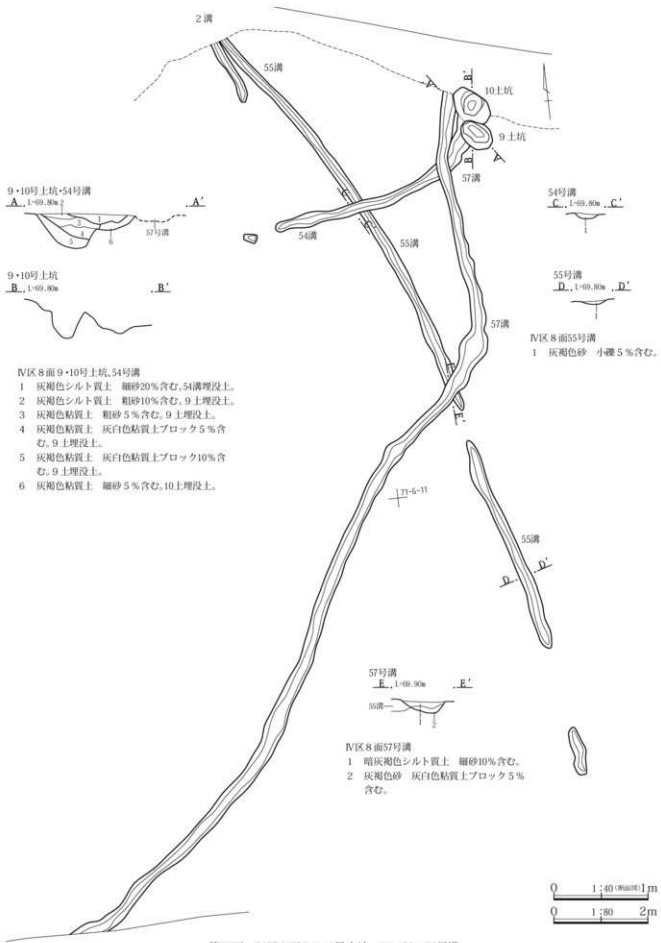
IV区51～53号溝



I区34号溝



第81図 I区8面34号溝・IV区8面51～53号溝



第82図 IV区8面9・10号土坑、54・55・57号溝

断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。埋没土は砂で自然埋没する。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

55号溝 位置 71F～H・10・11グリッド。57号溝より前出で、54号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや湾曲し、削平により3条に分かれる。走向方位N-15°-W～N-29°-W。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土は砂で自然埋没する。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

57号溝 位置 71E～H・10～12グリッド。55号溝より後出で、10号土坑、54号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°。東西軸の走向方位はN-39°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ20.60m上端幅19～56cm下端幅8～37cm深さ10cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

IV区8面56・58号溝(第83図、PL.36・37)

56号溝 位置 71G～I・15～20グリッド。北端は5面20号溝と重複により消滅する。平面形はL字形で、南北軸の走向方位はN-0°。東西軸の走向方位はN-69°-E～N-85°-E。断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。埋没土の白色粒は浅間C軽石の可能性が高い。規模は長さ28.40m上端幅15～54cm下端幅8～35cm深さ12cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

58号溝 位置 71H・I・16～18グリッド。平面形は直線状で、削平により断続的になる。走向方位はN-82°-W～N-72°-E。断面形は皿状。底面は凸凹する。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。自然埋没か。埋没土の白色粒は浅間C軽石の可能性が高い。規模は長さ11.36m上端幅10～40cm下端幅5～21cm深さ7cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

IV区8面59・60号溝(第83図、PL.37・38)

59号溝 位置 71E-14・15グリッド。南側は調査区域

外に延び、南側1次調査26号溝の一部と同一となるか。60号溝より前出。平面形は不定形で輪郭は乱れる。走向方位はN-37°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦でやや丸みを持つ。埋没土は攪拌が著しく、基本土層VII段階の耕作痕跡とも考えられる。規模は長さ4.20m上端幅197cm下端幅90cm深さ8cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

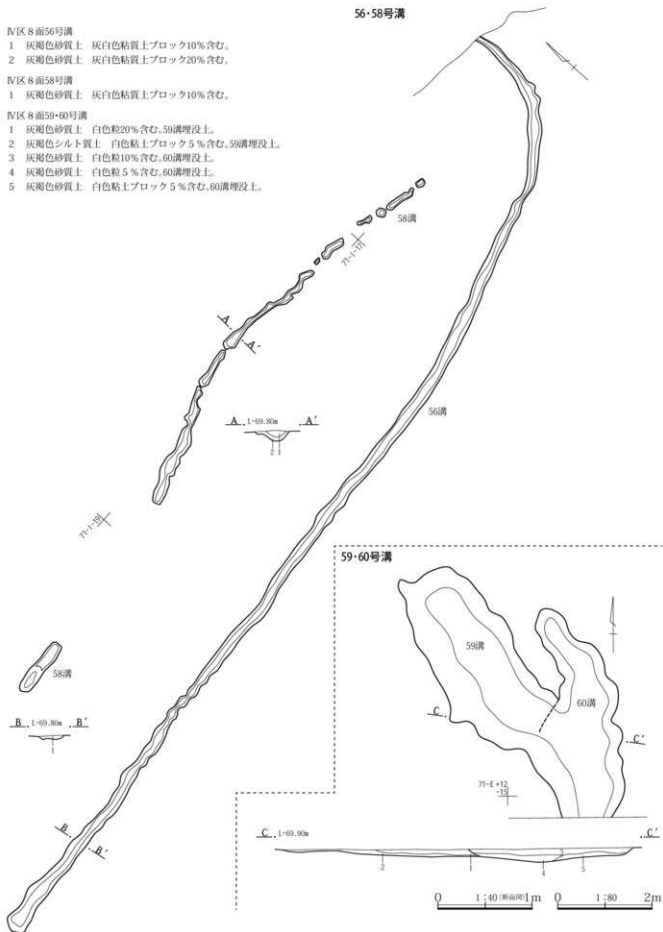
60号溝 位置 71E-14グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査26号溝の一部と同一となるか。59号溝より後出。平面形は不定形で輪郭は乱れる。走向方位はN-9°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦でやや丸みを持つ。埋没土は攪拌が著しく、基本土層VII段階の耕作痕跡とも考えられる。規模は長さ4.50m上端幅(175)cm下端幅80cm深さ13cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

IV区8面61・62・63号溝(第84図、PL.37・38)

61号溝 位置 71E・F-14グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査26号溝の一部と同一となるか。62号溝より前出で重複により消滅する。平面形・断面形・底面形・走向方位・勾配は不詳。埋没状況不詳。規模は長さ4.68m上端幅22～64cm下端幅8～46cm深さ5cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

62号溝 位置 71E～H-14グリッド。南側は調査区域外に延び、南側1次調査26号溝の一部と同一となるか。北端は5面20号溝と重複により消滅する。平面形はL字形で、削平により断続する。南北軸の走向方位はN-6°-E。東西軸の走向方位はN-75°-W。断面形はV字に近いU字形。底面は細くやや凸凹する。両端の比高差は43cmで、勾配2.52%で南から北方へ下向する。埋没土は攪拌が著しく、基本土層VII段階の耕作痕跡とも考えられる。規模は長さ17.00m上端幅14～100cm下端幅6～80cm深さ10cmである。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

63号溝 位置 71E-14グリッド。平面形は直線状で、削平により2条に分かれる。走向方位はN-8°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。



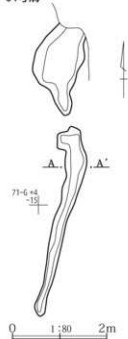
第83図 IV区 8面56・58～60号溝

IV区 8面64号溝 (第84図, PL.38)

位置 71G・H-14・15グリッド。平面形はやや蛇行し、削平により2条に分かれる。走向方位はN-8°-E。断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は17cmで、勾配2.75%で南から北方へ下向する。灰褐色土ブロックが顕著に含まれるが、地山の掘削土とみられ、何らかの掘削痕跡と考えられる。

遺物は出土していない。時期は層位から古代に比定される。

64号溝

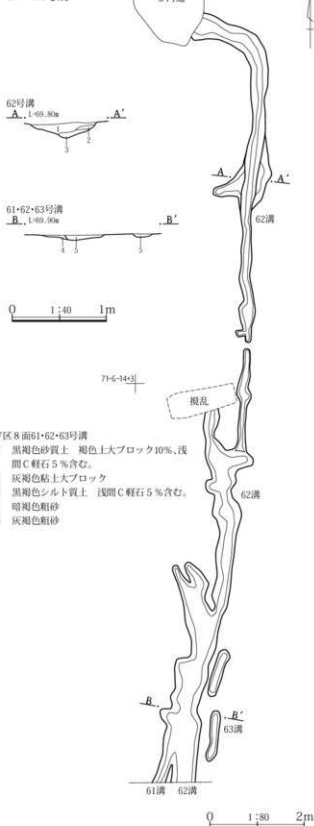


IV区 8面64号溝

- 1 灰褐色砂 灰褐色シルトブロック20%含む。
- 2 暗褐色シルト質土 灰褐色シルトブロック10%含む。



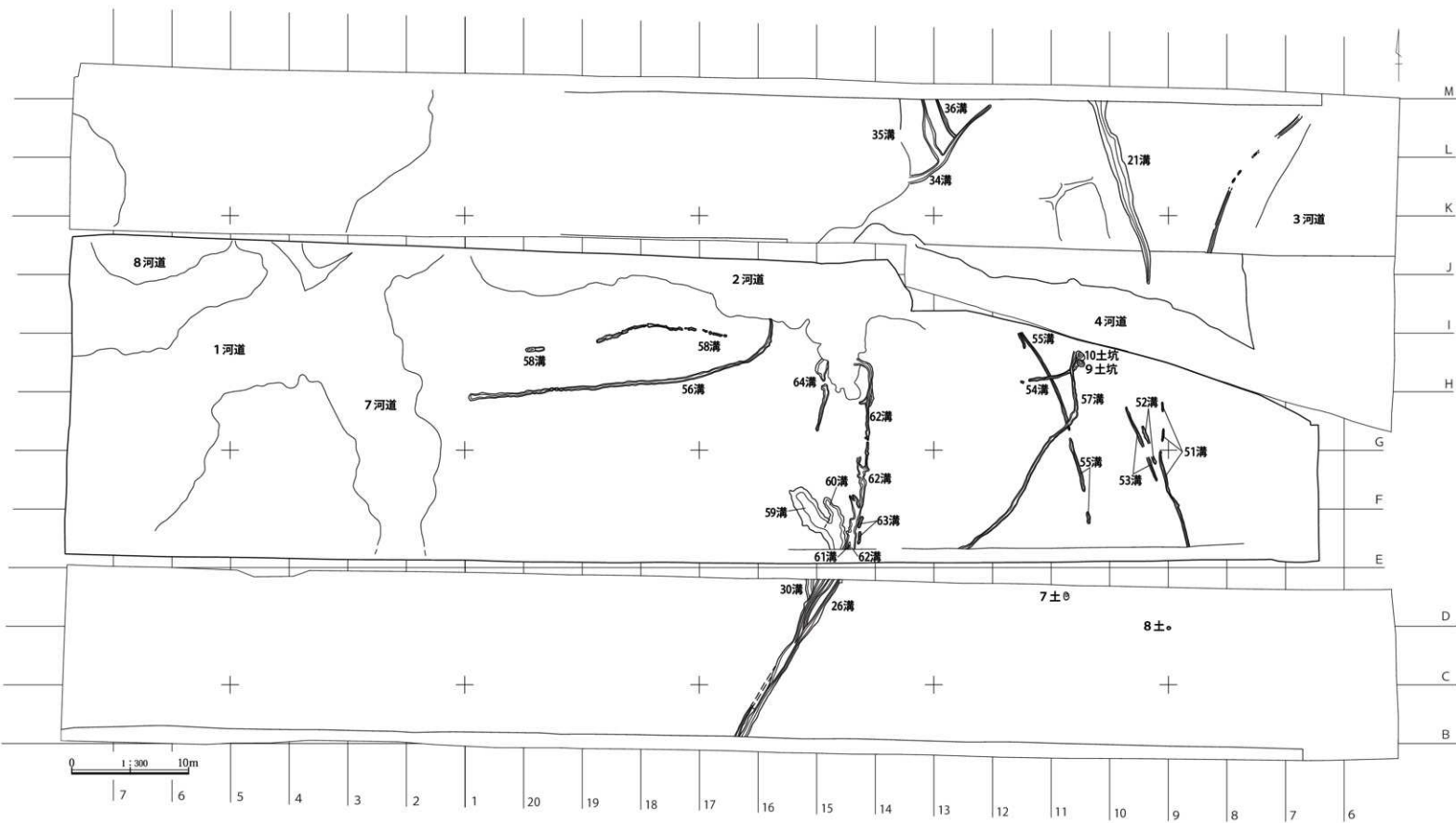
61～63号溝



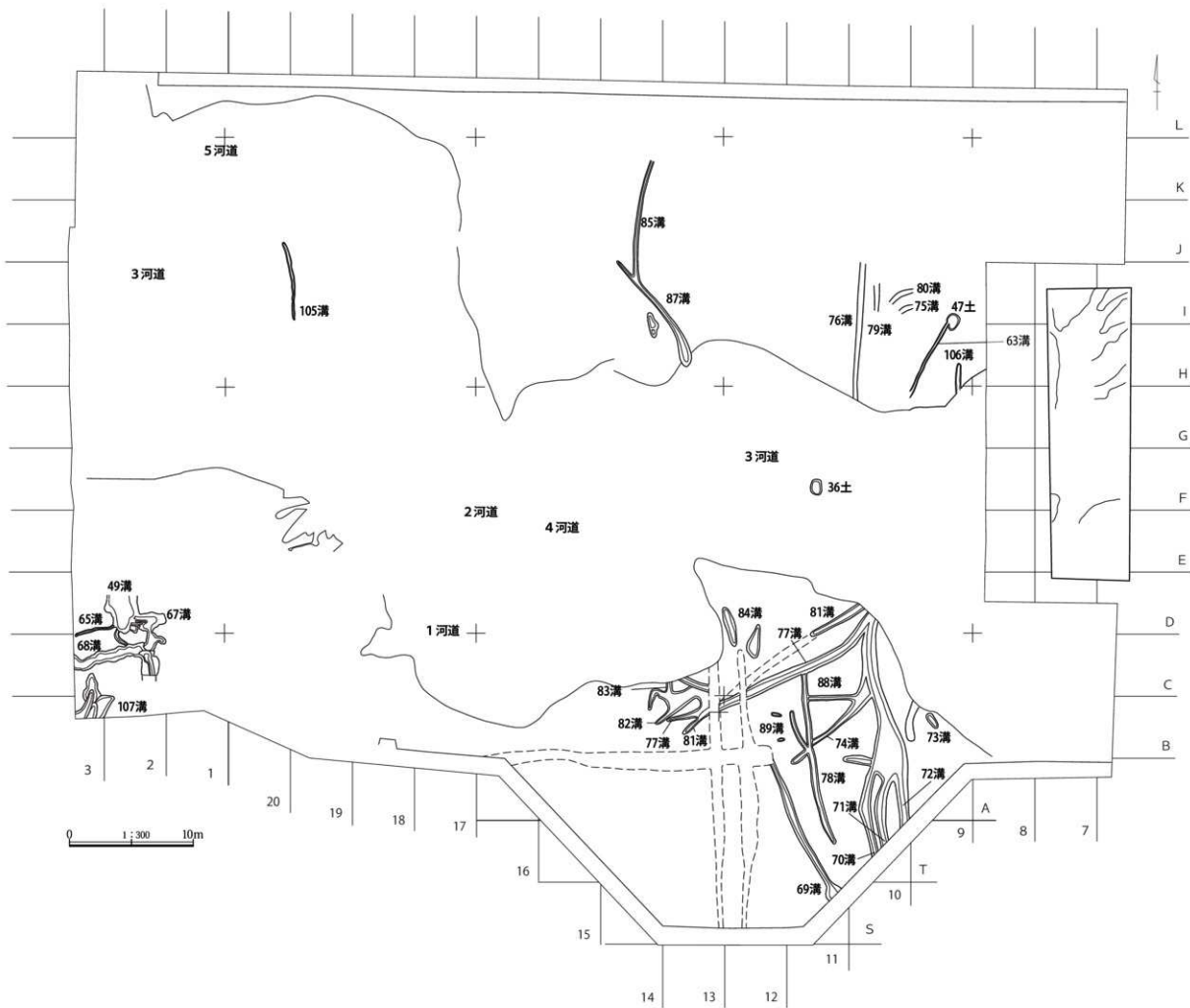
IV区 8面61-62-63号溝

- 1 黒褐色砂質土 褐色土大ブロック10%、浅間C軽石5%含む。
- 2 灰褐色粘土大ブロック
- 3 黒褐色シルト質土 浅間C軽石5%含む。
- 4 暗褐色粗砂
- 5 灰褐色粗砂

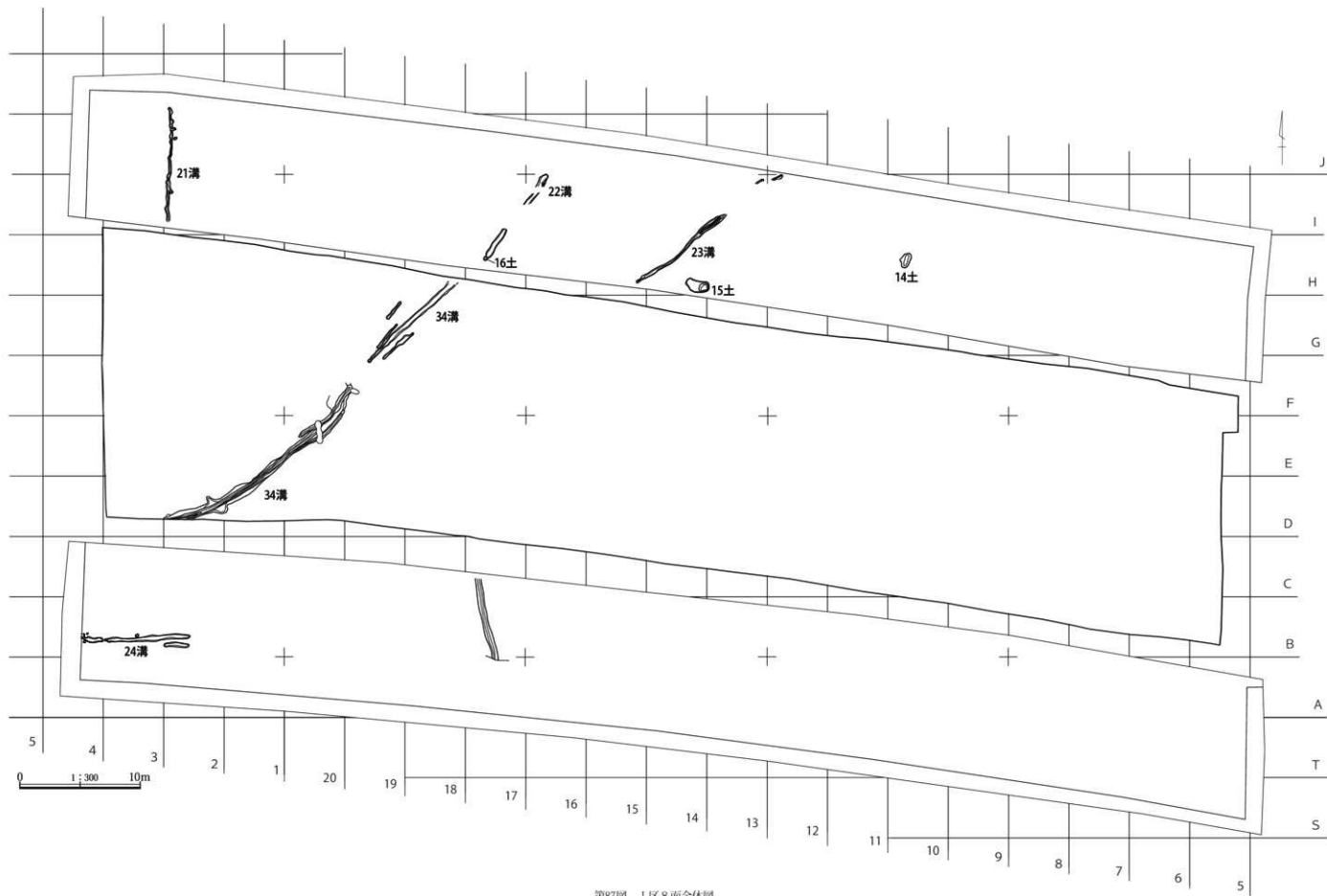
第84図 IV区 8面61～64号溝



第85图 IV区 8面全体图



第86图 Ⅲ区8面全体图



第87图 1区8面全体图

第10項 9面の遺構と遺物

1 概要

9面では旧河道と小谷地のみを扱う。調査段階では8面と合わせた同一面調査だが、完掘状態では年代差が著しいため、9面として分離した。旧河道は1次調査段階で遺跡全体の通番で1～8号河道が付番されており、2次調査で新たに付番したものはない。しかし、同番号の河道でもつながらず、別番号がつながるなど、混乱が生じている。3号河道は規模から本流となる河道で、各調査区3号河道で一致する。著しく蛇行しながら1次調査Ⅳ区北側で一度北側調査区域外へ出て、東端で再び現れ、Ⅲ区を北西隅から南東隅へ横切り、1次調査Ⅱ区南西隅で調査区域外となる。北西から南東へ流れる流路である。南側に並走する形で、Ⅳ区1・2・4号河道、Ⅲ区1・2・4号河道が東西軸で走向する。位置関係を考慮すると、Ⅳ区4号河道とⅢ区1号河道が連続する。1次調査Ⅳ区1号河道とⅣ区2号河道が同一となることも、2次調査で判明し、Ⅳ区内で3号河道に接続して不明となる。Ⅲ区2号河道は、Ⅲ区1号河道から分岐するもので新旧関係は不明である。Ⅲ区4号河道はⅢ区3号河道の変流部分と思われる。Ⅲ区5号河道は北側からⅢ区3号河道へ接続し、南側は不明となる。Ⅱ区6号河道は南西方向へ流下し、2次調査のⅢ区小谷地と接続して、Ⅲ区3号河道に接続して不明となる。1次調査Ⅳ区7号河道はⅣ区3号河道に南西方向から接続する流路で支流に見える。2次調査では名称に混乱が生じ、2次調査のⅣ区1号河道と同一となるが、南西方向に長く延びる流路と判明した。2次調査のⅣ区7号河道は1次調査と直接つながらず、南東軸に走向する。河床面は2次調査のⅣ区1号河道より高いため、南東方向から合流する印象を持つ。しかし、北西軸に走向するⅣ区8号河道が延長線上に存在するため、重複する北西-南東軸の流路である可能性もある。旧河道はすべて、埋没後上面にFA下水田が形成されており、1次調査の出土遺物からも5世紀代には埋没する。

2 旧河道・小谷地

(1) Ⅲ区

Ⅲ区9面小谷地(第92図、PL.38)

位置 61E～1-6・7グリッド。基本土層Ⅷ上面で確認される。西側1次調査3号河道に向かう6条の谷地の一部である。東側は1次調査Ⅱ区6号河道の一部と同一になる。走向方位は交錯して計測できない。断面形はU字形。底面はやや凸凹して丸みを持つ。両端の比高差は8cmで、勾配はほとんどない。埋没土は基本土層Ⅷ。遺物は出土していない。

(2) Ⅳ区

1・2・4・7・8号河道の5条の旧河道が検出された。1号河道は北側1次調査7号河道と同一となり、1次調査1号河道とは同一でなく混乱が生じている。2号河道は1次調査1号河道と同一である。4号河道は北東側部でわずかに検出され、上層の重複遺構によりほぼ消滅している。7号河道は1次調査7号河道と直接つながらず、別の流路である。河床面は1号河道より高いため、南東方向から合流する印象を持つが、北西延長線上に8号河道が存在するため、交差する流路の可能性もある。河道からの出土遺物は土師器小型品12片、同大型品4片が出土している。

Ⅳ区9面1・2・7・8号河道・杭

(第88・89・91図、PL.39～41・43・44、第25・26表)

1号河道・杭 位置 81E～J-1～7グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査7号河道と同一となる。9面7・8号河道と重複し、A断面観察の結果、7号河道は後出ではない。平面形は緩く蛇行する。走向方位はN-55°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹して丸みを持つ。両端の比高差は16cmで、勾配はほとんどない。埋没土の最下層8は水成堆積ながら、上層は粘質土で埋まるため、谷地地形として徐々に埋没したと考えられる。1の杭は7号河道と接続する南壁で出土する。護岸的な性格と思われる。土器石器類は出土していない。As-C降下以前に埋没している。

2号河道・杭 位置 71H～J-13～20グリッド。北東側は調査区域外に延び、北側1次調査2号河道と同一となる。西北側も調査区域外に延び、北側1次調査1号河道と同一となる。平面形は緩く蛇行する。東端で南へ延

第3章 発掘調査の記録

びる支流があり、9面4号河道へ向かう。主体部の走向方位はN-90°で、断面形は皿状、底面は丸みを持つ。流水痕跡はほとんどなく、埋没土は粘質土で中位にAs-Cが一次堆積する。分岐する南北軸の走向方位はN-90°。断面形は皿状で、U字形になる部分もある。底面はやや凸凹して丸みを持つ。埋没土下位は砂質土が水成堆積し、中位から粘質土で埋まり、途中中-FAが最大5cm程度一次堆積する。主体部に比べ埋没時期が遅いことが判明する。Ⅴ上面で草木類の痕跡らしい黒色の筋が見られるため、湿地的な景観が推測できる。杭は東端の分岐部周辺にあり、南壁に打ち込まれる。東側は9面4号河道への接続部である。2~4の杭は鋭く先端が尖る。12・13は丸太材で長さは50cm近い。先端はやはり削られている。割り材も含まれる。状況から護岸的な性格の杭列と思われる。埋没土から土師器杯(1)が出土する。出土遺物から南北軸部分は古墳時代に比定され、東西軸の主体部分はAs-C降下以前に埋没している。

7号河道 位置 81E~J-1~4グリッド。南側は調査区域外に延びるが、南側1次調査で延長部は検出されていない。北側は1号河道と重複して、延長線上に9面8号河道が伸びて同一となる可能性が高い。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-20°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹して丸みを持つ。両端の比高差は16cmで、勾配はほとんどない。埋没土の最下層8は水成堆積ながら、上層は粘質土で埋まるため、谷地地形として徐々に埋没したと考えられる。As-C降下以前に埋没している。

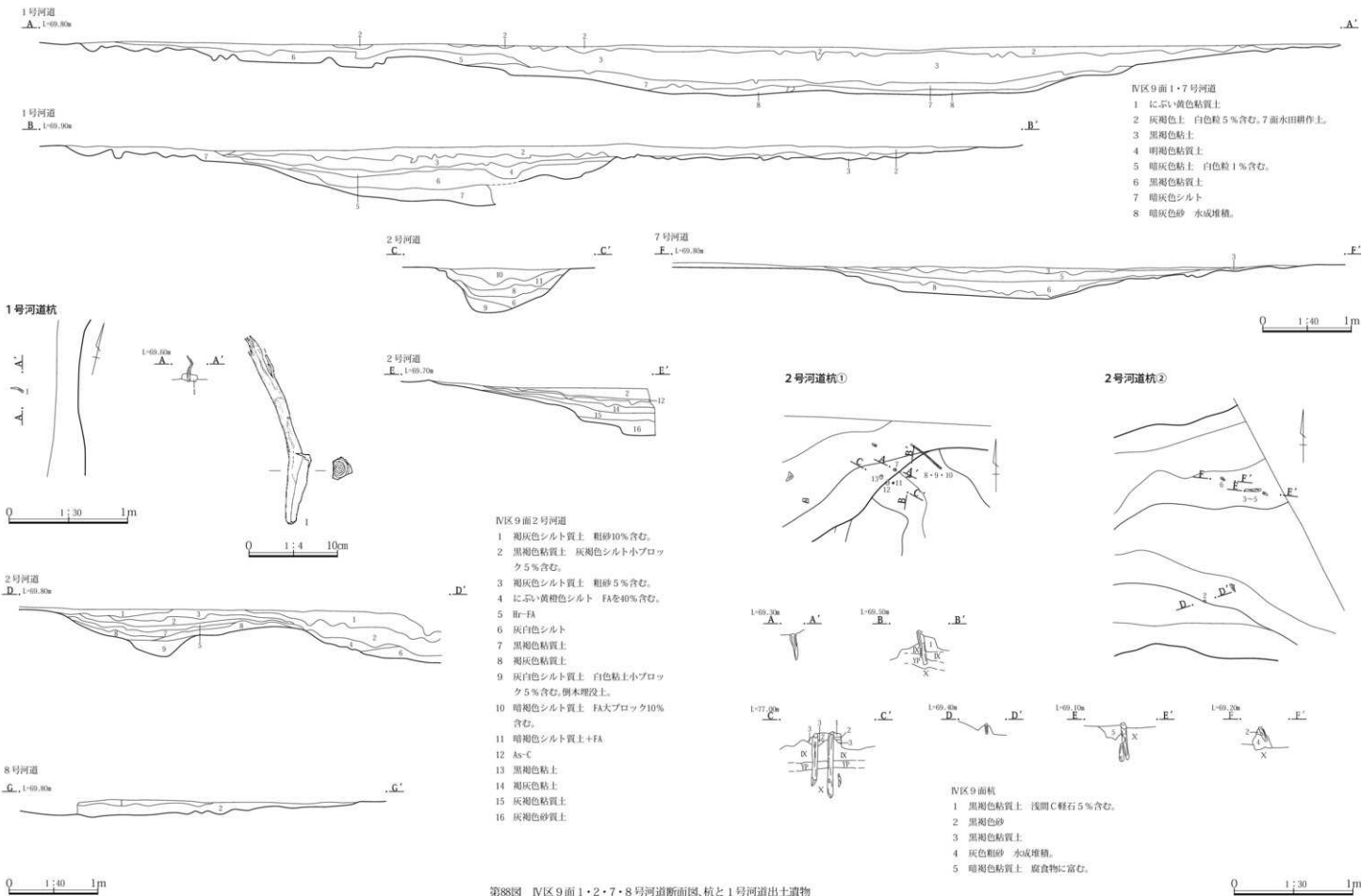
8号河道 位置 81I・J-5~7グリッド。北側は調査区域外に延び、北側1次調査で延長部が確認できる。南側は1号河道と重複して、延長線上に9面7号河道が伸びて同一となる可能性が高い。平面形は大きく蛇行する。走向方位はN-76°-E。断面形は皿状。底面はやや平坦で丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没土に水成堆積は見られず各地に近い。上位に基本土層ⅤBが堆積する。遺物は出土していない。As-C降下以前に埋没している。

第25表 IV区9面1号河道出土遺物

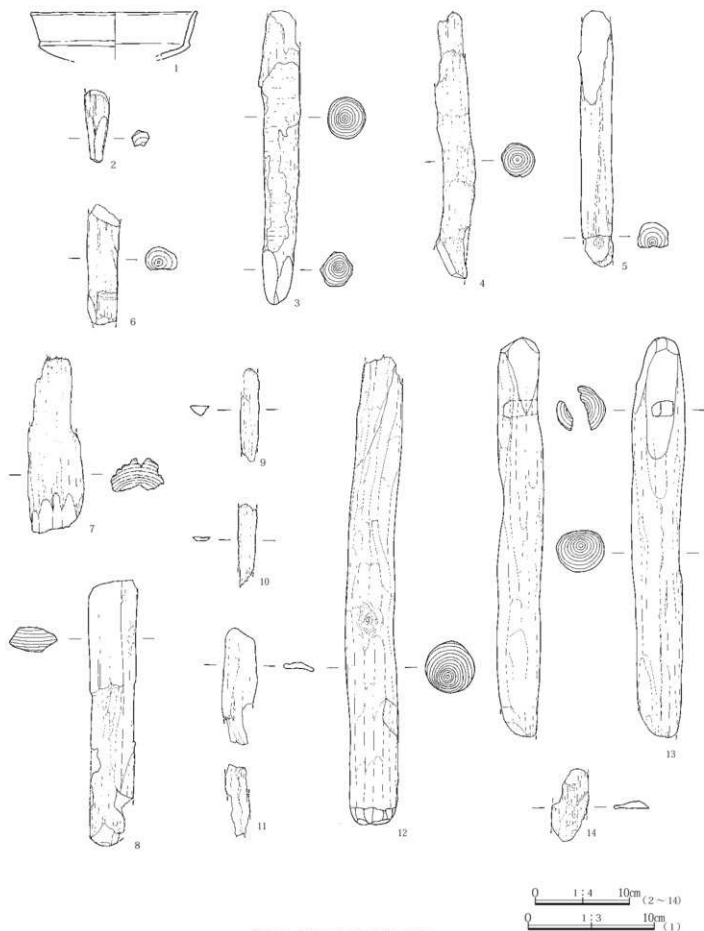
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 現存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第899号 PL.43	1	割杭		長 21 幅 2.3	厚 2.2 重 39	クリ	割材の一端を浅く4方向から削り尖らせた杭で、先端から8cm程で折れ曲がる。

第26表 IV区9面2号河道出土遺物

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 現存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第899号 PL.43	1	土師器 杯	口縁部-底部片	口 式	高	細砂粒/良好/橙	口縁部横溝で、底部手持ちへう削り、内面凹で。外縁上に凹線を巡らす。	器面厚減
第899号 PL.43	2	杭		長 7.7 幅 2.7	厚 1.7 重 18	クリ	芯を含まない丸太材の先端を浅く5方向から削り込んだ杭	
第899号 PL.43	3	杭		長 31 幅 4.2	厚 4.2 重 313	アカガシ垂葉	皮付丸木の一端を浅く5方向から削りこみ尖らせた杭で先端は破損する	
第899号 PL.43	4	不詳		長 28.2 幅 3.5	厚 3.5 重 193	ムクノキ	丸木で一方の端部に削りの様な面が見られるが、その断面形状から劣化後の損傷と考えられる	
第899号 PL.43	5	半炭材		長 27 幅 3.7	厚 2.6 重 124	アカガシ垂葉	僅かに芯を伴う半炭材で一端部近く削られたあとが見られるがこれは劣化後の破損と見られる	
第899号 PL.44	6	不詳		長 12.6 幅 3.4	厚 2.4 重 67	ホオノキ	芯持ち丸木で割れによるものか一部断面を欠き断面はかまぼこ型である。下端は劣化後の破損であるが先端はつぶれた形状を示しており杭の先端の可能性あり。	
第899号 PL.44	7	杭		長 18.8 幅 6	厚 3.2 重 140	アカガシ垂葉	半炭状で断面半円形の木材の一端を4面削り杭状をしていますが、劣化が顕著で、本来半炭木を加工した杭が劣化による形状化は不明	
第899号 PL.44	8	割材		長 28 幅 5	厚 2.6 重 231	カヤ	一部年輪に沿って割れている割材で向端とも破損し本来の大きさ・形状は不明	
第899号 PL.44	9	割材		長 10.2 幅 2	厚 1 重 8.2	カヤ	割材小破片で、特別な加工・形状は見られない	
第899号 PL.44	10	割材		長 8.9 幅 1.9	厚 0.4 重 4.5	同定不可	割材小破片、劣化が著しく樹種不明	
第899号 PL.000	11	杭		長 22 幅 3.5	厚 0.6 重 不	同定不可	出土状態で杭と判断されるが、乾燥収縮のため現状では樹種等よく詳細は不明	
第899号 PL.44	12	加工丸木		長 49.5 幅 5.2	厚 5.2 重 990	クヌサ節	丸木の一端を1~1.5cm程のピッチで斜めに削るがその先は破損する。芯も削り断面はほぼ円形であるが側面には1cm前後の幅で面取りされた痕跡がある。反対側断面は腐朽による形状と考えられる	



第88図 IV区9面1・2・7・8号河道断面図、杭と1号河道出土遺物



第89図 IV区9面2号河道出土遺物

第3章 発掘調査の記録

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長	厚				
第89回 PL.44	13	加工丸木		長 幅	42 5.5	厚 624	4.8	丸木の一部を4方向から削る。このうちやや斜めに相対する2面は平坦面を作り出すように長く削り中央に、5cm角の四角い窪が削れている。この穴は両面からほぼ直角に掘り込んだと見られ結果的に中心部でくの字に曲がる。他の2面は杭先端の斜めに削り込む。反対側の端部は直朽による形状と見られる。	
第89回 PL.44	14	割材		長 幅	7.6 4.8	厚 11	0.9	クヌギ節	薄いみかん割の割材破片

第11項 遺構外出土遺物

(第90回、PL.44, 第27表)

1の石匙はⅣ区1号河道に混入していた遺物であり、同時期の遺構や土器は見つかっていない。

2の埴輪はⅠ区で出土した小破片で摩滅が著しい。

3の土師器杯はⅣ区8・9面で出土する。

中世陶磁器(4~10)はⅠ~Ⅲ区で出土する。Ⅲ区では遺構から陶磁器が出土しなかったが、遺構外遺物の状況はⅢ区中世屋敷と一致する状況である。

古銭4点はいずれも初鈔年の中世である。Ⅱ区の3点はいずれも1面出土である。出土位置は3面3号溝より東側で、溝で区画されているが内部で中世段階の遺構は見つかっていない。古銭3点の出土は、性格を考える有用な資料となる。掲載遺物のほかに、土師器小用品31片、中成型品1片、同大型品44片、同不明品74片、須臾器小用品6片、同大型品4片、灰釉陶器碗・皿類1片、同瓶類1片、中世国産焼締陶器2片、同在地系鉢・銅類3片、近世国産磁器45片、同国産施釉陶器49片、同国産焼締陶器2片、同在地系銅類14片、近現代遺物66片、時期不詳遺物18片が出土している。

第27表 I~Ⅳ区遺構外出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長	厚				
第90回	1	剥片石器 石匙		長 幅		厚 43.0	黒色頁岩//	幅広剥片の剥片端部に粗い加工を施し、内湾気味の刃部を作出する。	黒色頁岩
第90回	2	埴輪 円形埴輪	Ⅰ区8号溝 破片				細砂粒・片岩/良好/橙	摩滅が激しく器面の整形は不明。突帯は摩滅し基部のみ残存。	
第90回	3	土師器 杯	Ⅳ区8面 口縁部~底部片	口	9.0		細砂粒/良好/暗赤褐	口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	内面摩滅
第90回 PL.44	4	龍泉窯系青 磁 皿?	Ⅰ区1面 体部片	口 底		高	//灰	内面底部周縁に低い段差。体部内面に丸鋸状工具で撫したと推定される放射状文。内外面に青磁釉。	中世。
第90回 PL.44	5	龍泉窯系青 磁 碗	Ⅲ区8面 口縁部片	口 底		高	//	外面横撫で文。内面無文。内外面に青磁釉。	Ⅱ~b・c類。 13世紀前後~ 前半。
第90回	6	陶美陶器 甕?	Ⅱ区5.5面 肩部片か	口 底		高	//	内面は横撫で。外面は板状工具による縦撫で。	12世紀~13 世紀前半。
第90回	7	常滑陶器 密か甕	Ⅲ区8面 口縁部片	口 底		高	//	器壁はやや薄く、口縁部は外反。端部上面は段をなして薄く仕上げられる。内外面に自然釉。外面の輪はほとんど割れとなる。	12世紀第3四 半期~第4四 半期
第90回	8	在地系土器 皿	Ⅰ区 1/6	口 底		高	B//にぶい橙	口縁端部付近で外反。	中世。
第90回	9	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底		高	B//黒褐	断面は褐色。器表は黒褐色。口縁端部上面は平円で内面撫は段をなす。口縁端部外面撫は僅かに突き出る。	15世紀後半~ 16世紀後半。
第90回	10	在地系土器 片口鉢	Ⅲ区 1/4	口 底		高	B//暗灰	断面はにぶい赤褐色。器表付近から器表は暗灰色。底部回転系切調整。内面は使用により器表摩滅して平滑となる。	中世。
第90回	11	石製品 火打石	Ⅰ区黄土	長 幅		厚 15.0	石英	背面側の各エッジは敲打され、潰れた状態にある。厚い板状剥片を分割して用いる。	
第90回 PL.44	12	銅製品 銭貨	Ⅰ区一括	長 幅	2.51 2.52	厚 25.23 3.12		質地元悪。文字および外縁の形深く明瞭。裏面の那は浅いが明瞭	初鈔1007年
第90回 PL.44	13	銅製品 銭貨	Ⅱ区一括	長 幅	2.54 2.58	厚 25.81 9.42		元悪道差と銭種不明の2枚銘付く。跡の状況から銅銭と見られるが表面を赤銅が覆う	初鈔1078年
第90回 PL.44	14	銅製品 銭貨	Ⅱ区一括	長 幅	2.44 2.38	厚 23.76 3.13		間元道差。劣化した銅銭表面を赤銅が覆い文字等は明瞭に観察できない。表面の孔輪郭は不明瞭	初鈔671年
第90回 PL.44	15	銅製品 銭貨	Ⅱ区一括	長 幅	2.41 2.42	厚 24.23 2.49		文字判読不能。外縁の欠けは劣化破損による	



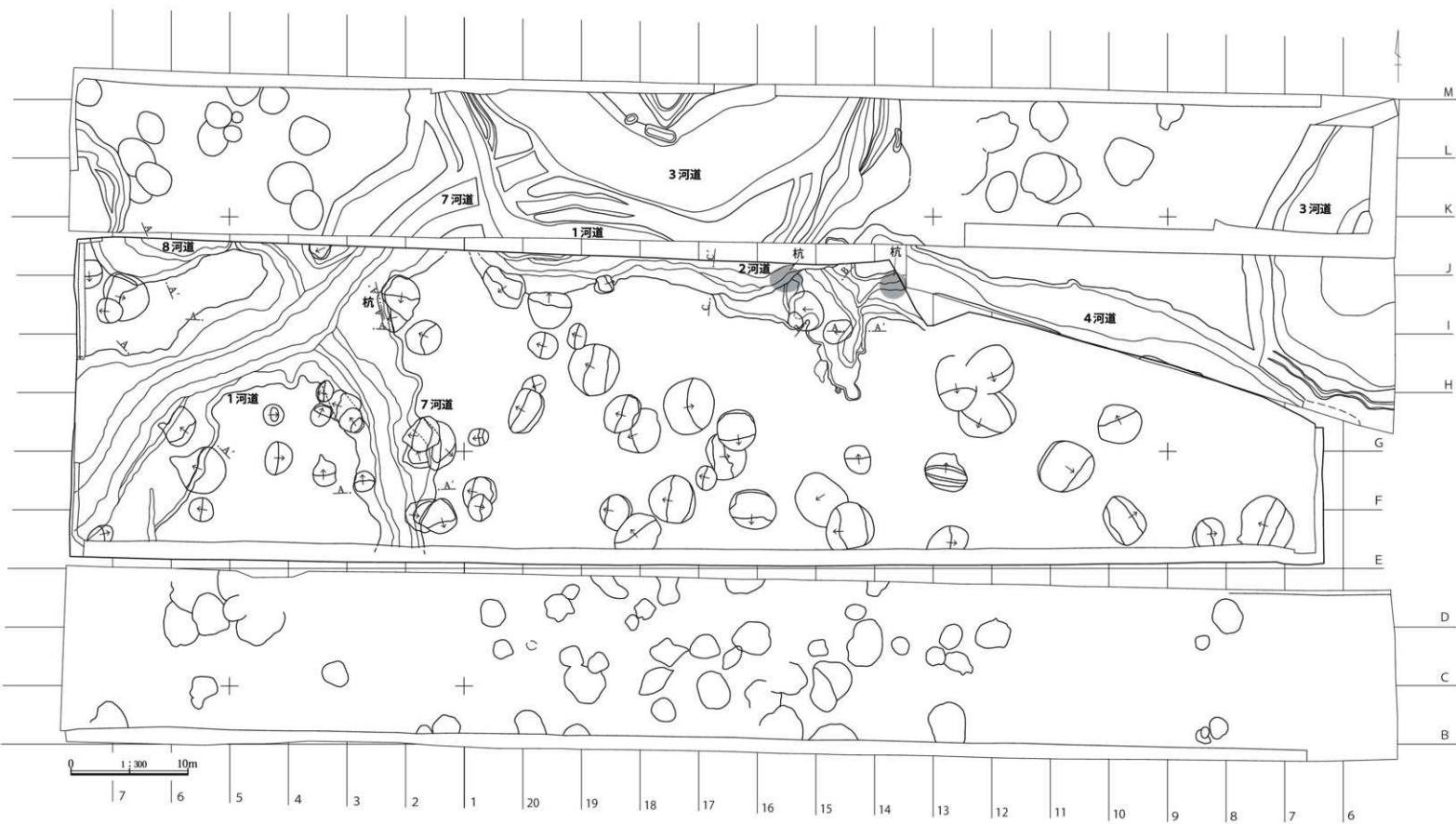
第90図 1～IV区遺構外出土遺物



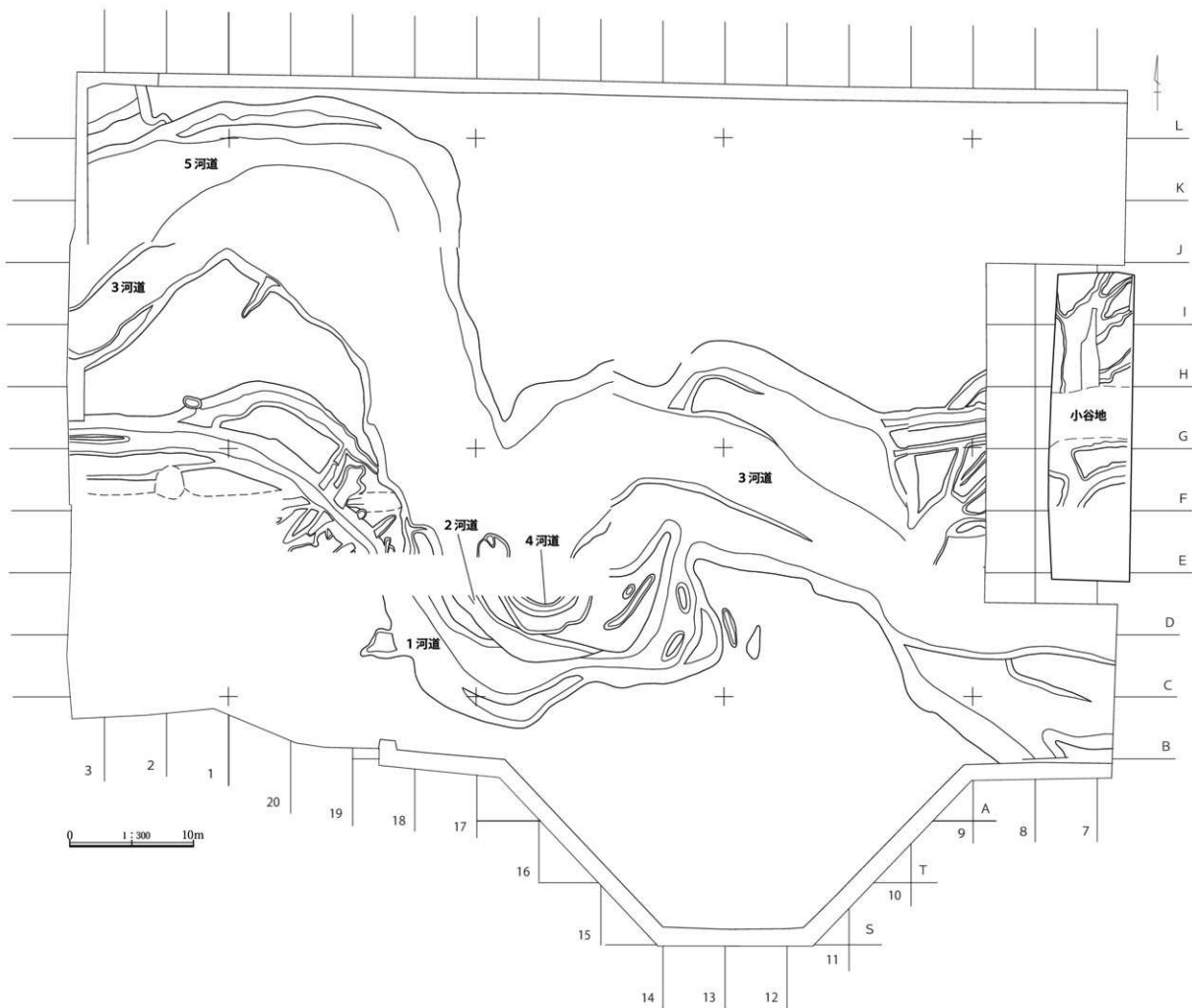
1次調査IV区9面2号河道と出土した木器類(南から) 底面よりも高い位置で出土したものが多く、やや埋没した段階であることがわかる。



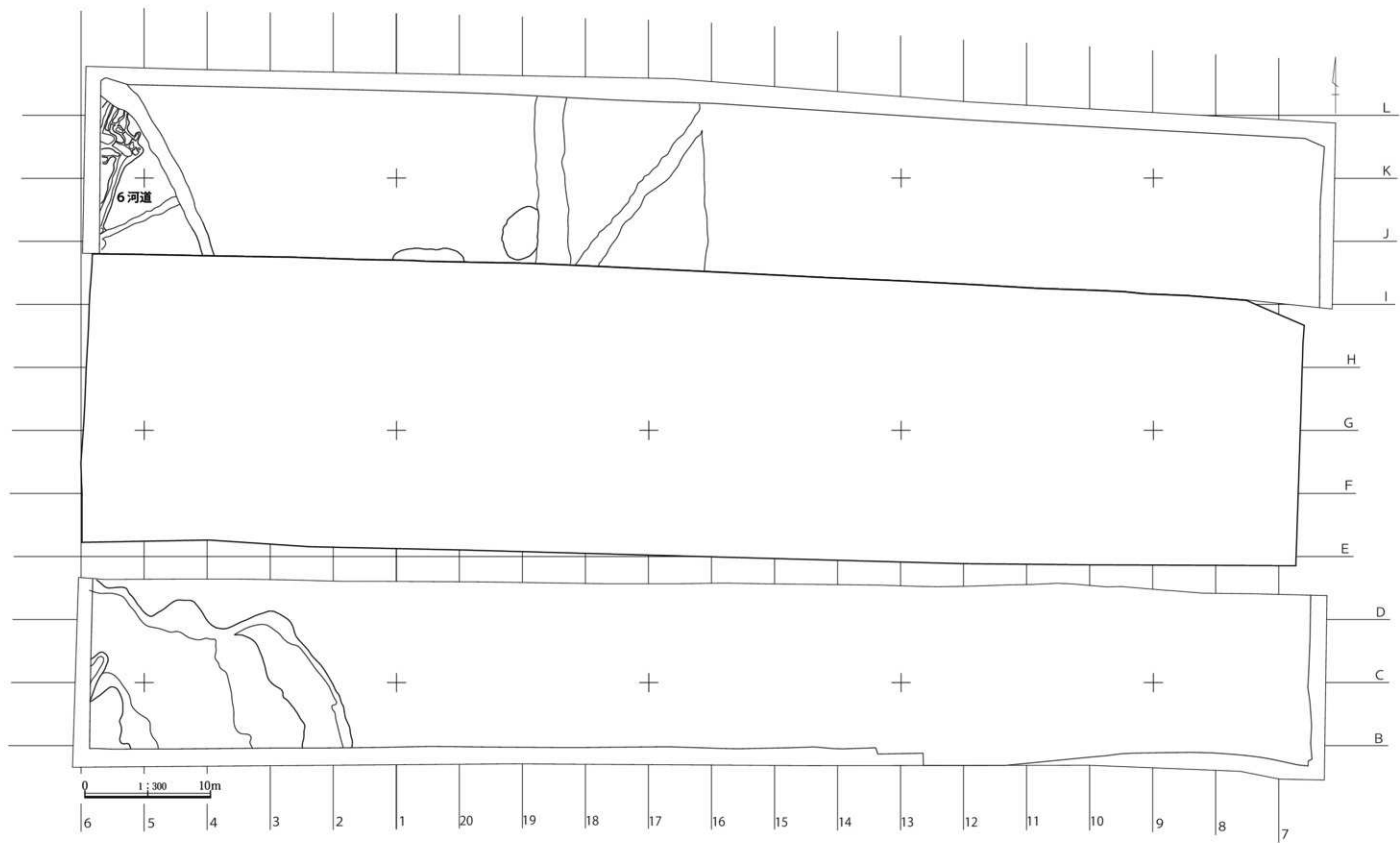
1次調査IV区9面2号河道から出土した又鎌(東から) 周辺での水田耕作がうかがえる出土遺物である。



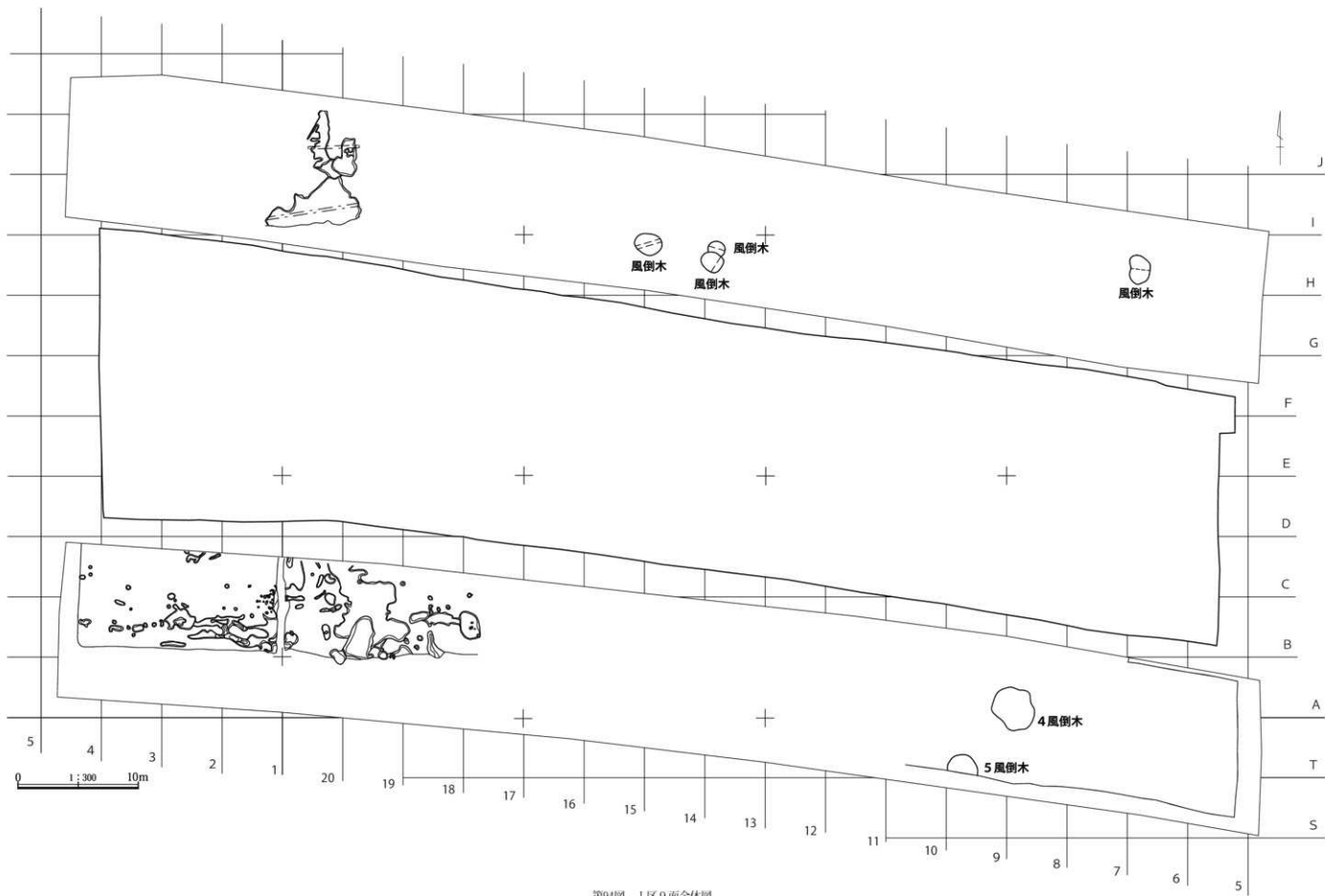
第91图 IV区 9面全体图



第92图 Ⅲ区9面全体图



第9区 II区9面全体图



第94图 1区9面全体图

第4章 鑑定分析

第1項 出土人骨・獣骨鑑定

1 はじめに

本遺跡では、調査された土坑墓や溝の性格を理解するため、出土人骨・獣骨の鑑定分析を生物考古学研究所・橋崎修一郎氏に委託して実施した。

2 分析の目的

I区2面疑似畦畔と重複して土坑墓が発見された。I区3面8号溝では、埋没土中から炭化材に混じって焼骨が出土した。これらについて、年齢・性別・個体数・部位の鑑定を行い、あわせて出土状況から火葬及び埋葬時の体位や、火葬方法や取骨法など、幅広い分析を行った。

獣骨資料は、I区2面疑似畦畔のトレンチ、II区3・23号溝から出土した。獣骨の種類を判別し、残存状況などについて分析を行った。

3 分析結果

(1) I区2面1号墓出土人骨

①埋葬状態・頭位

人骨は、長軸約120cm・短軸約65cm・深さ約30cmの隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。頭蓋骨及び歯しか出土していないが、出土状況から、頭位は北で顔面部を東に向けた横臥屈葬で埋葬したと推定される。

②副葬品

副葬品は寛永通宝及び皿が出土している。

③被葬者の個体数

出土には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

④被葬者の性別

頭蓋骨の厚さは薄く、出土骨の歯冠計測値が小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

⑤被葬者の死亡年齢

出土骨の咬耗度を観察すると、上顎左の第1大白歯



写真1. 齊田中耕地遺跡I区1号墓出土人骨
[左側頭骨]



写真2. 齊田中耕地遺跡I区1号墓出土人骨
[出土咬合面観]

(M1)及び第2大白歯(M2)は象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。下顎左第1大

第28表 齊田中耕地遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	齊田中耕地 1号墓		江戸時代人* Matsumura, 1995		現代人** 藤田, 1959		
		右	左	♂	♀	♂	♀	
上顎	M1	MD	-	9.6	10.61	10.18	10.68	10.47
	BL	-	11.3	11.87	11.39	11.75	11.40	
M2	MD	-	9.3	9.88	9.48	9.91	9.74	
	BL	-	11.0	12.00	11.52	11.85	11.31	
下顎	M1	MD	10.7	10.6	11.72	11.14	11.72	11.32
	BL	10.4	10.4	11.15	10.62	10.89	10.55	
M2	MD	10.5	-	11.39	10.78	11.30	10.89	
	BL	9.9	-	10.75	10.21	10.53	10.20	

注1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。
 注2. 歯種は、M1(第1大白歯)・M2(第2大白歯)を意味する。
 注3. 計測項目はMD(歯冠遠心径)・BL(歯冠軸心径)を意味する。
 注4. 「*」は、MATSUMURA(1995)より引用。
 注5. 「**」は、藤田(1959)より引用。

臼歯(M1)も同様である。したがって、死亡年齢は、約30歳代から40歳代であると推定される。

◎古病理

俗に虫歯と呼ばれる齲蝕が、下顎右第2大白歯(M2)の咬合面に認められた。

(2) I区3面8号溝出土人骨

8号溝から、火葬人骨が出土した。火葬人骨のみ検出されたため、火葬墓なのか火葬跡なのかは不明である。

火葬人骨はほとんどが白色を呈しているため、火葬の際の温度は約900度以上であると推定される。火葬人骨の出土部位は、頭蓋骨片及び四肢骨片であるが、残存量が少ないため、死体をそのまま火葬にしたのかあるいは白骨化したものを火葬にしたのかは不明である。残存量が少ないため、個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

(3) I区出土馬歯

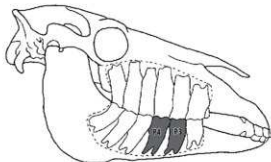
I区では、2面疑似畦畔から、馬歯が出土している。

①2面疑似畦畔

疑似畦畔のトレンチB-B'から出土している。馬歯片が3点出土しているが、いずれも破片であるため正確な歯種の同定は不可能であるが、臼歯片である。



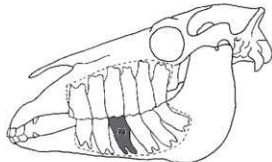
写真3. 齊田中耕地遺跡II区3号溝出土馬歯
[下顎右P3・P4: 頰側面観]



第95図 齊田中耕地遺跡II区3号溝出土馬歯出土部位図
[下顎右P3・P4]



写真4. 齊田中耕地遺跡3号溝出土馬歯
[下顎左P4: 頰側面観]



第96図 齊田中耕地遺跡II区3号溝出土馬歯出土部位図
[下顎左P4]

(4) II区出土馬歯

II区では、3号溝と23号溝から、馬歯が出土している。

①3号溝

中世の3号溝から、馬歯が出土している。出土状況は不明である。歯種が同定できたものは、下顎右第3小白歯(P3)・下顎左右第4小白歯(P4)の3本である。その他の破片も、馬歯片である。上顎歯及び下顎歯の破片が含まれていることから、元々は、馬の頭蓋骨があったものと推定される。歯以外の頭蓋骨は、経年変化により溶解したと理解すれば馬歯の残存状況と合致する。

出土馬歯には、重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。馬の場合、犬歯の有無で性別が推定されるが、今回は、犬歯は出土していないため性別は不明である。全歯高から、死亡年齢は約7歳であると推定される。なお、破損しているため、計測可能な馬歯はなかった。

②23号溝

近世の23号溝から、馬歯が出土している。上顎切歯片であると推定された。歯種の同定は、できなかった。

第5章 まとめと考察

第1項 まとめと問題点

1 1面

As-A降下以降の遺構であり、埋没土に浅間A軽石を含む。天明3年(1783)以降の遺構面である。溝は用水路であったものもあり、長く利用された末、最終的には場整備により埋没したものも含まれる。

復旧坑・痕群はⅠ・Ⅱ区のみで掲載となったが、1次調査ではⅢ区でも多く検出されている。Ⅳ区で検出されていないのは、後代に削平され消滅したと考えられよう。遺構の性格は、天明3年の噴火災害に対応した復旧痕跡である。被災前は農地であり、水田が多かったと思われる。Ⅰ区1面7号復旧坑群は同7・25号溝によって区画された農地に施されたと考えられる。1次調査Ⅲ区の状況は顕著である。Ⅲ区1号復旧溝群は南北軸で、東西両側に無遺構空間がある。Ⅲ区2号復旧溝群は東西軸で、北側に同規模の無遺構空間がある。Ⅲ区3号復旧溝の場合は複雑で、南側に同7・8号復旧溝群が点在して、残りが無遺構空間となっている。耕作面に高低差があり、上面が後代に削平されている例はあるが、Ⅰ・Ⅲ区の無遺構空間は施工されていないと見える。降下した軽石に粗密はあるにしても、復旧が必要な部分と必要ない部分が混在することは考えにくい。施工方法が異なり、残存条件が違ったとみるのが自然であろう。

復旧坑群を細かく見ると、3類型に分けられる。タイプ1はⅢ区1号復旧溝群で、幅1m弱で深さも30cm近く、遺跡内で最大幅である。間隔は10cm程度開けて並走している。タイプ2は、遺跡内で最も多い事例である。Ⅱ区5・6号復旧痕群(タイプ3)を除く残りである。幅は50cmを超える例が少なく、深さも20cm弱が多い。タイプ1の規模が半分程度になった例である。検出位置や状況はほとんど変わらない。タイプ3はⅡ区5・6号復旧痕群で、残存状況は悪い。浅く底面は凸凹で掘削痕を残している。溝の間隔は狭く輪郭も乱れる。

タイプ1は幅約1mであり、通常の耕作規模ではな

い。溝や穴を掘るという意識がなければ掘れない規模である。10cm程度の間隔で整然と並んでおり、同時にすべて掘れば、崩れる場合もあり掘削土の処理にも困る。1条ずつ掘削して、埋めながら次を掘る方が効率的である。深さも30cmで深い。本地域で灰・軽石の厚さが30cmを超えるはずはないため、灰をかき集めて埋めたと考えた方が妥当である。いわゆる天地返しではなく、灰掻き溝となる。溝の数を減らすには、間隔を開けることになる。数を半分にした場合、深さは倍になる方式である。1号復旧溝群ならば、広い範囲が賄えるため、溝の数量は半分以下で済むだろう。状況はこれに非常に近い。

問題は掘削位置であろう。耕作地の半分程度を掘るとすれば、間隔を開けて分散し、灰の移動距離を少なくした方が効率的である。1次調査Ⅲ区1号復旧溝群のように、中央に5条まとめたのでは効率が悪い。しかし、復旧坑を分散させた場合、後日施工した場所が分からなくなる。地盤は緩くなるので、填圧が必要になるし、耕作の際も配慮が必要になる。そこで、灰の移動距離を増しても、一か所に集めたものと考えたい。あえて効率を犠牲にしたのだろう。

タイプ2は基本的に間隔を開けて溝を掘るタイプであり、溝の本数を減らした結果であろう。幅が約50cmあるため、1条の掘削幅では賄えない。灰掻き溝に近い作業である。問題は、無遺構空間が半分残る点である。別の復旧作業をした可能性がある。軽石をかき集めて山にしたり、穴を掘って埋めることもあるだろうが、半分だけやることが理解し難い。軽石・灰の全重量は溝掘削部分で賄える量でもないだろう。最も理解し易いのは、軽石は移動しなかったと考えることだ。軽石は耕作土に混ぜ込まれたのである。半分は復旧坑で埋め込まれているので、軽石の量も半減している。復旧の一つの選択肢と考えられよう。

タイプ3は、いわゆる天地返しであり、1条の掘削に並行して、軽石を埋め溝の掘削土を載せていく作業である。連続して行うため、間隔は狭く輪郭も一定しない。掘削作業としては一回の作業で完結していくので、必要

箇所だけ施工することも可能であろう。Ⅱ区の場合、検出部分も半端で狭いため、削平により多くの痕跡が消滅したものと見なされよう。

2 2面

As-A降下以前で、埋没土に浅間A軽石を含まないか、概ね近世とみられる遺構面である。Ⅰ区では土坑墓1基と疑似畦畔が検出された。ここでは溝についての問題を、まとめておく。

Ⅱ区5・23号溝とⅢ区3号溝は同一で、広域に及ぶ水路である。本来上流となるⅣ区1面4号溝が、ほぼ整備以前まで継続使用されたため、調査面がわかれてしまった。Ⅱ区5・23号溝とⅢ区3号溝は、洪水などで埋没し機能を終えた。1次調査Ⅱ区5号溝の上位に浅間A軽石の復旧溝群が被覆している点で、下限が判明する。1面Ⅳ区4号溝の末流は、Ⅳ区東側調査区域外を南東方向へ直進したものと推測される。付け替えられたものか、元々分岐していたものかは不明である。水路としては南東方向へ存続したが、Ⅲ区からⅡ区へ向かう流路は廃止となった。規模も大きく流域への影響は大きかったであろうが、末流は玉村宿で宿用水に合流する。古くから基幹的な流路であったろうが、末流の変化は上流にも影響を及ぼし、流路の変更を可能にしたのだろう。広い視野で今後とも検討が必要である。

3 3面

As-B降下以降で基本土層Ⅲを埋没土とする。あるいは中世とみられる遺構である。Ⅲ区中世屋敷は2次調査の成果により再評価が必要となるため、次項で考察を行う。屋敷の東側であるⅠ・Ⅱ区では、溝により区画された空間が4か所以上存在し、Ⅱ区では遺構間をつなぐ1号橋も検出されている。1号橋の北岸はⅡ区4号溝と同71号溝北側延長部とに挟まれた空間である。両側に区画された空間を意識しつつ、その境界が通路となっていたと判断できる。同様に橋の南岸もⅡ区6号溝の東側に渡る。Ⅱ区2面23号溝との重複でわかり難いが、Ⅱ区3号溝も南流していたとみられる。Ⅱ区6号溝と同3号溝の間に帯状の空間があり、ここを通路が通じていた可能性は高い。周辺の区画された空間の性格は不明となっているが、通路によって周辺に往来のある遺構群であった。重要度

は橋のしっかりした構造で証明されている。

4 4面

As-B下面で検出された遺構となるが、Ⅰ区は基本土層ⅢC上面である。水田が主な遺構であり、Ⅰ・Ⅳ区で検出された。畦は潰れて幅広く、被災当時休耕していた可能性が高い。Ⅰ区水田は、Ⅱ～Ⅳ区5面水田に極めて似ており、Ⅰ区で5面水田が検出されていないことを加味すれば、同時期の水田を起源とすると考えられる。埋没条件の違いにより調査面が分かれているが、相互の関係を検討する必要がある。この点については、5面で後述する。ここでは、Ⅳ区4面水田と5面水田、6面の溝について述べる。

第97図はⅣ区4面水田部分に5・6面の遺構を重ねた図である。一見してわかるとおり、4面の畦は5面水田の畦とほぼ一致している。4面の畦が幅広く潰れているのは疑似畦畔A(凡例参照)だからであろう。6面の24号溝が、この畦に並走するのは余分とも思えるが、何らかの意図をもって畦畔に掘られた深い溝という可能性がある。この点は4面の畦にも関係してくる。南北畦が特によく残っているのは偶然だろうか。この南北畦は条里水田の坪境と位置づけられている(中島・吉澤2004)。詳細は5面の検討に譲るが、意図して残されたと考えた方が、理解しやすい遺構である。

以上の検討によっても、Ⅰ区4面水田は本来5面で扱うべき遺構と考える。

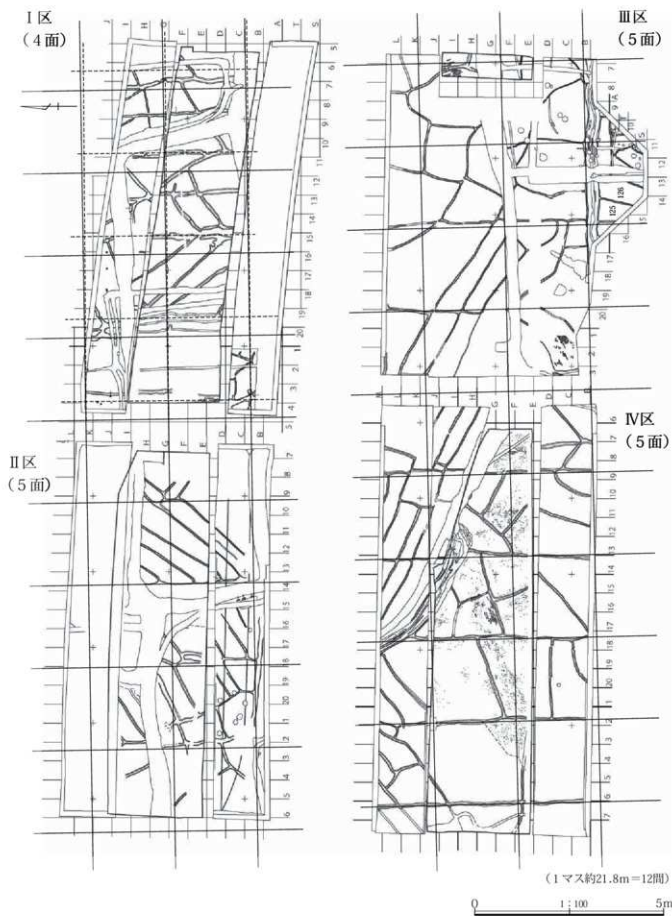
5 5面

(1) 水田形態

基本土層VA上面で確認された遺構である。Ⅱ～Ⅳ区で水田が検出された。まとめにあたり、保留してあるⅠ区4面水田も含めて考えたい。第98図はⅠ区も含めた編集図である。方眼は1マス約21.8m(12間)で、真北に対して西へ1.5度傾けである。作図の目的は条里地割との関係を表している。Ⅱ区から西側では南北畦がマス目に一致している状況がわかる。マス目はⅣ区西端畦の中心を起点にあわせてある。この畦は前項でも触れたとおり、中島氏らによって坪境と推定されている位置である。東西軸については基準となる畦が見いだしにくい。用水路であるⅢ区47号溝が中島らの言う坪境の推定線に近い



第97図 IV区4・5・6面合成図



第98図 4・5面水田地割想定図

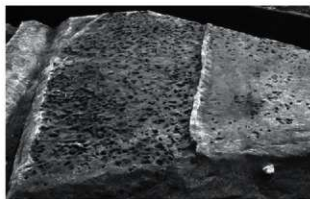
ため、この溝の北縁とした。

詳細にみると、Ⅳ区西端から南北畦は5条すべてが想定したマス目による。町道を挟んでⅢ区西から2条までは、一致する畦が調査区を南北に貫通する。西から3条目は南側で一部一致するが北側はずれて、4条目は南東部が調査区域外となるためか、一致する部分がない。Ⅱ区では若干ずれながらも西から3条は南北畦が通る。西から4条目は一部だけに見えるが、南側で水田が不明瞭となるため、畦が通らないとは言えない。町道を挟んでⅠ区になると、これまでのマス目では一致しなくなる。そこでマス目を東へ約5m移動した破線のマス目を重ねてある。南北畦とほぼ一致する状態となるため、Ⅰ・Ⅱ区の境界付近で条里地割が変わったと思われる。Ⅰ区は調査面が4面であるため、条里地割の違いは施工年代の違いを示す余地がある。畦においても違いがあり、Ⅰ区では南北畦の数が増え、マス目の中間に畦が1条多く造られている。直線的で基準線と考えられる。

『国史大辞典』によれば、「条里制の一町を十段に分ける半折型(色紙型)と長地型(短冊型)」とがある。前者は一町を横二つに、縦五つに分けるものであって、その一区画(一段)は、長さ三十間、幅十二間となる。(中略)これに対して後者は縦に十に分けるもの(落合重信)とある。長地型は長さ一町(六十間)、幅六間の区画が十段並ぶという。形態からⅡ～Ⅳ区は半折型で規則どおり十二間(約21.8m)間隔で南北畦が設けられている。一方、Ⅰ区は長地型と思われる。東西畦で直線的なものがないのは、Ⅲ区47号溝を基準とすれば、約54m北側が境界となるためと考えられる。

水田区画に着目すると、Ⅱ区の区画は北東-南西軸に長軸を持つものが目立つ。Ⅲ区は中央付近に方形の区画が碁石状に並ぶ。Ⅲ区西半部からⅣ区20号溝北側は北西-南東軸に長軸をもつものが並んでいる。これらの区画形態から、水回しはⅢ区中央部へ向かって漏斗状に流され、Ⅲ区47号溝に落水したと推測できる。Ⅳ区20号溝南側の区画は、北東-南西軸に長軸を持つことから、南西方向へ水が回されたと思われる。

Ⅰ区は複雑である。5区画は細長く、東側に幅の広い畦が並走する。東脇の区画は北西-南東軸の区画で、36区画は東畦に水口が確認できる。更に東側の区画は逆に北東-南西軸に区画が変わり、12区画は帯状に南へ延び



Ⅲ区5面水田125・126区画
ている。5・12区画は水を回すための区画形態として注目される。

(2) 水田に関連する遺構

水田面の状態として注目されるのが、Ⅲ区中央南端に逆台形に調査区が張り出した部分である。北側をⅢ区47号溝が東西に走向している。124～133区画まで10区画が分布している。写真の左側(東側)が126区画で、右側(西側)が125区画である。両水田面の状態は異なっている。126区画は凸凹していて東側133区画まですべて同じ状態である。畦は台形～三角形に盛り上がり、水口も明瞭である。縮尺1/300の全体図でも他の畦と太さが異なることがわかる。写真右側の125区画は水田面が平坦で、牛蹄跡と溝状の耕作痕5条程度が確認できる。西辺の畦は太くなっている。

状況から126～133区画までは荒起こし状態であったと考える。畦は既に完成した状態である。被災した季節は初夏と推測されよう。調査段階では凸凹した土塊の間にわずかに牛蹄跡も観察できた。124・125区画は荒起こし前で、畦も整形されていないだろう。本遺跡で検出された他の5面水田は、ほとんどこの状態に該当する。

牛蹄跡は、126～133区画を除くⅢ・Ⅳ区の水田面で、多量に検出されている。Ⅱ区で確認できていないのは、水田自体の遺存状態が悪いからで、有無は未確認である。Ⅰ区4面水田でも確認されていない。126～133区画の状況から、水田面は一度攪拌されるため、検出された牛蹄跡は収穫後から荒起こし前の状態を示している。牛蹄跡は調査時の所見で、数時期が混在するという印象を持った。隣接する上新田中道東遺跡でも同様に「洪水前後の一定期間内に踏み込まれた蹄跡」と結論づけている(小島2012-168頁)。Ⅳ区では埋没状況の断面観察を行い、踏み込みが深く、洪水砂で埋没する状況を確認した。

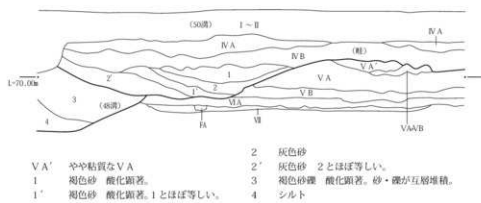
牛の歩行はどの程度の時期差があるのだろうか。荒起こしが及ばない深さまで踏み込んだ場合は、前のものが残る。洪水で埋没した直後に歩行した場合、126～133区画でも上面から踏み込み、荒起こし面を牛が踏みつぶさなければならない。洪水直下面の検出が限られている状況で、結論づけることは難しい

が、復旧と呼べるほど短い時期差ではないと考える。

溝状の耕作痕は、Ⅲ区水田の143・144区画、1次調査Ⅲ区115・125区画、Ⅳ区153区画で検出されている。Ⅲ区115区画は確認面が下がっており、基本土層ⅥA上面で他の例とは状況が異なる。埋没土はⅢ区143・144区画を除いて褐色砂で、同115区画も同様である。基本土層ⅣCを形成した洪水も数時期あると考えられ、Ⅲ区115区画は古い段階の洪水で埋まる可能性もある。同143・144区画は洪水砂と基本土層Ⅴの混土である。耕作痕にも数時期が存在する。同115区画の耕作痕は、砂を除去しても牛跡跡のような明確な凹みにはならなかった。水田面に造られた溝に砂が入ったわけではなく、耕作作業時に上層の砂が入ったからだと考える。Ⅲ区115区画を実見された農学者有馬洋太郎氏(社団法人農村生活総合研究センター(当時))から「犁のフネ部の通過痕跡ではないか」という助言を頂いた。溝状の耕作痕は北側に湾曲するままとまりと、南側に湾曲するままとまりが認められる。「状況は牛馬耕による移動作業に合致している」という話であった。

水路はⅢ区47号溝、Ⅳ区20号溝が畦との関係で同時と判断でき、用水路と判断できる。両者は同一の用水路と想定される。これと水田を関係づける水口は見つかっていない。Ⅳ区20号溝の南縁は後代の溝で壊されており、畦も途切れている。

Ⅲ区50号溝も用水路である可能性が高い。1次調査の報告では「記録が充分でなく」と断りつつ、状況から用水路としている。しかし、記録が不十分でなく、検出状況が不良とするのが正確であろう。検出面はⅢ区115区画と同様に基本土層ⅥA上面となった。重機による掘削の際、この部分は基本土層Ⅷ相当層が露出しているという



第99図 1次調査Ⅲ区48・50号溝断面

認識があり、微高地と判断されていた。5面水田を調査するにあたり、合わせて重機掘削を行った経験がある。東方へ掘り進んだある段階で、畦が連続して延びていることが確認され、精査した結果西端まで水田が広がるということが判明した。その際、Ⅲ区114・115区画は既に基本土層ⅥA面まで下がっていたのである。平面図ではⅢ区50号溝に接して畦状の高まりが描かれている。ⅣCが被覆していないので、厳密には疑似畦畔Bである。第99図はⅢ区114区画北側の土層断面である。Ⅲ区48号溝と同50号溝は重複しており、後者が後出で、5面水田に伴っている。Ⅲ区48号溝も用水路であろうが、一段階前に位置づけられよう。Ⅲ区50号溝底部の中心は若干東へ寄るが、そこから北西へ曲がりⅣ区20号溝へつながると推測される。Ⅲ区50号溝東側の畦の高さは10cmを越える。

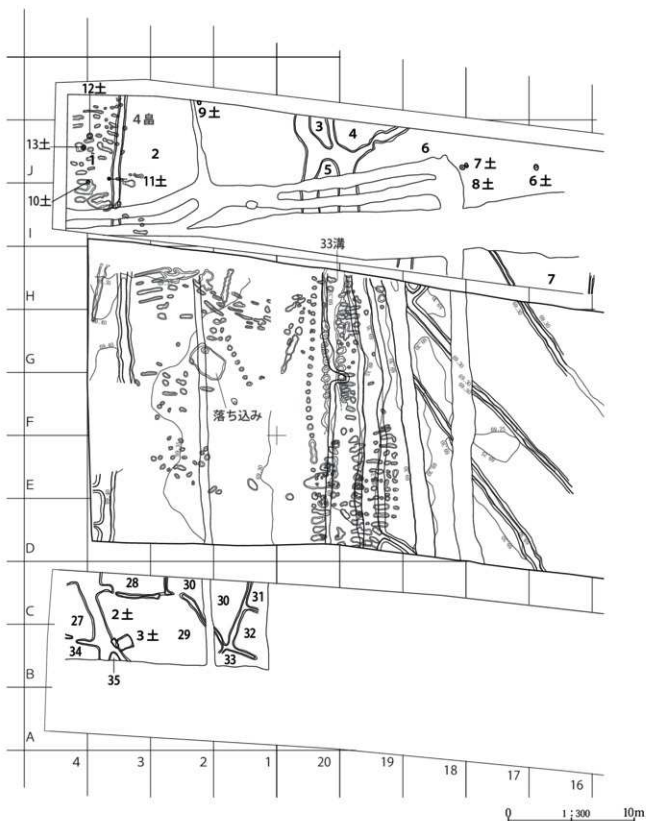
Ⅲ区47号溝・Ⅳ区20号溝で出土した遺物の年代は、9世紀第3四半期から同第4四半期と幅がある。両溝とも洪水によって埋まっている。溝内部で層別的な分類はできなかったが、洪水に時期差も想定される。Ⅲ区48号溝が埋没した後、同50号溝が掘り直されたと考えれば、出土遺物の年代幅を理解することができる。牛跡跡や耕作痕にVA下位で時期差が想定される点も、5面水田が一度復旧されたと考えると理解しやすいだろう。

6 6面

基本土層Ⅴ以下でHr-FAより上層で検出された遺構である。Hr-FAがない場合、Ⅷより上位で確認した場合となる。実質的な作業として5面水田より古いものが選別された。遺構量は少ない。Ⅳ区24号溝は4面で既に検討したので、ここでは1区の耕作痕・落ち込み・関連する溝についてまとめる。

第100図はこれらの遺構と1区4面の該当範囲を重ね合わせたものである。完全に一致するわけではないが、関連づけるには十分に一致していると考ええる。中央の1区33号溝は4面水田5区画とほぼ重なっている。5区画

は特殊な形態で、水回しを意図したと考えている。この下位に1区33号溝があることは偶然と思えない。前段階で水田の水路であった可能性を示唆していよう。6面の遺構は、確認面が基本土層Ⅶ～Ⅷ上面であったもので、



第100図 1区4・6面合成図

掘り込み面は確定できていない。埋没土は灰褐色土で基本土層VかVIを主体とする。4面水田耕作土との判別は難しい。溝の両側に見られる短い耕作痕は何を意味するのだろうか。範囲が狭く、実際は東へ伸びていたという可能性も残る。しかし、西側は削平された可能性は低く、西へ延びると考えにくい。東側も形態が一致するため、同様であろう。耕作痕は、帯状の狭い範囲を横断方向に掘削したと見なされる。東側の耕作痕列の上位には、4面水田5区画東隣の幅広い畦が重なる。畦道を思わせる広さである。西側の耕作痕列は、同5区画西側の土手部に一致している。通常の畦とは違う高まりと考えれば、特別な造作も想定できる。掘削が基本土層VIIに達する点は注目される。同VIIは灰色粘質土で、水を通しにくい。これを採掘して壁面に塗り込むことは考えられる。耕作痕と名付けられているが、水田修繕に関わる掘削痕である可能性が高い。

7 7面

Hr-FA直下面と基本土層VIII段階である。前者は水田で、後者は疑似畦畔Bであった。水路は見つかっていない。水田は谷地地形に形成された極小区画水田である。9面旧河道によって形成された埋没谷が、地形基盤となっている。水田は埋没谷の中心部に概ね造られており、用水は掛け流しが基本と見なされる。

疑似畦畔の検出はIV区のみであった。水田(Hr-FA直下)に比べると、東半部の区画はやや大きい。下位に旧河道がない部分もあり、谷水田とは考えられない。遺構分布は残存条件の違いに左右され、IV区のみで検出されたものと考えられる。8面ではII～IV区で細長い溝が検出されており、関係も想定できる。疑似畦畔の西半部は極小区画である。北端は旧河道と重なる部分もある。疑似畦畔の耕作土はVIIAで、Hr-FA直下水田と同じである。検出条件で直下でない場合でも、疑似畦畔として確認は可能であり、直下のものと前段階のものが混在する可能性がある。区画規模の違いには、この可能性も残る。

8 8面

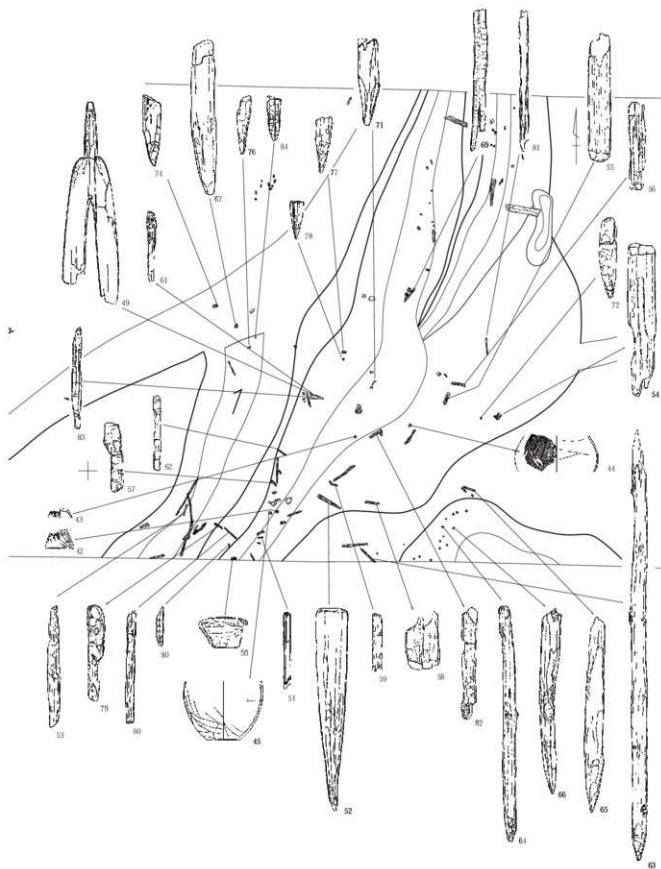
基本土層VIIIを確認面とする遺構で、9面河道が埋没谷となっていた段階と考えられる。遺構は溝が中心であった。III・IV区の溝群は、9面の旧河道が埋没した谷と結

んでいた。埋没土に砂が多く、遺構の性格は水路である可能性が高い。IV区では7面で浅間C軽石を含む疑似畦畔が検出されている。谷水田でないため、水路がないと水が回せないと思われる。状況から8面の溝が候補となる。IV区8面57号溝は7面疑似畦畔118・119区画間の畦畔部を通して、走向方位が一致している。溝が掘られた状態では水田と齧齧が生じる。疑似畦畔は基本土層VIIAがないことが確認条件であるため、埋没する溝を畦畔と誤認した可能性も残る。IV区62号溝も疑似畦畔の長軸方位と一致している。想定される水田区画の中心を通るため並存は難しい。前段階で関係していた可能性もあろう。

9 9面

基本土層VIII上面で確認された遺構で、最終調査面である。旧河道と小谷地である。埋没土上位にAs-CやHr-FAが堆積するものがあり、埋没年代は一律でない。2次調査IV区1・2号河道でも杭が検出され、用水路としての利用が想定されている。特に同2号河道の杭の本数は多く、位置づけが必要である。1次調査北側2号河道でも杭を含む多量の木器が出土していることから、これらと合わせて検討したいと思う。

第101図は1次調査IV区2号河道の遺物出土状態を示している。この下側に2次調査の2号河道が接続する。位置関係は第102図で確認できる。打ち込まれた杭や倒れた杭などが多いが、又鉋や板材など木器も含まれる。流水方向は北方向である。この部分では河道は2条あり、厳密には西側が1号河道につながる可能性もある。4世紀の遺物も出土し、報告では4・5世紀の所産としている。杭の打設状況が分かりにくいので、別に第102図を作成した。合わせて1次調査南壁の土層断面を示した。埋没土にHr-FAが両側で確認できるが、IV区2号河道部分では見られないため、Hr-FA降下後も流水があった可能性がある。2次調査部分では断面観察から、As-C降下以前に埋没していた部分が広く存在するため、トーンをかけて除外した。埋没土にHr-FAが見られる部分もあり、北側1次調査部分と若干一致しないだろう。1次調査2号河道は2条に分かれるが、杭は北西-南東軸にほぼ直線的に並ぶ。両者は並存していた可能性もある。打設地点は合流あるいは分岐点である。IV区3号河道の東壁にかかるものもある。東側の杭列の北側には、別の溝が分

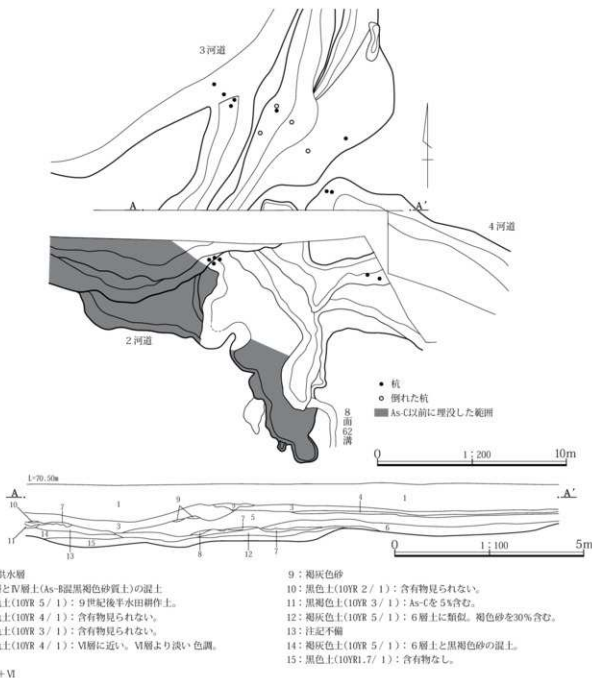


第101図 1次調査IV区2号河道遺物出土状態

岐している。呼称はなく詳細は不明だが、ここで分岐したとすれば分水路の可能性が高い。杭列は状況から護岸ではなく、堰であった可能性が高い。南側に多量の遺物が出土した状況は、流水が淀むことで堆積した可能性が高い。板材は堰の部材とも考えられる。

2次調査側の杭は南壁に打たれている。底面に打たれていないことから、護岸と判断した。位置は東西に分かれる。中央部の溝は北方へ流下しており、西へやや折れて1次調査部分と接続する。多少の流水も推測されるが、

1次調査側が本流とも思える。西側の杭列は合流部の壁面を強化した護岸と見なされよう。東側の杭列は東へ延びる河道の南壁に位置する。河道はIV区4号河道と同一か接続すると判断できる。流水は南東方向へ流れた可能性がある。状況を整理すれば、1次調査方向からの導水が基本にあり、杭はそれに対する護岸であったと考える。南からの流水は、ここで南東への流れに合流したと考えた方が自然である。



第102図 IV区9面2号河道杭分佈図

第2項 考察

1 Ⅲ区3面中世屋敷の再検討

(1) 溝の再評価

1次調査では中世屋敷が調査され、筆者は報告書において検討を行った(飯森2010)。2次調査では、Ⅱ・Ⅲ区で関連する溝が検出された結果、見直しが必要となった。

Ⅲ区13・14号溝は、1次調査の北側に連続する部分が検出された。両溝は屋敷の東辺を区画する溝として、屋敷初期段階に位置づけられていた。Ⅲ区13号溝は同14号溝より後出であり、北辺の検討からⅢ区13号溝と同42号溝が連続して、溝区画Ⅱ期となった。合わせてⅢ区14号溝と同11号溝が連続して、前段階の溝区画Ⅰ期と考えた。ところが、2次調査の成果により、Ⅲ区14号溝は屋敷北辺に東に曲がり、Ⅱ区の30号溝と同一であることがほぼ確実となった。Ⅲ区14号溝は屋敷を直接に区画する溝とは言えなくなった。

代わって、北辺Ⅲ区11号溝とⅡ区42号溝が連続するため、区画形態を見直す必要が生じた。Ⅱ区42号溝は同30号溝より後出で、南端近くで西からⅡ区70号溝が接続していた。Ⅱ区70号溝は西へ延びてⅢ区104号溝と同一になる。同104号溝は中世屋敷内部を仕切る溝として1次調査で判明していたが、変遷の中で位置づけられていなかった。ようやく、Ⅱ区42号溝・Ⅲ区11号溝による区画段階と同一であることが確かめられた。

問題はⅢ区104号溝が同13号溝より後出である点にある。溝区画による時期変遷が逆転し、Ⅲ区13・42号溝段階が古くなったのである。矛盾の原因は、Ⅲ区23号溝の評価にあった。1次調査ではⅢ区11号溝が南へ折れて同23号溝と同一になると考えた。消去法による推論で、判断材料の中では妥当と思えた。Ⅲ区15号溝が交差する同12号溝を超えて北へ延びたと考えたのだが、底面の深さからすればⅢ区11号溝の西壁で検出されないのは矛盾していた。調査段階でも精査したのだが発見できなかった。おそらく、東へ若干折れて、Ⅲ区11号溝の底面中央へ重なり消滅したと考えるしかなかった。新旧関係では、Ⅲ区23号溝が同11号溝より後出であり、それを根拠にⅢ区23号溝に連続すると考えた同42号溝も同11号溝より後

出と考えた。しかし、Ⅲ区42号溝と同23号溝を結びつけることは間違っていた。形態を余談なくみれば、L字形に北から西へ延びるⅢ区12号溝の掘り直しの1段階として、Ⅲ区23号溝を同15号溝と同様に位置づければ、問題は生じなかった。整理すると、溝区画Ⅰ期＝Ⅲ区13・42号溝、溝区画Ⅱ期＝Ⅱ区42号溝・Ⅲ区11号溝＋内部溝Ⅱ区70号溝・Ⅲ区104号溝と修正することとなった。

Ⅲ区104号溝は西へ延びて、延長部にあるⅢ区34号溝と同一となる。Ⅲ区18・33号溝と重複して最も古くなるため、状況から南西へ延びてⅢ区24号溝と同一と考えるのが妥当となった。内部溝はⅢ区34号溝→同18号溝→同33号溝と変遷している。1次調査の検討成果で、区画溝Ⅱ期以降、同Ⅲ期がⅡ区7号溝・Ⅲ区15号溝(あるいは同23号溝)、同Ⅳ期がⅡ区7号溝・Ⅲ区12号溝である。したがって、内部溝Ⅲ区18号溝が区画溝Ⅲ期段階、同16・33号溝が同Ⅳ期段階と考えるのが妥当であろう。

(2) 建物分類と変遷の見直し

1次調査では主軸方位の違いから、1～6類の分類を行った。詳細は、1類が南北軸でN-17°-W、2類が同N-3°5'-W、3類が同N-0°、4類が同N-4°5'-E、5類が同N-6°8'-W、6類が同N-10°11'-Wであった。やや細かい欠点があったため、建物変遷を再構築するにあたり、分類も整理し4つにまとめることとした。

1類はそのままで、2類は旧2・3類を一つにまとめ、南北軸N-0°5'-Wとする。3類は旧4・5類を一つにまとめ、南北軸N-4°8'-Eとする。4類は6類をそのまま振り替えることとする(第29表)。

1次調査の検討結果では、12期の変遷案を示した。今回は区画溝の変遷を再評価したため、必然的に建物の変遷も見直しが必要となる。大きな変化は溝区画Ⅰ・Ⅱ期が入れ替わった点にあったが、3～6期の建物群は基本的に溝区画Ⅰ期に統合されたため、大きな入れ替わりはない。建物の変遷は、Ⅲ区42号溝と走向が一致する4期建物群と、Ⅲ区13号溝に走向が一致する5・6期建物群が、同一時期となったためである。また、溝区画Ⅱ期のⅢ区42号溝と内部溝34号溝が同一時期となったため、Ⅲ区4号掘立柱建物(以下、建物と略す)が重複してしまい、必然的に溝区画Ⅰ期へ繰り上がることとなった。結果として、溝区画Ⅰ期には建物10棟が含まれることとなり、重

第5章 まとめと考察

複も激しくなった。主軸方位による分類では、2類と3類が混在することとなったが、前者は屋敷全体に広がり、後者は屋敷南東部に固まり、状況が異なる。そこで、同じ満区画1期であるが、時期を分けることとした。3期以降の建物配置との共通点から、3類建物群が2期となった。2期内でも重複関係が残るため、A・B2群に分けたが、B群も3時期が存在する。

3期の建物群は、満区画II期の建物群である。1次調査成果では、3期の建物群であったが、前述のとおり4号建物が内部溝Ⅲ区34号溝と重複したこともあり、すべて1期へ含まれることとなった。一方、内部溝Ⅲ区18・33号溝が満区画III期以降となったことで、両溝と重複する建物が3期と見なせることとなった。5・6号建物がこれである。ともに4類に分類される建物である。4類

はほかに2棟が残るため、3期に含めることとし、重複する20号建物をB群として分けた。これらは1次調査では10・11期の建物群であったため、大幅に遡ったことになる。ただし、20号建物は1次調査成果で変遷に問題が残っていた(後述)。

4期は7号建物のみが認定できる。内部溝Ⅲ区18号溝と走向方位が一致することを根拠とする。残る建物5棟はすべて3類である。うち2棟は5期となる。残る3棟はⅢ区13号溝と重複するため、いずれも4・5期どちらかである。

5期は内部溝Ⅲ区33号溝と走向方位が一致する1・3号建物が認定できる。

以上、建物群は大きく5期に変遷するが、重複関係も含めれば12期程度となり、1次調査と数量はほぼ同じで

第29表 1次調査Ⅲ区中世屋敷建物一覧

時期	分類	No.	主軸方位	面積	桁行平均 柱間	寸尺	梁間平均 寸尺	規格(梁間×桁行) /下屋	備考			
0	1類	22	N-73°-E	18.76	5.500	1.833	6.1	3.410	11.3	2×3間・東西棟	1・2より前出・3・5・9・10・13・16・18・19・20・21	
1	2類	4	N-90°	46.26	9.820	2.455	8.1	3.600	11.9	1×4間・東西棟 /北・南?	7・17	
		11	N-85°-E	18.52	5.750	1.917	6.3	3.220	10.6	1×3間・東西棟		
		12	N-90°	19.69	5.825	1.942	6.4	3.380	11.2	1×3間・東西棟		
		13	N-87°-E	31.49	6.750	2.250	7.4	3.945	13.0	2×3間・東西棟 /北	1より前出・2・3・5・9・16・18・20・21・22	
		14	N-0°	15.29	5.055	1.264	4.2	3.025	10.0	1×4間・南北棟	7・15	
2	A群	9	N-7°-E	33.46	8.470	2.118	7.0	3.950	13.0	2×4間・南北棟	1・2・5・10・13・16・18・19・20・21・22	
		17	N-84°-W	20.48	5.650	1.883	6.2	3.625	12.0	2×3間・東西棟	2・3・4・5・7	
	B群	15	N-86°-W	14.14	5.635	1.409	4.6	2.510	8.3	1×4間・東西棟	3・7・14	
		16	N-5°-E	25.19	6.290	2.097	6.9	4.005	13.2	1×3間・南北棟	1・2・5・6・9・10・13・18・19・20・21・22	
		21	N-5°-E	13.73	3.680			3.730	12.3	2×2間・正方形	1・2・3・5・9・13・16・18より前出・22	
3	A群	5	N-79°-W	36.73	8.715	2.179	7.2	4.215	13.9	2×4間・東西棟	1・2・3・9・13・16・17・18・20・21・22	
		6	N-10°-E	41.65 ~	12.360	2.060	6.8	3.370	11.1	1×6~間 ・南北棟	1・10・16・18・19・20	
		18	N-80°-W	43.08	7.075	1.769	5.8	5.590	18.4	3×4間・東西棟	1・2・3・5・6・9・10・13・16・18・19・20・21より後出・22	
	B群	8	N-82°-W	34.96	7.120	1.780	5.9	5.320	17.6	3×4間・東西棟		
		20	N-79°-W	17.69	5.030	1.677	5.5	4.550	15.0	3?×3間 ・東西棟/北	1・2・5・6・9・10・13・16・18・19・22	
4	C群	7	N-86°-W	32.98	7.850	1.963	6.5	3.600	11.9	2×4間・東西棟 /北	3・4・14・15・17	
4 5	3類	D群	2	N-83°-W	24.87	4.260			4.165	13.7	2×2間・東西棟 /東・西張出	1・3・5・9・13・16・17・18・20・21・22より後出
		E群	10	N-82°-W	23.87?	6.630	2.210	7.3			2?×3間・東西棟	6・9・16・18・19・20・22
		19	N-82°-W		6.100	2.033	6.7				?×3間・東西棟	6・9・10・16・18・20・22
5	F群	1	N-84°-W	21.47	5.880	1.960	6.5	3.175	10.5	2×3間・東西棟 /北	2・5・6・9・13より後出・16・18・20・21・22	
		3	N-7°-E	37.75 ~	11.510	2.302	7.6	3.280	10.8	1×5~間 ・南北棟	2・5・7・13・15・17・18・21・22	

ある。

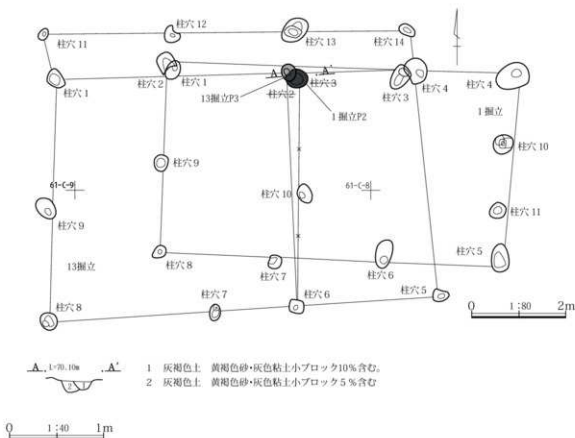
保留していた問題として、1次調査で1期20号建物、2期1号建物、7期22号建物の3棟が変遷に検討の余地を残したままとなっていた。20・22号建物はともに、Ⅲ区37号溝より前出という調査メモが根拠となり、20号建物は最も古い建物に、22号建物は1棟だけ1類と異例ながら、7期に入れなければならない。今回の変遷でも、この状況は矛盾するため、錯誤と結論づけたいと思う。20号建物は4類のため、3期とするのが最も自然である。22号建物も1棟だけ主軸方向が違う点に、2号建物より前出という要素を加えれば、屋敷より前段階の0期とするのが妥当であろう。

残る課題は1号建物の新旧関係である。1次調査では1号建物柱穴2が、断面観察の結果、変遷4期の13号建物柱穴3より前出となるため、4期以前とした。しかし、1号建物が最古段階となるのは、Ⅲ区13号溝より後出のため成立しない。これも事実には認識があるにちがいない。柱穴同士の新旧関係が確実なため、柱穴の認定が違うことになる。第104図に両建物を並べて示した。問題は1

号建物柱穴2と13号建物柱穴3の重複関係であった。両者の柱穴はもともとばらつきが顕著で、柱筋の通りが悪い。1号建物柱穴2を13号建物P3としても違和感がない。しかし、13号建物柱穴3は1号建物北辺の柱筋から内側に大きく外れる。これが原因で1次調査の建物認定となったのである。ただし、状況に矛盾があるとすれば、1号建物P2とすることに問題はない。これにより、1次調査での課題も、ほぼ解消できたこととなる。

(3) 建物の特徴と変遷

建物の計測項目について第30表のとおり総括した。なお、0期22号建物は屋敷との関連付けが難しいため、ここでは除外する。棟方向では、東西棟が多い点に特徴がある。規模では大きなものも多く、梁間1間型で桁5間を越える3・6号建物は注目される。ともに南北棟である。梁間3間も3棟と比較的多く、すべて3期・4類である。同一の建物が立て替えられた可能性を示す。しかし、18・20号建物は相互に重複した上、3期主要建物の5・6号建物を重複する点で問題がある。結果として、8号建物を並存する配置となり、梁間3間が建ち並ぶ状



第104図 第1次調査Ⅲ区1・13号掘立柱建物修正案

況は、本屋敷の変遷では異様で疑問が残る。

面積も大きなものが多い。1期の主屋である4号建物は最大規模の46.26㎡である。南・北・東に附属屋が整然と配置される。桁行の長い3・6号建物も40㎡前後しており、南北棟であるが中心的な建物となる。3号建物の場合、北辺をそろえて東側に東西棟の1号建物が近接する。6号建物の場合は、西側に隣接して東西棟の5号建物が存在する。状況から2棟がつながって1体として使用されていた可能性が高いだろう。小規模なものは、柱間が狭く桁側柱の多い建物が1・2期にみられる。面積は15㎡前後で、附属屋として十分な規模である。使用する木材などに何らかの事情が推測できる。

桁行平均柱間は全体として数値がばらついているが、時期ごとの変遷の中では共通する傾向がみられる。1期では4種の数値が混在する。狭柱間の14号建物は特殊事例として、6.3尺前後2棟と7.4尺1棟は4・5期でもみられる特徴として一貫性がある。問題は8.1尺の4号建物で、他に同じ数値の例はなく、面積も最大である。状況から建物自体の特殊事例が推測でき、建築材料が搬入品である場合、建築を施工した職人が外来である場合など、様々な事情が考慮される。形態から特殊な建物とは言い難い。2期も1期に近似する。表の処理上は欄が違いますが、4.6尺と狭柱間の15号建物があり、他に6.2尺が1棟、約7尺が2棟である。後者は主屋規模である。3期も同じ状況で、一体として使われたと考えられる5・6号建物が7.2尺・6.8尺と近似する。残る2棟は約6尺で、1棟は5.5尺とばらつく。4期は1棟の附属しか認定できないが、7号建物は主屋で、6.5尺とやや小さくなる。5期は主屋である3号建物が南北棟で、7.6尺とやや大きい。附属する1号建物は6.5尺と、主屋と1尺の違いがある。4期が5期と、確定できない3棟も同様な数値である。全体として、7～7.5尺程度の主屋と、1尺程度小さい附属屋で構成される傾向が読み取れる。したがって、4期7号建物は6.5尺と小さいため、10号建物を含めて別に主屋があった可能性が高くなる。

(4) 出土遺物と変遷の関係

屋敷から出土した遺物は1次調査のみであり、2次調査の出土遺物は遺構外に限られる。特徴として、在地系土器では鉢が主体である。明確に皿・内耳土器とわかる遺物は、非掘藏遺物も含めて、Ⅲ区3面で出土してい

ない。中国陶磁器や国内産焼締陶器も少量出土するが、伝世することが多く、時期判定は参考程度となる。ここでは、在地系土器鉢を使用して、遺構との関係から屋敷変遷を検証し、年代比定を行う。

区画溝の場合、存続期間が長く、異なる時期が混在することも多い。この屋敷の場合、3期のⅢ区11号溝や4・5期の同12号溝が該当するため、注意を要する。小規模な内部溝の方が存続期間が短いと思われ、遺物の混在も少ないと期待される。溝からの出土遺物は、あまり多くない。

3期のⅢ区11号溝で出土した224(11溝)の鉢は、口縁外側が丸みを持ち、中程でやや肥厚している。端部は上向きに鈍く尖る。227(11溝)は口縁部が著しく肥厚して瘤状になるタイプである。これらは高崎市史の鉢編年(以下、高崎編年)Ⅱ期に並行する時期と考えられる(星野1996)。250(34溝)の鉢は前述の2点に比べると器壁がやや薄くなり、口縁部は直線的で端部内側がやや尖っている。高崎編年Ⅲ期に近い。したがって、3期にはやや幅

第30表 1次調査Ⅲ区中世屋敷建物総括表

時期	0期	1期	2期	3期	4期	4・5期	5期	計	比率
東西棟	1	4	2	4	1	3	1	16	76.2%
南北棟		1	2	1			1	5	23.8%
正方形			1	1				2	4.8%
計	1	5	5	5	1	3	2	22	
規模	0期	1期	2期	3期	4期	4・5期	5期	計	比率
2×2間			1			1		2	11.1%
1×3間			2					3	16.7%
2×3間	1	1	1				1	4	22.2%
3×3間				1				1	5.6%
1×4間		1	1					2	11.1%
2×4間			1	1	1			3	16.7%
3×4間				1				1	5.6%
1×5～間							1	1	5.6%
1×6～間				1				1	5.6%
計	1	4	5	4	1	1	2	18	
面積㎡	0期	1期	2期	3期	4期	4・5期	5期	計	比率
～20	1	3	2	1				12	46.2%
～30			2			2		3	11.5%
～40		1	1	2	1		1	3	11.5%
～50		1		2				1	
計	1	5	5	5	1	2	2	21	
桁行平均柱間(尺)	0期	1期	2期	3期	4期	4・5期	5期	計	比率
～4.2		1						1	5.0%
～4.7			1					1	5.0%
～5.2									
～5.7				1				1	5.0%
～6.2	1		1	2				4	20.0%
～6.7		2			1	1	1	5	25.0%
～7.2			2	2				4	20.0%
～7.7		1				1	1	3	15.0%
～8.2		1						1	5.0%
計	1	5	4	5	1	2	2	20	

井戸・土坑遺物

1～5期は屋敷変遷に対応する。

1・2期：13溝・42溝

3期：11溝・24溝・34溝・104溝

4期：12溝・15溝・18溝

5期：12溝・16溝・33溝

1期

2期



302(14溝)



297(12溝)

3期



224(11溝)



227(11溝)



277(5溝)



250(34溝)



303(4上)

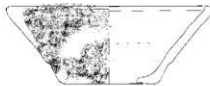
4期



501(18溝)



234(12溝)



270(3溝)

5期



246(33溝)



235(12溝)



第105図 1次調査Ⅲ区中世屋敷出土土鉢変遷案

があると思われる。

4期のⅢ区18号溝で出土した501(18溝)の鉢は口縁部のみで、器壁はやや薄く、口縁部は直線的で端部内側はやや突き出している。250(34溝)によく似ている。Ⅲ区12号溝は4・5期となるが、継続して使用されたため、出土遺物は5期に近いものと推測できる。234(12溝)は器壁がやや薄く、口縁部は丸みを持って外傾する。端部内側は横向きに顕著に突き出す。高崎編年Ⅲ期の標準遺物と同種類である。235(12溝)は口縁部が内湾気味に外傾する。端部内側の突き出しは尖る。

5期のⅢ区33号溝で出土した246(33溝)は口縁部の破片で、口縁部の内湾がやや強く短い。端部内側の突き出しは尖る。235(12溝)に近い。

以上から考えると、3期は高崎編年Ⅱ期頃(14世紀中頃)で、5期は高崎編年Ⅲ期で14世紀後半頃となる。4期の鉢は5期よりも古い様相があり、高崎編年Ⅱ期からⅢ期の間に位置づけられる。在地系土器では14世紀末頃から内耳土器(網)が出現する可能性があり、検証するものとして貴重な事例である。

次に、井戸・土坑から出土した遺物から鉢の変遷をたどる。302(14井)は器壁がやや薄いものの、口縁端部は上向きに鋭く尖る。口縁はわずかに内湾する。高崎編年Ⅱ期以前であろうが、同1期とは異なる。参考事例として大久保山遺跡ⅢA区井戸12-10(在地産瓦質片口鉢編年表:荒川1998)がある(大西雅広氏ご教示による)。ここでは年代を即断せず、14世紀前半以前としておく。Ⅲ区14号井戸は1期の12号建物と重複するが、内部遺構とも考えられる。遺物の年代観から、1・2期とするのが妥当と考える。

297(12井)は器壁がやや厚く、口縁端部は上向きに鈍く立ち上がる。224(11溝)に近い。277(5井)の体部は直線的で、口縁部下位が帯状に凹む。口縁部は丸みを持ち、端部は上向きで内側にやや屈曲する。224(11溝)に近似する。Ⅲ区5号井戸と同12号井戸は、屋敷中央部で隣接して発見されている。出土遺物から前者が若干新しいと考える。

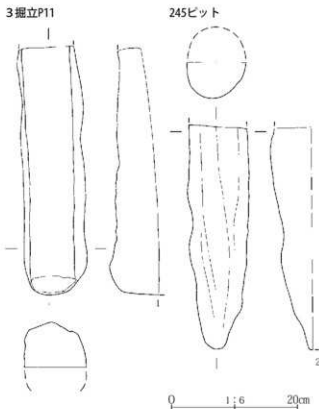
303(4土)は口径24.4cmと小型品である。器壁が厚く、体部は直線的に大きく外傾する。口縁端部外側は丸みを持ち、端部内側はやや上向きに鈍く尖る。250(34溝)に近い資料である。

270(3井)は器壁がやや厚く体部は直線的に外傾する。口縁端部外側はやや丸みを持ち、端部内側はやや上向きに鈍く尖る。端部は内側に屈曲し下位に稜を持つ。501(18溝)に近似する。

井戸・土坑から出土した鉢も、溝出土遺物と同様な形態変化をたどることが判明した。確定はできないが、これらの遺構は各時期に帰属する可能性が高いと言える。302(14井)がより古い状況を示し、1・2期と判断できたことは重要である。時期は14世紀前半以前となるが、屋敷内で13世紀代の中国陶磁器もやや多く出土するため、屋敷の年代が13世紀代まで遡る可能性が高くなる。(5)その他

ここでは、本論と直接関係しないが、1次調査成果の建物について補足資料を示すこととする。1次調査で混乱が生じ、非掲載となった石膏型2点である。ともに調査区の南壁面で確認されたピットの柱痕であり、排水溝の施工により北側半分を欠損していた。壁面として残ることで、横方向から断面観察が可能となった。採取位置は第49図に示してある。

第106図1はⅢ区3号掘立建物柱穴11の柱痕である。地山がⅢ区42号溝埋没土となったため、遺構確認が容易



第106図 Ⅲ区3面ピット柱痕石膏型

であり、柱痕も砂で埋まっていた。柱痕の掘削はハケで仕上げた後、石膏によって型取りを行った。柱痕は結果としてボジ資料に置き換わったことになる。長さは残存で39.6cmであり、掘立柱の基部にあたる。太さは最大で10.1cmである。正面部分の観察から4面程度は面取りされた角材と推測できる。面取りされた面は幅約7.5cmで、寸尺で3.5寸となる。柱材として十分である。底面は整形が粗く、丸みがある。仕口やほぞ穴はなく、転用された痕跡はない。

第106図2はⅢ区245号ピットの柱痕である。柱痕が鮮明であったため、1の比較資料として採出した。検出状況は1と同じであるが、地山の状況が異なる。柱痕の残存割合は1よりも少ない。形態が先細りしているのは残存状態のせいなのか、形態が尖っているのか、判別できない。断面形態から丸材に復元できる。残存長は35.7cmで、径は9.4cmである。太さ3寸と1よりも若干細いが、杭としては太いため丸柱の可能性が高い。掘立柱建物柱穴として復元できていないが、おそらく一部であろう。掘立柱の場合、地上部は角材で地中部が未製材のままの例もあり、参考資料となろう。両資料は、具体的な柱の状況を示す良好な資料である。

(6)総括

2次調査によりⅡ・Ⅲ区で検出された溝を手がかりに、Ⅲ区中世屋敷の変遷を再検討した。Ⅲ区13・42号溝が連続して同時期となったため、1次調査成果によるⅢ区11号溝との関係が修正された。区画溝の変遷では1～Ⅲ期を組み合わせることとなった。

区画溝の再評価は、建物の変遷にも波及し、大幅な変更が必要となった。あわせて軸方位による建物分類を再整理して、4つに統合することで複雑さを若干解消した。4類(変更前6類)の建物群は、古い段階の3期へ遷らせた。建物群は2期から5期まで統一感をもって変遷することが確かめられた。

建物配置における画期は、1・2期の間に認められる。区画溝はⅢ区13・42号溝と同一ながら、分類は2・3類に分かれ、重複も見られる。変化は3類A・B群の建物が13号溝に軸方位を合わせることで生じたと思われる。建物群自体も屋敷南東部にまとまる傾向が見られ、3期以降の建物配置と同一となる。

屋敷規模は1・2期が東西規模約30mで、3期以降は

溝外側で約38mと若干大きくなる。区画溝の幅も1・2期の42号溝が67cmであった状況から、3期以降に幅が2mを超える状況へと変化する。内部の仕切溝も現れ、建物敷地がより意識されたとも言える。2期の建物群は、区画溝変更による屋敷規模の拡大を先取りしていることとなる。

屋敷の時期では、出土遺物から13世紀に遡る要素もありながら、下限は14世紀代に納まることがわかった。建物群は5期で11段階程度に変遷するが、存続期間は比較して短い印象を受ける。

課題として、直接の論述をさせたが、Ⅲ区14号溝は屋敷の東辺と一致しながら、東側を区画する様相を示している。同様な方形区画がⅠ・Ⅱ区に最低4区画存在することも判明している。内部で明確な関連遺構が見つかっていない点も一致している。今後はこうした遺構と屋敷の関係を探っていく必要がある。

引用文献

- ・「采里制」(落合重信)『国史大辞典』吉川弘文館1986。
- ・荒川正夫1998「在地産土器」『大久保山VI』263頁早稲田大学。
- ・飯森康広2010「齊田中耕地遺跡Ⅲ区の中世屋敷について」『齊田中耕地遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・小島敦子2012「上新田中道東遺跡」公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・中島直樹・吉澤学2004「群馬県玉村町における条理地割の復原」『東国史論第19号』
- ・星野守弘1996「軟質陶器」『新編高崎市史資料編3中世1』高崎市

写真図版



1区1面調査区全景(東から)



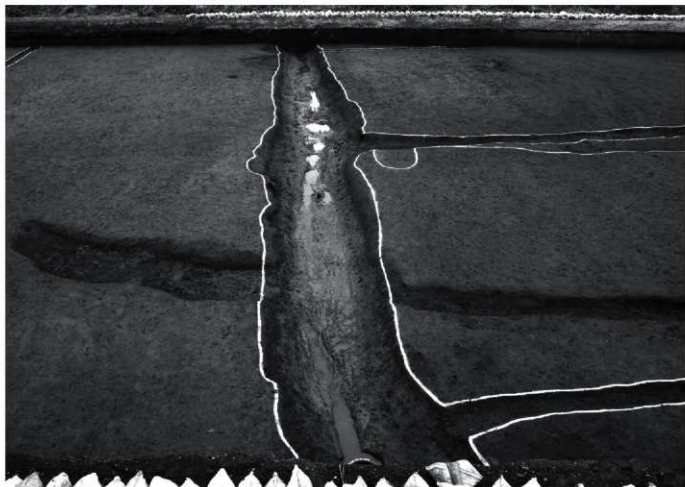
1区1面1号溝全景(西から)



1区1面1号溝セクション(南から)



1区1面4号溝セクションB(南から)



1区1面4号溝全景(南から)



1区1面4号溝セクションA(南から)



1区1面4号溝、杭列全景(南から)



1区1面4号溝、杭列セクションA(南から)



1区1面4号溝、杭列セクションB(南から)



I区1面7号溝東半部全景(北西から)



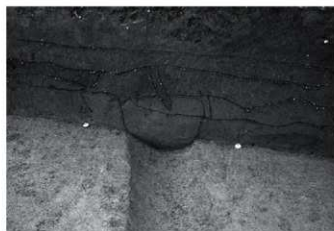
I区1面7号溝東半部全景(南から)



I区1面7号溝セクションA(南から)



I区1面7号溝中央部全景(南から)



I区1面7号溝セクションC(南から)



1区1面7号溝セクションB(南から)



1区1面7号溝西半部全景(西から)



1区1面25号溝中央部全景(南から)



1区1面25号溝西半部全景(西から)



1区1面25号溝セクション(南から)



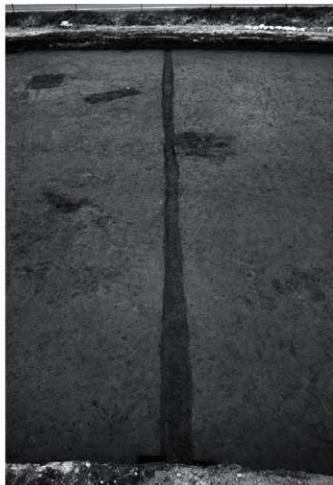
1区1面26号溝セクション(西から)



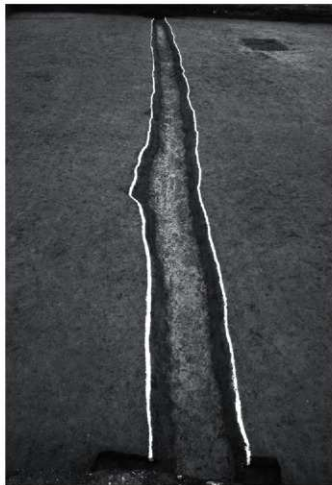
1区1面26号溝全景(西から)



1区1面27号溝セクション(南から)



I区1面27号溝全景(南から)



I区1面28号溝全景(南から)



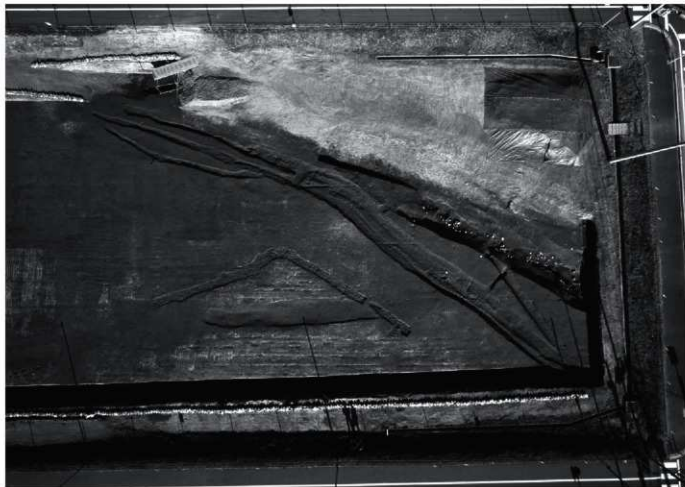
I区1面28号溝セクション(南から)



II区1面1号溝セクション(東から)



II区1面1号溝全景(東から)



IV区1 面東半部全景(上空から)



IV区1 面4・49号溝全景(北西から)



IV区1面4号溝内露出土状態(東から)



IV区1面4号溝セクション(東から)



IV区1面40・45号溝全景(南から)



IV区1面40・45号溝セクションA(東から)



IV区1面40・45号溝セクションB(東から)



IV区1面40号溝・3面47号溝セクション(西から)



IV区1面41号溝全景(北西から)



IV区1面43号溝全景(北から)



IV区1面43号溝セクション(南から)



IV区1面46号溝全景(西から)



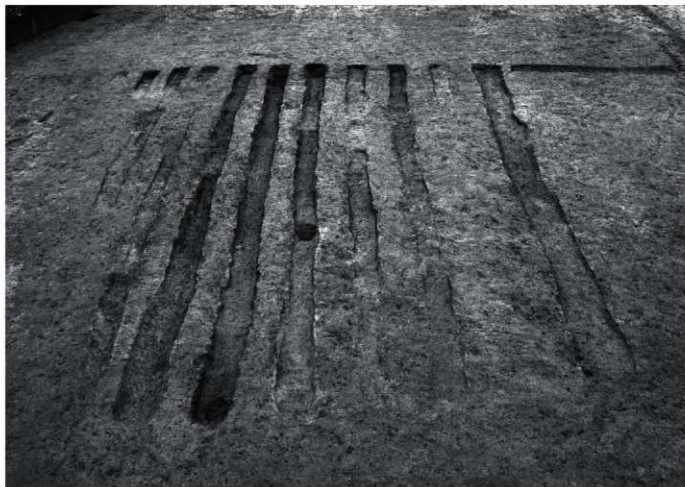
IV区1面46号溝セクション(北から)



IV区1面50号溝全景(南から)



IV区1面50号溝セクション(南から)



I区1面7号復旧坑群全景(東から)



I区1面7号復旧坑群セクション(東から)



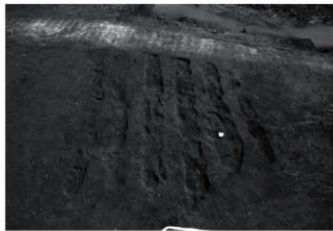
II区1面5号復旧痕群全景(南から)



II区1面5号復旧痕群セクション(南から)



II区1面5号復旧痕群セクション(南から)



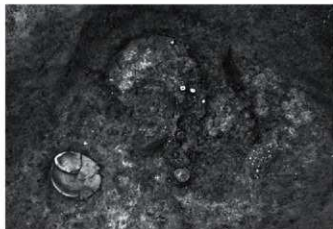
Ⅱ区1面6号復旧痕群全景(北から)



Ⅱ区1面6号痕旧痕群セクション(南から)



Ⅰ区2面1号墓全景(南から)



Ⅰ区2面1号墓遺物出土状態(南から)



Ⅰ区2面1号墓セクション(南から)



Ⅱ区2面23号溝全景(東から)



Ⅱ区2面23号溝セクション(北から)



Ⅱ区2面23号溝遺物出土状態(南から)



Ⅱ区2面23号溝遺物出土状態(南から)



Ⅱ区2面24号溝セクション(東から)



Ⅱ区2面25号溝セクション(北東から)



Ⅱ区2面26号溝セクション(東から)



Ⅱ区2面27号溝セクション(東から)



Ⅱ区2面28・29号溝セクション(北から)



Ⅲ区2面3号溝セクション(西から)



Ⅲ区 2面3号溝全景(西から)



Ⅰ区 2面疑似畦畔(東から)



Ⅰ区 2面疑似畦畔(西から)



Ⅰ区 2面疑似畦畔セクション(南から)



Ⅱ区3面1号橋全景(南から)



Ⅱ区3面1号橋P5・8～11全景(南から)



Ⅱ区3面杭列C断面(南から)



Ⅱ区3面杭列D断面(南から)



Ⅱ区3面杭列E断面(南から)



Ⅱ区3面杭列G断面(南から)



Ⅱ区3面杭列I断面(南から)



1区3面8A・8B号溝全景(南から)



1区3面8A・8B号溝セクション(南から)



1区3面8B号溝セクション(南から)



1区3面8号溝焼人骨出土状態(南から)



1区3面8・16・17号溝セクション(南から)



1区3面16～19号溝全景(北から)



1区3面16・19号溝セクション(南から)



1区3面18号溝セクション(南から)



1区3面29号溝全景(南から)



1区3面29号溝セクション(南から)



1区3面30・31・32号溝全景(南から)



1区3面30号溝北部全景(西から)



1区3面30号溝セクション(南から)



1区3面30・31・32号溝セクション(南から)



Ⅱ区3面調査区全景(上空から)



Ⅱ区3面調査区全景(東から)



Ⅱ区3面3号溝全景(西から)



Ⅱ区3面4号溝全景(西から)



Ⅱ区3面43号溝全景(南から)



Ⅱ区3面6号溝セクション(南から)



Ⅲ区3面調査区全景(東から)



Ⅲ区3面13・14号溝全景(南から)



Ⅲ区3面11・13・14号溝セクション(南東から)



Ⅲ区3面13・14・104号溝セクション(南東から)



Ⅳ区3面42号溝西半部全景(北から)



Ⅳ区3面42号溝東半部全景(北から)



IV区3面42号溝セクション(南から)



IV区3面44号溝全景(北から)



IV区3面44号溝セクション(南から)



IV区3面47号溝・4面48号溝セクション(西から)



IV区3面47号溝全景(北西から)



1区4面調査区全景(上空から)



I区4面水田16区画付近全景(北から)



I区4面水田43区画付近全景(南から)



I区4面水田F断面(南から)



I区4面水田H断面(南から)



IV区4面水田全景(上空から)



IV区4面48号溝全景(北西から)



Ⅱ区5面水田東半部全景(南から)



Ⅱ区5面水田中央部全景(南西から)



Ⅱ区5面水田畦セクションB(南から)



Ⅱ区5面水田下の擬似畦畔(北東から)



Ⅲ区5面水田全景(南から)



Ⅲ区5面水田北半部全景(南東から)



Ⅲ区5面水田南半部全景(南から)



Ⅲ区5面水田耕作痕全景(北西から)



Ⅳ区5面水田全景(東から)



Ⅳ区5面水田東半部全景(東から)



Ⅳ区5面水田西半部全景(東から)



Ⅳ区5面水田面牛跡跡(西から)



Ⅳ区5面水田面牛跡跡断面(南東から)



IV区5面調査区全景(上空から)



Ⅳ区 5面20号溝全景(南東から)



Ⅳ区 5面20号溝遺物出土状態(南東から)



Ⅳ区 5面20号溝遺物出土状態(南から)



Ⅳ区 5面20号溝セクションB(北西から)



Ⅳ区 5面20号溝セクションA(東から)



1区6面1号耕作痕全景(西から)



1区6面1号耕作痕確認状態(南から)



1区6面1号耕作痕近景(南から)



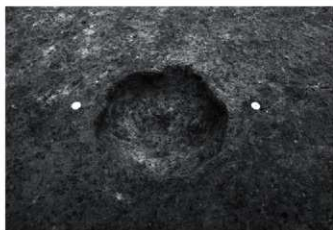
1区6面1号耕作痕近景(南から)



1区6面1号落ち込み全景(北から)



1区6面1号落ち込みセクション(西から)



1区6面5号ピット全景(南から)



1区6面5号ピットセクション(南から)



I区6面33号溝全景(南から)



I区6面33号溝セクション(南から)



II区6面17号溝全景(南東から)



II区6面17号溝セクション(北から)



IV区6面24号溝全景(北から)



IV区6面24号溝全景(南から)



IV区6面24号溝セクション(北から)



IV区7面水田西半部全景(西から)



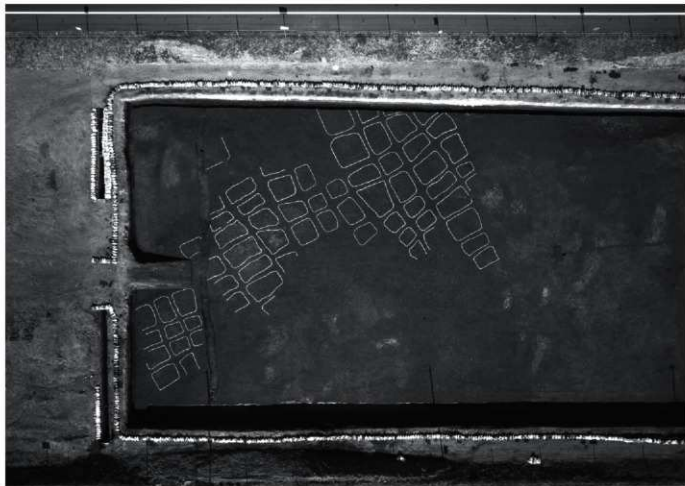
IV区7面C混土擬似畦畔西半部全景(南から)



IV区7面C混土擬似畦畔東半部全景(南から)



IV区7面全景(上空から)



Ⅳ区7面水田全景(上空から)



Ⅳ区7面C混土擬似畦畔全景(上空から)



I区8面34号溝全景(南から)



I区8面34号溝セクションB(北東から)



I区8面34号溝セクションA(南西から)



IV区8面51号溝セクション(南東から)



IV区8面52号溝セクション(南東から)



IV区 8面51号溝全景(南東から)



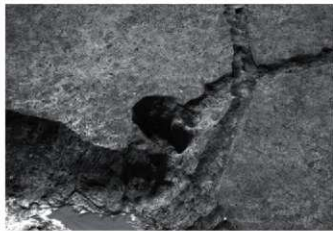
IV区 8面53号溝セクション(南東から)



IV区 8面54号溝セクション(西から)



IV区 8面54・55・57号溝全景(北から)



IV区8面9・10号土坑全景(北から)



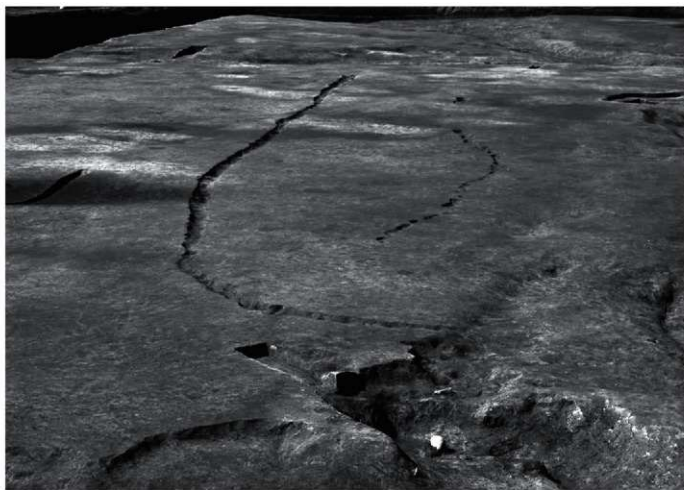
IV区8面9・10号土坑、54号溝セクション(北東から)



IV区8面55号溝全景(南東から)



IV区8面55号溝セクション(南から)



IV区8面56・58号溝全景(東から)



IV区 8面56号溝セクション(東から)



IV区 8面57号溝全景(南西から)



IV区 8面57号溝セクション(西から)



IV区 8面58号溝セクション(東から)



IV区 8面59~64号溝全景(南西から)



IV区 8面59～63号溝セクション(南西から)



IV区 8面62号溝セクション(南から)



IV区 8面64号溝セクション(南から)



III区 9面調査区全景(南から)



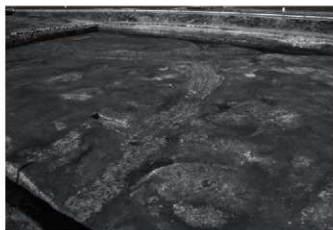
IV区9面調査区全景(上空から)



IV区9面1号河道セクション(南西から)



IV区9面1・7号河道全景(南東から)



IV区9面1・7号河道全景(北東から)



IV区9面7号河道全景(北西から)



IV区9面1号河道杭1出土状態(東から)



IV区9面2号河道全景(東から)



IV区9面2号河道全景(北から)



IV区9面2号河道セクションB(南東から)



IV区9面2号河道セクションC(東から)



IV区9面2号河道杭1出土状態(南から)



IV区9面2号河道杭2出土状態(南西から)



IV区9面2号河道杭3出土状態(南から)



IV区9面2号河道杭4出土状態(北から)



IV区9面2号河道杭5出土状態(北西から)



IV区9面2号河道杭6~8出土状態(北から)

PL.42

1区1面7溝



2 (1/2)

1区1面25溝



1

IV区1面41溝



1

1区2面1号墓



1



2

3



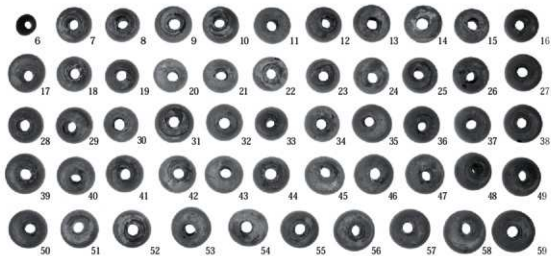
3



4 (1/1)



5 (1/1)



6~50(2枚)

II区 2面23溝



I区 3面8A・8B溝



II区 3面30溝



II区 3面43溝



IV区 5面20溝



IV区 7面



IV区 9面 1河道



IV区 9面 2河道



PL.44

IV区9面2河道



6 (1/4)



7 (1/4)



8 (1/4)



9 (1/4)



10 (1/4)



12 (1/4)



13 (1/4)



14 (1/4)

I~IV区遺構外



4



5



12 (1/1)



13 (1/1)



14 (1/1)



15 (1/1)

報 告 書 抄 録

ふりがな	さいだなかこうちいせき(2)
書名	齊田中耕地遺跡(2)
副書名	国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	571
編著者名	飯森康広
編集機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130630
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	さいだなかこうちいせき
遺跡名	齊田中耕地遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんざわぐんたまむらまち
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町
市町村コード	10464
遺跡番号	619
北緯(日本測地系)	361817
東経(日本測地系)	1390654
北緯(世界測地系)	361828
東経(世界測地系)	1390642
調査期間	20100701-20110331
調査面積	9340
調査原因	道路建設
種別	水田/その他
主な時代	縄文/古墳/飛鳥・奈良・平安/中世/近世
遺跡概要	その他-縄文-石器/その他-古墳-水田2+土坑2+溝11+旧河道-土師器+木器/ その他-平安-水田6+溝5-土師器+須恵器/その他-中世-溝30-陶磁器+金属器/ その他-近世-墓1+水田1+溝25+復旧坑群1+復旧痕群2-陶磁器+金属器+ガラス玉
特記事項	9世紀後半に発生した洪水によって埋没した水田が検出され、条里地割に基づいていることが確認できた。水田面には牛蹄跡多数が見られた。
要約	縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。古墳時代から平安時代の水田を検出した。知られていた中世屋敷に関する区画溝の一部も確認した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第571集

齊田中耕地遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年6月30日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmalbm.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社